

青森県埋蔵文化財調査報告書 第220集

小 沢 館 跡

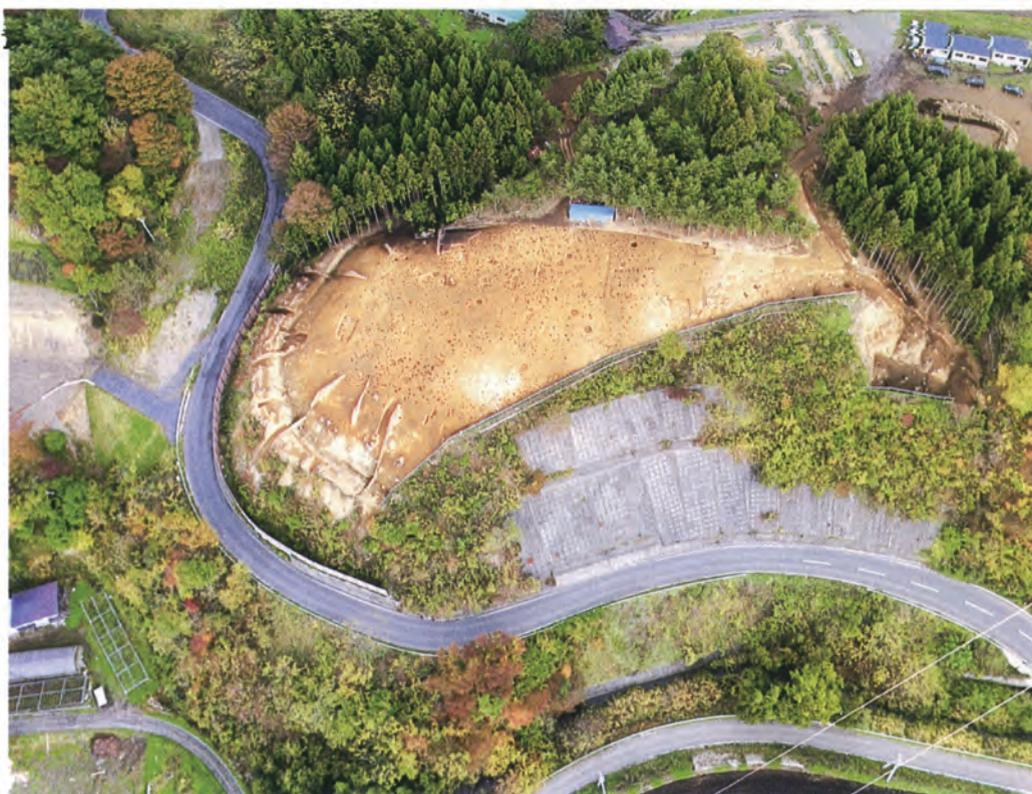
— 県道名川階上線建設事業に伴う遺跡発掘調査報告書 —

1997年3月

青森県教育委員会



小沢館全景（北西上空から）



小沢館跡完掘（西上空から）



出土陶磁器



第1号門跡全景（南東から）

序

青森県教育委員会は、県道名川階上線建設事業に伴い、平成7年度に路線内に所在する階上町小沢館跡の発掘調査を実施しました。

小沢館跡は、三重の堀が巡る館跡として古くから知られており、このたびその記録保存のため報告書を刊行することになりました。

調査の結果より、館跡内に多くの遺構が発見されました。特に堀跡や土塁は大規模でその重要性と同時に当時の土木工事の水準が伺われます。さらに、遺構の作り替え等の様子から城の構造を知るうえでも、多くの成果を得ることができました。

また、縄文時代の遺物の出土や近世の炭窯の発見もあり、悠久の時代から永く、当地域が生活する上で適地であったことが伺われます。

本報告書は、この発掘調査の成果をまとめたものであり、考古学・歴史学のみならず、学校教育・社会教育においても活用され、文化財の保護活動の普及および啓蒙に役立てば幸いに存じます。

最後ではありますが、調査の実施と報告書の作成にあたり関係各位から御協力、御指導賜りましたことに対し、心から感謝の意を表します。

平成9年3月31日

青森県教育委員会
教育長 松 森 永 祐

例 言

- 1 本報告書は、青森県教育委員会が平成7年度に実施した小沢館跡の発掘調査の成果を収録したものである。
- 2 本遺跡は、青森県三戸郡階上町大字晴山沢字小沢20、外に所在する。「青森県遺跡台帳」（平成4年3月：青森県教育委員会）の番号は、63060である。
- 3 本報告書の執筆は、第1章3節は松山力が執筆し、一部に小田川が加筆した。他は、小田川哲彦と中村博文が分担し、執筆した。編集は、小田川と中村が行った。
本文中のP1、P2…の表記は、小穴及び柱穴を示す。
- 4 本報告書における挿図の用例は次のとおりである。
 - 1) 方位 地形図・遺構図の方位は真北を示し、グリッドの南北線に一致する。
 - 2) 縮尺率 縮尺率は遺構・遺物の大きさと性格により適宜決定した。選択した縮尺率については、スケール脇に示した。
 - 3) ケバ 遺構内の傾斜及び落込みは  で示した。
木根等の攪乱及び後世の削平地、崩落は  で示した。
 - 4) 小穴 門跡・竪穴遺構・地割りで復元された柱列等・掘立柱建物跡の小穴には、P番号（P1…）を付した他、検出面及び底面からの深さをカッコ内に表示した。付図中の、小穴脇の数字も検出面からの深さである。
 - 5) 挿図中で使用したスクリーントーンは次のとおりである。

焼土



炭化物（材）



道跡・踏締まり



これ以外のスクリーントーンの表示は、その用例を同図中に示した。

- 6) 土層 自然堆積層番号はローマ数字を、遺構内の堆積層番号は算用数字で表示した。堀跡・土塁など連続したベルトで作図したものについては、層番号は連続させた。
 - 7) 礫石器の実測図については、擦り・敲きの使用痕跡が顕著な部分をドットで表示した。
 - 8) 遺構写真のうち、堀跡・土塁など現況と完掘状態のほか、関連上調査区外の状況も掲載した。
写真図版中の個々の遺物番号は、挿図番号と一致する。（第15図1は→15-1と表示）
- 5 本調査及び本報告書の作成にあたっては、下記の機関並びに諸氏からご協力・ご助言を得た。
飯村均、高橋博志、佐々木浩一、藤田俊雄、大野亨、工藤清泰、半沢紀、長尾正義、田中寿明、古屋敷則雄、室野秀文、本田泰貴、金沢陽
(順不同・敬称略)

目 次

序

例言

目次

挿図・表目次

写真目次

第1章 調査概要

第1節 調査要項	1
第2節 調査の経緯・調査経過と方法	2
第3節 遺跡の地理と地形・基本層序	5
第4節 周辺の館跡	9
第5節 小沢館跡概略	10

第2章 遺構と遺物

第1節 堀 跡	13
第2節 土 塁	23
第3節 道 跡	29
第4節 門 跡	30
第5節 地割り	35
第6節 掘立柱建物跡・小穴	53
第7節 竪穴遺構	55
第8節 土 坑	68
第9節 焼土・炭化物	85
第10節 出土遺物	86

第3章 ま と め	101
-----------	-----

付 章 炭素年代測定結果	105
--------------	-----

写 真 図 版	106
---------	-----

報告書抄録	150
-------	-----

挿図・表 目次

図1 小沢館跡位置と周辺の館跡・遺跡……………V	図34 第5号地割り……………52
図2 館跡地形及び路線……………4	図35 第1号掘立柱建物跡……………54
図3 館跡周辺の地質……………7	図36 第1号竪穴遺構……………56
図4 基本層序……………8	図37 第1号竪穴遺構柱穴断面……………57
図5 「南部諸城の研究」掲載小沢館跡……………10	図38 第2・5・6号竪穴遺構……………58
図6 堀跡・土塁現況及びグリッド配置……………11	図39 第2・5・6号竪穴遺構柱穴断面……………59
図7 遺構及び測量点配置……………12	図40 第3号竪穴遺構……………61
図8 第1号堀跡北、第1・2号土塁北……………15	図41 第7号竪穴遺構……………62
図9 第1号堀跡北、第1・2号土塁北土層(1)……………16	図42 第8号竪穴遺構……………63
図10 第1号堀跡北、第1・2号土塁北土層(2)……………17	図43 第8号竪穴遺構柱穴断面……………64
図11 第1号堀跡北、第1・2号土塁北土層(3)……………18	図44 第9・10号竪穴遺構……………66
図12 第1号堀跡北出土礫(1)……………19	図45 第9・10号竪穴遺構……………67
図13 第1号堀跡北出土礫(2)……………20	図46 第2・5・6・9・10号 竪穴遺構柱穴配置……………68
図14 第1号堀跡北出土礫(3)……………21	図47 縄文時代の土坑……………70
図15 第1～3号堀跡南、 第2・3号土塁南、第1号道跡……………27	図48 縄文時代以外の土坑(1)……………73
図16 第1～3号堀跡南、 第2・3号土塁南土層……………28	図49 縄文時代以外の土坑(2)……………74
図17 第1号道跡土層……………29	図50 縄文時代以外の土坑(3)……………75
図18 第1号門跡・集礫……………30	図51 縄文時代以外の土坑(4)……………76
図19 第1号門跡……………31	図52 炭窯……………85
図20 第1号門跡土層・門柱穴断面……………33	図53 焼土・炭化物……………86
図21 第2号門跡……………34	図54 出土陶磁器……………87
図22 第1号地割り……………36	図55 出土銭貨……………89
図23 第1号地割り土層……………37	図56 出土鉄製品……………90
図24 第1号地割り・柱列断面……………38	図57 出土土器……………92
図25 第1号地割り内・土坑……………40	図58 出土石器・石製品……………93
図26 第2号地割り……………41	図59 出土石器・石製品(1)……………95
図27 第2号地割り土層(1)……………43	図60 出土石器・石製品(2)……………96
図28 第2号地割り土層(2)……………44	図61 出土石器・石製品(3)……………97
図29 第2号地割り内・焼土跡及び土坑……………45	図62 出土石器・石製品(4)……………98
図30 第2号地割り内・集礫……………46	表1 小沢館跡周辺の館跡及び遺跡……………V
図31 第3号地割り……………47	表2 陶磁器観察表……………87
図32 第4号地割り……………48	表3 銭貨観察表……………89
図33 第4号地割り・柱列断面……………50	表4 鉄製品観察表……………90
	表5 縄文土器・石器観察表……………99・100

写真目次

写真1	館跡現況	106	写真35	第7号・9号・10号竪穴遺構	140
写真2	館跡完掘	107	写真36	縄文時代の土坑	141
写真3	基本層序と作業状況	108	写真37	縄文時代以外の土坑(1)	142
写真4	作業状況	109	写真38	縄文時代以外の土坑(2)	143
写真5	調査区外現況(1)	110	写真39	遺物出土状況	144
写真6	調査区外現況(2)	111	写真40	出土遺物(1)	145
写真7	堀跡・土塁北側現況	112	写真41	出土遺物(2)	146
写真8	堀跡・土塁北側完掘	113	写真42	出土遺物(3)	147
写真9	第1号堀跡出土礫(1)	114	写真43	出土遺物(4)	148
写真10	第2号堀跡出土礫(2)	115	写真44	出土遺物(5)	149
写真11	第1号堀跡土層	116			
写真12	第1号土塁北側現況	117			
写真13	第1号土塁北土層(1)	118			
写真14	第1号土塁北土層(2)	119			
写真15	堀跡・土塁南側現況	120			
写真16	堀跡・土塁南側完掘	121			
写真17	堀跡・土塁南側土層	122			
写真18	道跡	123			
写真19	第1号門跡集礫	124			
写真20	第1号門跡完掘	125			
写真21	第1号門跡土層	126			
写真22	第2号門跡	127			
写真23	第1号地割り(1)	128			
写真24	第1号地割り(2)	129			
写真25	第2号地割り(1)	130			
写真26	第2号地割り(2)	131			
写真27	第2号地割り(3)	132			
写真28	第2号地割り(4)	133			
写真29	第3号・4号地割り完掘	134			
写真30	第5号地割り・第1号堀立柱建物跡完掘	135			
写真31	第1号竪穴遺構	136			
写真32	第2・5・6号竪穴遺構	137			
写真33	第3号竪穴遺構	138			
写真34	第8号竪穴遺構	139			

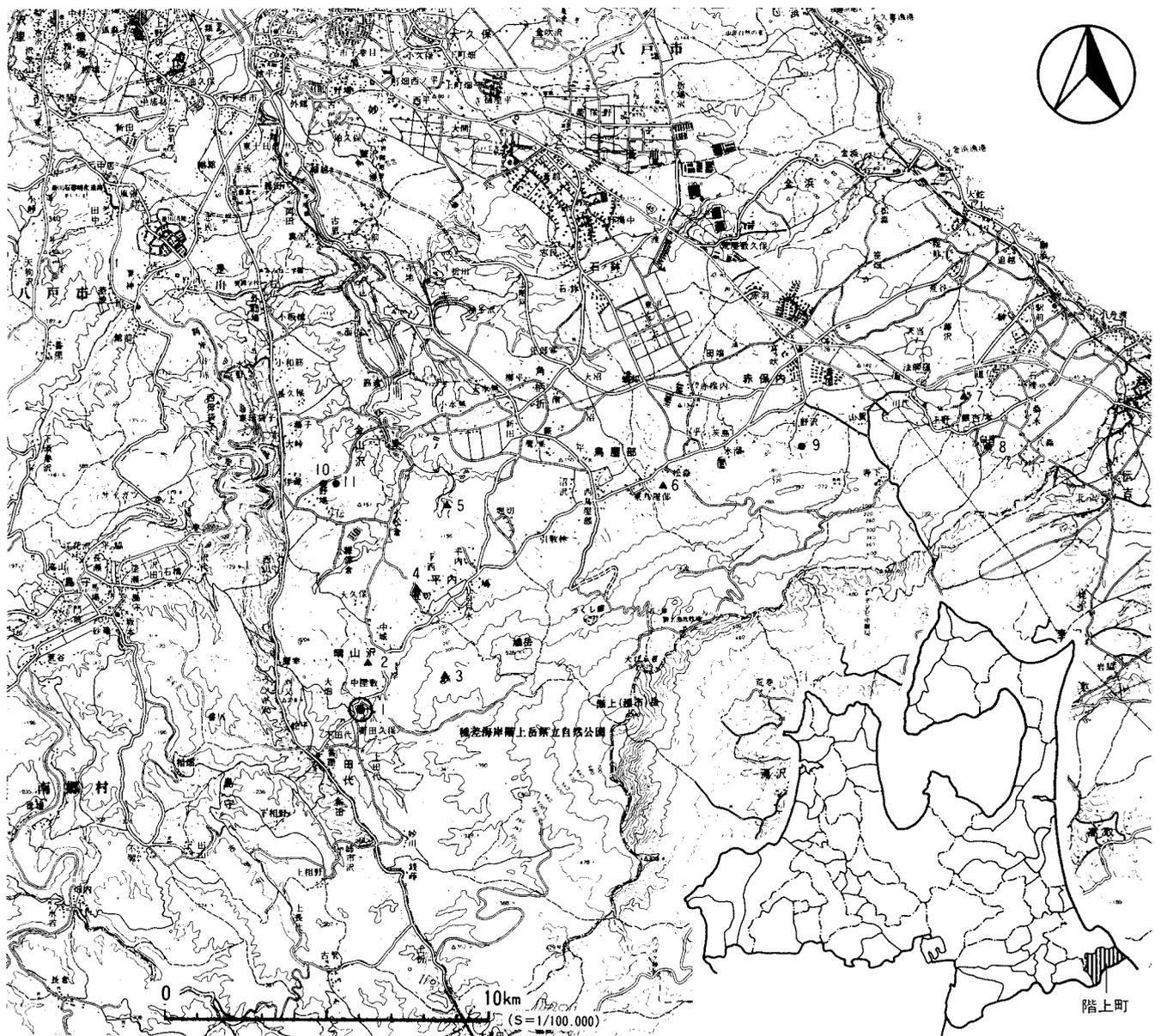


表1 小沢館跡周辺の館跡及び遺跡

番号	遺跡名	所在地	時代	備考
1	小沢館跡	大字晴山沢字小沢20外	中世	
2	晴山沢館跡	大字晴山沢字中城	〃	青森県遺跡台帳 平成4年
3	根岸館跡	大字晴山沢字上ノ山	〃	〃
4	登切館跡	大字平内字清水	〃	〃
5	平内館跡	大字平内	〃	〃
6	鳥屋部館跡	大字鳥屋部字上ノ山	〃	〃
7	道仏館跡	大字道仏字鳥井	〃	〃
8	白座遺跡	大字道仏字銀杏ノ木窪	縄文前期	階上町教育委員会昭和62年発掘調査
9	山館前遺跡	大字赤保内字山館前4-22	平安時代	階上町教育委員会平成6年試掘調査
10	野場(3)遺跡	大字金山沢字野場28	縄文中期	階上町教育委員会昭和63年発掘調査
11	野場(5)遺跡	大字金山沢字野場28外	縄文中期	青埋文報第150集平成3年発掘調査

図1 小沢館跡位置と周辺の館跡・遺跡

第1章 調査概要

第1節 調査要項

1 調査目的

県道名川階上線建設事業の実施に先立ち、当該地区に所在する小沢館跡の埋蔵文化財発掘調査を行い、その記録保存を図り、地域社会の文化財の活用に資するものである。

- 2 遺跡名および所在地 小沢館跡（県遺跡番号63060）
三戸郡階上町大字晴山沢字小沢20，外
- 3 発掘調査期間 平成7年5月8日から同年11月2日まで
- 4 調査対象面積 9，700平方メートル
- 5 調査委託者 青森県土木部道路建設課
- 6 調査受託者 青森県教育委員会
- 7 調査担当機関 青森県埋蔵文化財調査センター
- 8 調査協力機関 階上町教育委員会、三八教育事務所
- 9 調査参加者 調査指導員 村越 潔 青森大学教授（考古学）
調査協力員 大釜 安也 階上町教育委員会教育長
調査員 高島 成侑 八戸工業大学教授（建築史）
松山 力 八戸市文化財審議委員（地質学）
佐藤 仁 弘前市文化財審議委員（歴史学）
小山 彦逸 七戸町教育委員会主事（考古学）
- 調査担当者 青森県埋蔵文化財調査センター
調査第三課長 成田 滋彦（現・三内丸山遺跡対策室主幹）
主 事 小田川哲彦
主 事 中村 博文
調査補助員 工藤 真人
川村真樹子
小山 愛
佐藤 研

第2節 調査の経緯・調査経過と方法

調査経緯

青森県が階上町を横断する県道名川階上線の改良工事を計画し、その予定地内に小沢館跡が所在していた。本館跡は、三重の堀跡と土塁を有することで周知の遺跡であり、保存等について、工法対応による処置が模索されたが、事業の進捗及び地形的な要因から路線の変更は不可能であった。

本事業により館跡の大半が消滅することから、関係機関協議の結果、平成7年度に記録保存のため発掘調査が実施される事になった。

調査経過

発掘調査に先立ち、館跡の規模等の概要を把握するために、前年度に踏査が実施された。

踏査により、路線内の北側と南側には堀跡と土塁が良好な状態で遺存しており、特に北側縁辺から西側縁辺の斜面直下には、県道が巡るように通っているため、調査時に土砂が崩落流出する危険性が指摘された。また、東側は民地のほか南側も急峻な沢地形のため、調査時の排土処理についても問題があった。

このため、発掘調査以前に、作業の安全及び県道保護のための対策を講じるため、原因者及び関係機関と協議し、H型鉄鋼を基礎とした安全柵を県道に沿って巡らす事となり、完了次第、縁辺部の発掘調査をすることとなった。また、館跡西側斜面は以前に崩落し、コンクリート備壁とフェンスが設置されていたが、老朽化しており、同じく作業の安全と土砂の流出防止のため、調査区西側縁辺にも簡易ネットを設置した。

5月8日、器材等を搬入し調査を開始した。安全柵等の準備が完了するまで、調査区内の雑木等を処理し環境整備を行ったほか、調査区外の堀跡と土塁の遺存状態が良好であるため、地権者の承諾を得て雑木等を処理し、現況の写真撮影を行った。同時に地権者である、小沢勝司氏より聞き取り調査を行った。また、県道を挟んだ北側の路線内を踏査と試掘により、館の領域外であることを確認した。

5月中旬～下旬には、委託による地形測量を行ったほか、調査区内の土層確認のためトレンチによる掘り下げを行った。合わせてグリッドの設定も行った。

6月に入り、安全柵も完了し本格的な発掘調査に入った。調査区内が斜面地で、雨天時に排土流出の危険性があるほか、斜面上方の東側調査区外に排土を搬出せざるを得ないため、排土の集約と搬出には、ベルトコンベアーと重機を併用して作業にあたった。

7月～8月には、平坦面の表土剥ぎもほぼ終了し、全面に遺構が拡がっていることが判明した。遺物は、縄文土器が散発的に出土したが、館跡に伴うと思われる遺物の出土は極めて少なかった。

北側の堀跡と土塁を精査するためには、重機を導入し作業にあたった。北側の堀底面から平坦面までの比高差は、約5m～9mあり法面も急傾斜であるため掘り下げと排土の移動には多大な労力と時間を要した。

9月には、南側堀跡と土塁の精査に移ったほか、平坦部南側縁辺部に地割りを検出した。この地割りは深く数度の整地が確認されたが、作業および周辺の安全上、西側の斜面をすべてを調査する事はできなかった。

9月中旬～10月中旬には、各遺構図面の作成が作業の主体となった。柱穴跡は広範囲にあり、作図に時間を要した。これらの柱穴跡は、検出数の割に並びを特定できず、現地で建物と認定できるものは少なかった。また、北堀跡底面から多量の礫が検出され、早急な図面の作成に迫られた。このため、バルーンによる全体の空中写真撮影と合わせて、北堀跡出土礫については、空中写真図化を行うこととした。

10月14日には、現地説明会を実施し調査の成果を一般公開した。約二百名を超える見学者が訪れ盛況であった。11月2日には、調査器材および遺物を搬出し、発掘調査の全日程を終了した。

調査対象面積は、9,700㎡であったが、館の領域外と判断された調査区南端沢部分と作業上危険で除外された西側斜面部分を除いた面積は、およそ5,000㎡である。

調査方法

掘り下げ以前に、1/200縮尺・50cmの等高線で館跡全体の現況地形測量図を委託作成した。これには、現況で確認できる堀跡と土塁の範囲も合わせて作成した。

調査はグリッド法を基本とし、現況地形測量の基準杭P-3とP-4の2点を基準として20mのグリッド杭を設定し、表土除去後、更に4m四方のグリッドをピンを用いて設定した。P-3は法定座標X=44,600、Y=59,880、P-4は法定座標X=44,600、Y=59,840である。グリッドは、東から西へアルファベットを、南から北へ算用数字を付し、館跡全域を覆うように設定した。グリッドの呼称はこの組み合わせで、A1・B2・C3…とした。また、遺構の記録に際しては、1グリッドをさらに1m単位で分割した測点を用いることとした。測点は、調査区内に任意に設定した原点(EW-0・NS-0)から、東西南北の各方向(略号E・W・N・S)と、原点からの距離を表す数字を組み合わせて表記した。N-20・W-20は、原点から北に20m、西に20mの地点を示す。原点は、基準杭P-3とP-4の midpoint から南へ20mの地点で、法定座標上の位置は、X=44580、Y=59860である。

調査区内の標高点は、北側はP-3杭の高さH=192,24とP-4杭の高さH=187,28を基準とし、南側は測量基準杭P-2の高さH=186,87から用い、必要に応じて移動し用いた。

調査は排土処理の問題から、北側から順次掘り進めた。検出した遺構については、調査時には略号用い、検出順に番号を付した。略号は、竪穴遺構=S I、掘立柱建物跡=S B、柵跡=S A、土坑=S Kとし、城郭史的用語の堀跡、土塁のほか門跡、通路跡については略号を用いなかった。

遺構の精査は、4分割及び2分割し土層観察後掘り上げた。堆積土が遺構壁面や底面と峻別しにくいものについては、随時サブトレンチを設け掘り足りない部分が無いように留意した。また、焼土等については、最終的には断ち割りを行って土層を観察した。小穴(柱穴)については、2分割で掘り上げたが、土層図を作成しなかったものが大多数である。

土層観察については、「新版標準土色帖」を用いて土色とマンセル記号を併記した。

写真は、35mmモノクロームとカラーリバーサルフィルムを用い、同一方向で同一コマを撮影した。

遺構の図化は、1/20を基本とした他に、必要に応じて1/10や堀跡・土塁等の全体図については1/40や1/100で適時選択し作図した。小穴(柱穴)の図化は、調査区を分割して作図した。

遺物は、各遺構及びグリッドと層ごとに取り上げたほか、堀跡・土塁出土のものは、グリッド位置と層位を記入し取り上げた。

(小田川)

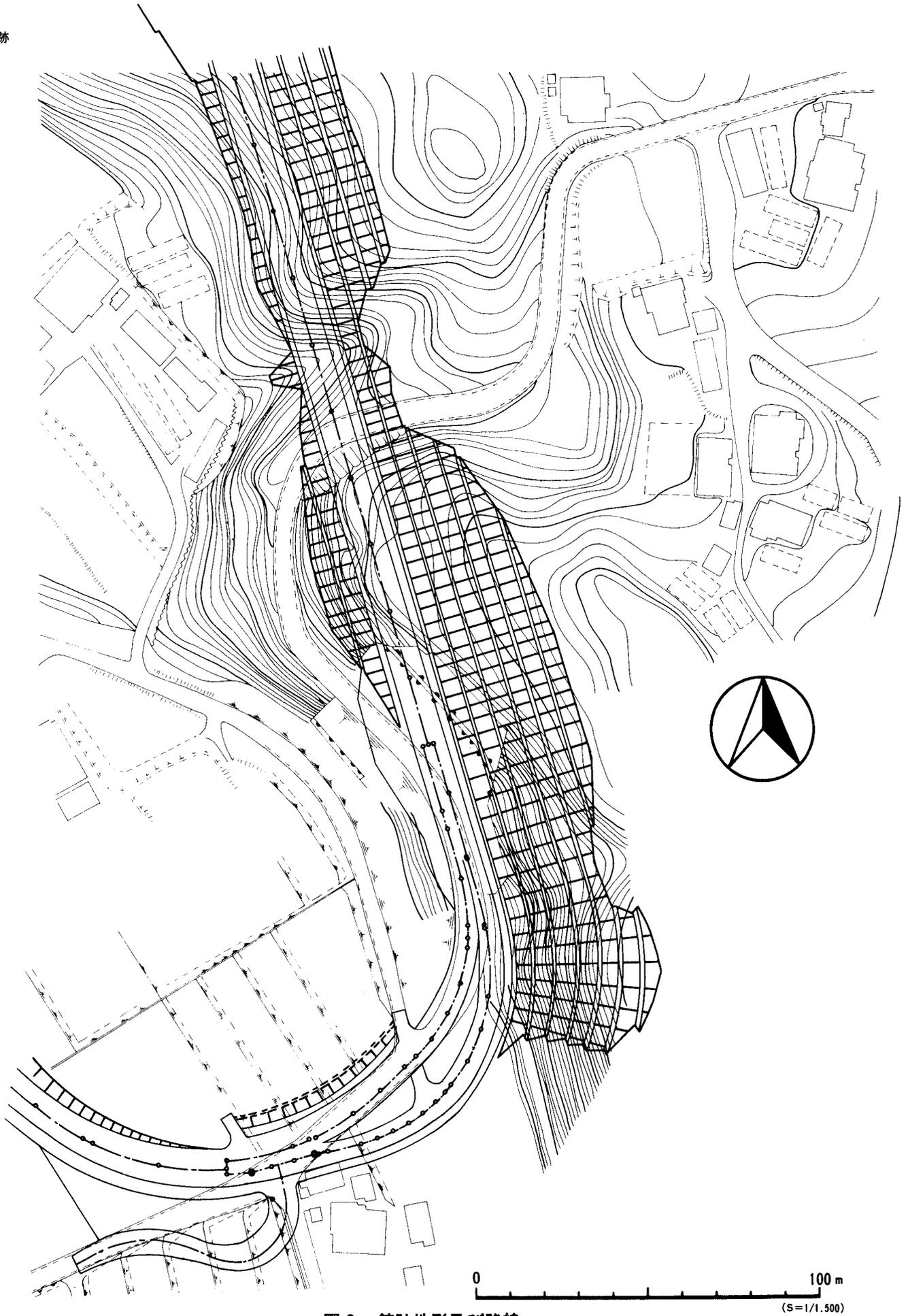


図 2 館跡地形及び路線

(S=1/1.500)

第3節 館跡周辺の地形・地質と基本層序

松山 力

1) 位置と周辺の地形・地質

小沢館跡は、階上岳山体西麓の丘陵地を切り裂いて北方に流れる松館川（妙川）の、東岸に接する谷壁を刻む谷型急傾斜に挟まれて、舌状に北西に突き出す1 ha程度の小規模な卓状地にある。

階上岳は、館跡の東方約4 kmに標高740mの山頂をもつ、頂部がなだらかな、長さ約12km、幅5 km余りの山体で、その長軸は西南西から東北東にのびている。東麓の東方に傾斜する幅約3 km程の丘陵地を隔てて、太平洋岸（館跡からの最短直線距離は北東方へ12.5km）が北東にのびている。

松館川（妙川）は、館跡の北方約7 kmの八戸湾に注ぐ新井田川に、北方約5 kmで合流する支流で、南東方約5 kmの岩手県境付近に、主流の源流部がある。

図3は、館跡を中心とした東西5.5km、南北4 kmの範囲の地形区分図である。

館跡周辺地域は、海拔180～230mの蒼前平段丘（最高位段丘）相当の丘陵と、其れを刻む谷壁急傾斜面および狭長な谷底平野（沖積地）が主で、中・低位の洪積段丘は、谷底平野縁辺のところどころに見られるにすぎない。階上岳山体の西縁から北縁にかけては、山塊の急斜面に接する丘陵面を覆うように、14～16°前後の扇状地性の山麓緩斜面が断続的に分布している。

新井田川以東の地域の基盤は、おもに先第三系の堆積岩と火成岩類、および変成岩類である。火成岩類はおもに階上岳山塊のほとんどを占める花崗閃緑岩と海岸部に多い古期安山岩で、一部にこれらを通る脈岩類や、花崗閃緑岩体周縁相の閃緑岩などが分布する。堆積岩類は、粘板岩・砂岩・チャート・石灰岩・緑色凝灰岩（輝緑凝灰岩）などで、それらが花崗閃緑岩体と接触する地域には結晶質石灰岩（大理石）やホルンフェルスなどの接触変成岩が分布し、一部に千枚岩質緑色岩類や結晶片岩類などの変成岩が見られる。これらの岩石は、周辺遺跡から出土する石器類の材料となっている。

新井田川ぞいの島守盆地の周囲や、その下流方、八戸市是川付近の新井田川の西側には、新第三紀中新世の砂岩、頁岩、凝灰岩類を主とする堆積岩類や、安山岩などの火成岩類が分布している。

以上の基盤岩石の上には、礫・砂・シルト・粘土などの段丘堆積物や、褐色火山灰層（いわゆるローム層）などの火山碎屑物がのり、最上部を黒色土層群が覆っている。

この地域の褐色火山灰などの火山碎屑物は、下位から先天狗岱火山灰層（九戸火山灰層）、天狗岱火山灰層、高館火山灰層および八戸火山灰層の4群に分けられている。最上部の黒色土中には、それぞれに特徴をもつ十和田火山起源の南部浮石層、中振浮石層、十和田b降下火山灰層、十和田a火山灰層や、朝鮮半島基部の白頭山起源の苦小牧火山灰層などの火山碎屑物が挟まれている。

2) 館跡の地質と土層序

館跡と直近域の基盤は先第三系の粘板岩である。粘板岩の上には、巨礫を含む砂礫層や砂層、シルト層などで構成される厚さ1～2 mの段丘堆積物がのり、礫層中の礫種は、背後の山体を構成する花崗閃緑岩体の周縁相の閃緑岩やはんれい岩、花崗閃緑岩体などを貫く輝緑岩などの脈岩類で、硬質砂岩や粘板岩礫なども含まれている。段丘堆積物は、上限に1～数cmの風化帯を伴う厚さ数10cmの粘土質褐色火山灰層とその上の八戸火山灰層に覆われ、火山灰層は地表直下の黒色土層に漸移する。

図4は、館跡北側の堀跡の壁をつくる八戸火山灰層と黒色土層群の断面の一部である。

表土のⅠ層は、厚さ3～12cmの黒褐色土層(10Y R3/1)で、粒径1～5mmの明黄褐色(10Y R7/6)や褐色(10Y R4/6)の浮石粒が散らばっている。Ⅰ層の下位には、黒褐色土(10Y R3/1)中に黒色土塊(10Y R2/1～1.7/1)と褐色土塊(10Y R4/6)が入り乱れる部分があり、Ⅰb層とした。

Ⅱ層は、厚さ約20cm程の黒色土層(10Y R2/1)で、粒径1～10mmの明黄褐色浮石粒(10Y R7/6)や褐色浮石粒(10Y R4/6)が散らばっている。

Ⅲ層は、厚さ6～70cmの黒色土層(10Y R2/1)で、粒径3～8mmの堅い灰白色～浅黄橙色浮石(10Y R8/1～8/4)が5～7%程度の割合で混入している。この浮石は、十和田b降下火山灰に由来するものであるが、二次的に土層中に散乱したもので、土層の時代を限定するものにはならない。

Ⅳ層は、厚さ4～22cmの黒褐色土層(7.5Y R3/2)で、粒径1～3mmの黄褐色細粒浮石(10Y R5/8)粒や中振浮石に由来する粗粒砂大の黄色火山灰(2.5Y R7/8)あるいは十和田b降下火山灰に由来する粒径2～5mmの堅い灰白色浮石粒(10Y R8/2)が混入している。

Ⅴ層は、厚さ18～50cmの黒褐色土層(10Y R3/1)で、中振浮石に由来する、火山灰と粒径が3～5mmの火山灰塊がやや多量に混入している。Ⅳ層との境界には縄文時代中期の土器片が散在する。

Ⅵ層は、厚さが30～50cmで、上半部は中振浮石に由来する粗粒砂大の火山灰が混じる黒褐色土(10Y R3/4)で、下半部が黒色土(10Y R2/1)で構成されている。上半部にはところどころで粒径1.5～5mmの中振浮石塊が断続的に集中する部分があり、下半部には、南部浮石に由来すると思われる粗粒砂大から粒径10mm程度までの黄褐色浮石粒(10Y R5/8)が7～10%の割合で混入している。

Ⅶ層は、厚さ12～20cm程の南部浮石層である。館跡の南部浮石層は、粒径2～10mmの黄橙色浮石(上半部が7.5Y R8/8、下半部が10Y R8/8)の密集層で、隙間は粗粒砂～細礫大の暗色岩片で満たされるが、膠結が進んでいないので、くずれやすい。

Ⅷ層は、厚さ15～25cmのよくしまった粘土質黒褐色火山灰層(10Y R2/3)で、おもに南部浮石に由来する浮石粒を、上部ほど密(3～7%)に含んでいる。その色合いは灰白色、にぶい黄橙色、明黄褐色、黄橙色など、多彩である。

Ⅸ層は、厚さ120～140cmの粘土質褐色火山灰層(10Y R4/6)で、下位層の浮石粒が散らばる。

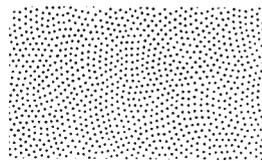
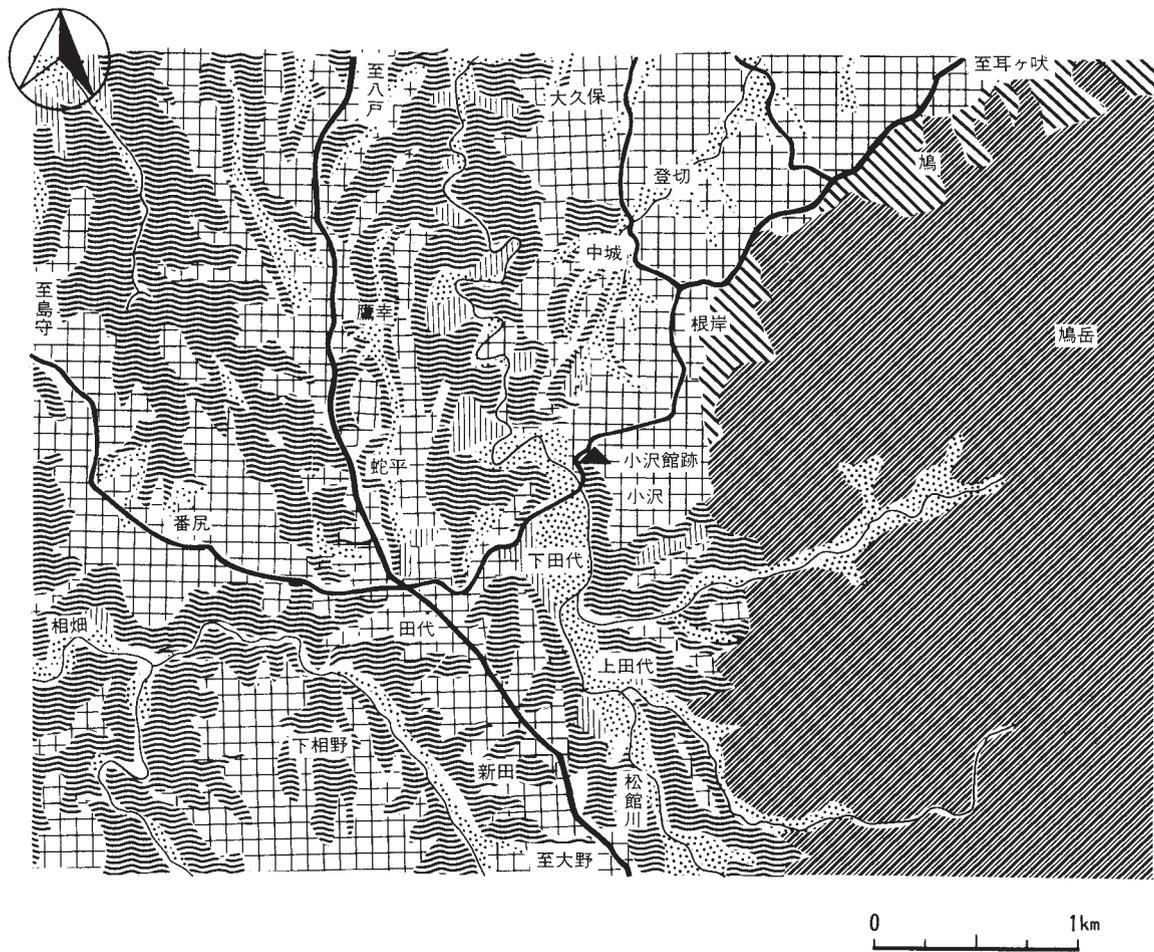
X層～Ⅻ層は降下型の八戸火山灰層である。そのうち、X層はおもに粗粒砂大の火山灰からなる厚さ8～15cmの火山灰層で、明黄褐色(10Y R6/6～6/8)ないし黄褐色(10Y R5/8)を呈する。Ⅺ層は厚さ12～26cmのにぶい黄色浮石層(2.5Y R6/4)で、おもに粒径2/10cmの浮石が集まっている。Ⅻ層は、図では厚さ5cm以上(ここでは下限不明)の、灰白色粘土質砂質火山灰層(10Y R8/1)である。

X層、Ⅺ層、Ⅻ層は、それぞれの順に、大池ら(1970)のⅤ層、Ⅳ層、Ⅰ層にあたる。

館跡の東半部では東側と南側で黒色土層が欠如し、表土直下に直接八戸火山灰層が存在する部分が多い。黒色土の欠如は、館の造成時の削剝によるものと思われる。八戸火山灰層の下は、厚さ0～40cmの褐色火山灰層に覆われた、最上部に10～50cmの砂をのせる砂礫層となっている。砂礫層は径10～30cm(最大50cm±)の大・巨礫の密集部分が主体で、隙間は砂・シルトで充填されている。

引用文献

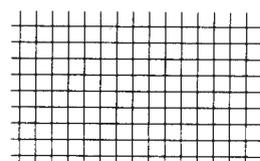
大池昭二・七崎 修・松山 力、1970 八戸平原地域地質調査報告書 東北農政局計画部



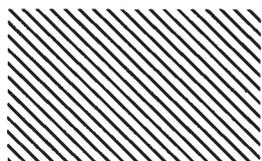
沖積地



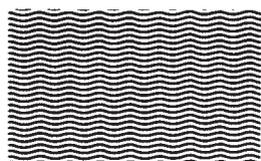
洪積低位段丘面



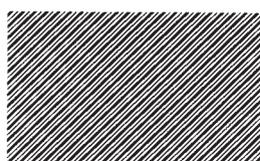
蒼前平段丘面



山麓緩斜面



急傾斜面



階上岳山体

図3 館跡周辺の地質

3) 館跡内の層序

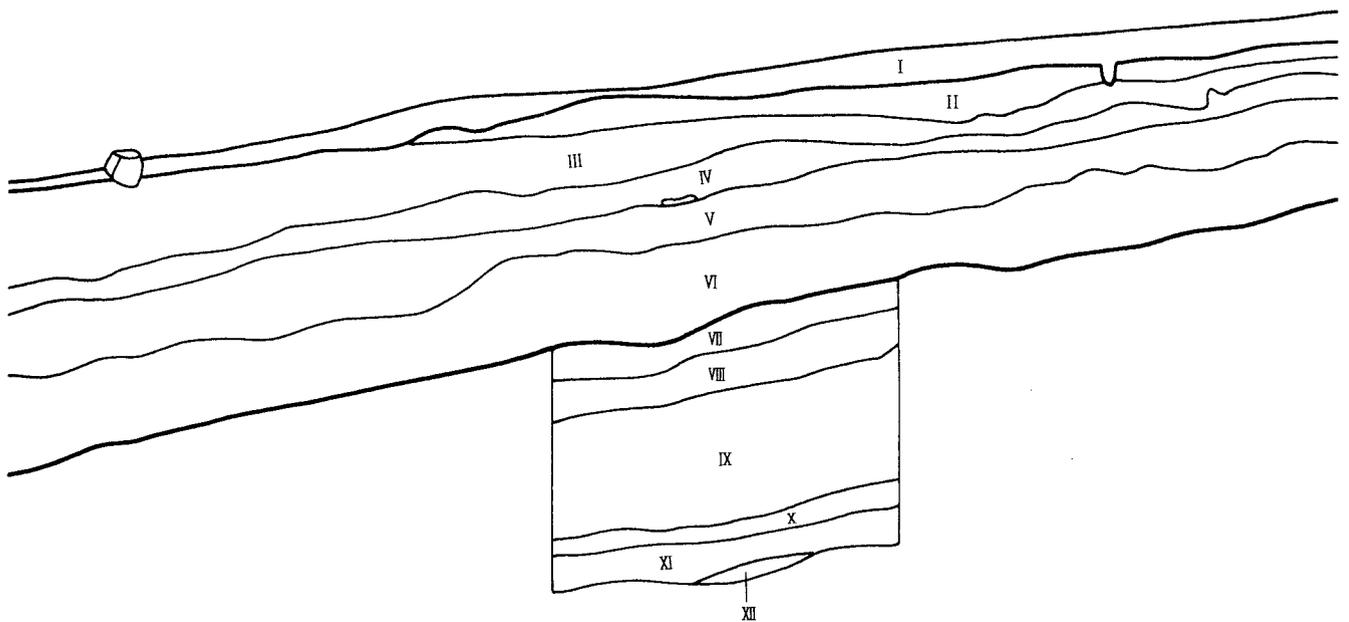
館跡の立地する丘陵の基本層序は、前述のとおり第Ⅰ層から第Ⅻ層まで分けられ、その基盤は粘板岩層となる。館跡内部に、自然層序を確認できる範囲は、土層確認トレンチを設定した、J・K36グリッド部分だけである。この部分は、土層および基盤の傾斜から沢頭部分に相当するものと判断され、部分的に土層がプライマリーな状態で残っていたものと考えられる。

館跡内部の被覆土は、すべて第Ⅰ層ないし第Ⅰb層である。第Ⅰb層は、黒褐色土中に黒色土塊と褐色土塊が混入し、部分的に砂粒や碎石を混入することから、後世の攪乱土と判明した。この第Ⅰb層の拡がりは、虫食い状態に調査区全域に見られ、特に調査区西側に大きく残っている。状況的に備壁およびフェンス構築の際の影響と判断している。

このため、調査区内は、遺構堆積土以外は第Ⅰ層・第Ⅰb層直下が第Ⅸ層の粘土質褐色火山灰層となる。遺構の検出面は、大部分はこの第Ⅸ層面となるが、G・H20グリッド付近ではこの層も薄く、基盤の粘板岩層直上の、巨礫を含む砂礫層や砂層が検出面となる。

館跡は、自然地形を改変して作られているため、自然層である第Ⅱ層から第Ⅷ層までが欠失している。遺構の堆積土は殆どが埋め土で、第Ⅴから第Ⅶ層の浮石や上層の土、下層のロームブロック（粘土質火山灰ブロック）が混入する。土木遺構である土塁は、旧表土から第Ⅸ層までの土が集約され構築されており、縄文時代に否定される土坑以外の個別遺構は、第Ⅸ層面から作られているものと考えている。堀跡は、基盤の粘板岩層面まで掘り込まれている。 (小田川)

— 192.50 m —



基本層序			
第Ⅰ層	黒褐色土 (10Y R3/1)		
第Ⅰb層	黒褐色土 (10Y R3/1)	第Ⅶ層	南部浮石層 (7.5Y R6/8~5/8)
第Ⅱ層	黒色土 (10Y R2/1)	第Ⅷ層	黒褐色土 (10Y R2/3)
第Ⅲ層	黒色土 (10Y R2/1)	第Ⅸ層	褐色粘質土 (10Y R4/6)
第Ⅳ層	黒褐色土 (7.5Y R3/2)	第Ⅹ層	明黄褐色砂層 (10Y R6/6)
第Ⅴ層	黒褐色土 (10Y R3/1)	第Ⅺ層	にぶい黄色浮石層 (2.5Y R6/4)
第Ⅵ層	黒色土 (10Y R2/1)	第Ⅻ層	灰白色粘土質砂質火山灰層 (10Y R8/1)

0 2 m
(S=1/40)

図4 基本層序

第4節 周辺の館跡

階上町内には、現在約70箇所の遺跡の所在が確認されている。これらはおおよそ、JR八戸線に沿うように海岸段丘上に立地するもの、階上岳裾野に広がる標高およそ150m～180mの丘陵地に立地するもの、階上町と南郷村を画する解析谷の頂部付近に立地するものに分けることができる。時代別には、縄文時代早期から中世期のものが各ブロックに点在している。

図1と表1には、所在確認できる館跡と発掘調査で詳細が判明している遺跡を示した。

白座遺跡は、縄文時代前期円筒下層a式を主体とした遺跡で、大木文化との関わりが指摘される。

野場(5)遺跡は、縄文時代中期後半の集落跡で、植物遺体が遺構から出土したことで注目される。

町内の館跡は、「青森県遺跡台帳」(平成4年度)では7ヶ所あるほか、「南部諸城の研究」(昭和52年：沼館愛三)では、9ヶ所ある。以下に各館跡の概略を両文献から抜粋して記述する。

小沢館跡については、次節で記述する。

晴山沢館跡は、根岸集落の西方約500mの南北に延びる丘陵地に位置する。丘陵の南側を切り土して構築される。丘陵の東西は谷地形である。規模は、東西約50m、南北約155mの単郭である。二重の堀跡が全周する。時期と由来等は明らかではないが、小沢館跡と登切館跡の間に位置し中城とも呼ばれている。

根岸館跡は、階上岳西側中腹の標高約300mの派生山地に立地する。馬背状地の頂部に構築されており、規模は東西約200m、南北約100m程である。西側に二重の堀跡と平坦面が階段状につくられてある。山城であり、由来等は明らかでない。

登切館跡は、登切集落の北側丘陵地を利用してつくられてある。北側は台地続きで、南側は村に接する。丘陵の東西は谷地形である。規模は、東西約100m、南北約200mの単郭である。南北に堀跡がある(「南部諸城の研究」の図では二重の堀跡に見える)。形態は、小沢館跡や晴山沢館跡と殆ど等しい。時期と由来等は明らかではない。

平内館跡は、平内集落の北方約600mに位置する。南北に延びる馬背状台地の先端部に構築されてある。東西と北側が谷地形で、南側に堀跡が見られる。規模は、東西約140m、南北約200m程あったが、現在は石灰岩採掘により10m四方を残し大部分が消滅している。

鳥屋部館跡は、鳥屋部集落から約200m南側の標高約160mの高台に位置する。南北両側は谷地形である。規模は東西約150m、南北約80mで、四重の堀跡が巡らされてある。伝承では、根城八戸家土鳥屋部氏がいたという。

道仏館跡は、道仏小学校から約500m西の道仏川北側の河岸段丘に立地している。館跡は方形単郭で、規模は約150m程である。現在、館跡内の南西隅には神社が奉られている。二重の堀跡が、全周するようにつくられてある。伝承によれば、館主は赤松民部吉時で、天正19年九戸の乱の際に九戸勢に攻められ落城したといわれる。

これらの館跡のほかに、「南部諸城の研究」のなかに赤保内館跡と上野館跡がある。共に、居館型の館跡で、堀跡が巡らされているとある。しかし、両館跡とも所在が明確ではなく位置を特定できないほか、規模形態について不明な点が多い。(上野館跡は道仏館跡と混同されている可能性がある)

(小田川)

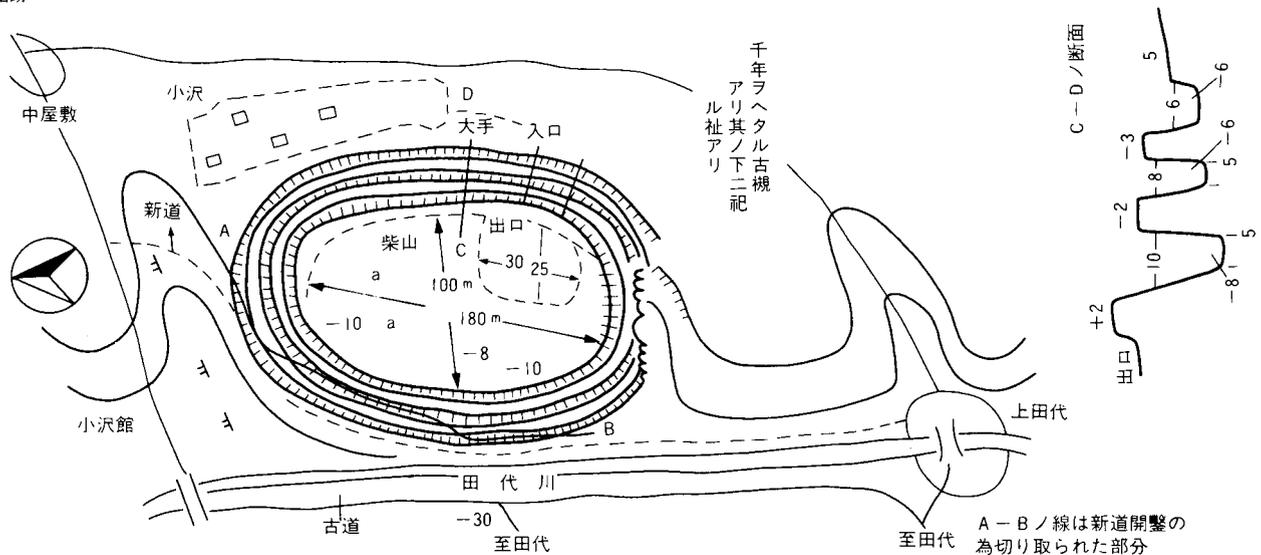


図5 「南部諸城の研究」掲載小沢館跡

第5節 小沢館跡概略

位置と規模形態

小沢館跡は、階上町西部の晴山沢と田代地区の間に位置する。新井田川の細支流である妙川（田代川）の東岸、標高180m～190mの段丘端部に立地する。妙川から段丘まで比高差は、およそ40mあり、西側は急崖となっている。

館跡は、段丘の縁から東側に三重の堀と土塁を巡らし構築されている。この堀跡と土塁から、地元はもとより古くから知られる著名な館跡である。規模は、南側短軸方向で約80m、長軸方向約140mであり、館跡内部は、単軸方向で50m、長軸方向で100mの広さをもつ。内部の地形はほぼ平坦であるが、東側から西側へ傾斜しており、比高差は約10mある。形態は、北西方向が卵形、南東方向が隅丸となり、全体的には楕円形状である。構造的には、堀跡が南西側の一部を除きほぼ全周していたと思われる、単郭の館である。

本館跡の規模や形態、性格や役割等については、沼館愛三氏が、南部領旧十郡内にある二百八十六の城跡を実地に調査しまとめた研究書「南部諸城の研究」の中で、詳細に述べられている。

以下、「南部諸城の研究」から抜粋。

「田代東北一軒余、田代川の右岸である。当館の由来は、明確でないが蝦夷館で、後人が之れを利用したものである。—中略— 近年新道開鑿の爲め、西二番壕以下崩壊し、原型を失したのは遺憾である。城地は、高地の末端が河畔に臨んだ処を利用したもので、其形状楕円形をなしている。其遺構は、平地より高きこと三十米、南北百八十米、東西約百米の広さを有している。上面平坦でない。西するに従い低く、東南隅に比し約十米の差がある。—中略— 南辺より東辺にかけて、高さ約二米の土居がある。之は、東面よりする敵に対しての防禦設備である。三重の堀が廻らされ其間に二重の土居がある。—中略— 堀間の土居は次第に外方になるに従い低くなり、本壘上からの弓射に支障のないように経始されて、弓射時代の特徴をあらわしている。中堀外堀は、匡壕をなして、敵の乗越を妨げている。—中略— 当館は、土豪の居館というよりも、寧ろ万一の際、領内の領民を保護収容するにあるものの如くである。—中略— 当館は、非常に苦心して三条の堀を作って、之に全勢力を注いでいるが、其他の設備は、殆ど現地のみままで特別な加工をなしていない。自然の地形

を其尽使用しているのは、臨時的の意味が多分に含まれている。又、館址と思われる処は、郭内の一部で僅かに三十米に二十五米の一郭に過ぎない。 —中略— 結局、領主も領民も万一の際、之に立籠る程度のものであろう。階上山麓の諸城館は皆此種の寨壘である。」

上記の記述と掲載された図（図5）について、調査の状況と比較して見ると、各部の数値に若干の違い見られることと、東側堀跡が埋められていること、細部が不明瞭な点を除けば大きな違いはない。個人踏査で、雑草木の密集する山地からこれだけの情報を得たことについて敬服する次第である。

しかし、「近年新道開鑿の為め、西二番壕以下崩壊し、原型を失したのは遺憾である。」という点に関しては、地形と調査の成果からは異なる。以下に、発掘調査で検出した遺構について、記述する。

（小田川）

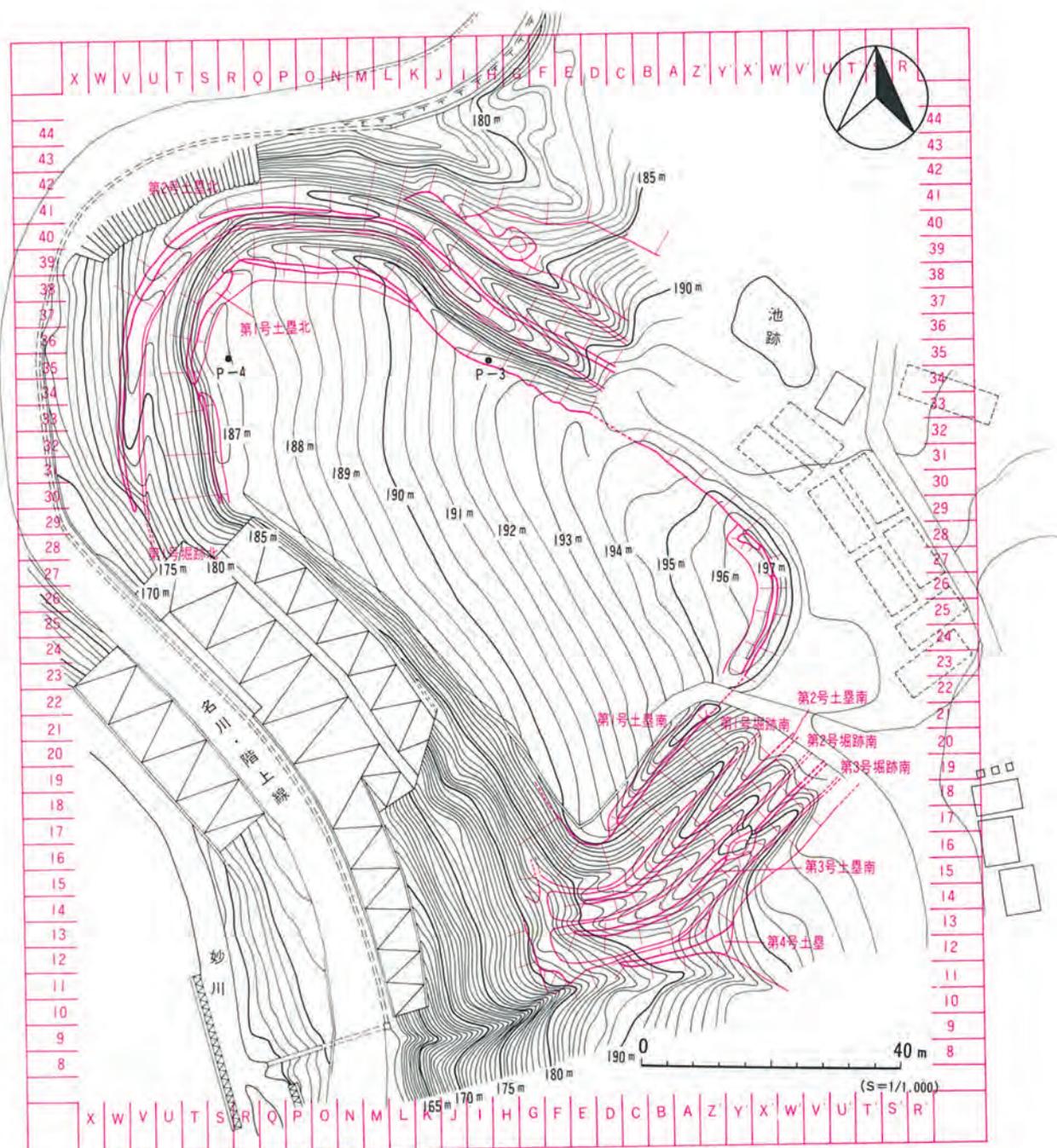


図6 堀跡・土塁現況及びグリッド配置

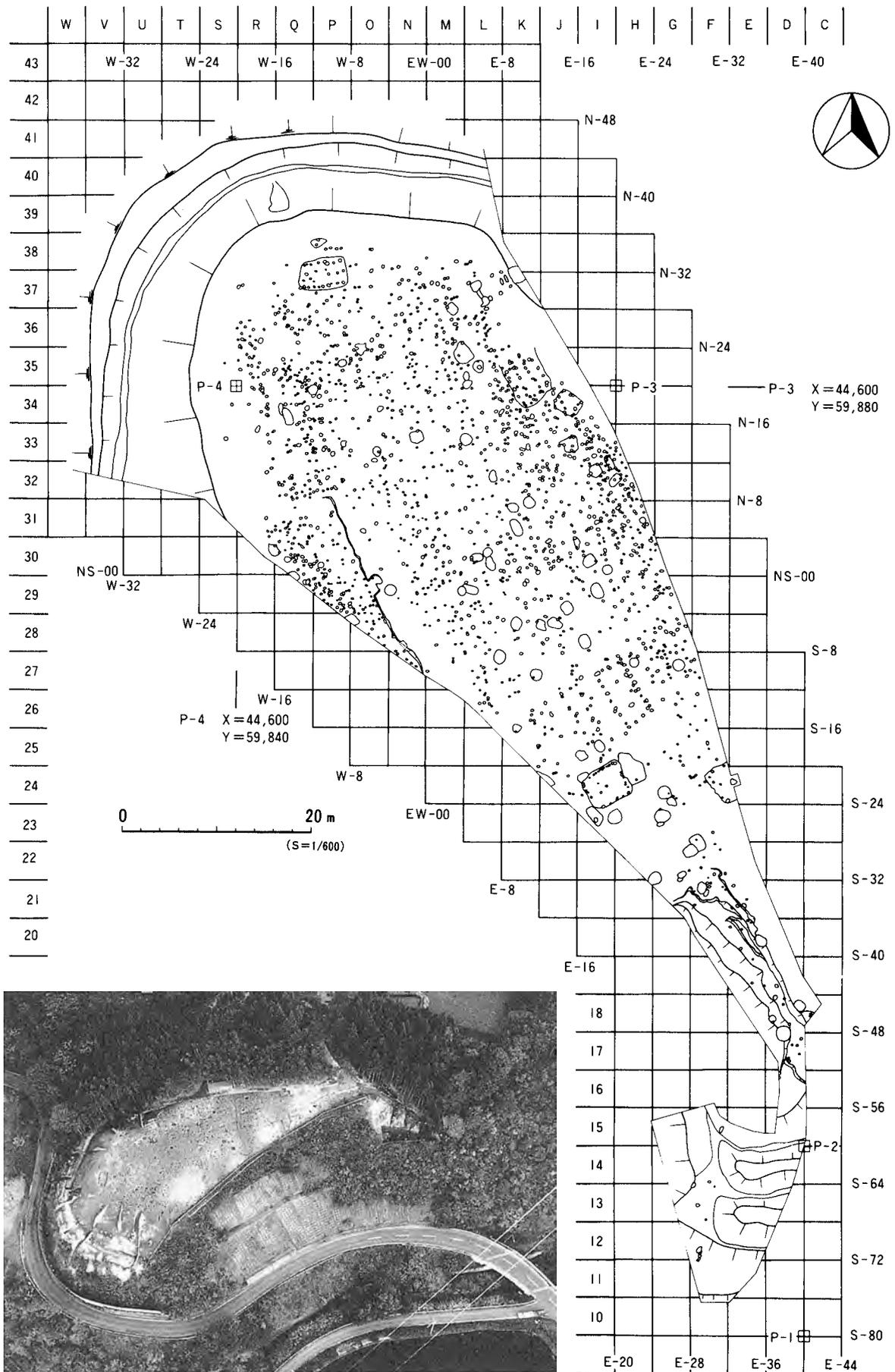


図7 遺構及び測量点配置

第2章 遺構と遺物

本調査で検出した遺構は、現況で確認できる堀跡と土塁のほか、道跡1ヶ所、門跡2ヶ所、竪穴遺構9基、土坑57基、焼土炭化物跡7カ所、地割り5ヶ所、小穴（柱穴）約1,750数個である。

検出された上記遺構は、館跡内部に乱雑に拡がっている。本来、館跡・城跡の内部は画一性の強い配列等で構成されるものであるが、その様な状況は見受けられない。唯一、地割り箇所が西側に集中しているくらいである。特に、柱穴と考えられる小穴は極めて不規則で散在して検出された。土坑も同様に散在してあり、縄文時代に比定されるものもある。

出土遺物は、陶磁器、土師器、縄文土器、石器、石製品、鉄製品、銭貨がある。

遺物の中で最も出土数が多いのは縄文土器であり、館跡に関連する遺物は少ない。縄文時代の遺物は、館跡構築時の削土や土の移動で攪拌されている。

以下、館跡をかたち作る堀・土塁などの土木遺構、館跡内部に作られる個別遺構の順に記述する。遺物についてもまとめて掲載記述する。

第1節 堀跡

現地地形図と沼館氏が「南部諸城の研究」に表した図（図5）からも読みとれるように、本館跡の最大の特徴は、堀跡と土塁にある。堀跡と土塁は、館を取り囲むように各々3条つくられているが、調査の結果、沼館氏が指摘するような、3条すべてが完全に全周してはいなかった。

堀跡と土塁は、調査区に二分されたため、調査時には北内堀跡・北内土塁、南内堀跡・南内土塁・南中堀跡・南中土塁・南外堀跡・南外土塁と呼称していた。地形図作成の際、館跡南端の調査区外に地形的に土塁と考えられる部分があったことから、館跡の構造上、記述する必要があるため調査時の名称を以下のように変更して記述する。

北内堀跡 第1号堀跡北、南内堀跡 第1号堀跡南、南中堀跡 第2号堀跡南、
南外堀跡 第3号堀跡南、北内土塁 第1号土塁北、北中土塁 第2号土塁北、
南内土塁 第1号土塁南、南中土塁 第2号土塁南、南外土塁 第3号土塁南、
調査区外土塁 第4号土塁とする。

第1号堀跡北（図8～図14）

[位置・確認] 館跡の最も内側の堀跡で、北端に弧状に巡る。現況で、D33・34グリッドからS～U30グリッドまでの範囲に、斜面を鋭角に切り落として作られていることが明瞭に確認される。標高は約190m～178mである。館跡東側のD33グリッドから南側は埋められている。

地権者からの聞き取り調査によると、図・に示したビニールハウス（波線四角）の範囲に3条の堀跡があり、昭和30年代頃に耕地用として平坦地にしたそうである。西側は、U27グリッドまで窪地として確認できるが、ここから南側は傾斜面となり自然地形と峻別できない。調査範囲内はすべて掘り上げた。

[規模・形態] 本来は、第1号堀跡南に連続していたもので、全長は約230m～240mあるものと推定される。調査区内の長さは、約64mある。堀跡の上幅は、第1号土塁北と第2号土塁北間で約10m

ある。堀底は、50cmから約1mの幅を持ち、底面は多少起伏がある。第1号土塁北の頂部から底面までの比高差は最大8mで、平均して5～6mある。法面の勾配は、南側が急で約35～45度、北側は約20～35度ある。断面形は、底面が緩いU字形となるが、いわゆる葉研形状である。

〔土層〕 堀跡の堆積土は、第1号土塁北から連続する3本のベルトを設定して観察した。堆積土については、相互に対比させるべきであったが、部分的にしか把握できなかった。堆積土は、褐色土を主体にした土で各層中に第Ⅶ層の南部浮石や第Ⅴ層の中礫浮石が含まれる。部分的に第Ⅸ層以下の粘質土がブロックで含まれる。ほとんどが、第1号土塁からの流入によるものと考えられ、部分的には、土塁を崩し埋められた可能性がある。特徴的なのは、土層C-C'の第13層と14層である。第13層は、褐色土を主体にした混合層で、図示できなかったが薄層の互層をなしている。また、非常に硬くグライ化している。第14層は、暗褐色土で緻密で硬く、締められている感じである。同様な層面は、土層E-E'の第11層と12層に見られる。このことから、これら層の上面での使用が考えられる。

〔遺構と遺物〕 遺物は堆積土中より数点の縄文土器と、石臼の破片が出土した。このほかに図・、図・～・に示した様に、堀底から多量の礫が出土した。礫の大きさは10cm～60cm位で、堀底から10cm～30cm程浮いた状態で出土した。MN40グリッドとU33・34グリッド付近では密集しているが、配列等は見受けられない。堀底と平行するように面的にあり、単に投げ込んだという状態ではない。

〔小結〕 本堀跡は、立地する丘陵の基底となる粘板岩を掘り込んで作られている。館跡北側を形づくると共に、第1号土塁北と連続し急勾配と高い比高差から、効果的な防御区画施設となっている。堀底は、東側から西側に向かって低く傾斜している。土層観察から、堀底道としての機能が考えられる。堀底面付近から出土した礫は、堀底道とする際の基礎工事的ものであったと考えられる。

第1号堀跡南 (図15・図16)

〔位置・確認〕 調査区南側の最も内側の堀跡で、第1号堀跡北と連続する。現況では、F14・15グリッドからX'20グリッドまでの範囲で、V字状の落ち込みとして確認される。標高は約191m～185mである。第1号堀跡北で記述したように、X'20グリッドから東側は埋められている。本堀跡の西端部は、幅3m程の平坦面に連続し、その先は急な自然傾斜面となる。

〔規模・形態〕 前述のとおり、北に連続し全長は約230m～240mあるものと推定され、西端部付近は緩く屈曲する。調査区内の長さは、僅か9m程である。堀跡の上幅は、第1号土塁南と第2号土塁南間で8m～10m程ある。堀底幅は約30cm～60cmで、底面は凹凸が激しい。調査区東境界部分の、第1号土塁頂部から堀底面までの比高差は5.50mで、縁辺から西端部では6mある。法面の勾配は30度程である。断面形は、およそ葉研形状であるが底面および法面はいびつである。

〔土層〕 堀跡の堆積土は、東側調査区境界面で観察した。堆積層は、第1号土塁側からの第7層が流れ込んで堆積している。第Ⅸ層のローム粒を混入する褐色土である。第8層には粘板岩の破砕片が混入する。

〔遺構と遺物〕 遺物は、表土直下より多数の縄文土器が出土した。ほかに、堀底の端部から踏み締まったような硬化面を確認した。後述する道跡と連続するものと考えられる。

〔小結〕 本堀跡も、基底となる粘板岩を掘り込んで作られている。堀底はいびつで、東側から西側に向かって傾斜している。連続する硬化面から堀底道としての機能も、持っていたと考えられる。

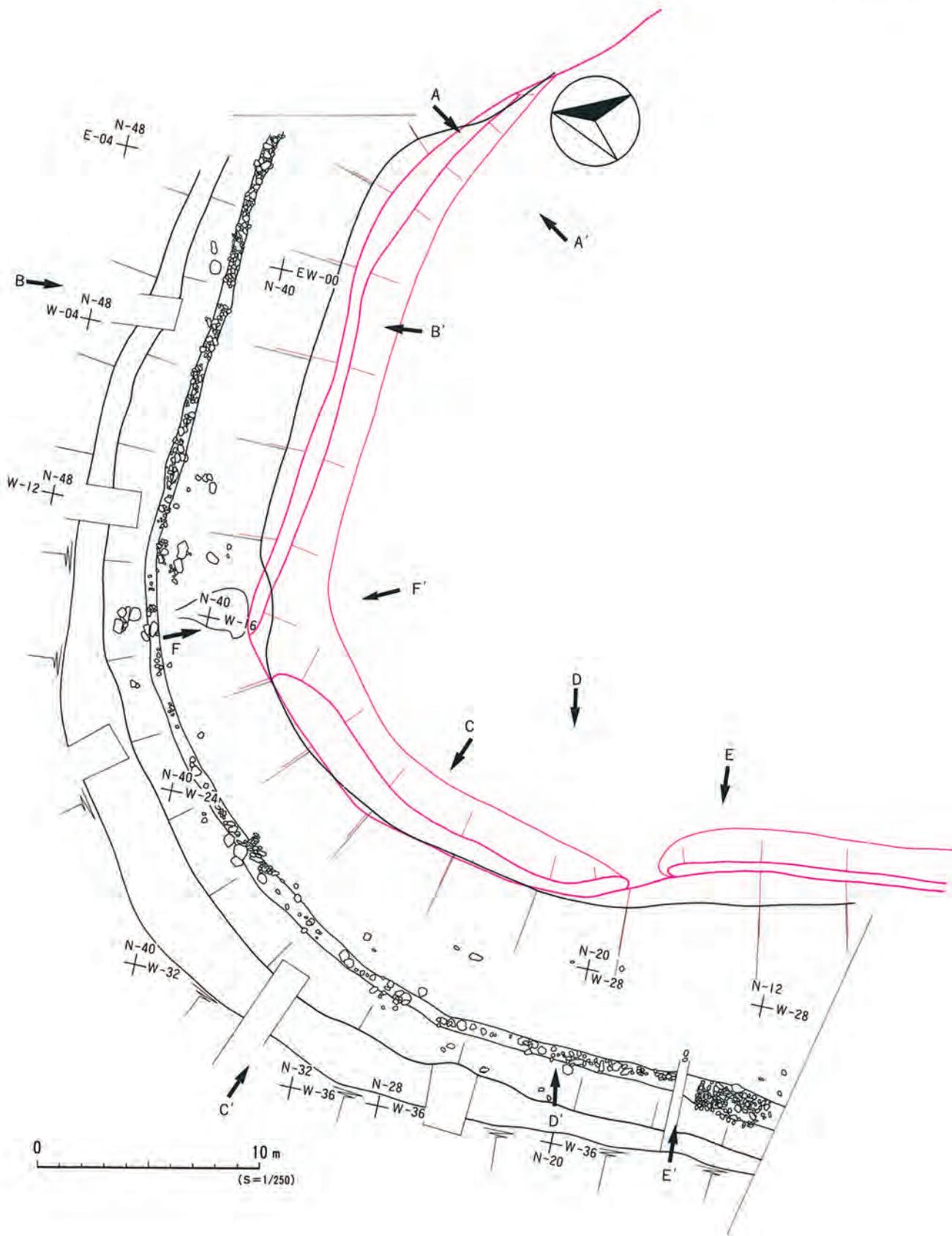
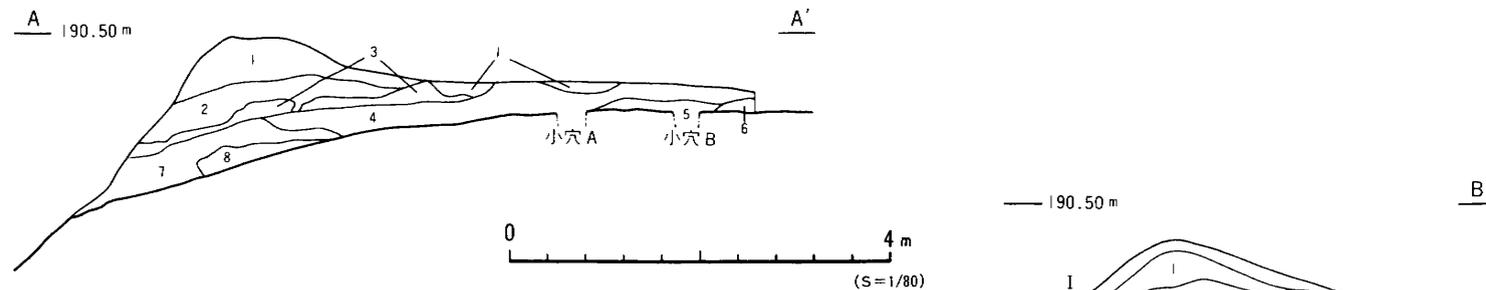
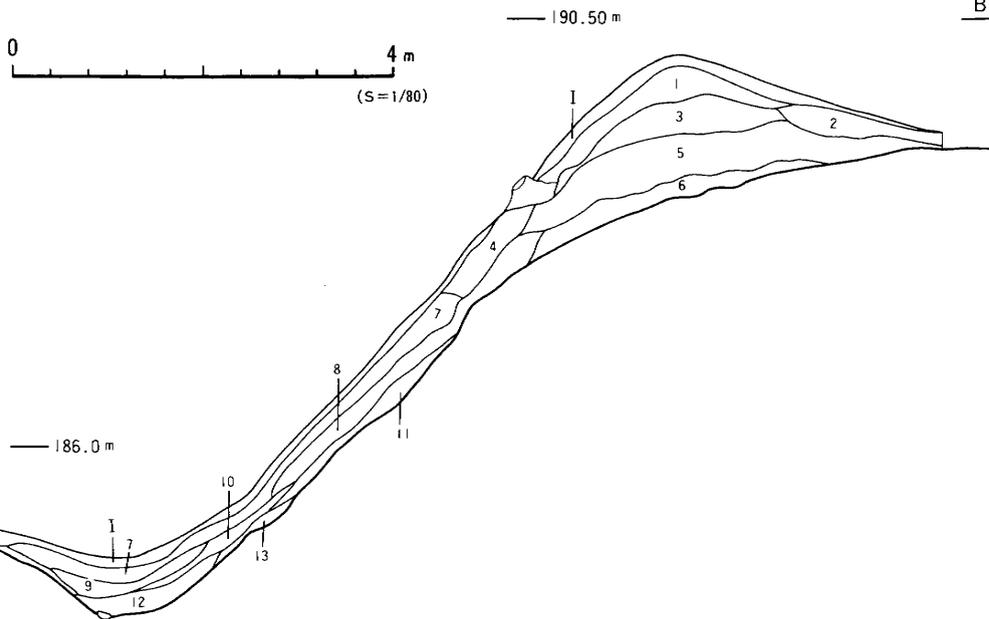


図8 第1号掘跡北、第1・2号土塁北



第1号土壘北土層 A-A'

- | | |
|---|--|
| 第1層 黒色土(10YR2/1)
浮石粒混入 | 第5層 黒褐色土(10YR3/1) |
| 第2層 黒褐色土(10YR3/1) | 第6層 暗褐色土(10YR3/3)
浮石粒中量混入 |
| 第3層 にぶい黄褐色砂質土(10YR4/3) | 第7層 黒褐色土(10YR2/2) |
| 第4層 暗褐色土(10YR3/3)
破碎ロームブロックと黒色土
褐色土の混合層 | 第8層 褐色土(10YR4/4)
破碎ロームブロック主体
若干の褐色土粒混入 |



第1号堀跡北、第1号・2号土壘北土層 B-B'

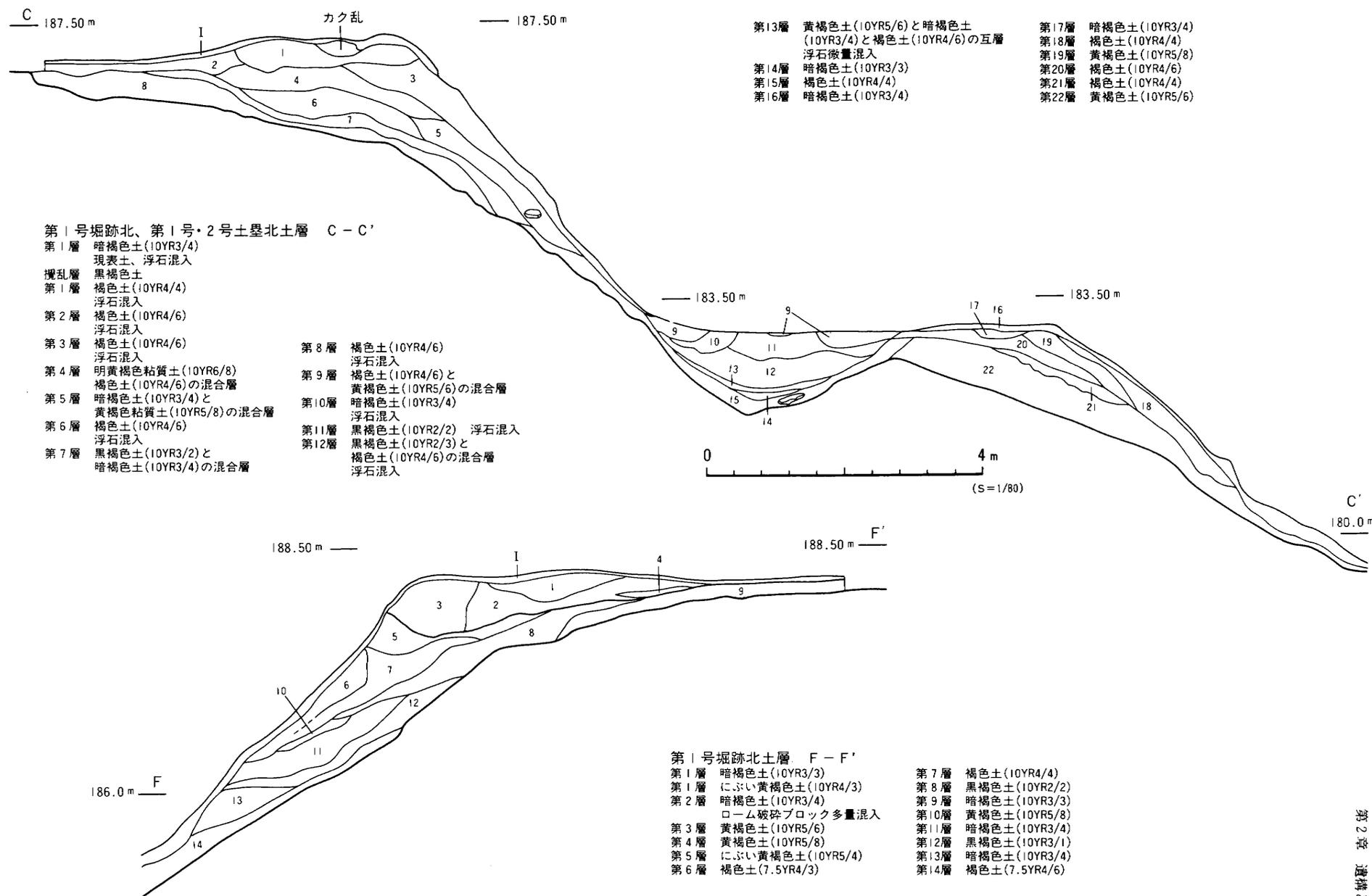
- | | | |
|---|--|--|
| 第1層 暗褐色土(10YR3/3)
現表土 | 第6層 褐色土(10YR4/6)
浮石微量、ローム混入 | 第13層 明褐色土(7.5YR5/8)
粘板岩片混入 |
| 第1層 暗褐色土(10YR3/4)
黄褐色ローム粒混入 | 第7層 暗褐色土(10YR3/3) | 第14層 暗褐色土(10YR3/4)
浮石粒、黒色土微量混入 |
| 第2層 暗褐色土(10YR3/3)
炭化物微量混入 | 第8層 黒褐色土(10YR2/2)
明黄褐色ローム混入 | 第15層 黒色土(10YR1,7/1)
浮石微量、暗褐色土混入 |
| 第3層 黒色土(10YR2/2)
黄褐色ローム混入 | 第9層 暗褐色土(10YR3/3)
浮石及び黄褐色ローム、
粘板岩片混入 | 第16層 暗褐色土(10YR3/4)
ローム粒微量、黒色土混入 |
| 第4層 黒褐色土(10YR2/3)
ローム微量混入 | 第10層 褐色土(10YR4/4)
黄褐色ロームブロック混入 | 第17層 黒色土(10YR2/2)と暗褐色土(10YR3/3)
の混合土、浮石少量混入 |
| 第5層 暗褐色土(10YR3/3)
黄褐色土多量、
ロームブロック混入 | 第11層 明褐色土(7.5YR5/8) | 第18層 黒色土(10YR2/2)
暗褐色土混入 |
| | 第12層 褐色土(10YR4/4)
浮石多量、ローム粒混入 | 第19層 黒褐色土(10YR2/2) |
| | | 第20層 黒褐色土(10YR2/2)
黄褐色ローム粒、浮石混入 |
| | | 第21層 黒褐色土(10YR5/6)
浮石混入 |

181.0 m

カク乱

図9 第1号堀跡北、第1・2号土壘北土層(1)

図10 第1号堀跡北、第1号・2号土塁北土層 (2)



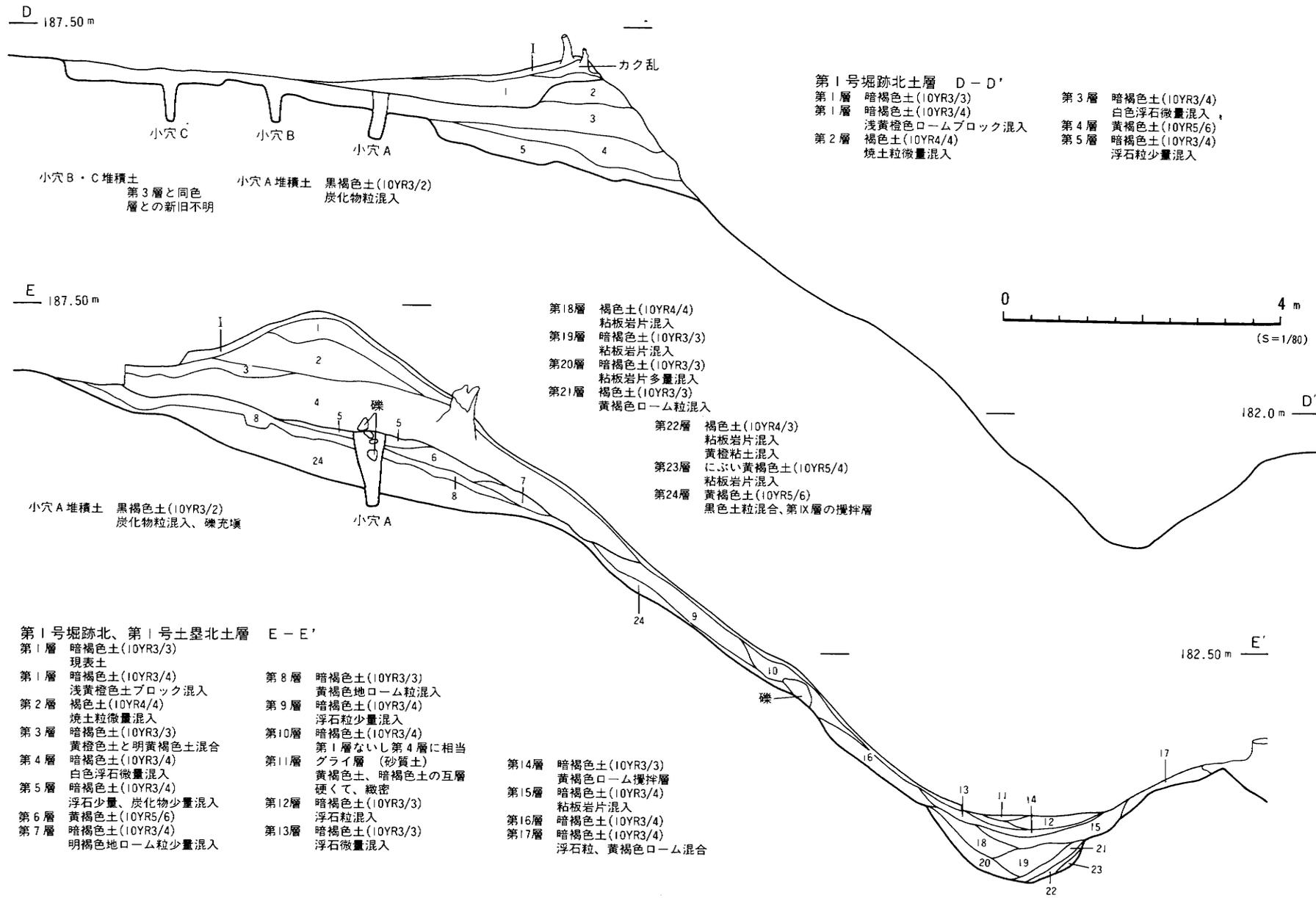


図11 第1号堀跡北、第1号土塁北土層(3)

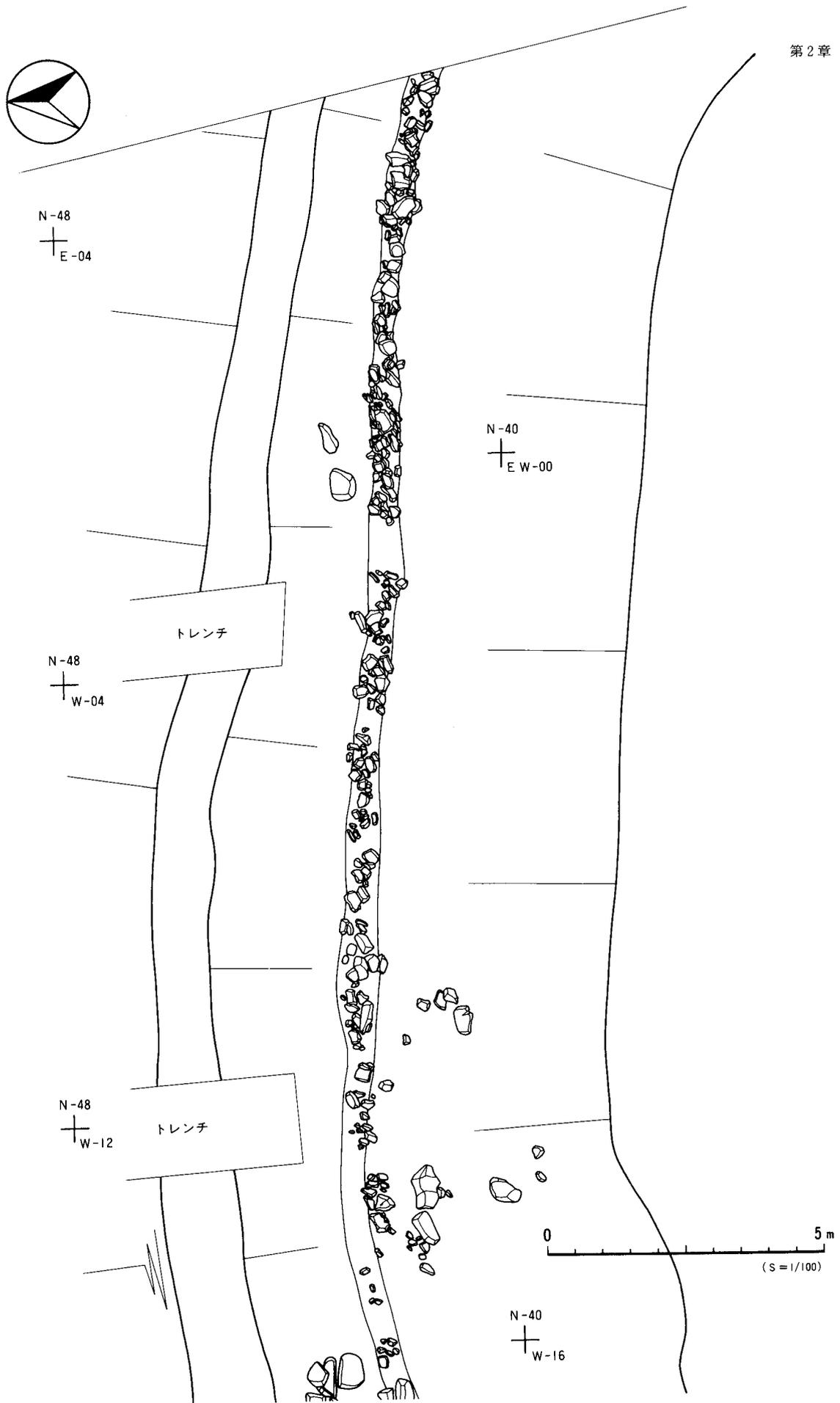


図12 第1号堀跡北出土礫(1)

小沢館跡

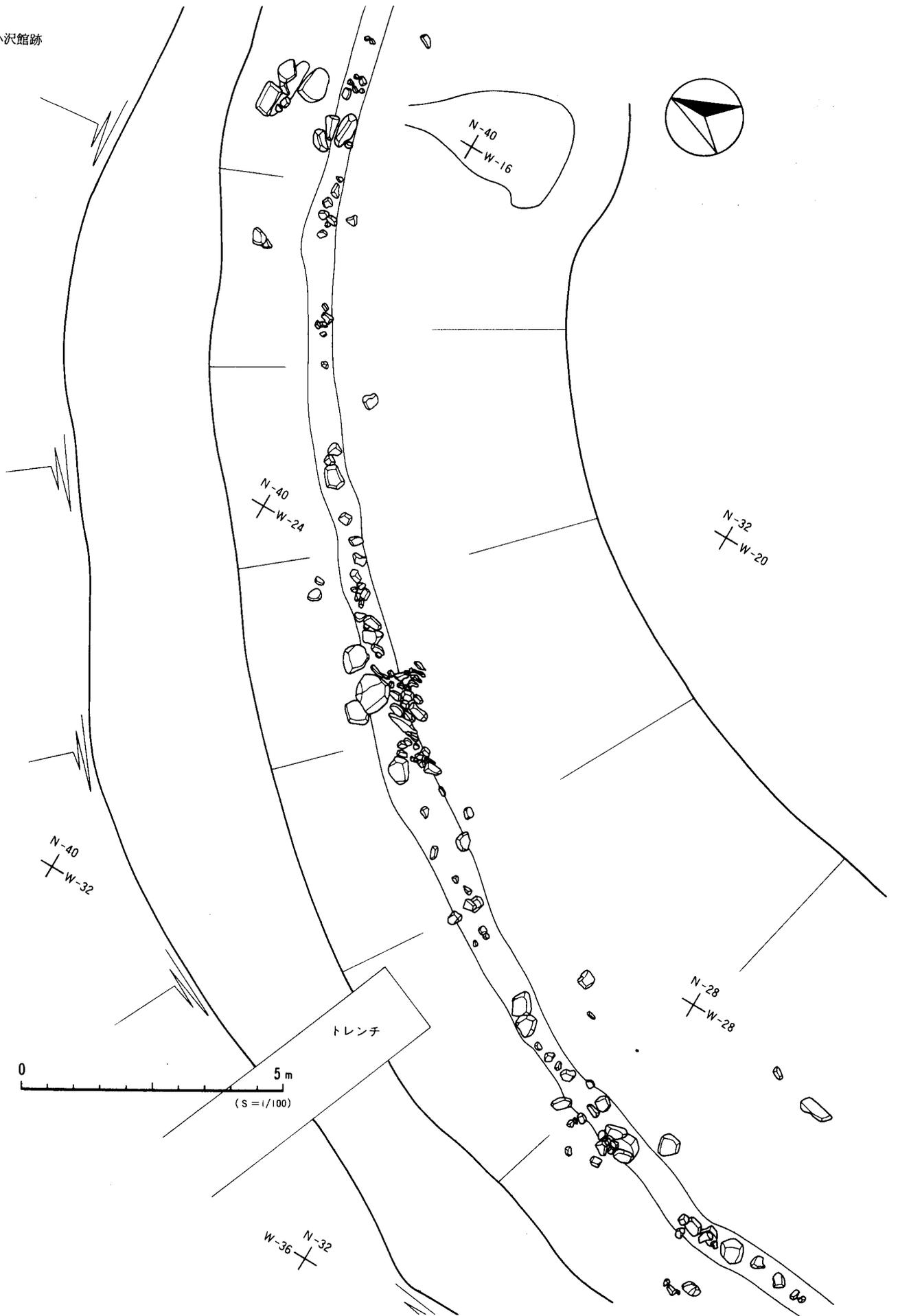


図13 第1号堀跡北出土礫(2)

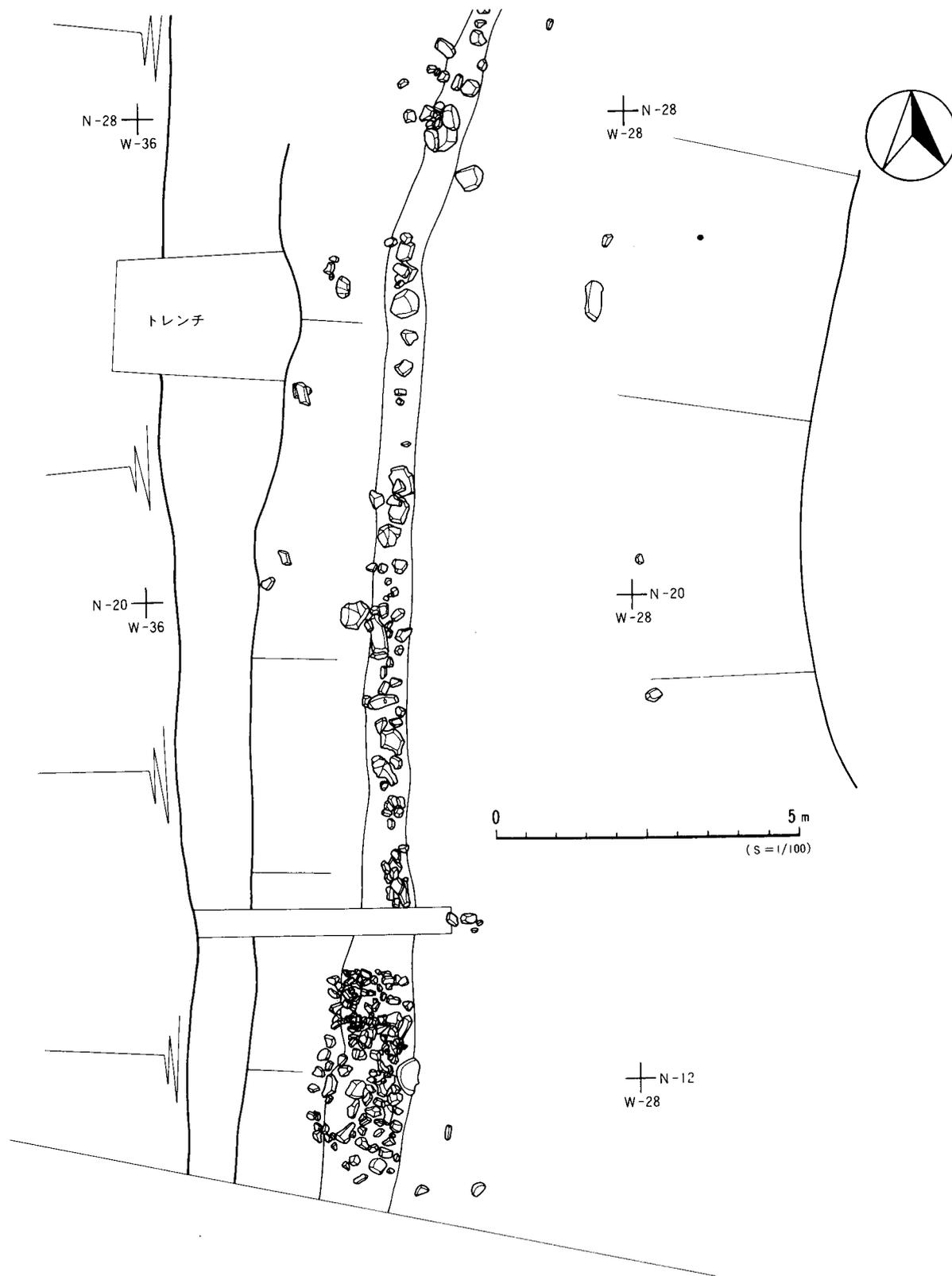


図14 第1号掘跡北出土礫(3)

第2号堀跡南 (図15・図16)

[位置・確認] 第1号堀跡南の南側に位置する。現況では、F13グリッドからW'19グリッドまでの範囲で、第1号堀跡と同様な状態で確認される。標高は約193m～184mである。W'19グリッドから東側は埋められている。聞き取り調査から、本堀跡は調査区外となるG38グリッドからC36グリッドに延びる堀跡に連続するものと推察される。この部分も、東側から西側に傾斜しており、末端は図・に見られる様にG38グリッド部分で、第2号土塁の北側斜面に吸収される。その先は、幅約2m～3m、長さ14m程の平坦面となっている。

[規模・形態] 本来の堀の全長は、約157m～160mあるものと推定される。調査区内の長さは、僅か7m程である。堀跡の上幅は、第2号土塁と第3号土塁の頂部間で約6mある。堀底幅は約30cm～60cmで、底面は凹凸が激しい。第2号土塁頂部から堀底面までの比高差は2.50mである。法面の勾配は35度程である。断面形は、およそ薬研形状であるが底面および法面はいびつである。

[土層] 堀跡の堆積土は、南中土塁からの土が流れ込んで堆積している。第9層とした土で、第IX層のロームの細ブロックを混入する。上層には、第7層に相当する土が堆積する。自然流入なのか、人為的なもの判別できない。

[遺構と遺物] 遺物は、表土直下より多数の縄文土器が出土した。

[小結] 第1号堀跡とは全長では異なるものの、形態は同じであり、堆積土の流れから1号堀跡と同時期に機能していたと考えられる。

第3号堀跡南 (図15・図16)

[位置・確認] 本堀跡は、館跡の最も外側を巡るもので全体は調査区外にある。現況では、E11グリッドからV'18グリッドまでの範囲で確認される。標高は約194m～184mである。堀底は東側から西側に傾斜している。V'18グリッドから東側は埋められている。調査区外の埋められた、3本の堀跡の外側のものに連続するもの推察される。聞き取り調査から、この堀跡は、図・に示した池に連続していたということである。現在、池は殆ど埋没しているが、昭和初期頃には、洗濯できるほどの水量はあったということである。しかし、池より北側に堀が延びていたかどうかは明確ではない。

[規模・形態] 堀の全長は、池の南端部までで約120m～130m程あるものと推定される。調査区内では、堀底部分の僅か4m程が対象となる。堀跡の上幅は、第3号土塁と第4号土塁の頂部間で約5m～6mある。堀底幅は約50～80cmで、底面は凹凸が激しい。第3号土塁から堀底面までの比高差は約4mである。法面の勾配は約35度程で、南側は沢地斜面で緩やかに下る。断面形は、緩いU字状となる。

[土層] 堀跡の堆積土は、褐色土を主体にした土が第3号土塁斜面から流れ込んで堆積している。第10層には粘板岩の破砕片が混入する。自然流入なのか、人為的なもの判別できない。

[遺構と遺物] 遺物は、表土直下より多数の縄文土器が出土した。

[小結] 堆積土の流れから第1号堀跡、第2号堀跡と同時期に機能していたと考えられる。

(小田川)

第2節 土 塁

本館跡には、堀跡に付随して3重の土塁が作られている。堀跡と同様に、すべてが館内部を取り囲むように全周してはいない。土塁は、積み土（以下盛土とする）で作られるものと、基盤となる層を高く掘り残して作られるものがある。調査により、1号土塁では、土塁の作り替えが確認された。

第1号土塁北（図8～図11）

〔位置と確認〕 館跡内部縁辺に作られている土塁である。現況は荒地で、緩やかな細長いマウンドとして確認される。本来は全周していたものと思われるが、館跡の西側部分は備壁工事の際に、長さ約80mにわたって壊されている。同様に、東側部分も長さ約60mにわたり消失している。調査区内では、R39グリッドとS34グリッドで途切れており、S34グリッドから南側は平坦に近いことから、部分的に壊されているものと考えている。全体的な土塁の高さは、現地形で80cm～1m程で確認される。

〔規模〕 全長は、館跡を囲む約180m～185m程であったものと推定される。調査区内の長さは約60m程で、東側末端はK37グリッド、西側末端はR31グリッドに位置し、弧状につくられている。土塁の最標高は、館跡南東隅部分でおよそ197m、最低標高はS36～38グリッド部分で187mである。全体的には堀跡と同様に、東高西低で緩やかに傾斜している。土塁幅は、およそ2m～4m程である。第1号堀跡からの比高差は、約8m～5mある。S31グリッド部分から、直下の県道までの比高差は約18mある。

〔土層〕 土塁の積み土は、6本のベルトを設定して観察した。各部分で積み土が異なり、すべてを相互に対比させることができなかつたため、各土層ごとに記述する。

土層A-A'（図9）図は表土除去後のもので、若干頂部を崩されているようである。盛土は、ほぼ平坦な地山（第IX層）に最大1.4mの高さで、ほぼ水平に積まれている。盛土は8層に分けられる。第1層と第2層は黒色土を主体としている。第3層以下は、褐色土を主体にし第IX層の碎細ロームが斑に混入する。これらは、地山の第IX層が攪拌されたような土で、第4層に顕著である。図に示した小穴Aは、第1号門跡の柱穴で、本土層面の反対側に堆積状態が明瞭にでていた。それから判断すると、第4層の上面で新旧二時期の画期があったものと考えられる。

土層B-B'（図9）比較的遺存状態の良い部分である。ほぼ平坦な地山面に最大1.5mの高さでほぼ水平に積まれている。褐色土を主体に第IX層のロームの比較的大きなブロックが混じる土で積まれ、第1層から第5層まででマウンドが作られる。第6層は、やや硬くその基礎となるものとする。第4層と第7層以下の斜面にある土は、特に堅さもなく、マウンドを作る際の流入土と判断している。第3層は黒色土で、第IX層のロームを混入する第1層と第5層に挟まれていることから、第3層上面ラインに新旧の画期があったものと考えている。

土層C-C'（図10）上面が平坦で、頂部を大きく崩されているものと判断される。地山面の傾斜は、マウンド下では土層A・Bと変わらないが、斜面部分では、起伏が見られる。盛土は最大1.5mある。第1層は攪乱である可能性が高い。第4層には、第IX層のロームを多量に混入されており、マウンドの中心ないしは基礎となる土であったと考えられる。第3層は、斜面に流れているが同様な土であったものと思われる。明確に捉えられなかつたが、第6層上面ラインないしは第7層上面ラインに、新

旧の画期があったものと考えている。

土層D-D' (図11) 上面が平坦であることから、頂部を崩されているものと判断される。地山面の傾斜は他と変わらないが、やや段状である。盛土は最大1.5mある。5層に分けられ、水平に積まれていることが明瞭である。第2層上面ラインから小穴が掘られていることで、この面での使用時期があったと確認された。この点で、第2層を頂部とする土塁の存在は、高さ的に不自然であり、第2層以下の土を盛った土塁が、斜面側に存在していた可能性が考えられる。更に、第1層の盛土から、第2層以下の土塁の上に更に土を積み上げた土塁があったものと考えられ、土塁の位置的な作り替えがあったものと考えている。

土層E-E' (図11) 遺存状態の良好な部分である。地山面からの盛土は最大2.5mある。盛土は10層に分けられ、第1層から第4層がマウンドを作る。水平に積まれており、第4層は斜面へ大きく流出している。第5層上面から、小穴が掘られていることで、この面での使用時期があったと確認された。本小穴に連続するものを検出することはできず、性格は不明であるが、土層Dと同様に、作り替えがあったものと考えられる。地山面の傾斜が他と比べやや緩やかであることと、土塁頂部から1号堀跡底面までの距離がややあることからそのことが伺われる。

土層F-F' (図10) 上面が平坦であることから、頂部を崩されているものと判断される。地山面は、段状となる。盛土は14層に分けられる。褐色土を主体にした土が、積まれている。第1層から第6層は堆積状況から、近接して検出された後世の炭窯構築の際に影響を受けた攪乱の可能性がある。第8層～第12層は斜面に平行してあり、流出した土の可能性がある。第13層上面ラインが水平であり、新旧画期の面の可能性もあるが判然としない。

[遺物] 盛土中より、銭貨と縄文土器が出土した。

[小結] 本土塁は、館跡内部を全周するものである。後世の削土攪乱あるいは崩落により、大きく改変している。この改変が、現代のものであるのか、破城行為によるものか判断できなかった。土塁の構築は、単純に土を盛り上げたもので、土の堅さから明確な版築法とは言いがたい。用いられた土には、堀底面となる粘板岩の混入が見られないことから、館内部の土であったと判断できる。土層観察より、構築の際には旧地表面が整地されているほか、新旧で位置的な作り替えが行われていたことが考えられる。

第1号土塁南 (図15・図16)

[位置と確認] 第1号土塁北に連続する、同一の土塁である。館跡の南側縁辺をほぼ直線で巡る。現況は、馬背状の細長いマウンドで確認される。東側から西側に向かって傾斜してある。

[規模] 調査区内の長さは、C18グリッドからD16グリッドまでの約7m程であるが、殆どが工事の際に削平されている。

[土層] 図16に土層を示したが、調査区内が削平されていたためと、本土塁が第2号地割りの整地層の上に作られていることから判然としない。第2号地割の土層と対比させ、第1層が本土塁の基盤となる層と考えている。

[遺物] 出土しなかった。

[小結] 削平により不明な点が多いが、第2号地割との関係から、本土塁で形づくられた館跡が最

終時の形態であったものと判断される。

第2号土塁北 (図8～図11)

[位置と確認] 館跡内部から二番目の土塁で、第1号堀跡の外側を囲むように作られている。現況は荒地で、高さ60cm～80cm程の緩やかな細長いマウンドとして確認される。確認できる範囲は、北側調査区内でV30グリッドからD36グリッドまでである。C35グリッドから北東側は、耕地造成の際、堀を埋めると同時に削平されたものと考えられる。本土塁北側斜面の、R42グリッドからX38グリッド間は崩落している。

[規模] 本来は、第2号土塁南と連続するものと思われ、全長は、約150m～160m程であったものと推定される。調査区内の長さは約65m程で、東側末端はL40グリッド、西側末端はV30グリッドに位置する。第1号堀跡に沿って弧状に作られている。土塁の最標高は、東部分のD36グリッドでおよそ191m、最低標高はV30グリッド部分で177mである。全体的には堀跡と平行して緩やかに傾斜している。土塁頂部付近の幅はおよそ1m程である。第1号堀跡底面からの比高差は、1.2m～1.5m程である。

[土層] 土塁の積み土は、第1号土塁と第1号堀跡から連続するベルトで観察した。庇状に崩落した範囲が広く、不明な部分が多い。各部分で積み土が異なり、すべてを相互に対比させることができなかったため、各土層ごとに記述する。

土層B-B' (図9) 比較的遺存状態の良い部分である。第IX層以下の地山を、鋭角な山状に掘り残して基礎としている。盛土は、北側斜面部片側だけに認められ、斜面と平行して積まれている。第14層から第21までの8層に分けられる。地山面から60cm～1.2mの厚さがある。褐色土を主体に第IX層のロームの比較的大きなブロックが混じる土で積まれている。特別、敲き締められたような状態は認められなかった。

土層C-C' (図10) 上面が平坦で、頂部を大きく崩されているものと判断される。地山を掘り残して基礎としているが、掘り残しの角度は土層Aよりも緩やかである。崩されたいため不明であるが、盛土は斜面部だけに積まれているようである。第16層から第22層までの7層に分けられる。第21までは、土質と状態は土層Bと特に変わらない。第22層は、第IX層の黄褐色土で攪拌されている。

[遺物] 盛土中より、銭貨と縄文土器が出土した。

[小結] 本土塁は、第1号堀跡の外側を巡るものである。土塁は、基盤の層を掘り残す、手法を用いて構築されている。削土と崩落により不明な点が多いが、盛土は斜面の片側だけに単純に積み上げられている。盛土の中には、堀底面となる粘板岩の混入がまったく見られないことから、用いられた土は、館内部の土であったと考えている。掘り残し部分の角度の違いから、作り替えの可能性も指摘される。

第2号土塁南 (図15・図16)

[位置と確認] 第2号土塁北と連続すると思われる土塁である。第1号堀跡南の外側に作られている。F14グリッドからX'19グリッドまでの範囲に、細長いマウンドとして確認される。現況での長さは、約45m程である。W'19グリッドから北東側は、耕地となり平坦である。削平されたものと考えら

れる。西側先端部は、堀跡と同様に平坦面を介し、北側調査区外の斜面に吸収される。

[規模] 全長は、第2号土塁北で記載したとおりである。調査区内の長さは約8m程である。第1号堀跡南と平行して、直線的に作られておりC14グリッド部分で北側に緩く屈曲している。土塁の最標高は、東部分のX'19グリッドでおよそ195m、最低標高はE14グリッド部分で185mであり、東側から西側へ傾斜している。比高差は、第1号堀跡底面から約1m、館内部縁辺から約5.5m、第2号堀跡底面から約2mある。

[土層] 東側調査区境界面で観察した。土塁は、本丘陵の基盤となる粘板岩層を、掘り残して作られている。粘板岩層が硬かったためか、掘り残しは緩やかである。その上に、第9層とした褐色の単一層があるが、第2号堀跡に大きく流れている。高まりを作るため意識的に盛ったものなのか判断しかねる。

[遺物] 第9層中より、縄文土器が出土した。

[小結] 本土塁は掘り残し土塁である。堆積層を旨く捉えることができなかつたため、断定できないが、本調査区部分では高さをだすために盛土されているものと考えておきたい。

第3号土塁南 (図15・図16)

[位置と確認] 館跡南辺を囲む最も外側の土塁と思われる。現況で、F13グリッドからV'18グリッドの範囲に、第2号土塁南と同様な状況で確認される。現況で確認できる長さは、約50mあり、ほぼ中央から東側に、楕円形で5m程の落ち込みがある。聞き取り調査で、3条の堀跡があったということから、それに付随して本土塁も存在していたものと思われる。しかし、第1号堀跡北や第2号土塁北の調査区外に見られるように、地形的に見て明らかに連続するとは言えない。連続するとしても、調査区外のC36グリッドからG38グリッドに見られる、瘦せ尾根状の部分に繋がるものと思われる。

[規模] 全長は不明であるが、上記の瘦せ尾根先端までで約150m程ある。調査区内の長さは約6m程である。第2号堀跡南と平行して、直線的に作られておりA14グリッド部分で北側に緩く湾曲している。土塁の最標高は、第2号土塁北と変わらず、最低標高は1m低い。傾斜の状態も同じである。比高差は、第3号堀跡底面からは約4m、館内部縁辺からだ約8mから10mある。

[土層] 第2号土塁南と同じく、粘板岩層を掘り残して作られている。掘り残す部分は、浅く面的であるが、粘板岩の節理によつて凹凸が激しい。土は、第7層と極めて似た色の土が堆積している。南側斜面部に第11層とした土が第3号堀跡まで流れた状態で堆積してある。高まりを作るため盛ったものか判断しかねる。すべて、上方から流入した土で、本来は掘り残しのままであった可能性もある。

[遺物] 表土直下、特に斜面部分から多数の縄文土器が出土した。

[小結] 構築手法、規模形態が、北側の第2号土塁と同じであり、作り替えの痕跡が見受けられないことから、第2号堀跡と同時存在し機能していたものと考えられる。

4号土塁 (図6)

[位置と確認] 調査区外のC12グリッドからY'12の範囲に位置する。現況では、この範囲だけ第2号・第3号土塁南と同様な状態で確認される。北側は、第3号堀跡の法面としてU'18グリッドまで、切り落としていることが明瞭である。南側は、清水が流れる沢地斜面となる。東側は、丘陵の自然地

第2号地割り

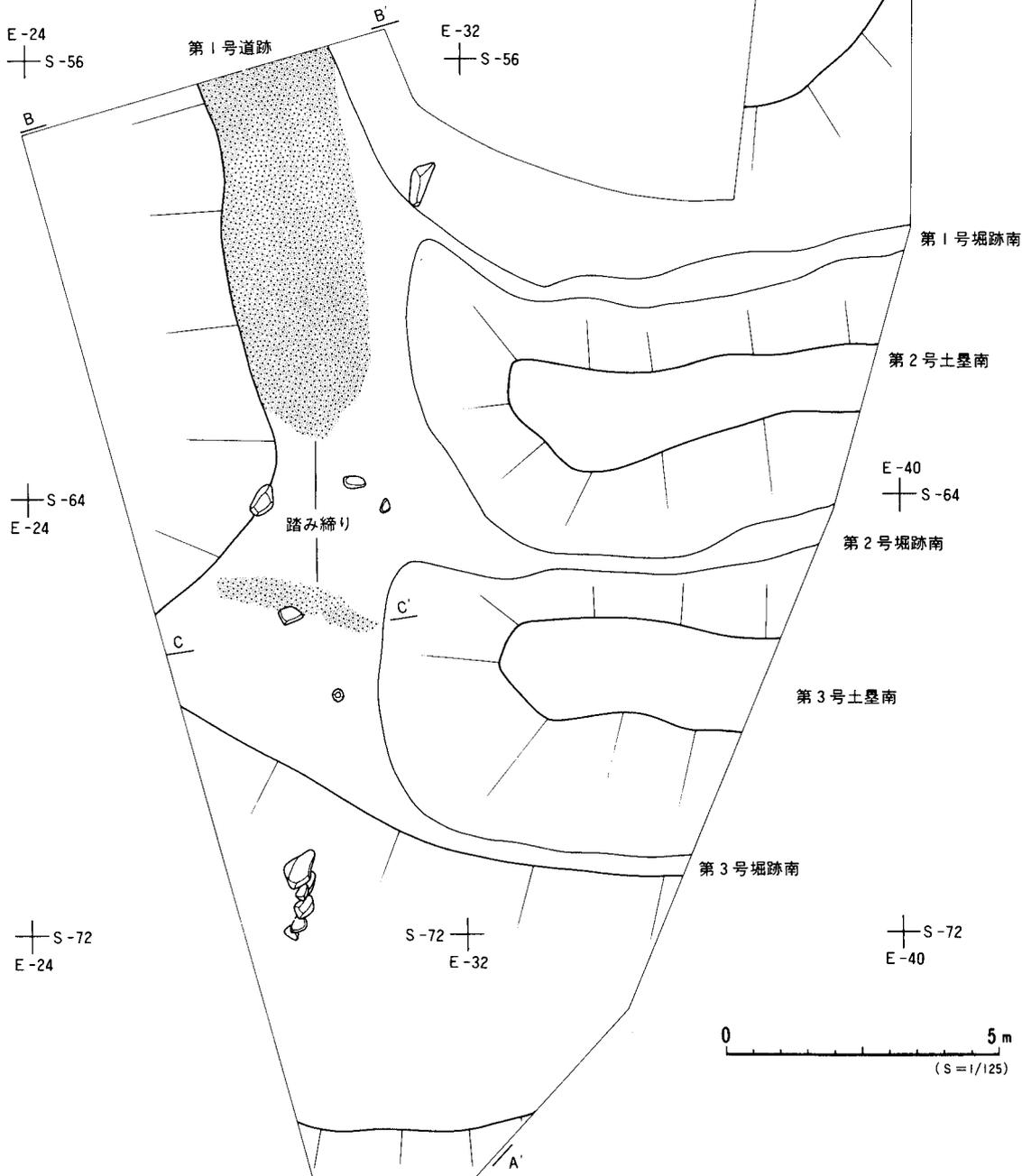
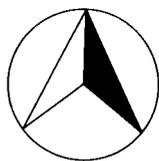


図15 第1～3号堀跡南、第2・3号土壘南、第1号道跡

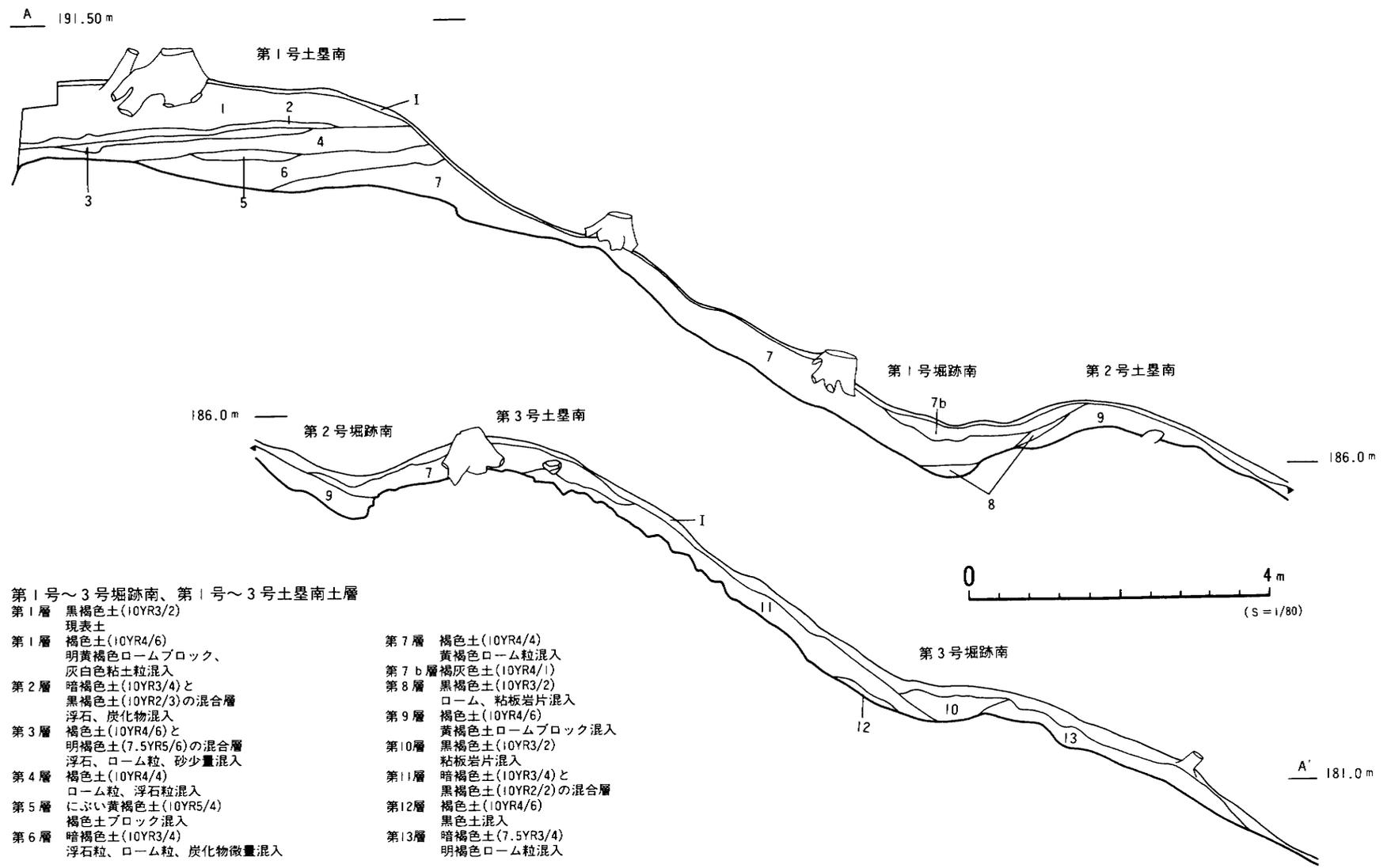


図16 第1～3号堀跡南、第2・3号土塁南土層

第1号～3号堀跡南、第1号～3号土塁南土層

- | | | | |
|-----|--------------------|------|-------------------|
| 第1層 | 黒褐色土(10YR3/2) | 第7層 | 褐色土(10YR4/4) |
| | 現表土 | | 黄褐色ローム粒混入 |
| 第1層 | 褐色土(10YR4/6) | 第7b層 | 褐灰色土(10YR4/1) |
| | 明黄褐色ロームブロック、 | 第8層 | 黒褐色土(10YR3/2) |
| | 灰白色粘土粒混入 | | ローム、粘板岩片混入 |
| 第2層 | 暗褐色土(10YR3/4)と | 第9層 | 褐色土(10YR4/6) |
| | 黒褐色土(10YR2/3)の混合層 | | 黄褐色土ロームブロック混入 |
| | 浮石、炭化物混入 | 第10層 | 黒褐色土(10YR3/2) |
| 第3層 | 褐色土(10YR4/6)と | | 粘板岩片混入 |
| | 明褐色土(7.5YR5/6)の混合層 | 第11層 | 暗褐色土(10YR3/4)と |
| | 浮石、ローム粒、砂少量混入 | | 黒褐色土(10YR2/2)の混合層 |
| 第4層 | 褐色土(10YR4/4) | 第12層 | 褐色土(10YR4/6) |
| | ローム粒、浮石粒混入 | | 黒色土混入 |
| 第5層 | にぶい黄褐色土(10YR5/4) | 第13層 | 暗褐色土(7.5YR3/4) |
| | 褐色土ブロック混入 | | 明褐色ローム粒混入 |
| 第6層 | 暗褐色土(10YR3/4) | | |
| | 浮石粒、ローム粒、炭化物微量混入 | | |

形に繋がる。

[規模] 全長約15mである。

[小結] 自然地形を利用した土塁である。おそらく、構築手法は前述の堀跡と同じであると思われる。本土塁が構築途中であったものか、これ自体で役割を持ち機能したものかは不明である。

(小田川)

第3節 道 跡 (図15・図17)

[位置と確認] 調査区南端部の、F12グリッドからF15グリッドに位置する。現況で、確認された平坦面部分である。表土を除去したところ、黒褐色の硬化面を検出した。硬化面は、2.5m×6.5mの範囲で認められ、北側の土層観察面まで続いている。他に、3m程離れた南側にも硬化した部分がある。標高はおよそ183mである。

[規模] 幅約2.5m～3mで、調査区内では約20m程の長さである。東側は、各堀跡と土塁の端部と連続し、西側は、急峻な斜面となっている。南側は、第4号土塁の南側法面に繋がる沢地斜面である。土層観察面の北側に更に延びているようである。道跡の面は、北から南側にやや傾斜している。

[土層] 図17の土層B-B'の第5層上面と、土層C-C'の第5層ないし第3・4層上面が道路面であったものと考えられる。土層B-B'の第5層と6層は、第IX層相当のブロックを混入させた土で、硬く締まりがある。特に第5層は、貼付けられたものと考えられる。

[遺物] 表土直下より、縄文土器が多数出土した。他に、道路面から大型の礫が図示したほかにも多数出土した。断定できないが、本遺構に関係した施設があった可能性がある。

[小結] 館跡の西側斜面を通る道跡であったと考えられる。北側部分を調査できず、断言できないが、後述する第2号門跡に向かう道であった可能性がある。本遺構の南側は沢地形であるが、沢筋に沿って急峻な道があるものと思われる。また、この道の存在により、南側の各堀跡が第1号堀跡北のように、堀底道として機能していたことが考えられる。

(小田川)

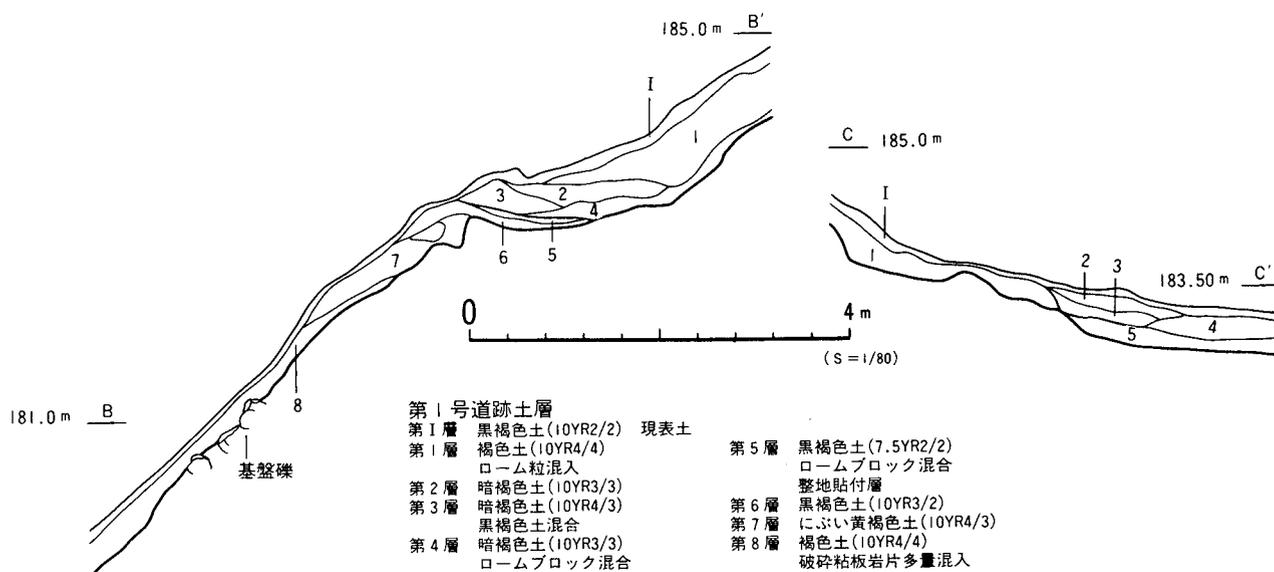


図17 第1号道跡土層

第4節 門跡

第1号門跡 (図18~図20)

[位置と確認] 本遺構は、館跡の北東側縁辺、L37~K L37・38グリッドに位置する。第1号土塁撤去後、第IX層面に黒色土の円形とそれに連続する不整なプランとして検出した。精査段階で土層から柱穴と確認され、隣接する同様なプラン及び、周囲の小穴との配列から、門跡と判断した。また、プラン上には配列された様に、礫が集中して検出された。この集礫が、本門跡と関連する可能性があることから、以下、集礫・門跡の順に記述する。

集礫 (図18)

[規模] 本グリッド付近からは、土塁撤去掘り下げ時点から、多量の礫が出土していたが、各々レベル差があり土塁の混入物と思い注意しなかった。集礫は、上記プランの内側に、3列のラインとして検出した。長さは約2.5m~3mで、このうち2列はほぼ平行してある。2列間の幅は、だいたい60cm~80cm程である。これらは、第IX層面に密着するものと、約5cm~15cm程浮いているものがある。

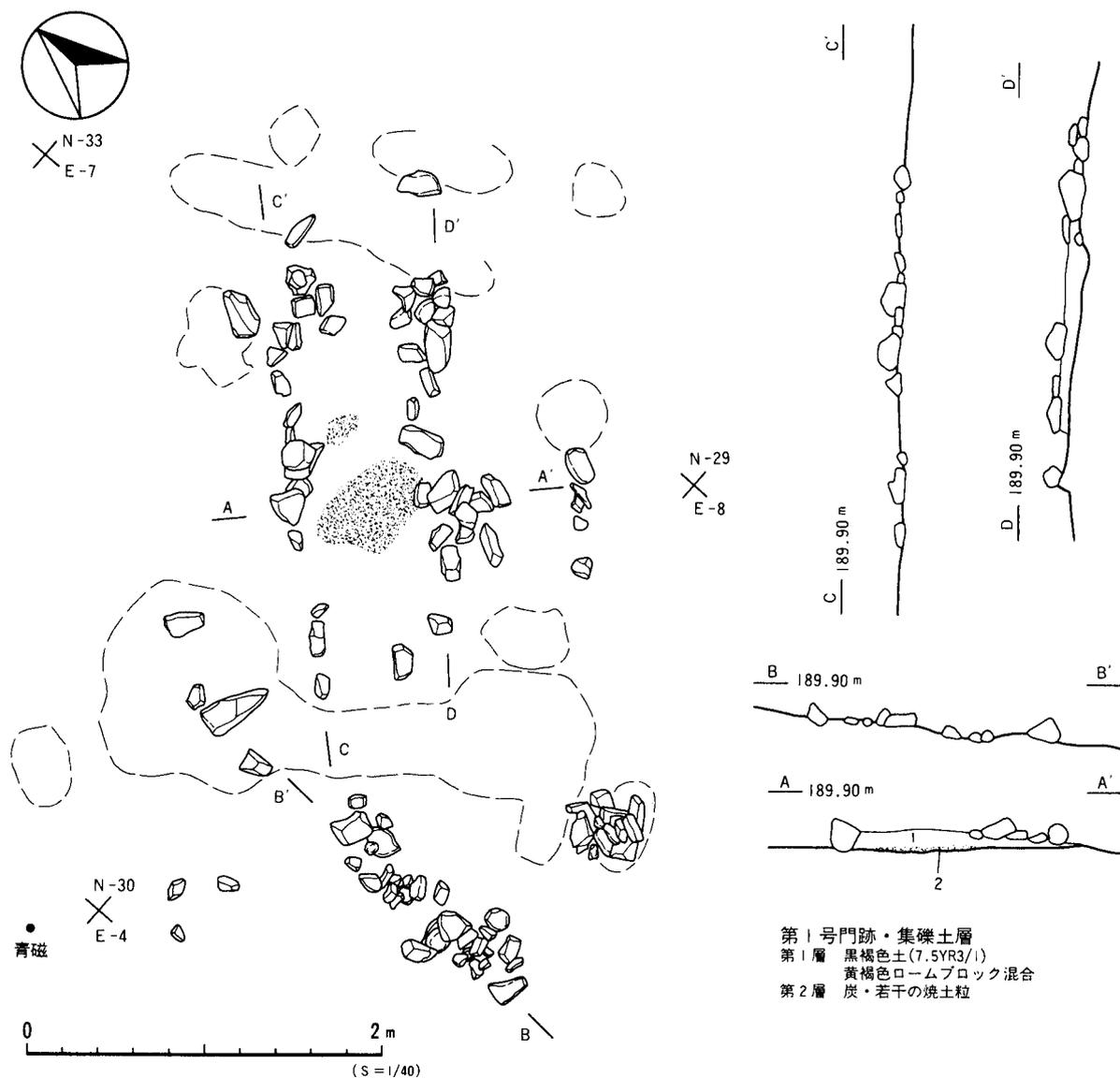
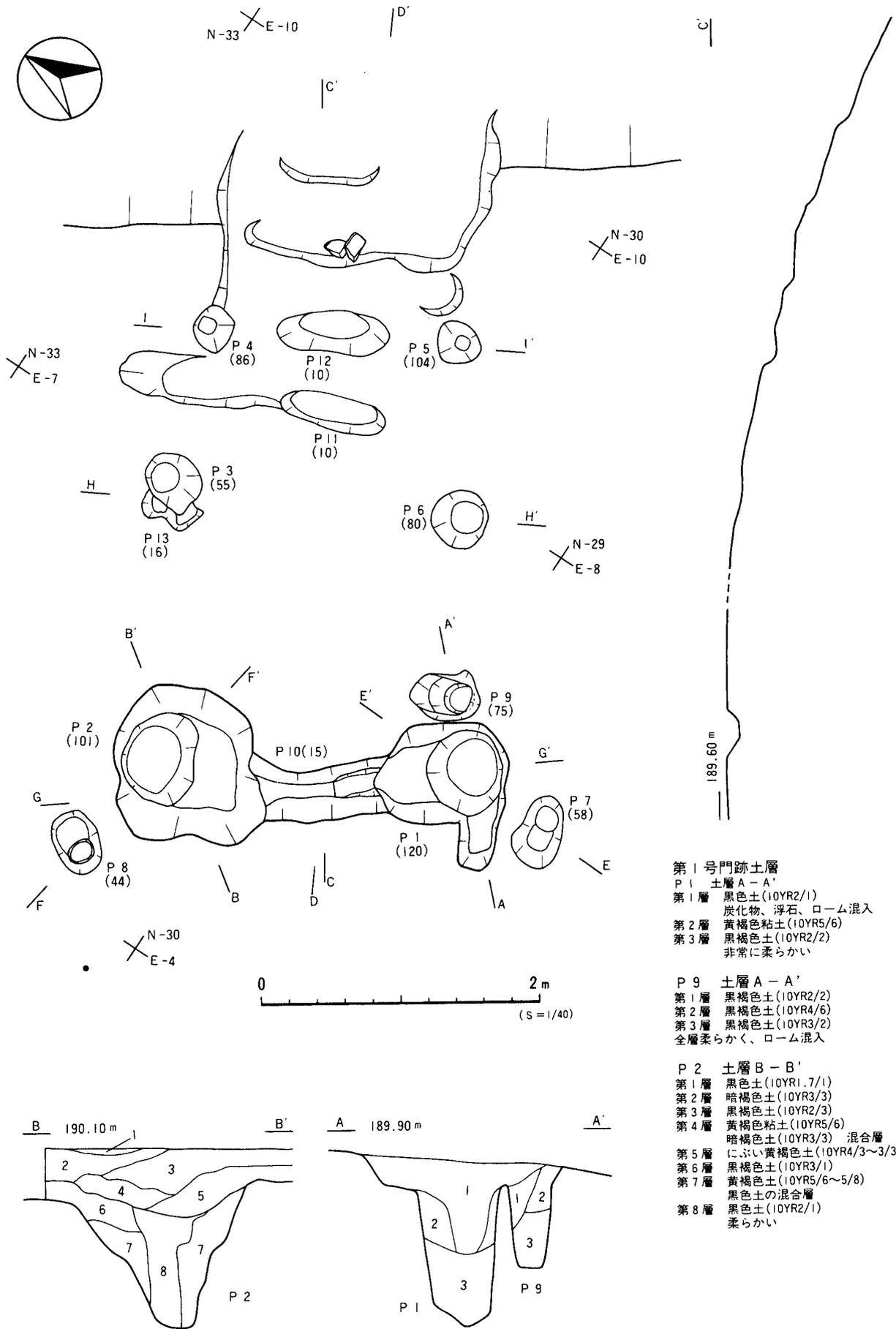


図18 第1号門跡・集礫



第1号門跡土層

- P 1 土層 A - A'
- 第1層 黒色土(10YR2/1)
炭化物、浮石、ローム混入
- 第2層 黄褐色粘土(10YR5/6)
- 第3層 黒褐色土(10YR2/2)
非常に柔らかい

- P 9 土層 A - A'
- 第1層 黒褐色土(10YR2/2)
- 第2層 黒褐色土(10YR4/6)
- 第3層 黒褐色土(10YR3/2)
全層柔らかく、ローム混入

- P 2 土層 B - B'
- 第1層 黒色土(10YR1.7/1)
- 第2層 暗褐色土(10YR3/3)
- 第3層 黒褐色土(10YR2/3)
- 第4層 黄褐色粘土(10YR5/6)
暗褐色土(10YR3/3) 混合層
- 第5層 にぶい黄褐色土(10YR4/3~3/3)
- 第6層 黒褐色土(10YR3/1)
- 第7層 黄褐色土(10YR5/6~5/8)
黒色土の混合層
- 第8層 黒色土(10YR2/1)
柔らかい

図19 第1号門跡

礫の大きさは、最大40cm～10cm位で、礫自体に画一性は見られない。先に撤去した礫の中には50cm～60cmの大型のものも多くあった。

〔土層〕 浮いて検出された礫は、黄褐色のロームブロックが混合した黒褐色土の上に置かれている。列の間及び礫間も同じ土が充填している。また、平行する2列間の底面ほぼ中央部分に、不整楕円形の炭化物範囲を検出した。規模は40cm×60cmで、厚さは3cm～5cm程である。

〔小結〕 本遺構は、後述の柱穴と関連して門跡を構成していたものと考えられる。撤去した礫と考え合わせると、本部分に石で作られた施設が存在し、その基礎である可能性もある。しかし、大部分が崩されてしまったものと考えられる。

門跡 (図19)

〔規模・形態〕 門跡は、東側掘方向に傾斜した面に作られている。図・に示した様に、P1～P13までの穴と、これに付随するL字状の段差で構成される。P1とP2が大きさで作られる位置から門柱と考えられ、その間隔は2.3mある。その他各小穴の間隔は、P3とP6間が2.2m、P4とP5間が1.8m、P1からP5までが各1.8mと1.3m、P2からP4までが各2mと1.2mある。P1とP7間は65cm、P2とP8間は75cmある。小穴の規模は、P1が1m×70cm、P2が1.3m×1.2mと大きく、他は30cm～50cm程である。形状は、不整円形及び不整楕円形である。検出面からの深さは、P5が最大で1.04mあり、最小はP13の16cmである。これらの小穴は、門柱に付随し前面に並ぶ柱穴と考えられる。この内側に、P10～P12とした小穴がある。P10は、溝状の掘り込みで、P1とP2を連結するように作られてある。長さは1mで、幅は40cm、深さは10cm～15cmである。形状から敷居が渡されていたものと考えている。P11とP12は、ともに長楕円形で、深さは約10cm程である。斜面部の、L字状の掘り込みは、P10から連続したかたちで、斜面を削平し階段状に作られていたものと考えられる。P7とP8は、P1とP2の補助柱的ものと考えられる。

〔土層〕 P1の堆積土は、3層に分けられる。第2層は黄褐色粘土の埋め土であり、第1層の黒色土が柱痕状に入り込む。第3層は黒褐色土で非常に柔らかい。柱のラインを捉えることはできなかった。P2の堆積土は、8層に分けられる。第1層から第5層までは、第1号土塁の盛土であり、第2層から第5層までが、第1号土塁土層A-A'の第4層に相当する。第8層は柔らかく柱痕と考えられる。第7層は埋め土である。第6層は埋め土または整地土と思われる。この他の、小穴は土層図を作成せず掘り上げたが、黒褐色土を主体にした土が堆積していた。また、P6、P7とP8の小穴からは、柱押さえと思われる礫が出土している。図・土層D-D'では11層に分けられる。第1・2層が第1号土塁の盛土であり、西側の第4層はP10の堆積土である。第6層を掘り込んで同一層が堆積している部分があり、同一レベルで第3層ラインにも同様な断面形状が確認される。この二つの部分を敷居の痕跡とすれば、第5層が硬いことから第5層上面ラインで通路として使用されていた可能性が指摘される。集礫の検出レベルもほぼ同じである。第8層～第10層も比較的硬く、第5層以下の層は、門跡の基礎となる整地層と考えられる。

〔遺物〕 図18に示したが、M37グリッド測点N-30/E-4付近検出面上から、図54の陶磁器(青磁)が出土した。他に縄文土器が出土した。

〔小結〕 本遺構は、柱穴の配列から門跡と判断される。土層観察により、第1号土塁が作られた、館跡の最終時期以前に機能していたことが判明した。また、検出面(第IX層面)でのP11とP12の掘

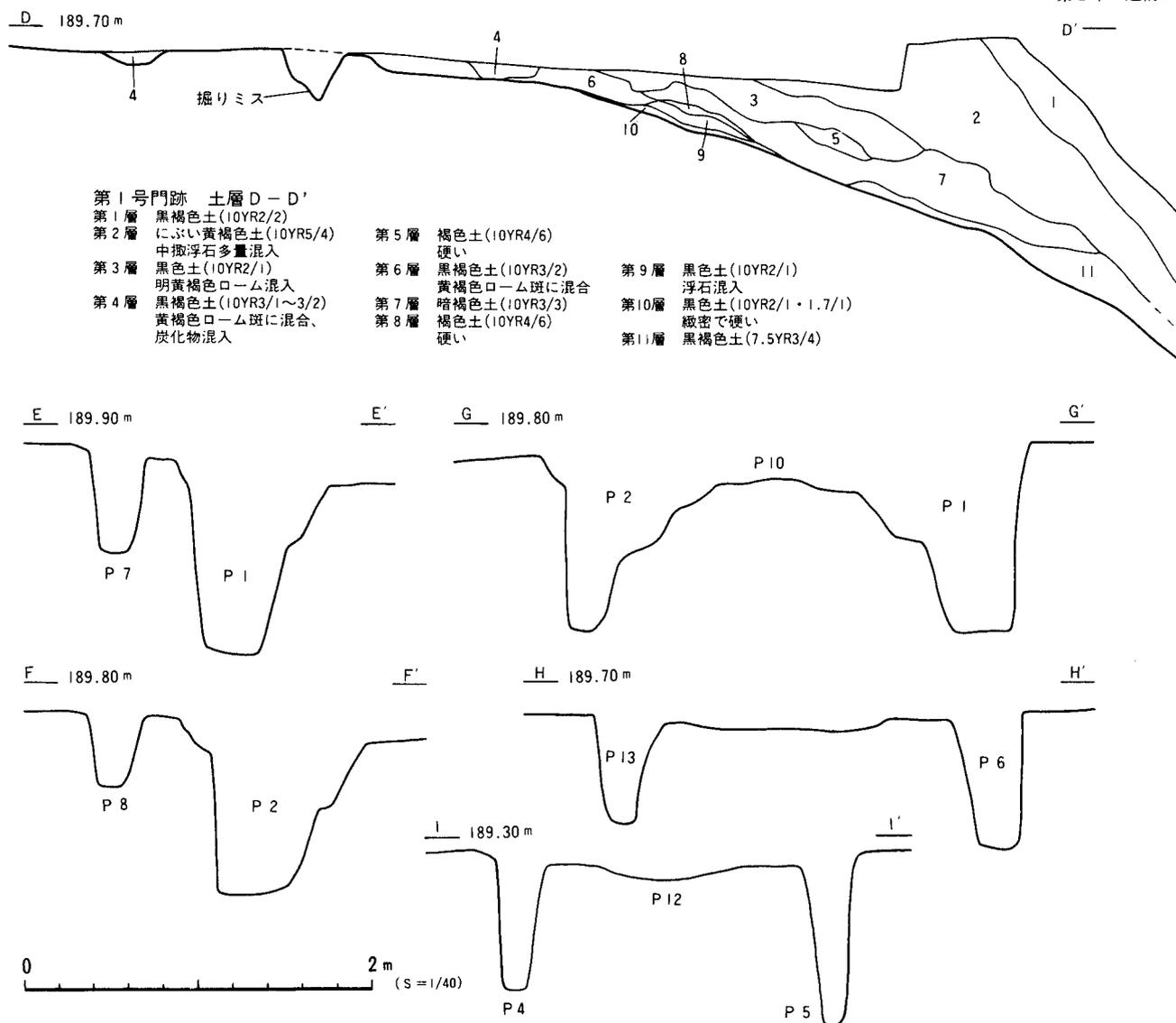


図20 第1号門跡土層・門柱穴断面

り込みと、土層D-D'の敷居跡から、門ないしは通路が改修されていたことが考えられる。さらに、門跡廃絶時には、門柱が切り取られ撤去されている。(小田川)

第2号門跡 (図21)

[位置・確認] 本遺構は、館跡の南西側縁辺付近、F21・G22グリッドに位置する。表土撤去後、第IX層面に暗褐色土の不整楕円形プランとしてP1を検出した。当初、土坑として精査したが、土層観察から柱穴と判断された。近接して検出されたP2の状況もあわせ、門跡とした。門跡は、西縁辺方向に傾斜した面に作られている。他に、周辺にはP5からP13までの小穴が検出されている。

[規模・形態] 図に示した様に、P1からP4までの重複する小穴が門柱と考えられる。P1とP4、P2とP3の新旧関係は不明である。P1からP4の規模は、P1が、1.2m×90cmの不整形で、断面筒型である。深さは、検出面から最大1.3mある。P2は、85cm×70cmの不整形で、深さは最大70cmある。P3・P4ともに不整形で、深さはP3が50cm、P4が60cmある。P5からP13は、不整形円形及び楕円形で、深さはP9の最大61cm～P11の10cmまでである。各小穴の間隔は、P1とP2間が2.4m、P3とP4間が3mある。P3とP11およびP4とP7の間隔は各1.4mある。他、P7とP9

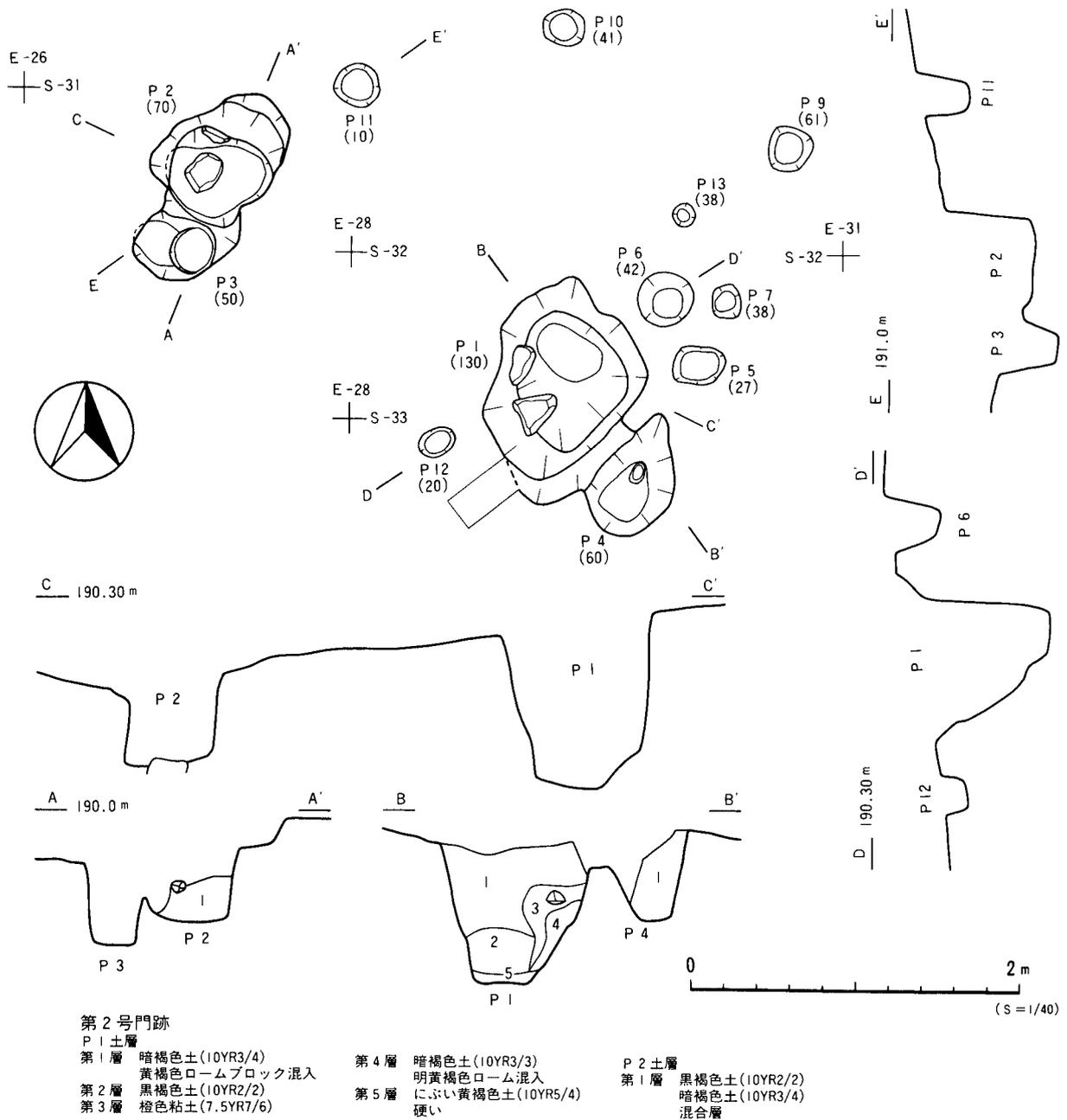


図21 第2号門跡

間が1m、P10とP11間が1.35m、P9とP10間が1.6mある。

〔土層〕 抜いてしまったものが多い。P1の堆積土は5層に分けられる。第1層と第2層は、褐色土を主体にした土で、水平に堆積している。第3層は、橙色粘土ブロックの埋め土であり、本層の状態から柱穴と判断した。柱痕は確認できなかった。

〔遺物〕 出土しなかった。

〔小結〕 本遺構は土層から柱穴と判断され、規模形状からP1とP2、P3とP4が対になり機能したものと考えられる。第1号門跡の様に、他の小穴が付随したかは不明である。重複から、同一場所での作り替えがあったと判断される。また、柱穴上端の形状と土層から、廃絶時には柱が抜き取られていると判断される。

(小田川)

第5節 地割り

第1章第5節で記述したとおり、館跡内部は10mの比高差をもって傾斜している。調査により、傾斜面を削平し、意図的に平坦面を作りだしている箇所が検出された。この段差で区画される箇所を、地割りと呼称し、以下に記述する。また、地割り内部から検出された、土坑や焼土、掘立柱建物跡や柵跡と想定される多数の小穴については、関連して機能したものと考えられることから、これらもあわせて地割りごとに記述する。

第1号地割り (図22～図25)

〔位置・確認〕 調査区西側のN27グリッドからO～Q31グリッドの範囲に位置する。館跡の中央部西隅の部分にあたる。現況での標高は、186m～188mである。この範囲の基盤層は北西方向へ緩やかに傾斜する。表土撤去後に、基盤の粘土が斑状に混入する褐色土を広範囲に検出した。当初、法面施工時の際の攪乱と思われたが、攪乱土の下より整地土を確認し、地割りされた遺構であることが判明した。表土面からは、最高で約70cm掘り込まれている。

〔規模・形状〕 地割りは、南北約21m、東西最大約10mの範囲で調査区に認められる。おそらく長方形に削土され、調査できなかった西斜面部まで広がっていたものと推測される。掘り上がりの状態では、東側から西側へ下がる段差をもつ。段差は、東端で約40cm、北端のO30グリッド付近で約35cm、南端部で約20cmである。地割り底面は、北西側へ緩く傾斜している。

〔土層〕 本遺構の堆積土は、安全対策上の境界面とそれに直行及び平行する5本のベルトで観察した。堆積土は、褐色土に黒色土や第IX層以下のロームブロック、小礫が斑に混入する。人為堆積であり、整地層ないしは土塁の盛土と考えられる。

〔内部遺構〕 地割り内部から多数の小穴と土坑、焼土を検出した。これらの遺構は、地割り底面の第IX層を掘り込んで構築されている。

小穴 (図22・図24)

小穴は、地割り内部に散在し、総数157個検出された。調査できなかった西側斜面部分にも相当数の小穴があったものと推測される。小穴の規模は、径が約20cm～30cm、深さ20cm～50cmである。これらの小穴のうち、地割り東側の段直下に並ぶものや、ある程度の配列を認定できるものがあることから、大多数のものが、掘立柱建物や柵を構成するものと考えられる。調査不能部分と、小穴の新旧関係を捉えられなかったことから、全容を把握することは難しいが、地割りの段と平行あるいは直交して並ぶものと、北方向に並ぶもの、これ以外に並ぶものを柱列として、以下に記述する。

地割りの段と平行する柱列

4列認められる。A列は、地割りの段直下に約10cm～40cm離れて、ほぼ平行に並ぶ。小穴の規模は、径が約18cm～40cm、深さは23cm～51cmである。柱穴の間隔は、P1とP2間が2.25m、P2とP3間が2.15mである。P3～P9までの間隔は、最長でP7とP8間が70cm、最短でP8とP9間が30cmである。B列は、直径約30cm程、深さは18cm～50cmの柱穴が並ぶ。P10とP11間が1m、P11とP12間が2.30mである。C列は、直径約20cm～40cm、深さは15cm～50cmの柱穴が並ぶ。柱穴の間隔は、約80cmの等間隔である。D列は、直径が約20cm程、深さは40cm～70cmの柱穴が並ぶ。柱穴の間隔は、P

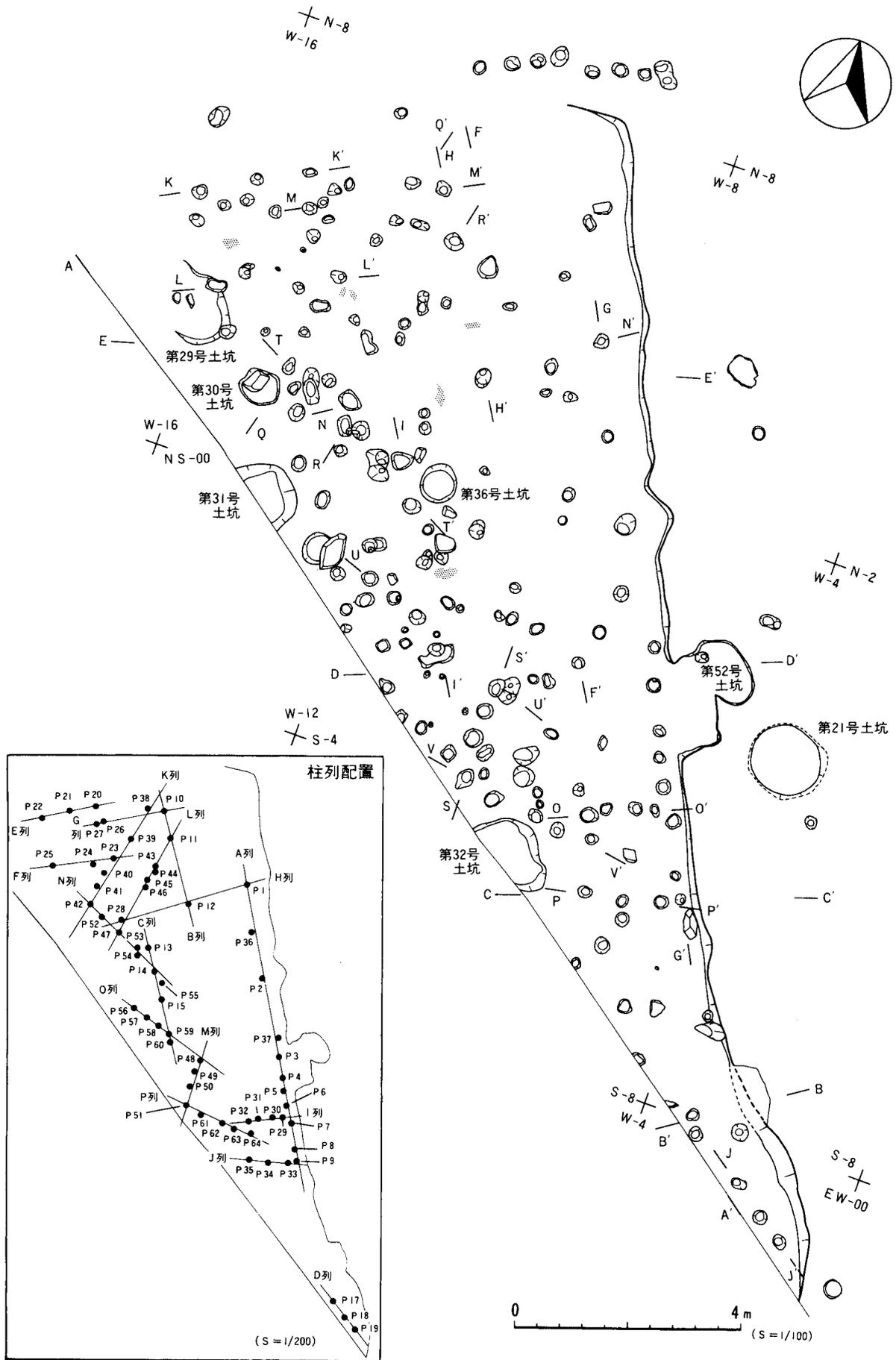


図22 第1号地割り

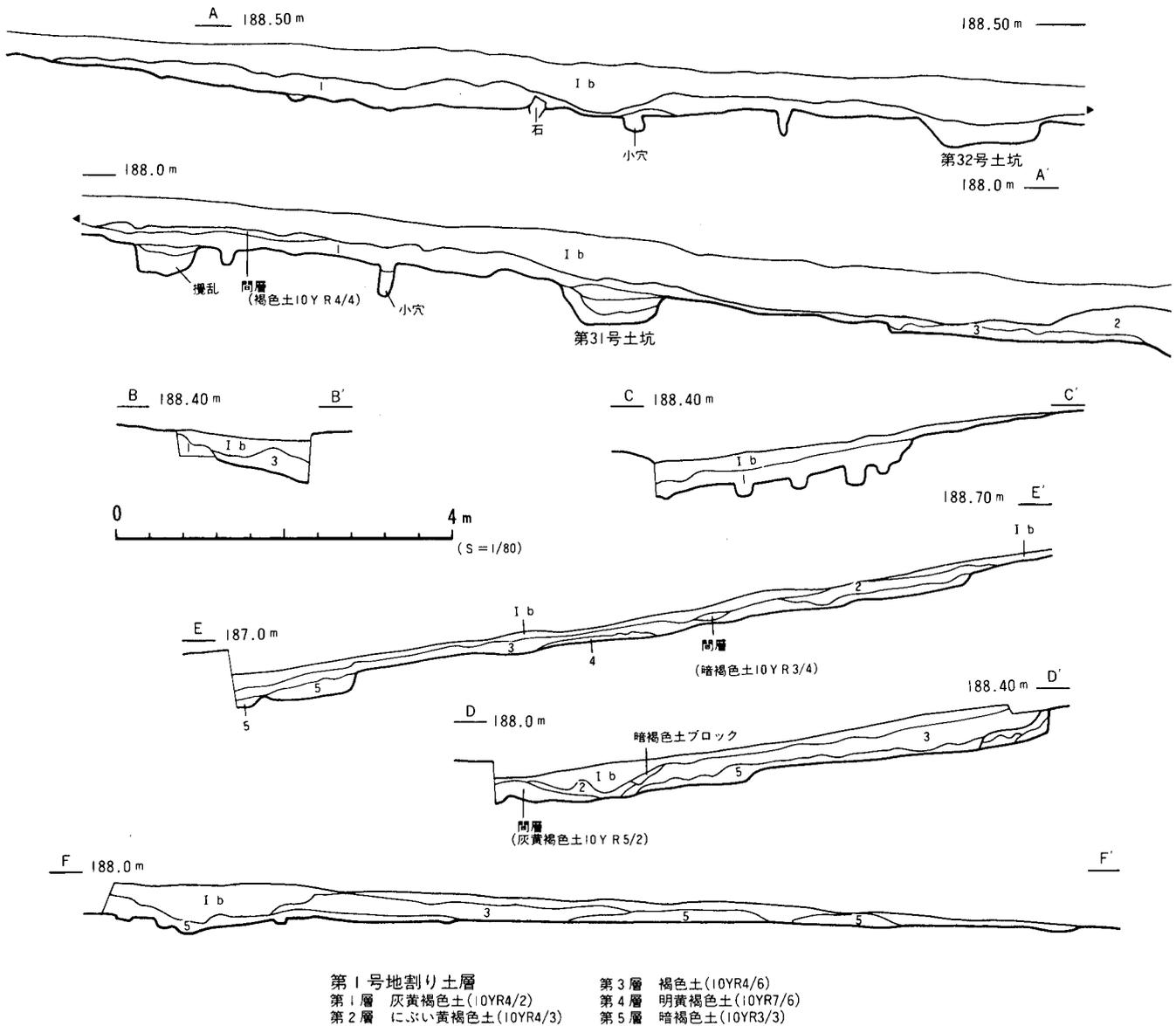


図23 第1号地割り土層

17とP18間が70cm、P18とP19間が60cmである。

地割りの段と直行して並ぶ柱列

5列認められる。E列は、直径約30cm程、深さは約33cm～55cmの柱穴が並ぶ。柱穴の間隔は、約90cmの等間隔である。F列は、直径が約25cm～35cm、深さは34cm～40cmの柱穴が並ぶ。柱穴の間隔は、P23とP24間が80cm、P24とP25間が150cmである。G列は、直径約30cm程、深さは20cm～45cmの柱穴が並ぶ。柱穴の間隔は、P10とP26間が2.10m、P26とP27間が10cmである。断面図に乗らない周囲の柱穴もあり、本来の間隔は狭くなると思われる。H列は、直径約30cm～45cm、深さは15cm～50cmの柱穴が並ぶ。柱穴の間隔は、P1とP12間が2m、P12とP28間が2.20mである。I列は、直径約20cm程、深さは10cm～35cmの柱穴が並ぶ。柱穴の間隔は、概ね30cm～40cmである。J列は、直径約30cm程、深さは約35cm～40cmである。柱穴の間隔は、約70cmの等間隔である。

北方向に並ぶ柱列

3列認められる。K列は、直径約20cm～35cm程、深さは25cm～50cmの柱穴が並ぶ。柱穴の間隔は、

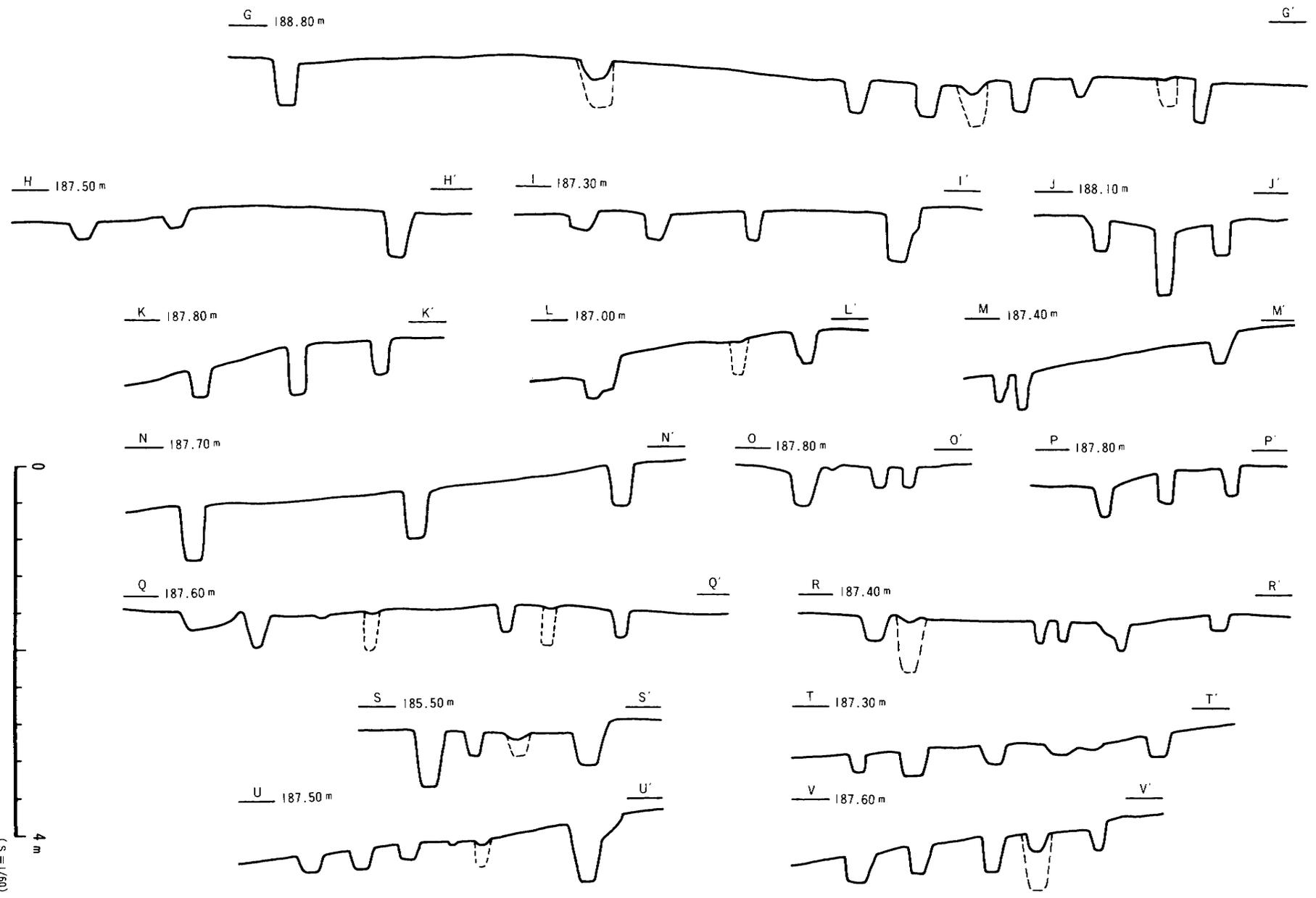


图24 第1号地割り・柱列断面

50cm～1.80mである。断面図に乗らない周囲の柱穴もあり、その柱穴も含めると間隔は、概ね50cm～60cmである。L列は、K列とほぼ平行に並ぶ、直径が約20cm～35cm、深さは10cm～30cmの柱穴である。柱穴の間隔は、最大で1.80m、最小で25cmである。ややばらつきがある。M列は、直径約30cm、深さは25cm～65cmの柱穴が並ぶ。柱穴の間隔は、概ね50cmの等間隔である。

上記以外に並ぶ柱列

3列認められる。N列は、直径約30cm～45cm、深さは10cm～30cmの柱穴が並ぶ。柱穴の間隔は、概ね50cmである。O列は、直径約10cm～30cm、深さは5cm～64cmの柱穴が並ぶ。柱穴の間隔は、最大でP60～P48間の約1m、その他は概ね50cmである。P列は、直径約20cm～30cm、深さは35cm～65cmの柱穴が並ぶ。

これら柱列は、柵として単体で機能していた可能性があるほか、配列から掘立柱建物の一部である可能性もある。A列は地割りの段差際に平行に並ぶ。柱穴の間隔が他の列より狭くP36、P37を含め遮蔽を目的とする柵跡と考えている。また、間尺の広いP1とP2、P37間は通用口として機能していた可能性もある。また、I列とJ列はA列とほぼ直交するように並び、A列に付随する柵跡の一部として機能した可能性がある。E列とF列は、柱穴がほぼ等間隔に並び、桁行2m桁行約2mの、2間×1間の掘立柱建物跡を構成するものと考えられる。この建物跡には、B列、G列、H列、C列が付随していた可能性もあり、大型の建物も想定される。さらに、K列、L列、N列とO列、M列、P列の組み合わせにより、南北棟の建物として、各柱列が機能していた可能性が高い。この外に柱列や小穴の組み合わせにより建物跡の存在が想定されるが、詳細に捉えることはできなかった。

土坑 (図25)

地割り内に、5基検出した。小規模で掘り込みが浅いが多い。地割り検出時に、上からの重複が認められなかったことと、整地土が直接流れ込んでいるものが多いことから、地割り内の掘立柱建物跡と関連して機能していたものと思われる。土坑番号については、後述する個別の土坑と区別せず付してある。

第29号土坑は、Q・R31グリッドに位置し2個の小穴と重複している。小穴の方が新しい。規模は、開口部で1.25m×1m、底面1.10m×88cmの楕円形である。堆積土は、褐色土の単層でロームブロック、黒褐色土を微量混入する。整地土流れ込みである。壁高は、約15cm～35cmで東側が若干高く、西壁は残存していない。底面はほぼ平坦である。

第30号土坑は、Q30グリッドに位置する。規模は、開口部で75cm×64cm、底面55cm×50cmのほぼ円形である。堆積土は2層に分けられる。第1層は褐色土で整地土の流れ込み、第2層は黄褐色土で浮石が微量混入する。第1層と同様な埋土と思われる。壁高は約20cm～40cmで、西壁側が高い。南壁は掘りすぎて不明である。底面はほぼ平坦である。床直上より礫が出土した。

第31号土坑は、Q29・30グリッドに位置する。規模は、開口部で1.30m、底面径が85cmの不整形である。堆積土は3層に分けられる。全体的に褐色土を主体とする。第3層は、黄褐色粘質土であり、埋められている。壁高は北壁46cm、南壁28cmである。底面はほぼ平坦である。

第32号土坑は、O28グリッドに位置する。規模は、開口部径1.40m、底面径が1.20mの不整形である。堆積土は褐色土の単層である。壁高は北壁40cm、南壁20cmである。底面はほぼ平坦である。

第36号土坑は、P30グリッドに位置する。規模は、開口部で径で約65cm、底面径で約55cmのほぼ円

小沢館跡

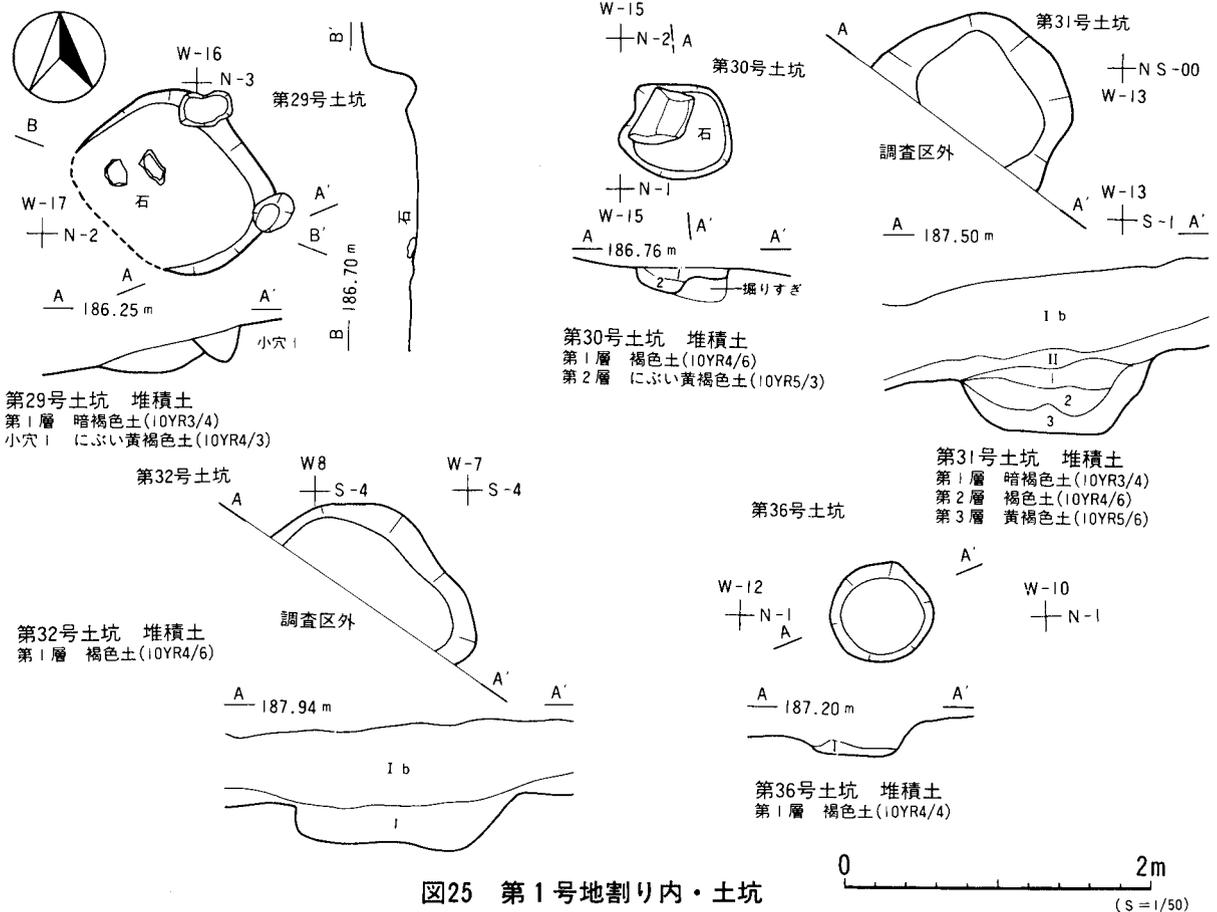


図25 第1号地割り内・土坑

形である。堆積土は褐色土の単層である。整地の際の流入土と思われる。壁高は、10cm～20cmである。傾斜面高位の東壁側が高い。底面はほぼ平坦である。

焼土 (図22)

地割り内のP30グリッドから3カ所、Q30グリッドから2カ所の焼土を検出した。規模は、約20cm～40cmの拡がりを持つ不整形である。地割り底面下に2cm～5cm程度厚さで焼成している。小規模ながら、面的にあることから掘立柱建物と関連して機能していたものと考えている。

[遺物] 縄文時代中期～後期に比定される土器片が出土した。

[小結] 本遺構は、館内部の傾斜面を削平して作られている。内部から、多数の小穴が検出され、建物やそれに付随する施設として機能していたものと考えられる。また、小穴の数から数度の建て替えや重複があったものと判断されるが、確証は得られなかった。本遺構の外にも、掘立柱建物跡が想定される小穴が作られていることから、本遺構が、館内において階層性等の区画されるべき場所であった可能性がある。最終的には埋められており、その整地土は土塁構築の盛土であったものとする。

(中村)

第2号地割り (図26～図30)

[位置・確認] 調査区南側のD16グリッドからE～G21グリッドの範囲に位置する。館跡の南西隅の部分にあたる。現況での標高は、190m～192mである。この範囲の基盤層の傾斜は、北側に比べやや急である。表土撤去後に、第IX層以下の粘土等を混合する褐色土を広範囲に検出した。当初、排水路及び備壁工事の際の攪乱と思われたが、攪乱土の下より整地層を確認し、地割りされた遺構であることが判明した。表土面からは、2.2m掘り込まれている。北側には、第2号門跡がある。

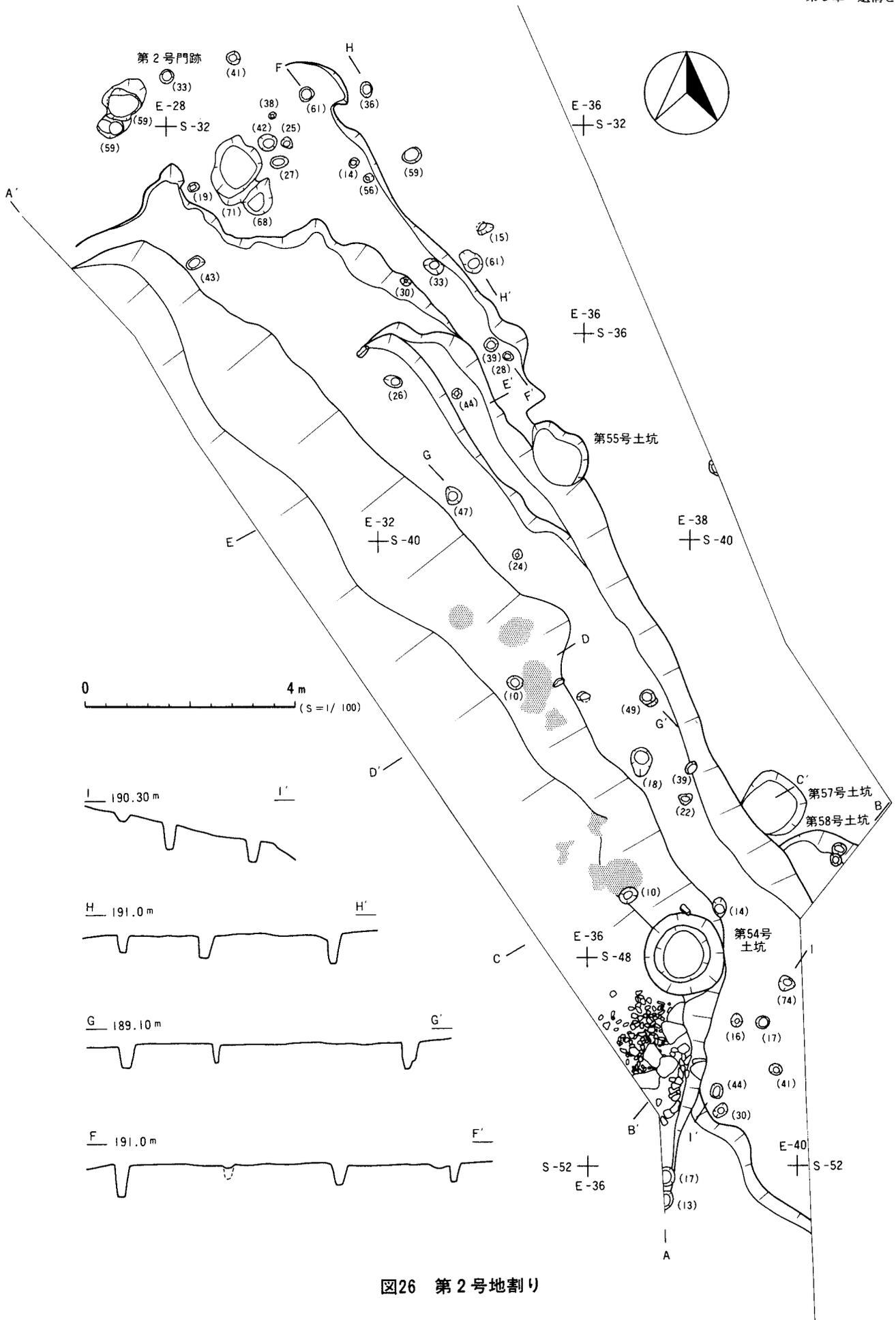


図26 第2号地割り

〔規模・形状〕 地割りは、南北約19m、東西最大約6mの範囲で調査区に認められる。おそらく長方形に削土され、調査できなかつた西斜面部まで拡がっていたものと推測される。掘り上がりの状態では、東側から西側へ下がる、2～3の段をもつ階段状となる。段差は、東側上段で約20cm～35cm、E20グリッド部分にあたる中段で約20cm～25cmである。下段にあたる部分は、段というよりも斜面に近い。また、段は北側へ向かいしだいに緩くなり、斜面に吸収される。掘形は、礫を包含する地盤を掘り込んでいるため、不規則で凸凹がある。同様に、壁面と平坦面にも礫が現れており、起伏がある。

〔土層〕 本遺構の堆積土は、安全対策上の境界面と直行する4本のベルトで確認した。堆積する土は、全体的に褐色土を主体とする土である。これに、黒土や第Ⅶ層の浮石、および第Ⅸ層以下の粘土粒や塊、礫が混入混合する。すべて、整地層ないしは盛土と判断され、29層に細分される。土層観察より、4回ないしは5回の画期があったものと考えている。各時期に何らかの遺構が存在したものと思われるが、調査時に掘りすぎてしまい詳細に大きく欠ける。面的に捉えることができたのは、第7～10層上面ラインだけである。この他に、小穴が作られている第1層上面ライン、第3層上面ライン、第22層上面ラインに画期があったものと思われる。第1層上面では、小穴が掘り込まれている。第7～10層上面ラインでも小穴が作られているほか、焼土と土坑が検出されている。第3層上面ラインでは、本層と第8層を切り込んだ上に、第5・6層を盛っていることから、この土で作られた土塁があったものと考えている。第22層上面ラインでは、本層以下の層が水平に積み上げられていることと、第23層の上に土塁盛土に見られるような、斜面と逆傾斜で第20・21層が積み上げられていることから、第20層以下が土塁ないしは、その基盤となる層と考えている。第22層上面ラインが、北側のどの層に連続するものなのか解釈しかねる。

〔個別遺構〕 前述のとおり、面として精査できたのは第7層上面と基盤層面だけである。これにおいても小穴を捉えることができず、掘りとばしてしまった可能性が高い。他の画期でも、小穴等の遺構が存在した可能性は非常に高いが検出できなかった。

小 穴 (図26)

図中に示した小穴は、焼土にかかるもの以外すべて基盤層面での検出である。地割り内には、総数28個の小穴を検出した。上段の上にも4個検出した。小穴の径は、最大5cm、最小で15cmである。大半が30cm程の大きさである。深さは、20cm～40cmである。掘形の形状から抜き取られているものもある。柱痕を確認できるものは無かった。検出したものの中から、4条の小穴列を復元したが、各小穴間の間隔にバラツキがあることと、上記理由により、柵跡や建物跡と断定できない。しかし、後述する焼土などから、段の内部に建物があった可能性は強く、F列など、第1号地割りに見られるような、段差直下の柵跡と想定される。

焼 土 (図29)

第7層上面から、小規模にわかれた焼土跡を検出した。

地割り内のほぼ中央とその南側、D E18グリッド～E19グリッドに7ヶ所検出した。焼土の規模は、焼土1と焼土5を除き、他は30cm～70cmの円形ないし不整形である。焼土の厚さも約5cm～10cmである。焼土1は他と比べ、明確な掘形をもつものである。掘形の規模は、径が70cm、深さ25cm程である。周壁に粘土を貼付けたうえ、粘土を3cm～5cmの厚さで敷き詰めて火床として使用している。

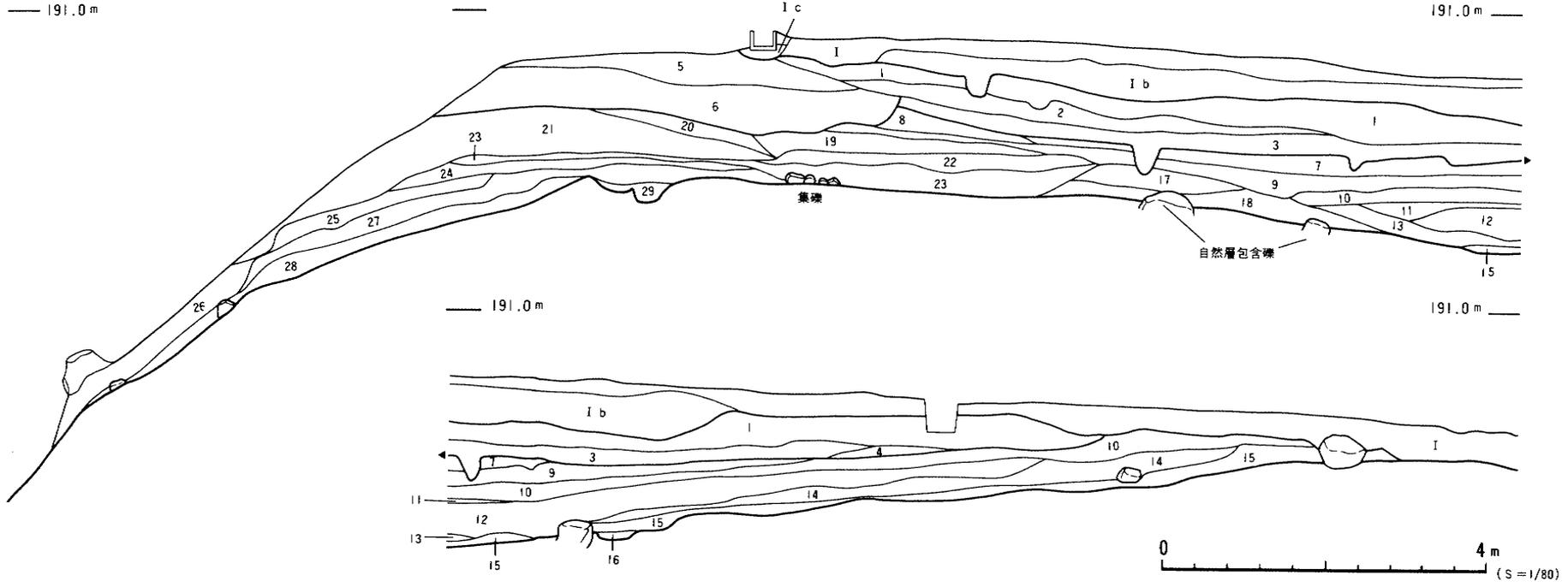


図27 第2号地割り土層(1)

- 第2号地割り土層 A-A'
- | | | |
|----------------------------|--------------------|-------------------------|
| 第1層 褐色土(10YR4/4) 表土 | 第7層 暗褐色土(10YR3/3) | 第17層 暗褐色土(10YR3/4) |
| 第1 b層 にぶい黄褐色土(10YR4/3) 攪乱層 | 第8層 褐色土(10YR4/4) | 第18層 極暗褐色土(7.5YR2/3) |
| 第1 c層 褐灰色土(10YR4/1) 攪乱層 | 第9層 褐色土(7.5YR4/6) | 第19層 黒褐色土(10YR2/3) |
| 第1層 暗褐色土(10YR3/4) | 多量のロームブロックと礫混入 | 第20層 にぶい黄褐色土(10YR4/3) |
| 第2層 暗褐色土(10YR3/3) | 第10層 暗褐色土(10YR3/3) | 第21層 明褐色土(7.5YR5/8) |
| 第3層 暗褐色土(10YR3/4) | 第11層 暗褐色土(10YR3/4) | 焼土粒、炭化物混入 |
| 第4層 暗褐色土(7.5YR3/4) | 第12層 黒褐色土(10YR2/3) | 第22層 黒褐色土(10YR2/3) |
| 第5層 暗褐色土(10YR3/4) | 第13層 暗褐色土(10YR3/4) | 第23層 褐色土(10YR4/4) |
| 第6層 黒褐色土(7.5YR3/2) | 第14層 黒色土(10YR2/1) | 第24層 明褐色土(7.5YR4/6) |
| | 第15層 暗褐色土(10YR3/3) | 第25層 褐色土(7.5YR4/4) |
| | 第16層 暗褐色土(10YR3/3) | 第26層 暗褐色土(10YR3/3) |
| | | 第27層 黒褐色土(10YR2/3) |
| | | 第28層 褐色土(10YR4/6) |
| | | 第29層 暗褐色土(10YR3/4) 小穴埋土 |

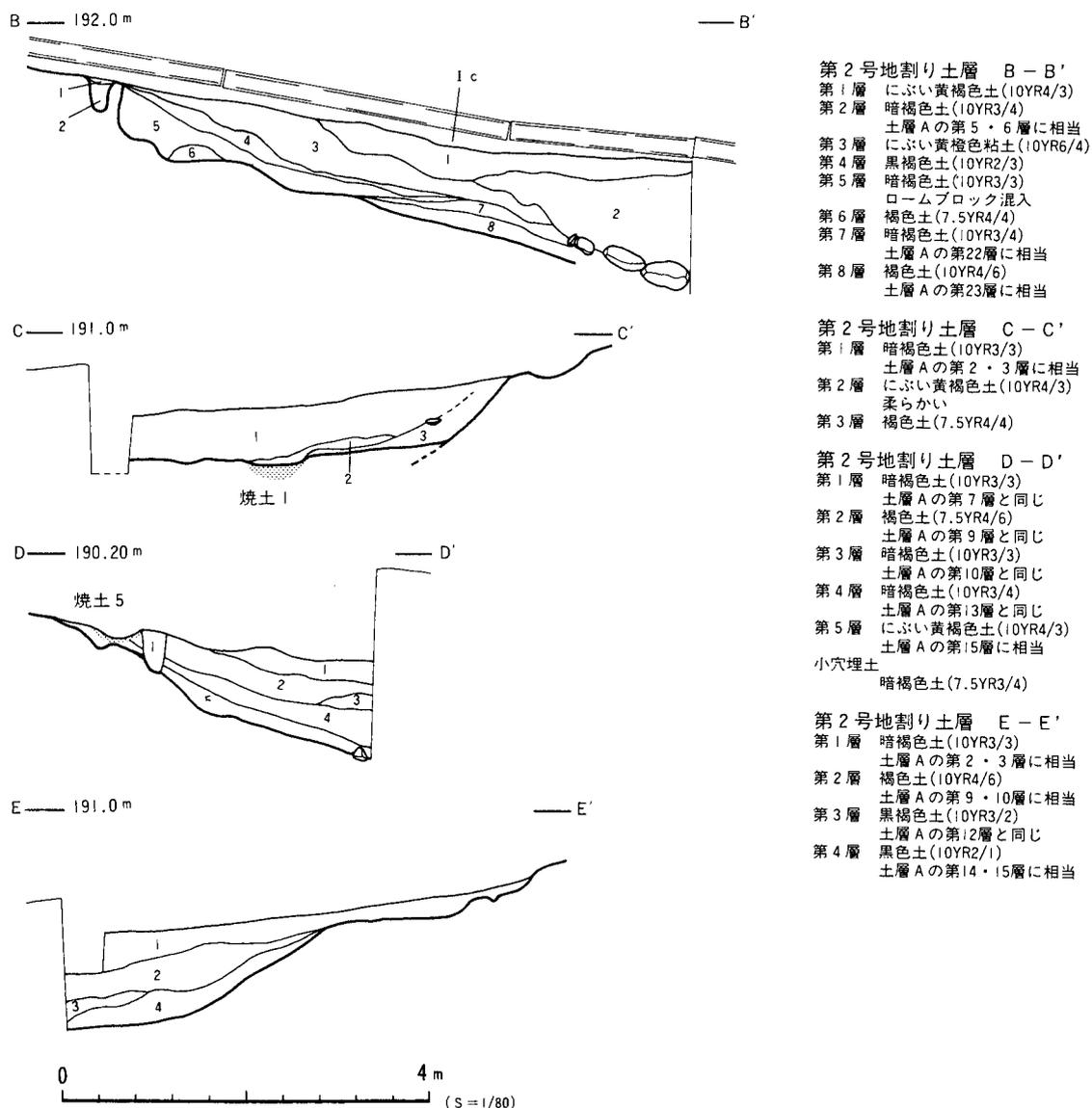


図28 第2号地割り土層(2)

土坑 (図29)

焼土と同じ第7層上面から土坑を1基検出した。D18・19グリッドに位置し、焼土1の南側に90cm程離れて作られてある。第54号土坑として調査した。本土坑の規模は、開口部が1.6m×1.3mの楕円形、底面は径75cmの円形である。深さは、検出面から1.3mある。底面は平坦である。周壁は、底面より直角に立ち上がり中位で外側に開く。断面形Y字状である。堆積土は、4層に分けられる。第1層は、基盤の粘土ブロックを混入する。第2層は焼土であり、この層を挟み大小の礫が出土した。第3層と第4層は、基盤の粘土ブロックを多量に混入する土で、崩落土と考えられる。人為堆積である。

集礫 (図30)

D17グリッドに位置し、地割り南端部の段差直下にある。礫は3段階に分かれて、まとまっている。第1段階の礫は、50cm～60cmの大型の礫で、第19整地層掘り下げ時に4個がまとまって出土した。第2段階の礫は、大型礫と段差の間にほぼ同一レベルで出土した。10cm～25cm大の礫で、直線的に並べる様に、第19層上面に置かれている。第3段階は、地割り底面の基盤層面に、5cm～20cm大の小礫が

敷かれた状態で出土した。これらの礫は、各段階で整地層を介在するが、ほぼ同じ範囲にあることから、関連して機能したものと考えられる。土層の項目で記述したが、土塁の基礎および盛土と考えられる層から出土していることから、その根固めないしは、土塁に付随した施設の可能性がある。

[遺物] 焼土2付近の壁面より芋引金出土した。他、各整地盛土層から縄文土器が出土した。

[小結] 本遺構については、完全に掘り上げることができず不明な点が多い。しかし、土層面観察から、5回にわたり変遷していると考えられた。各時期で、地形を改変し様相に変化があったものと

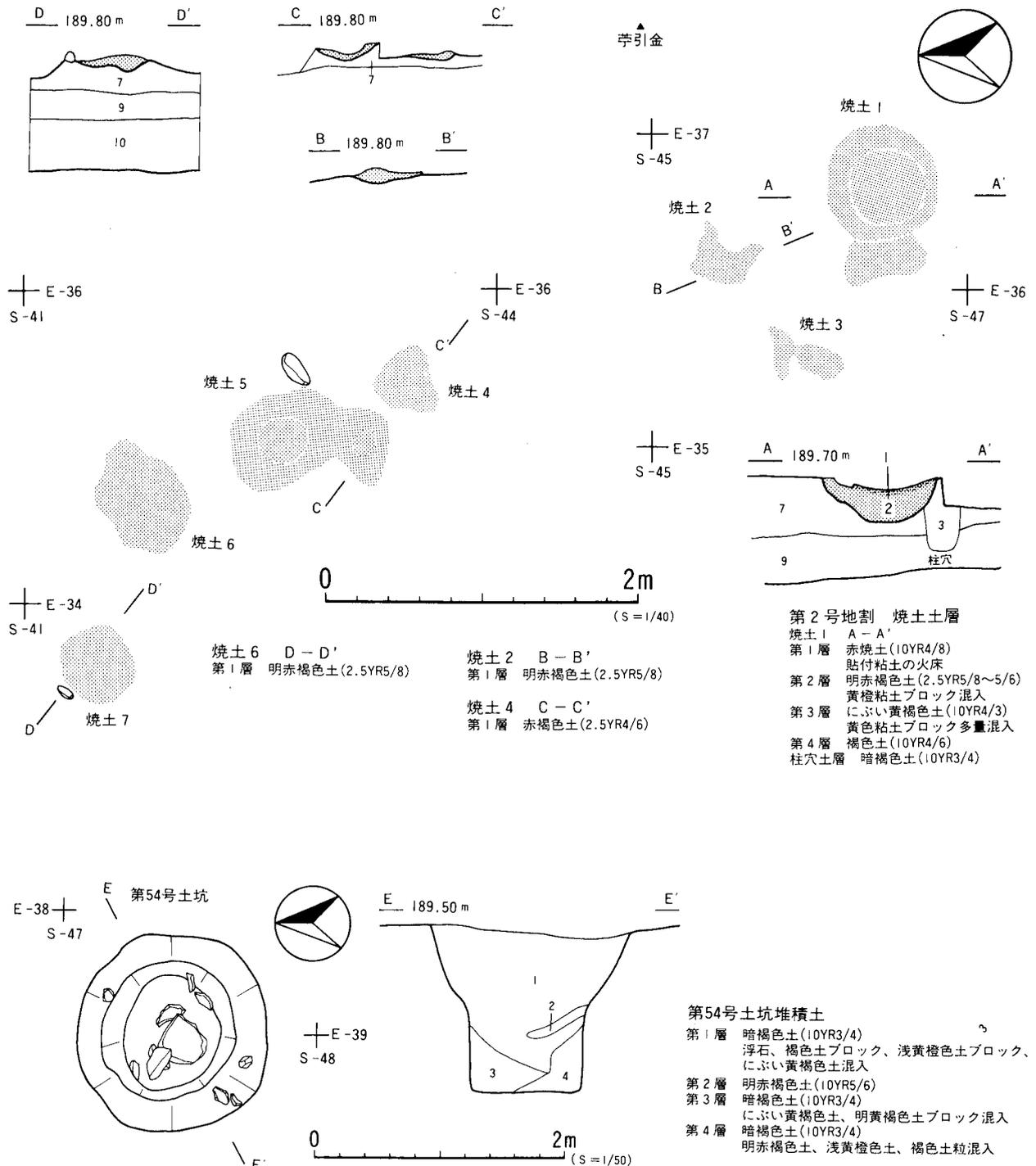


図29 第2号地割り内・焼土跡及び土坑

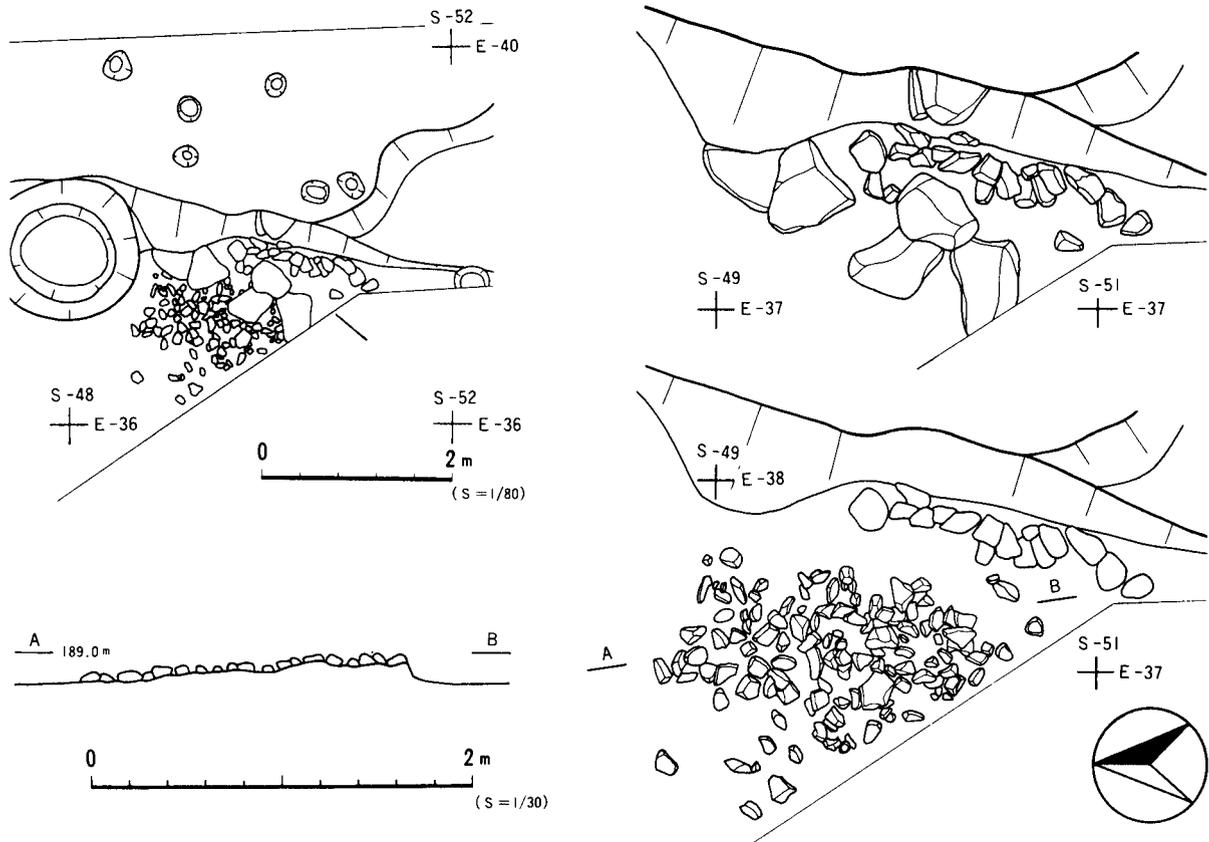


図30 第2号地割り内・集磔

思われる。整地作業の根底には、土塁の構築が意識されていたものと考えられ、焼土や小穴等の検出から、土塁に近接して施設が存在したことも明らかである。各面での機能性格については、詳細に大きく欠けるが、西側斜面部で検出した道跡や、北側の第2号門跡と考え合わせると、本館跡において極めて重要な場所であったと考えられる。(小田川)

第3号地割り (図31)

[位置・確認] 調査区北側のR34・35グリッドに位置する。東南側には第4号地割りがあり、西側に第1号土塁が近接する。表土撤去後、褐色土の不整形プランで検出した。標高は、186m～187mである。検出時点では堅穴遺構と思われたが、検出された小穴から地割りと判断した。

[規模・形態] 地割りは、長さ約4.5m、深さ20cm～30cmの段に基盤層を平坦に削平して作られている。内部から検出された小穴から、全体の規模は南北約4.5m、東西3.5mの小規模な範囲であったと推測される。

[土層] 掘り抜いてしまったが、第IX層のロームブロックや浮石、炭化物等が混入する褐色土であり、近接する土塁の盛土に近似することから、土塁構築時に埋められたものと判断している。

[内部遺構] 総数33個の小穴と、踏み締まった硬化面を検出した。

小穴

小穴の規模は、概ね直径が10cm～40cm、深さ10cm～75cmで、大きさ及び深さにバラツキがある。これらの小穴のうち、P1からP14までが段に付随して作られた、掘立柱建物の側柱を構成するものと考えられる。深さは40cm～50cmである。各柱穴間の間隔にもバラツキがあり、規則性は見られない。

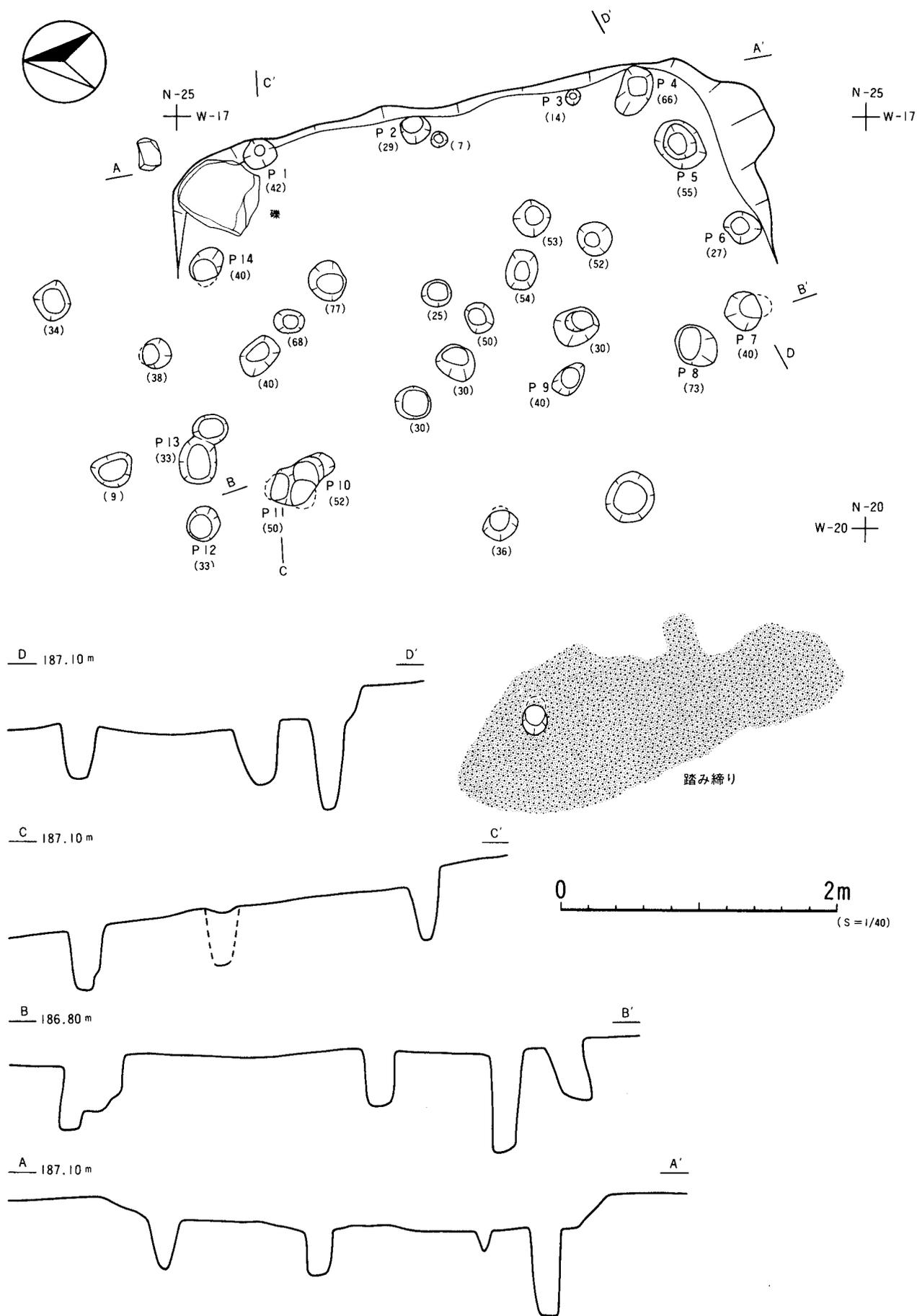


図31 第3号地割り

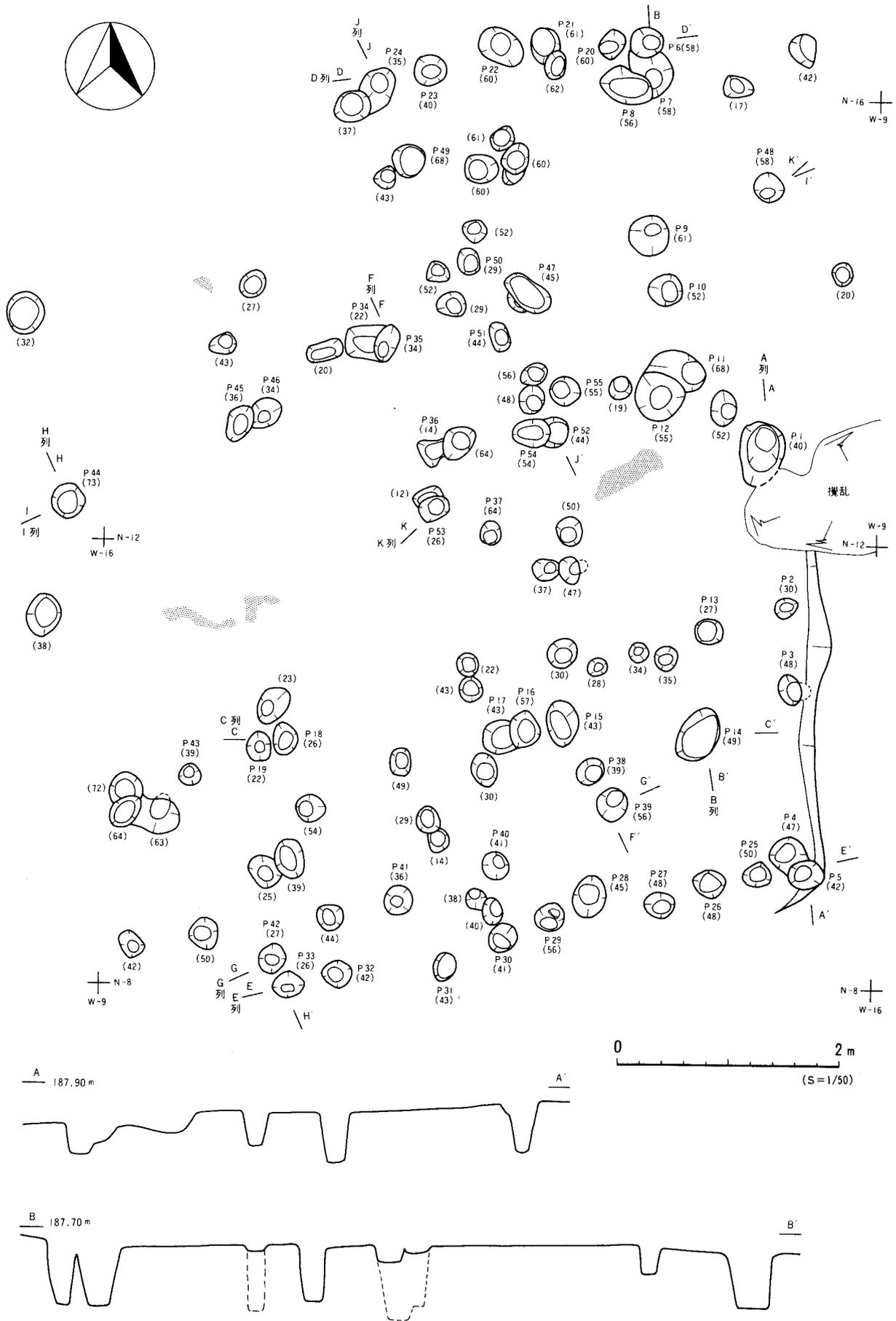


図32 第4号地割り

桁行2.8m、梁行1.8m～2.4m程の掘立柱建物跡と思われ、不整な長方形の建物であったと考えられる。他に建物を構成する柱穴があるものと思われるが、ラインとして捉えることができない。

踏み締まり痕

段から約4m西側に離れて、長さ約2.8m、最大幅の約1.2mの規模で、踏み締まったような硬化した面を検出した。黒色土に礫とローム粒が混入する土で非常に硬い。本遺構に伴うものか明確にできないが、関連した可能性がある。

[遺物] 段の北隅から、50cm程の扁平な礫が出土した。持ち込まれた物であることは明らかであるが、敲打や磨滅の痕跡がなく、用途については不明である。

[小結] 前述した、第1号・第2号地割りよりも小規模な地割りである。おそらく、掘立柱建物1棟分を区画するものであったと考えている。 (中村)

第4号地割り (図32・図33)

[位置・確認] 調査区西側のP・Q32・33グリッドに位置する。南側には第1号地割りがある。表土撤去後に、部分的ではあるが段を確認し、内部から多数の小穴を検出したことから地割りとした。北西方向へなだらかに傾斜する面に作られている。

[規模・形態] 地割りの段は、測点W9/N8～12の範囲だけに検出された。北側は攪乱により壊されているほか、斜面に吸収されている。遺存している段の長さは、3.3m程で、深さは20cm程である。このため区画域を的確に把握できないが、小穴のありかたから、地割り全体の大きさは、南北約8m、東西約6mの範囲であったと推定される。

[土層] 表土直下の検出であり、堆積土については捉えることができなかった。

[内部遺構] 総数105個の小穴と焼土を検出した。

小 穴

地割り内に検出した小穴の規模は、径が20cm～75cm、深さ15cm～70cmまでである。形状は、不整円形及び不整なものが多い。小穴は段の西側に密に散在しており、この中に、他の地割と同じく、掘立柱建物や柵が存在していた可能性が極めて高い。小穴には、不規則ながら地割りの段と平行するものや直交するもの、それ以外に並びを想定できるものがあることから、これらをA～Kまでの柱列として、以下に記述する。

地割りの段差と平行する柱列

2列認められる。A列は、地割りの段差直下に20cm～30cm程離れて並ぶP1からP5までである。柱穴の間隔は、P1とP2間が1.5m、P3とP5間が1.6mである。P2とP3間は80cmと狭い。B列は、他の柱穴よりやや大きい小穴が含まれる、P6からP14までである。柱穴の間隔には大きくバラツキがある。P6とP9間が1.7m、P9とP12間が1.5m、P12とP13間は2.1mある。

地割りの段差と直交する柱列

3列認められる。C列は、P14からP19までの柱穴が並ぶ。柱穴の間隔は、P14からP17間で1.8m、P17からP18間で2mある。D列は、P6とP20からP24までの柱穴が並ぶ。柱穴の間隔は、他の柱列より密で、各々40cm～60cmある。E列は、P5とP25からP34までである。柱穴の間隔は、D列と同様に密である。断面図上にのらないものも含めると、概ね40cm間隔である。

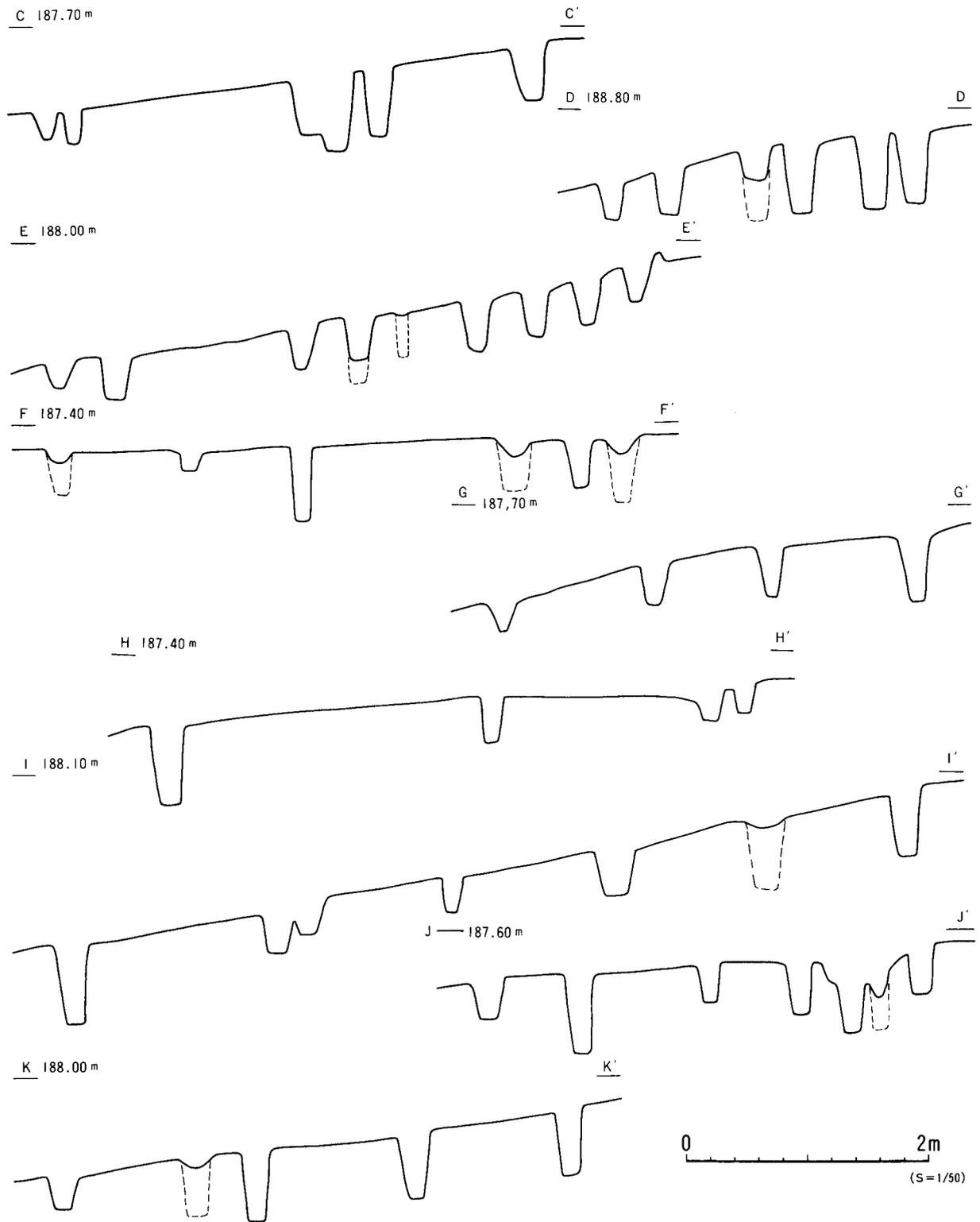


図33 第4号地割り・柱列断面

その他の柱列

6列認められる。F列は、P35からP39までの柱穴が並ぶ。柱穴の間隔は、P35・36とP37間が2.1mと1.95m、P37とP38・39間が2.3mと2.6mある。G列は、P39からP42までの柱穴が並ぶ。柱穴の間隔は、P39とP40、P41とP42間が1.2m、P40とP41は1mとほぼ均一である。H列は、P42からP44の並びである。柱穴の間隔は、P42とP43間が1.8m、P43とP44間が広く2.7mある。

I列は、P44からP48までとP9とP36を含めて並ぶ。柱穴の間隔は、各々概ね1.2mである。J列は、P24とP49からP52までが並ぶ。柱穴の間隔は、70cmから1mであるほか、P24とP50、P50とP52間が、1.85mと1.75mである。K列は、P53からP55とP48、P10の並びである。柱穴の間隔は、P53とP55間が1.6m、P55とP10およびP10とP48間が1.3mと同じである。

地割り内部のこれら柱列は、他の地割り同様に建物跡を構成したものと考えられる。A列は、段際に平行にあることから、遮蔽の柵跡の可能性はある。B列は、構成する柱穴が他よりも大きく、間隔も広いことから柵等とは考えられず、むしろ直交するC列と関連して掘立柱建物跡の可能性が高い。D列とE列は、小規模な柱穴が密に並びことで共通し、対応して作られていた可能性がある。密であることから柵か塀であった可能性がある。F列からH列とI列のP36までは、ほぼ長方形に組むことができ、掘立柱建物跡の可能性はある。桁行4.6m、梁行3.2mの南北棟の建物として想定される。J列は、この建物に付随した柵ないしは塀と考えることもできる。K列は、ほぼ均一な柱穴間隔で、この列に関連して構造物が地割り内部または付近にあったものと想定される。

焼土 (図32)

地割り内のQ33グリッドから3カ所、P33グリッドから1カ所の焼土を検出した。規模は、約20cm～40cmの拡がりを持つ不整形である。地割り底面に2cm～5cm程度厚さで焼成している。第1号地割り同様、面的にあることから掘立柱建物と関連して機能していたものと考えている。

[遺物] 出土していない。

[小結] 段の内部に想定した前述の柱列等については、詳細に欠け的確な復元ではないが、小穴の密度からみて、何らかの建造物があったことは明らかである。 (中村)

第5号地割り (図34)

[位置・確認] 調査区中央部西側のK・L26・27グリッドに位置する。北西側に第1号地割りがあ。表土撤去後に、長方形の褐色土のプランで検出した。内部から検出した小穴から、第3号地割りと同様なものと判断した。

[規模・形態] 地割りは、南北の長さ約3.5m、東西の長さ約1.1m～70cmのコの字状の段に作られている。段の深さは20cm～30cmで、内部は削平され平坦に作られている。内部から検出された小穴から、全体の規模は南北約3.5m、東西3.5mの方形な範囲であったと推測される。

[土層] 堆積土は、暗褐色土の単一層で、硬く締まっていた。埋められたものと判断している。

[内部遺構] 段の内部に総数20個の小穴を検出した。

小穴の規模は、直径が10cm～40cm、深さが8cm～73cmである。検出された小穴からは、第3号地割りと同様に1棟の掘立柱建物跡を復元した。P1からP11までの小穴が、掘立柱建物の側柱を構成するものと考えられる。P1からP3の間隔は各1.55mと1.70mでほぼ均等である。段の南北隅に位置するP1とP3から、P9とP4の間隔もほぼ一定している。P1からP3に平行して、P4からP9が作られている。P4からP8間に小穴が混在しているが、P4とP8、P9がP1からP3に対応するものと考えられる。およそ桁行3.40m、梁行2.10mの2間×1間の掘立柱建物跡と考えられる。

[遺物] 出土していない。

[小結] 第3号地割りと同じ、小規模な掘立柱建物跡を区画したものと考えられる。 (中村)

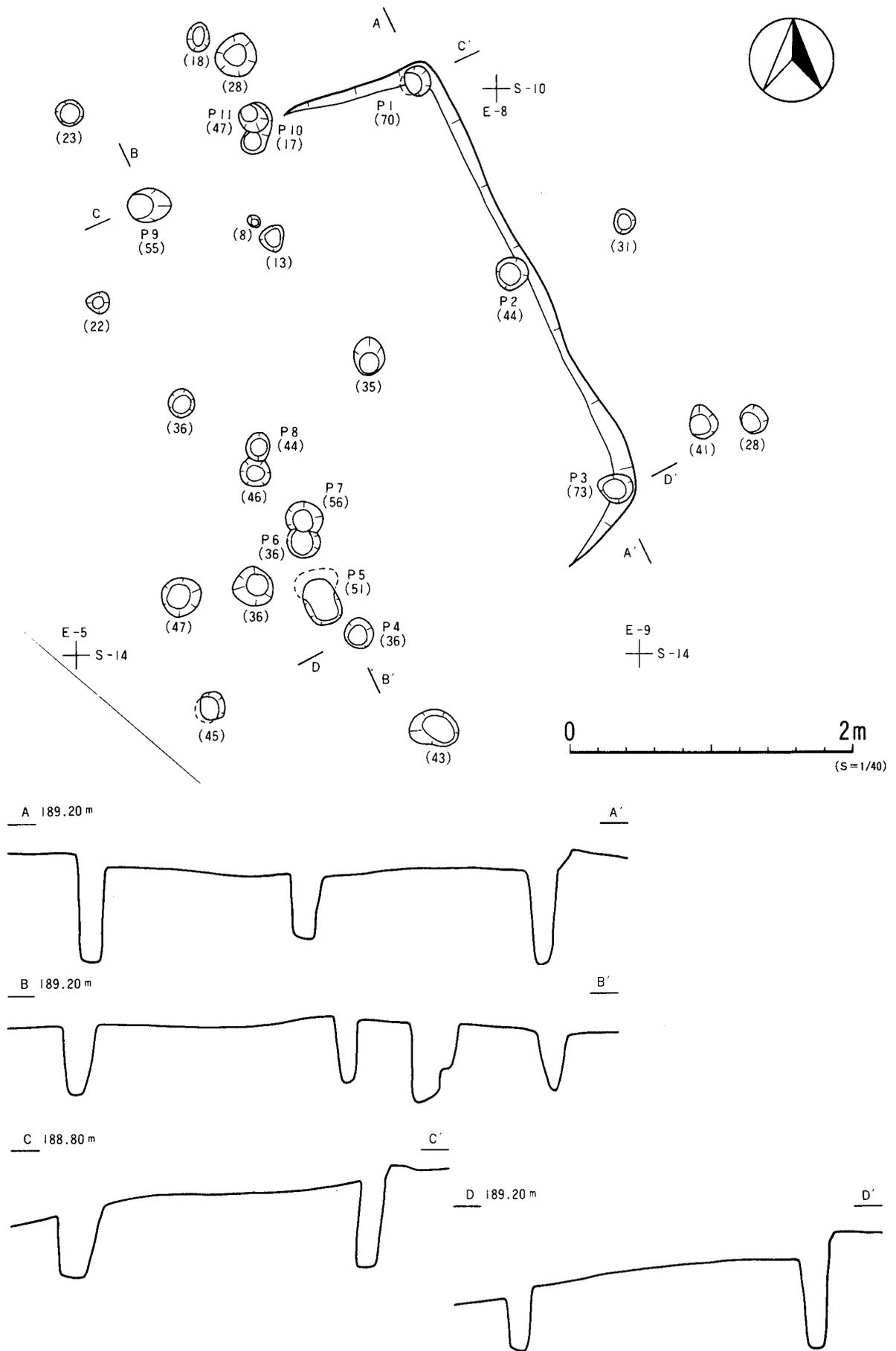


図34 第5号地割り

第6節 掘立柱建物跡・小穴

本調査により検出された小穴は、総数約1,750個である。(付図1・2)

小穴の規模は、径が25cm～40cmまでのものが大多数を占め、これ以外の大型のものや小さいものは数少ない。形状は、円形や不整な楕円形になるものが多く、希に隅丸方形ないしは長方形になるものみられる。付図中に示したが、深さにもバラツキが多く、ほぼ同一レベル面であっても深さに極端な違いが見られる。小穴内堆積土は、暗褐色土か黒褐色土で単層のものが多い。第IX層以下のロームや粘土の細ブロックを混入するものはあるが、それ自体で埋められているものは少ない。柱痕を確認できるものも少なく、確認できるものでも、その太さは10cm～25cm程である。

これらの小穴は、館跡内部に散在するが、測量点のS-20ラインを境に南側には希薄になる。これに対し北側は数が多く、特にP・Q34～36グリッド範囲や、H～L29～34グリッド範囲に多数作られており、一見して調査区周縁を囲むようにある。

第1号土塁盛土の範囲内だけ作られていないように見えるが、図10の第1号土塁土層D-D'や同E-E'に見られるように小穴は作られていたが、大部分を掘りとばしてしまった疑いがある。

各小穴どうしの重複も多数確認されるが、調査時に新旧の関係を明確に捉えることはできなかった。

大多数の小穴は、掘立柱建物跡および柵跡や塀跡のような構造物を構成するものであったと考えられるが、小穴の規模のバラツキ以外に、並びや間隔にもバラツキが多く、調査時点で6棟の掘立柱建物跡と数列の柵跡を復元したにすぎない。

当初、掘立柱建物跡として復元したものについても、検討の結果、第5節の第3号地割りや第5号地割りに変更し、記述したものがあほか、小穴の並びとその間隔から、第9号竪穴遺構と第10号竪穴遺構に変更して、記述したものがあほ。

調査時点では、第1号門跡の南側に柵跡や建物跡を、第1号地割りの東側にも同様に構造物を想定復元したが、画一性に乏しく、的確な想定とは言えないことと、時間的制約及び紙数の都合上、個別に図示する事を控え、漠然と付図の呈示だけに止める。いずれにしても、調査時及び整理時点での検討不足は否定できない。

本節では、1棟だけの呈示であるが、ほかに多数の掘立柱建物跡が作られていたものと考えられる。重複する小穴から、立て替えが頻繁に行われていたものと考えられ、建物の立て替えが頻繁に行われる点では、八戸市根城や七戸町七戸城跡北館などと共通するところである。小穴は、検出状況や他遺構との関係から、大多数が館に付随して建てられていたものと考えられる。建物跡の規模は、小穴の規模から、大型の建物があった可能性は薄く、小規模で簡易な建物がいくつも建てられていたものと思われる。

第1号掘立柱建物跡 (図35)

[位置] 調査区北側N・O36～38グリッドに位置する。第1号竪穴遺構の東側に隣接し、土塁に近接する。

[規模] 桁行3間(総長約5m)、梁行1間(総長約3m)の南北棟の建物である。軸方向はN-3°-Sである。

[平面形式] 主屋部 1 室である。P 3 に対応する柱穴は検出されなかった。P 5 と P 9 は他の柱穴に比べ小規模で掘り込みが浅く、隣接する P 1 と P 4 間での間隔も狭い。間仕切りの柱穴とは考えられず、側柱を構成したものと考えられる。

[柱穴] 柱穴の規模は、径が約40cm前後である。深さにはバラツキがあるが、概ね30cm～40cmである。掘形はほぼ円形である。

[柱間寸法] 東側の桁行は、P 1 と P 2 間が1.80m、P 2 と P 3 間が1.60m、P 3 と P 4 間が1.70 mあり、平均寸法は1.70mである。西側は、P 7 と P 8 間が1.70m、P 6 と P 7 間が3.20mある。梁行はP 1 と P 9 間が70cm、P 9 と P 8 間は2.20mである。P 4 と P 5 間、P 5 と P 6 間もほぼ同じく対応する。

[年代] 明確にできないが、館機能時に比定できるものと考えている。

(小田川)

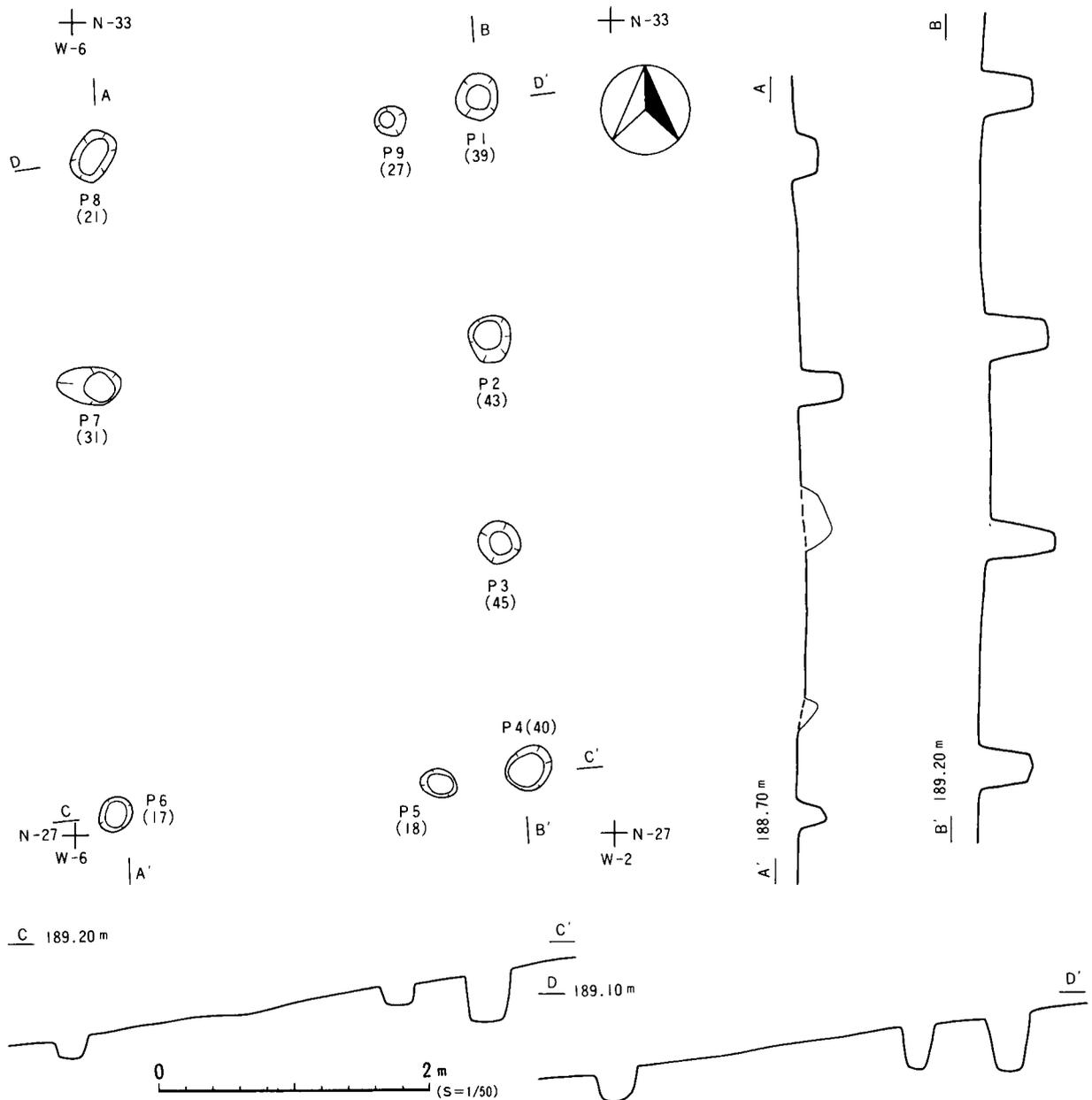


図35 第1号掘立柱建物跡

第7節 竪穴遺構

本遺跡で検出された竪穴遺構は8基である。精査時に風倒木と判断された第4号竪穴遺構は欠番とした。各竪穴遺構は、およそ縁辺に近い部分に作られており、第1号と第3号、第8号竪穴遺構は単独に作られてある。第2号と第5号、第6号竪穴遺構は、同一場所に重複して検出された。この重複した竪穴遺構については、壁と床面を捉えることができず、柱穴も基盤層面で検出したため、3棟分が混在している。基本的には、各々分けて掲載すべきであるが、まとめて記述する。

第1号竪穴遺構 (図36・図37)

〔位置・確認〕 調査区北側、P・Q37・38グリッドに位置する。館の縁辺近くの緩斜面に作られている。表土撤去後に、褐色土の長形状プランで検出した。

〔重複〕 第10号土坑と重複し、本遺構の方が新しい。

〔規模・形態〕 平面形は隅丸長方形である。開口部は長軸5.20m、短軸3.50m、底面で4.80m、3mである。

〔堆積土〕 堆積土は、2層に分けられた。第1層は褐色土で、掘り下げ時点から多量の炭化材と焼土粒の混入が見られた。また、大小の礫が多量に出土した。第2層は黒色土で、第IX層のローム細ブロックが斑状に混入する。東側壁直下にだけ見られる。床面の直上からは、多量の炭化材が焼土と混在して出土した。炭化材には、板状のものと棒状のものがあり、内側に倒れ込むように重なっていた。

〔壁・底面〕 壁高は、東西に緩傾斜する面に作られていることから、東壁で高く約75cmある。西壁は遺存する部分で15cmある。北壁と南壁は斜面なりに傾斜する。壁面は、底面よりほぼ直に立ち上がる。床面はほぼ平坦であり、南西隅部分では、緩やかに上がる。

〔柱穴〕 竪穴内に総数28個の小穴が検出された。小穴の規模は、径が20cm～40cmの不整円形及び楕円形で、深さは床面から最低15cm、最大85cmである。柱穴は、南北の壁直下に密に作られている。これらの小穴のうち、P1からP10までが竪穴支柱穴であると考えられる。P1からP3の間隔は、各1.20mと1.30mでほぼ均等である。北壁側のP1からP8の間隔は、P1とP10間が1.60m、P9とP8間が1.50m、P9とP10間が70cmあり、対する南壁側のP3からP6に同じ間隔で対応する。P1からP3に対応するものは、P6からP8であるが、P6とP7の間隔は、1.40mと広めにとられている。P11とP12の間隔も同じで、各々P6とP7に50cmの間隔で対応する。出入り口に関連した柱穴であったものと考えられる。他に、P13とP15は、P1からP4とP10に結びついて、間仕切りの空間を作っていたものと考えられる。P17からP20は各々対峙しており、他の柱穴の補助的のものであったと思われる。

〔出土遺物〕 堆積土中より縄文土器が出土した。

〔小結〕 本遺構は、炭化材の出土から火災にあった竪穴である。炭化材の状態と土から、火災後に一気に埋められたものと判断される。堆積土中より出土した多量の礫は、屋根の置き石であったものと思われる。

(小田川)

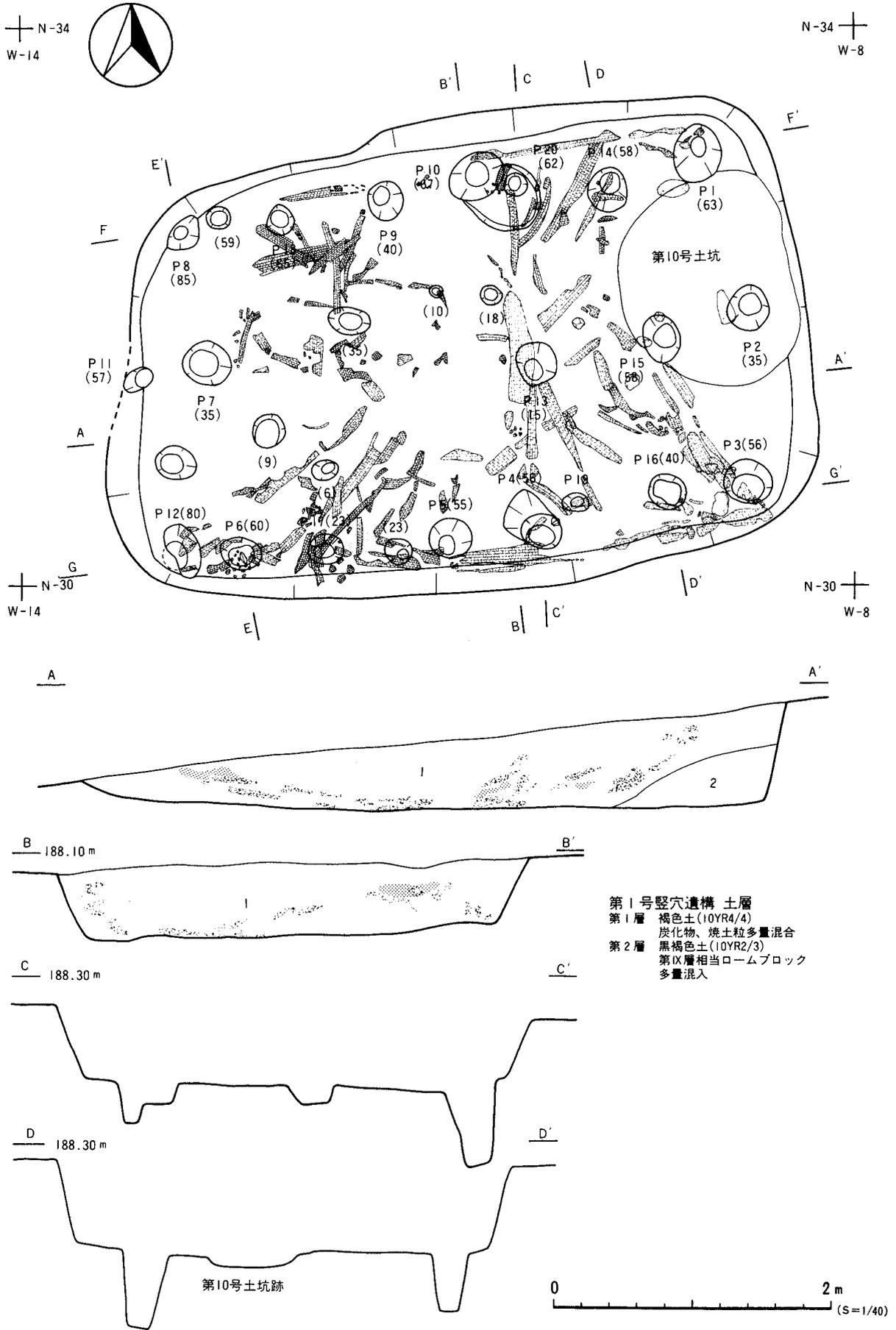


図36 第1号竖穴遺構

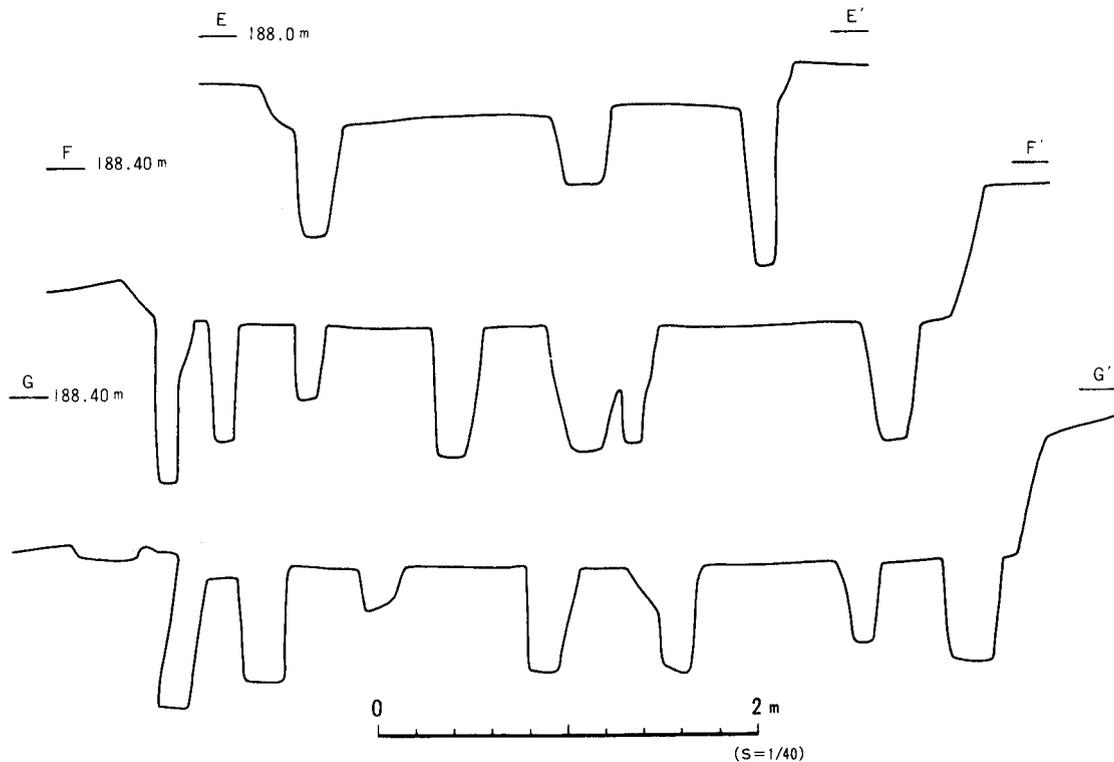


図37 第1号竪穴遺構柱穴断面

第2号、第5号、第6号竪穴遺構 (図38・図39・図46)

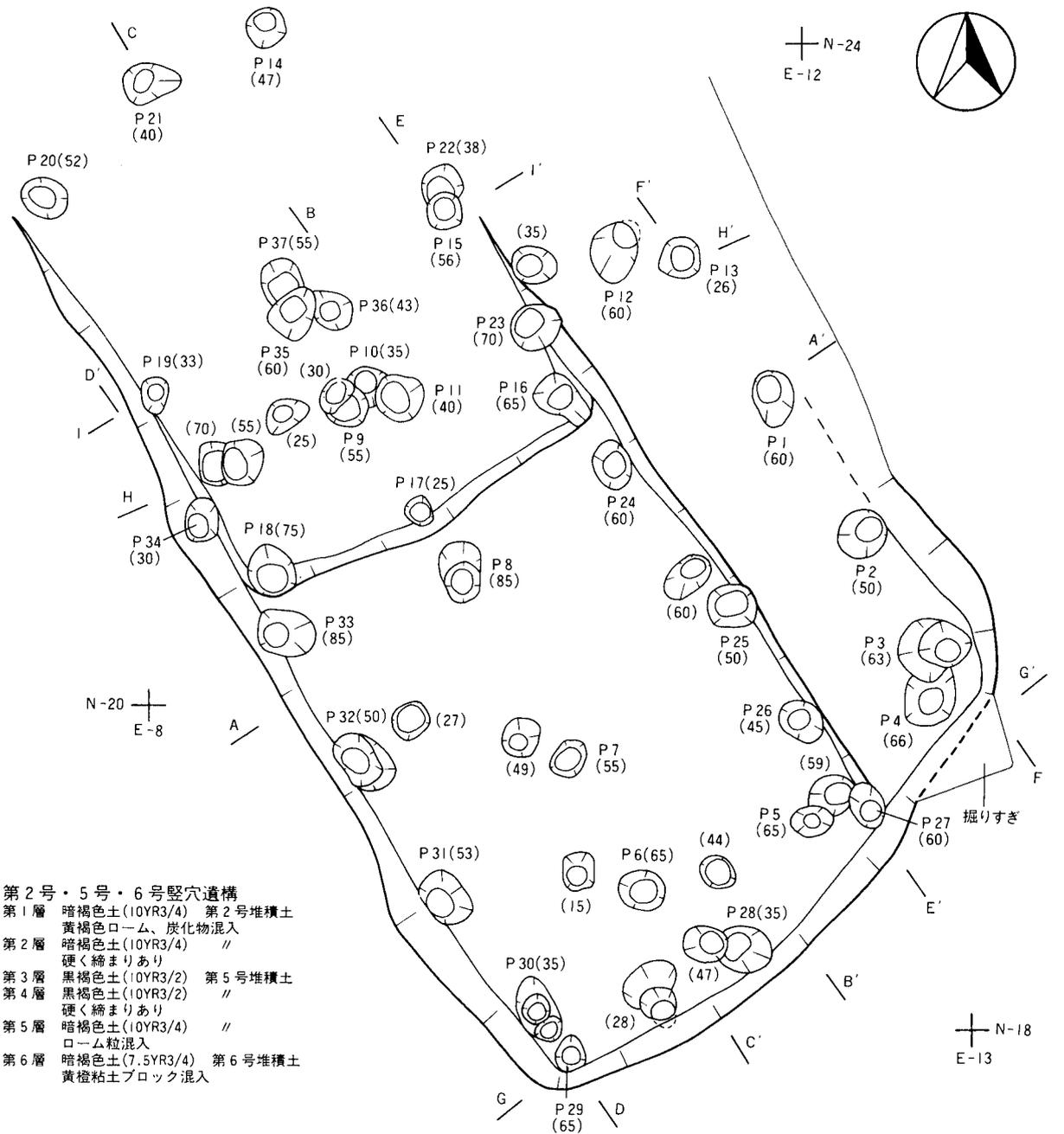
〔位置・確認〕 調査区東側J～L34・35グリッドに位置する。暗褐色土に、ロームの細ブロックが混入する大型の長方形のプランで検出した。検出時点では重複を確認できなかった。

〔重複〕 掘り下げ時に、土層A-A'部分に小穴を検出し、遺構が重複するものと判断された。しかし、壁と床を判別できず、ほかの柱穴も捉えることができなかつたため、基盤面まで掘り下げた。土層B-B'の観察と、床面および内部に検出した小穴から、3棟が重複しているものと判明した。(以下に、竪穴遺構を省略して記述する)

〔規模・形態〕 前述のとおり、壁を捉えることができなかつたため明確ではないが、遺存する壁と柱穴と判断される小穴から、次の規模で推定される。第2号は、長軸で約4m、単軸で約3m。第5号は、長軸で約3.50m、単軸で約2.50m。第6号は、長軸で約5.50m、単軸で約2.80mである。形態は、概ね隅丸長方形となるものと思われる。

〔壁・底面〕 壁は、遺存している部分と土層観察面から、次のようにある。第2号は、東西壁で15cm～20cm。第5号は、南壁で25cm、西壁で約30cm。第6号は、南壁で60cm、東西壁で15cm～30cmある。本来はもっと高かった可能性がある。また、各竪穴の北側は供に不明であるが、北側に傾斜する部分に作られていることから、他の竪穴と同様であったものと思われる。床面は、各竪穴ともに、ほぼ平坦である。第5号と第6号は、基盤層を床面としているが、第2号は、第6号の堆積土を床面とする。

〔堆積土〕 堆積土は、非常に近似した暗褐色土を主体としている。第IX層のローム粒や焼土粒、炭化粒を各層に混入する。人為堆積と判断している。連続した層番号で表記したが、第1層と第2層が層が第2号竪穴遺構の堆積土。第3層から第5層が第5号竪穴遺構の堆積土。第6層が第6号竪穴遺構の堆積土である。第2号と第5号の北側部分の土層については、分層できなかった。第2号の第2



- 第2号・5号・6号竪穴遺構
- 第1層 暗褐色土(10YR3/4) 第2号堆積土
黄褐色ローム、炭化物混入
 - 第2層 暗褐色土(10YR3/4) //
硬く締まりあり
 - 第3層 黒褐色土(10YR3/2) 第5号堆積土
 - 第4層 黒褐色土(10YR3/2) //
硬く締まりあり
 - 第5層 暗褐色土(10YR3/4) //
ローム粒混入
 - 第6層 暗褐色土(7.5YR3/4) 第6号堆積土
黄橙粘土ブロック混入

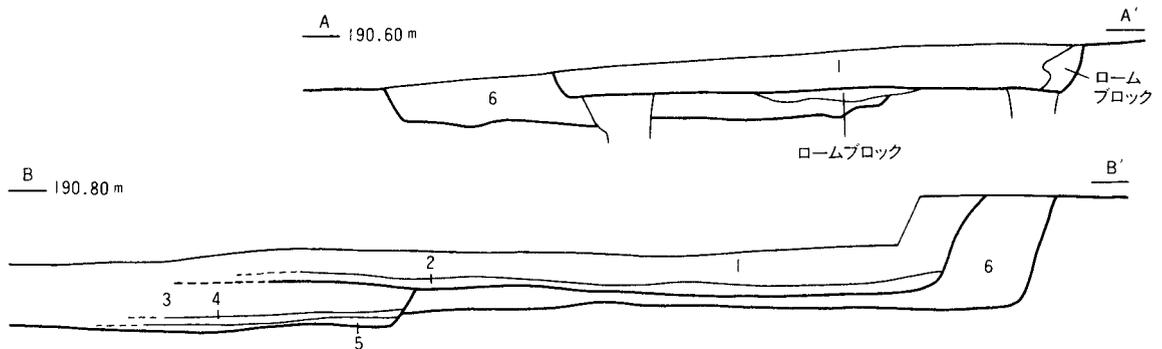
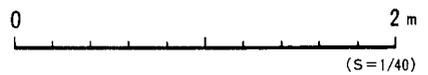
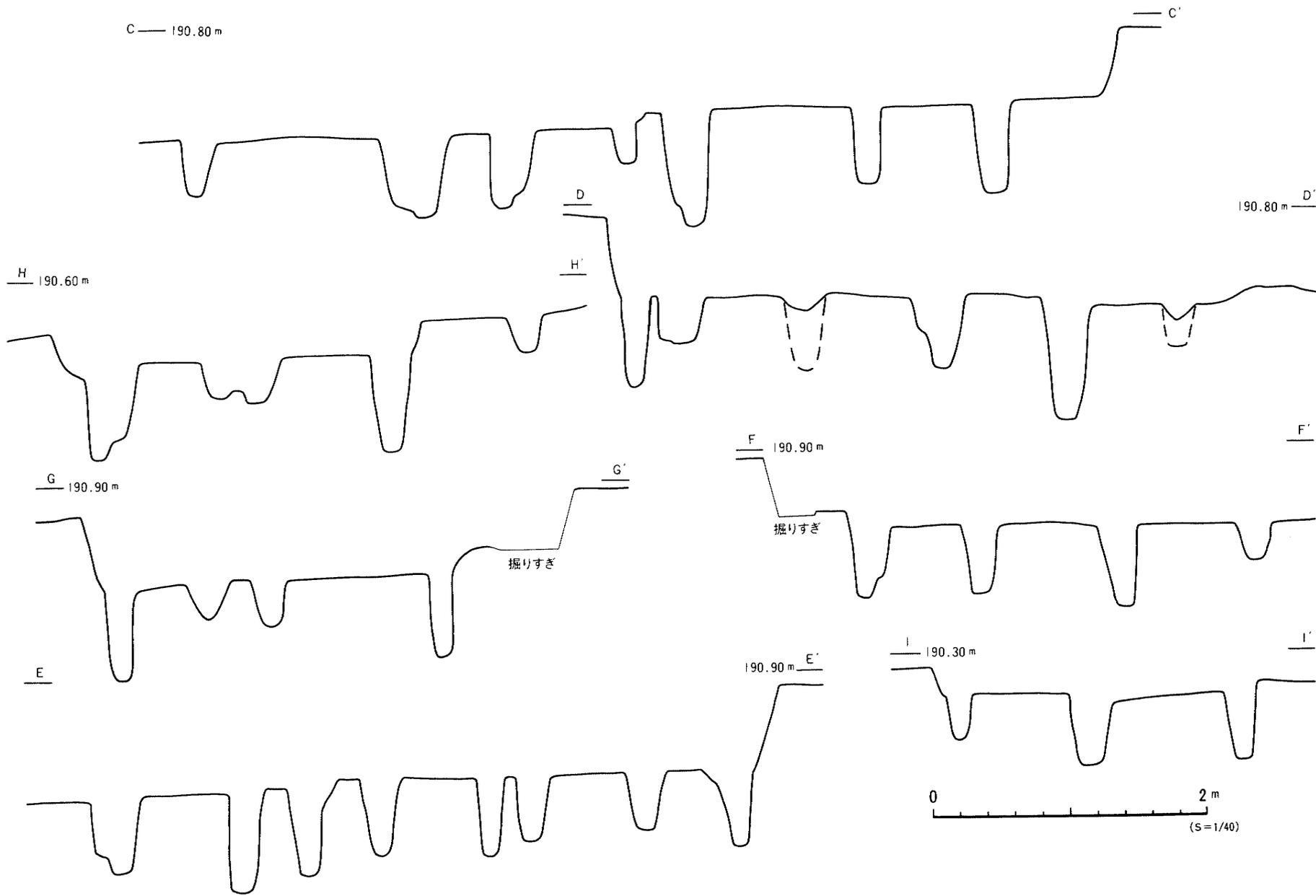


図38 第2・5・6号竪穴遺構

図39 第2・5・6号竪穴遺構柱穴断面



層は、細かなロームブロックが密であり、部分的にしか捉えることができなかったが、貼床であった可能性がある。同様なものに、第5号の第4層がある。

〔柱穴〕 各堅穴内から総数49個の小穴を検出した。小穴の規模は、径が20cm～40cm程の不整形円形及び楕円形で、深さは床面から最低25cm、最大90cmである。小穴は、各堅穴の壁直下に作られており、部分的に重複しているものもあるが、新旧関係は捉えることができなかった。大半が堅穴遺構に付随する柱穴であると判断される。

第2号堅穴遺構

P1からP13までの柱穴で構成される。東壁直下のP1からP4に、P6からP8が対応する。各柱穴の間隔は、最低でP2とP3間の90cm、最高でP7とP8間の1.25mである。他の柱穴間の間隔は、若干のバラツキはあるものの極めて近い数値である。P9からP11とP12の間隔は広く取られており、P5に対応するものがないことから、この部分が出入り口であったものと考えている。

第5号堅穴遺構

P14からP21までの柱穴で構成される。P14からP16とP18からP20、P16からP18とP20・P21 P14の東西と南北の各柱穴が対応する。各柱穴の間隔は、最低でP14とP21間の85cm、最高でP14とP15間の1.60mである。各柱穴間の間隔にバラツキはあるが、極端に歪みは見受けられない。第6号の柱穴と考えられるP35からP37の重複する3個のうち、P35は本堅穴の柱穴である可能性もある。

第6号堅穴遺構

P22からP37までの柱穴で構成される。東壁直下のP23からP27に、西壁直下のP29からP34が対応する。各柱穴の間隔は、約80cm～1.10mの間にある。P34と、P35からP37の重複する3個の間隔は、いずれも1.50mと広く取られており、この部分が出入り口であったものと考えている。

〔出土遺物〕 堆積土中より縄文土器片が出土した。 (小田川)

第3号堅穴遺構 (図40)

〔位置・確認〕 調査区東側E・F24・25グリッドに位置する。表土撤去後、にぶい黄褐色土の不整形なプランで検出した。調査により堅穴遺構と判明した。本遺構は、調査区外に延びている。堆積土が、底面下に入り込むようであったことから、調査区外を部分的に拡張した。

〔規模・形態〕 大部分が調査区外にあるため、全体を捉えることはできない。調査された西辺で約3.60mある。おそらく、隅丸方形ないし長方形の平面形となるものと思われる。

〔堆積土〕 4層に分けられる。全体的に褐色土を主体とする。すべて人為堆積であり、各層に基盤のロームブロックが見られる。特に第2層中には、多量に混入する。

〔壁・底面〕 壁高は、南北壁で約30cmであり、底面から直に立ち上がる。西側は、底面から緩やかに斜面へと抜ける。底面は平坦である。

〔柱穴〕 堅穴内より9個の小穴が検出された。小穴は不整形で、径は20cmから最大80cmである。深さから、それぞれ柱穴であったと思われる。P1からP9までの各々の間隔には、バラツキがある。P1とP2間が最低で60cm、P1とP8間、P6とP8間が各2.10m、2.45mと広い。P8は、他と比べ大型で、大黒柱的感じを受ける。上端が不整形であるのは、抜き取りによるものと考えている。

〔出土遺物〕 堆積土中より縄文土器片出土した。 (中村)

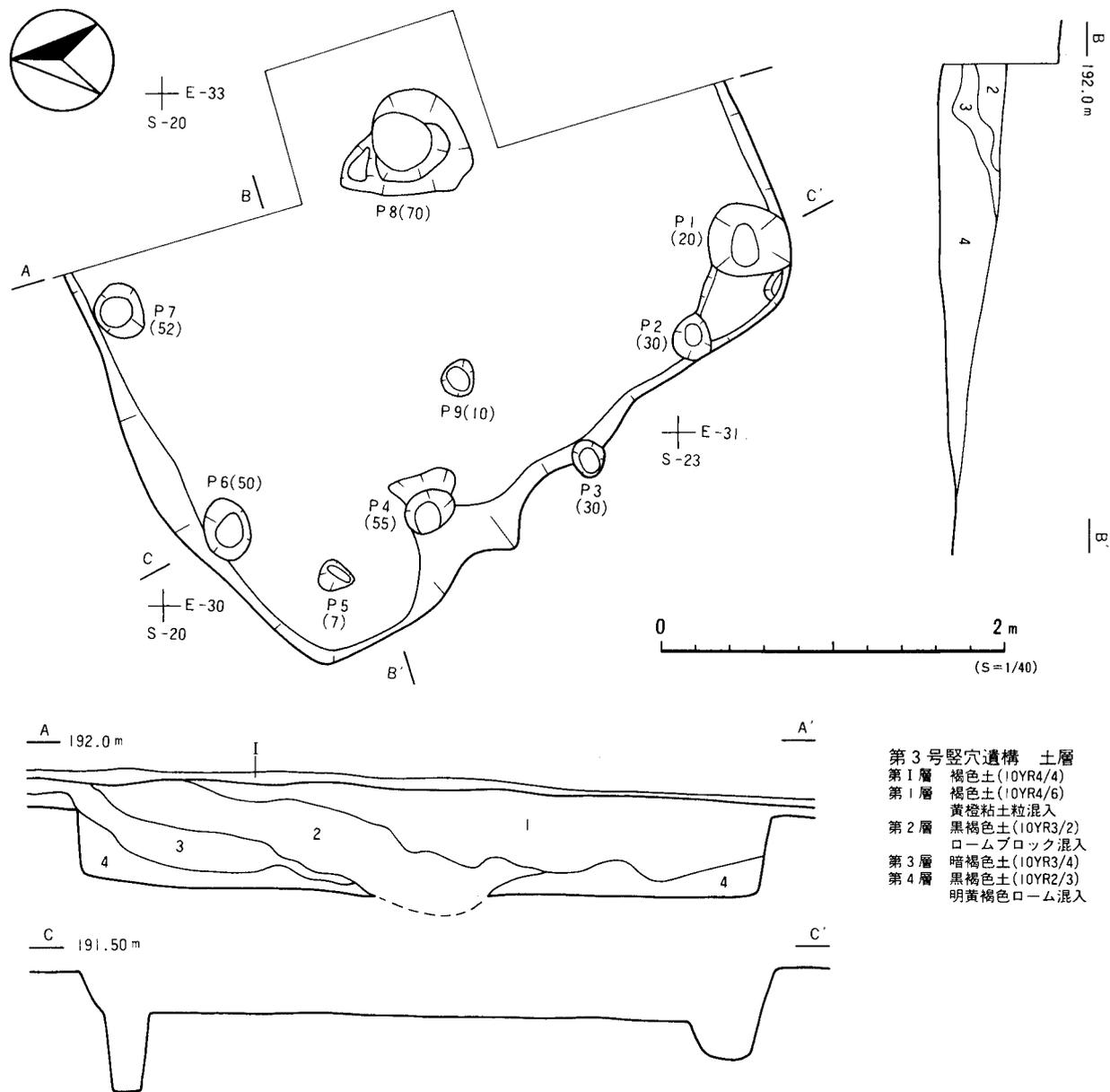


図40 第3号竖穴遺構

第7号竖穴遺構 (図41)

[位置・確認] 調査区北側 I・J 34グリッドに位置する。北側に重複して検出された、第2号・5号・6号竖穴遺構がある。表土撤去後、黒褐色土の楕円状のプランで検出した。

[規模・形態] 形状は、西側がやや不整な隅丸長方形で、長軸2.85m、短軸2.30m、底面2.70m、2.20mである。[堆積土] 黒褐色土の単一層で、ローム粒、炭化物が微量に混入する。人為堆積である。

[壁・底面] 周壁の高さは、15cm～25cmである。底面はほぼ平坦である。

[柱穴] 竖穴内に17個の小穴が検出された。小穴の規模は、径が20cm～35cm程の不整形円及び方形状で、深さは床面から最低20cm、最大40cmである。これらの小穴のうち、P1からP8までが支柱穴

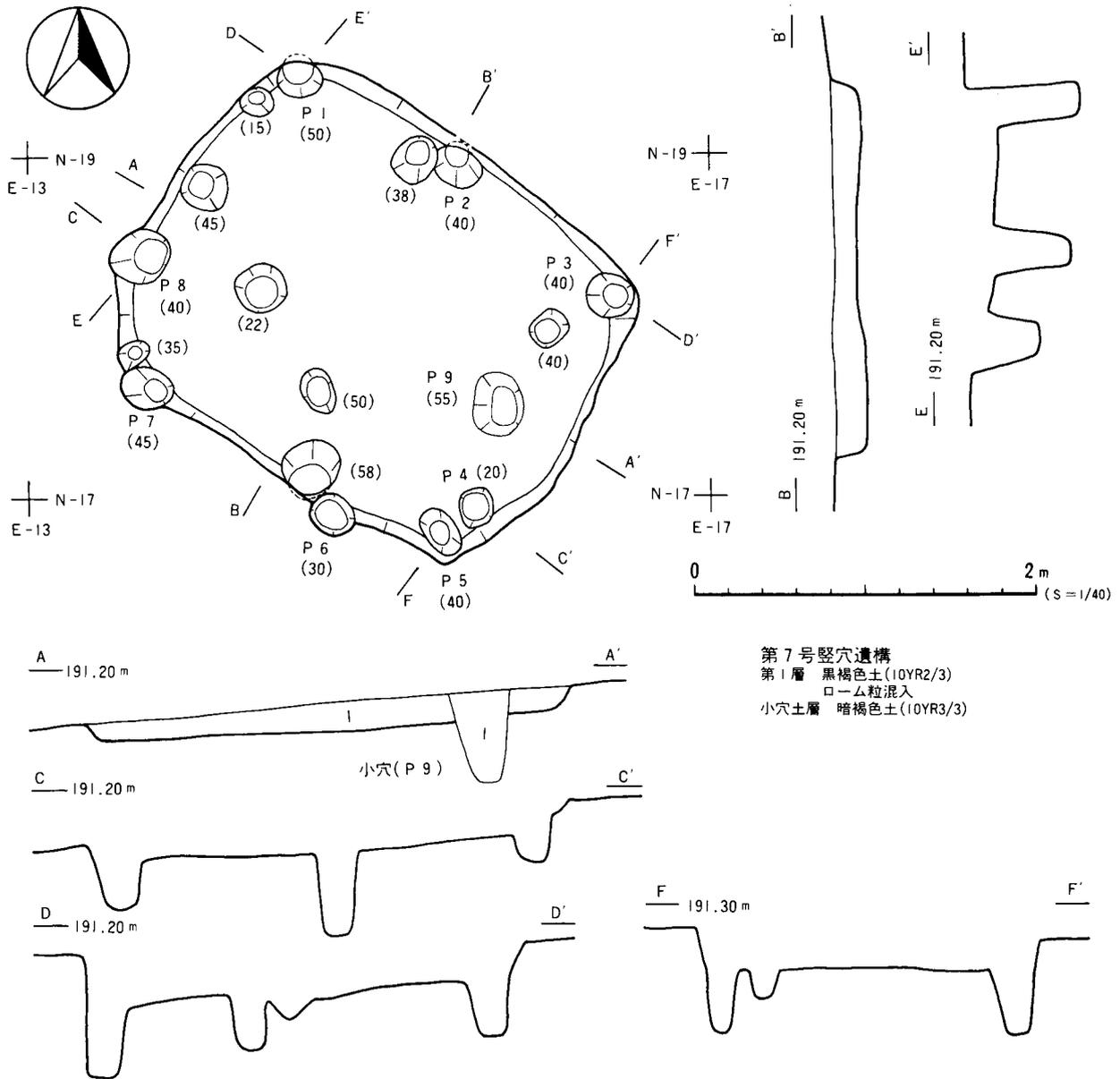


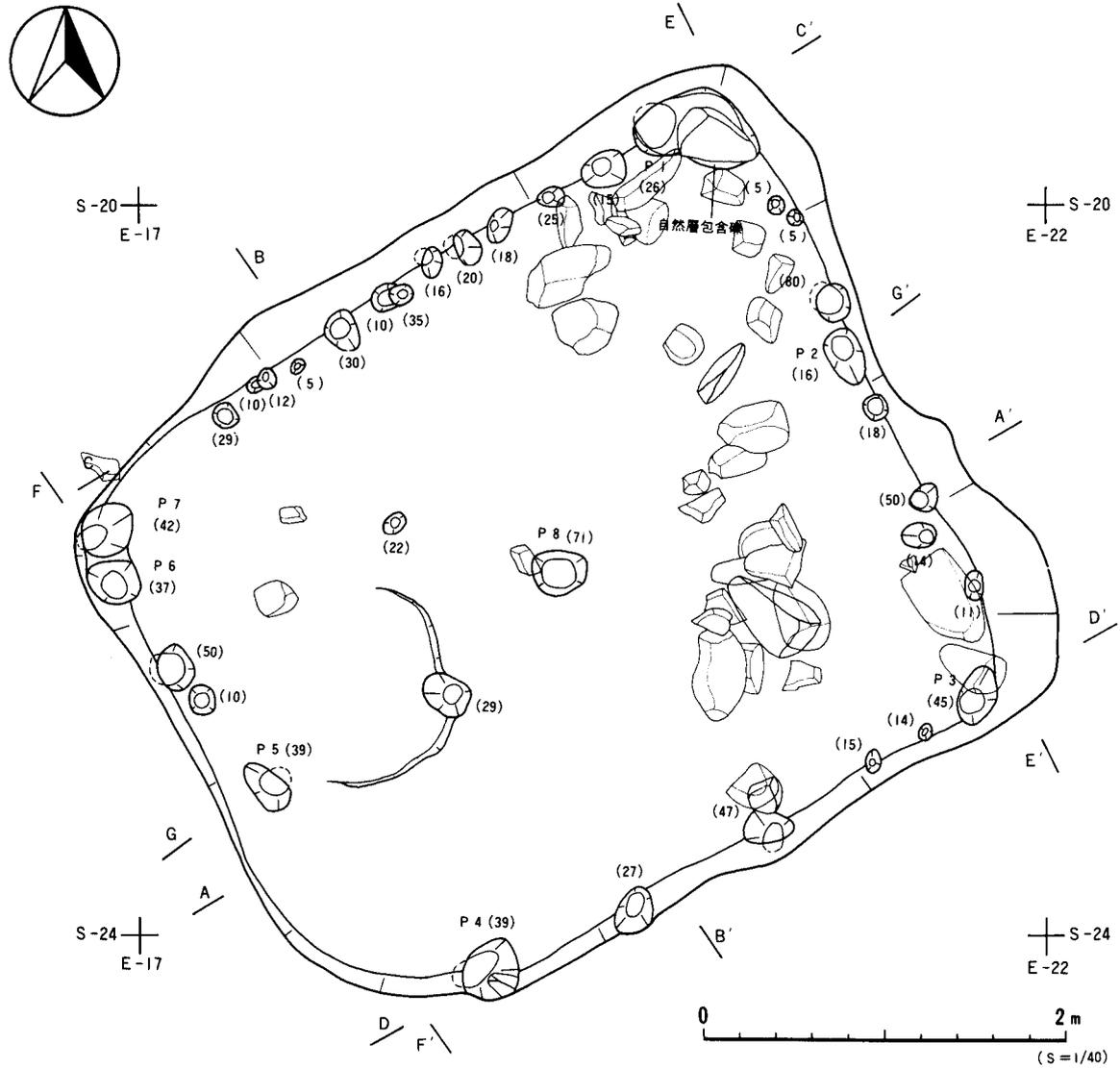
図41 第7号竖穴遺構

ないしは側柱として機能していたものと考えている。各柱間隔は、P 1からP 3間が2.30m、P 4からP 8間が2.35mとほぼ同じであるほか、P 1とP 8間、P 3とP 4間も1.40mと同じである。また、P 4とP 6、P 7とP 8間もほぼ同じ間隔である。平面形で、六角形状に配置されていたものと判断される。P 6とP 7の間隔は1.25mあり、張り出すようにあることから、出入り口を想定している。
 [出土遺物] 堆積土中より縄文土器片が出土した。(中村)

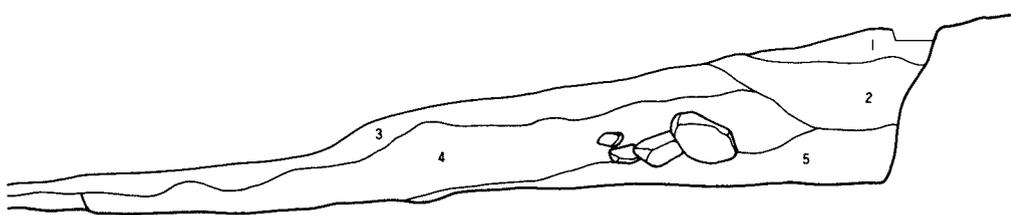
第8号竖穴遺構 (図42)

[位置・確認] 調査区中央よりやや南側のH・123~25グリッドに位置する。北側に比べ傾斜がある。暗褐色土に、ローム粒と炭化物が混じるプランで検出した。

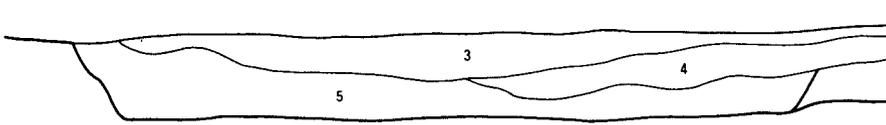
[重複] 第41号土坑と重複し、本遺構が新しい。



A 190.20 m



B 189.80 m



第8号竖穴遺構

第1層 褐色土(10YR4/6)

第2層 暗褐色土(10YR3/3)

炭化物混入

第3層 にぶい黄褐色土(10YR4/3)

浅黄橙色粘土細ブロック斑に混入

第4層 褐色土(10YR4/4)

炭化物、第IX層以下の粘土細ブロック斑に混入

第5層 褐色土(10YR4/6)

明黄褐色ロームブロック混入

図42 第8号竖穴遺構

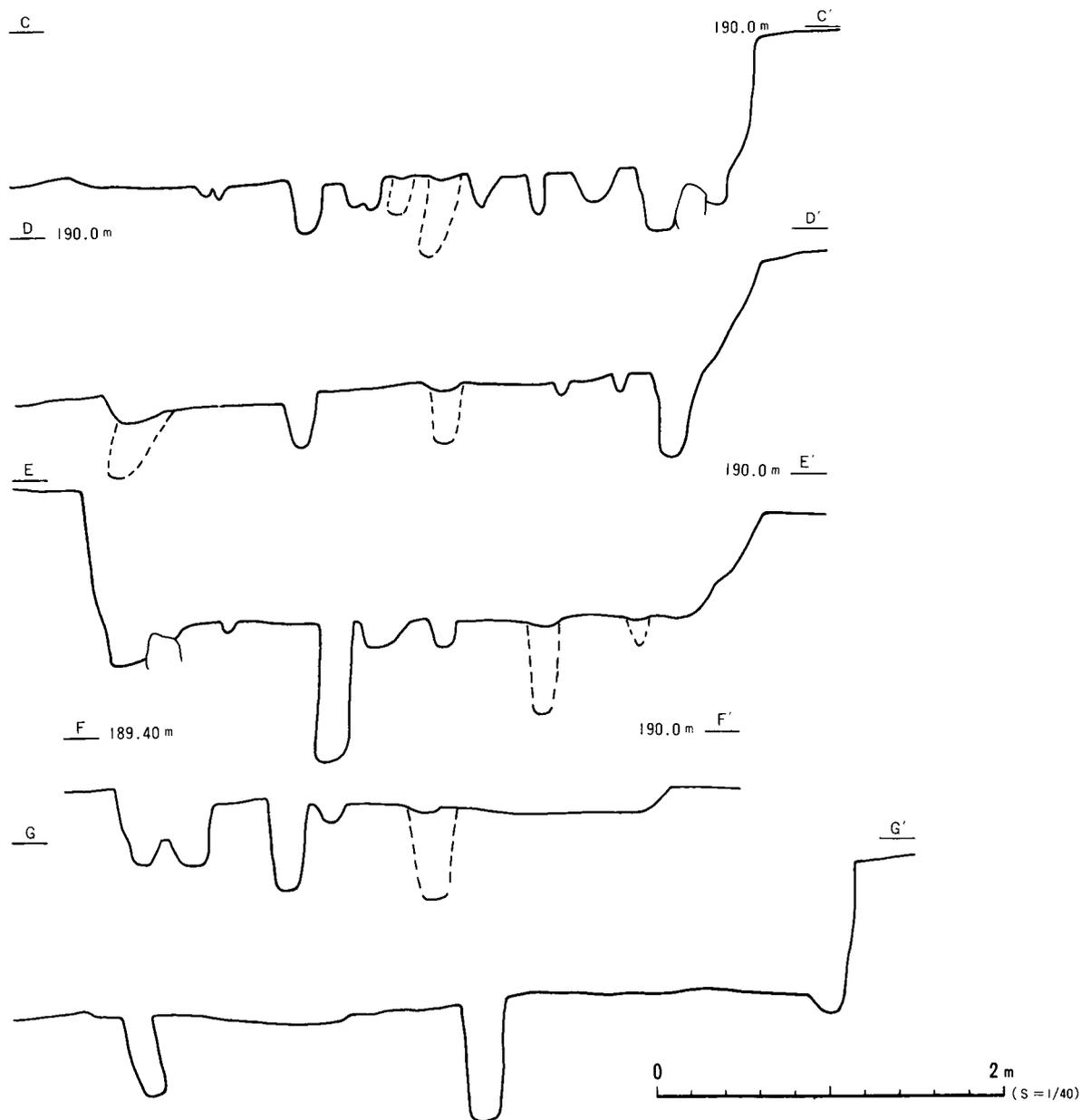


図43 第8号竪穴遺構柱穴断面

〔規模・形態〕 平面形状は隅丸方形である。開口部で長軸4.50m、短軸4m、底面で長軸4.20m、短軸3.60mである。

〔堆積土〕 5層に分けられる。褐色土を主体とした土である。全層にローム粒、炭化物が混入する。本遺構の南西側は、大きく攪乱されたように抉れており、整地土で埋められていた。本遺構は、この整地土の上から掘り込まれ作られている。整地土は、第2号地割りの整地土と連続するものと考えられ、本堆積土の第3層と第4層はその整地土と連続するが、どの層であるかは特定できなかった。また、第3層と第4層中から、大型の礫が投げ込まれた様に多量に出土した。攪乱状の抉れた部分には、多量の礫が露出していたが、関係は不明である。土質と礫、整地土との関係から埋められていると判断される。第1層と第2層は、堆積状態から本遺構埋没後、掘り込まれたものと判断されるが、遺構として確認できなかった。

〔壁・底面〕 壁高は、東西に緩傾斜する面に作られていることから、東壁で高く約85cmある。西壁では10cm程で、部分的に斜面と同じくなる。北壁と南壁は斜面なりに傾斜する。壁面は、底面よりほぼ直に立ち上がり、中位で屈曲する。床面はほぼ平坦である。礫を包含する基盤を掘り込んで作られているため、壁面および底面には大小の礫が露出している。

〔柱穴〕 竪穴内に総数36個の小穴が検出された。小穴の規模は、径が10cm～50cm程の不整円形及び楕円形で、深さは床面から最低10cm、最大80cmである。柱穴は、周壁の壁直下に作られているほか、ほぼ中心に1個作られている。これらの小穴のうち、各隅と中央、東西辺の中位に位置する、P1からP8までが本竪穴の主柱穴であったと考えている。各柱穴間の間隔は、P1からP3間が各1.60mと2m、P4からP7間が各1.55mと1.70mある。P8から各隅の柱穴までの間隔は、P1とP7までが2.50m、P3とP4までが2.30mと南北方向で同じである。P8の軸線上にある、P2とP5の間隔も1.95mと同じである。この他の、壁直下にある小穴もこれらの補助的役割をもったものと考えられる。

〔出土遺物〕 堆積土中より縄文土器片が出土した。

(小田川)

第9号、第10号竪穴遺構 (図44～図46)

〔位置・確認〕 調査区中央からやや南の、G～I26・27グリッドに位置する。北側に比べ傾斜のきつくなる部分にある。表土直下が基盤層面となる範囲で、比較的大きな小穴の並びを明確に確認できた。当初は、2棟の掘立柱建物跡としていた。

〔重複〕 第9号の東側小穴列と第10号の西側小穴列が重複する。新旧の関係は捉えることができなかった。他の小穴どうしで重複するものについても、関係は不明である。

〔規模・形態〕 第9号は、長辺方向で約7m、短辺方向で約3.50mの長方形となる。第10号は、長辺で約6m以上、短辺で約2.70m～3m程あったと推定される。

〔壁・底面〕 写真・に見るように、第9号の東側小穴列の直上に段が作られている。おそらく壁であったと考えている。検出面からは約10cm～20cm程の比高差がある。南北の壁は検出されない。調査時の不手際により、この段(壁)を作図していない。第9号の底面は、東から西へ緩やかに傾斜しているが、ほぼ平坦である。第10号の壁は検出されない。底面の状態は、第9号とほぼ同じである。

〔柱穴〕 図に示した小穴は、総数56個である。小穴の規模は、径が20cm～最大55cmあり、不整円形及び不整楕形である。深さは最低で20cm、最大で95cmある。他の小穴と比べ深く掘られているものが多い。これらのほとんどが、柱穴であったと判断される。

第9号竪穴遺構

P1からP23までの柱穴で構成される。P22とP23を除く、P1からP21までが隅柱と側柱穴であると考えられる。側柱穴の各間隔は、最大のものでP20からP1間までで、各1.50mある。その他の間隔は50cm～1mの間にあり、70cm～80cmが平均である。P22とP23は、規模がほぼ同じで、内部を対称に分ける様に対に作られている。四隅の柱穴と結びついた主柱穴であったものと考えている。また推測であるが、P1とP21の間にP10と対応するものがないことから、P37からP39までの小穴が付随して、出入口となっていたものと思われる。

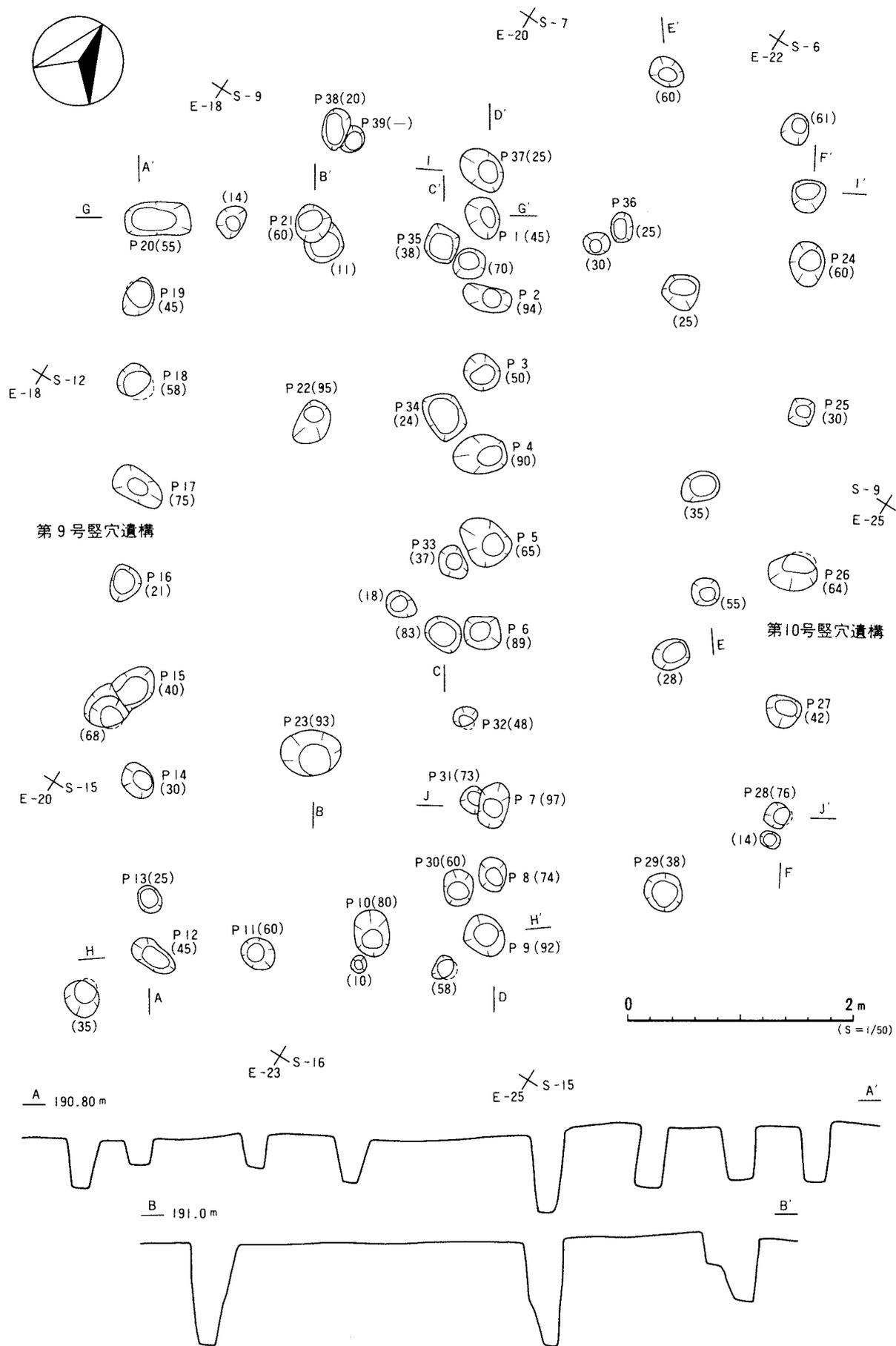


図44 第9・10号竪穴遺構

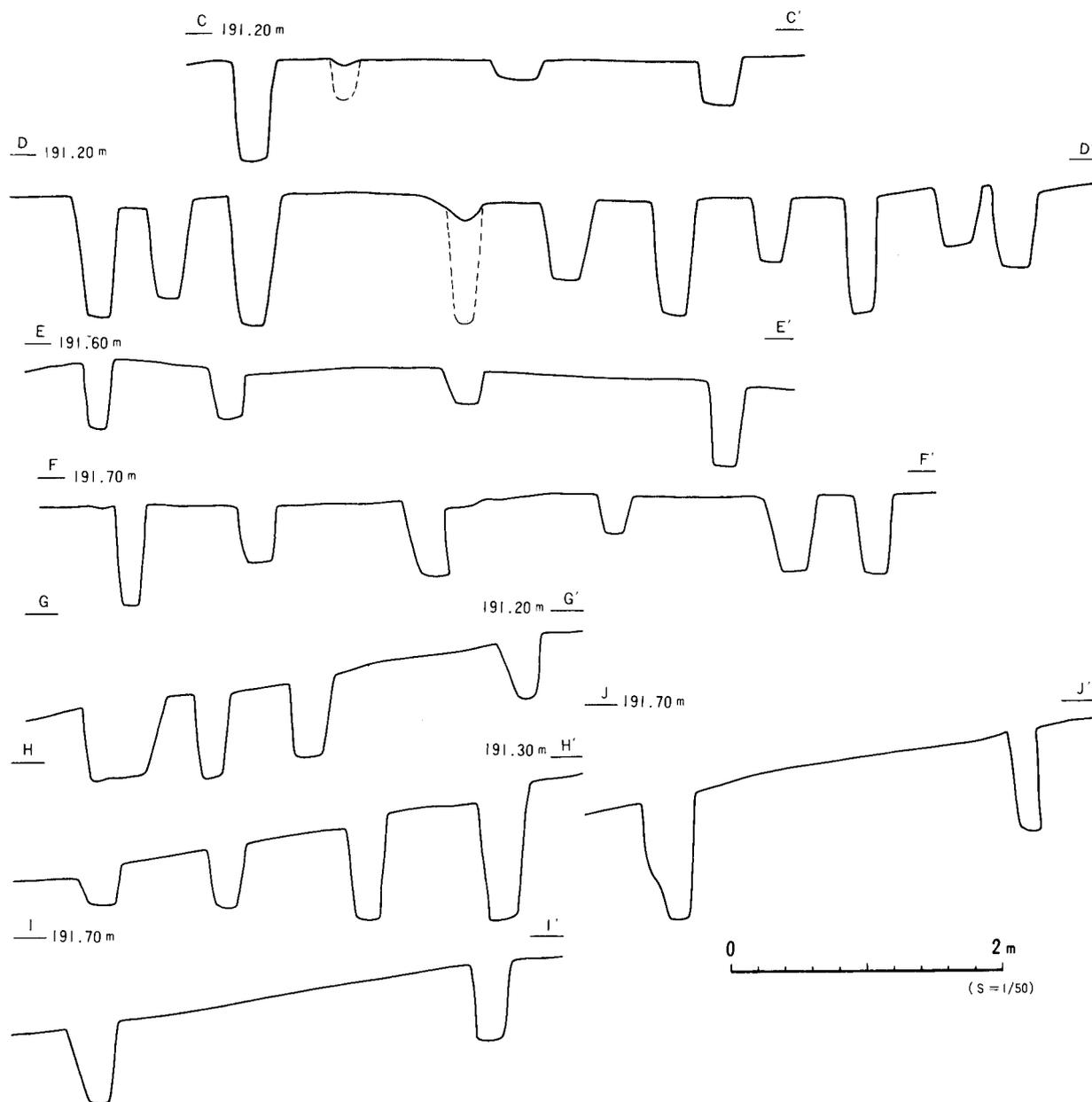


図45 第9・10号竖穴遺構

第10号竖穴遺構

P24からP36Pまでの柱穴で構成される。各柱穴の間隔は、P27とP28、P30からP32までの各間隔が約70cmと狭いが、他は1.30m～1.50mとほぼ一定で、第9号よりも各柱穴間隔は広く取られてある。平面的には、南側がややすぼまる形状である。P28とP29の間が出入口であったものと思われる。

[小結] 両遺構については、竖穴遺構、掘立柱建物、地割りのどの類に含めるか判断に困るところである。全体の小穴から見ても、並びに画一性が強く、複数棟が南北に分かれるように完全に重複しているとは考え難い。小穴の作られ方は、その間隔において竖穴遺構のものに極めて近く、居住を意図したものとは思われない。他の竖穴遺構と比べ規模も大きく、柱穴もしっかりしていることから、他の竖穴遺構とは異なる性格を持っていたものと考えられる。

(小田川)

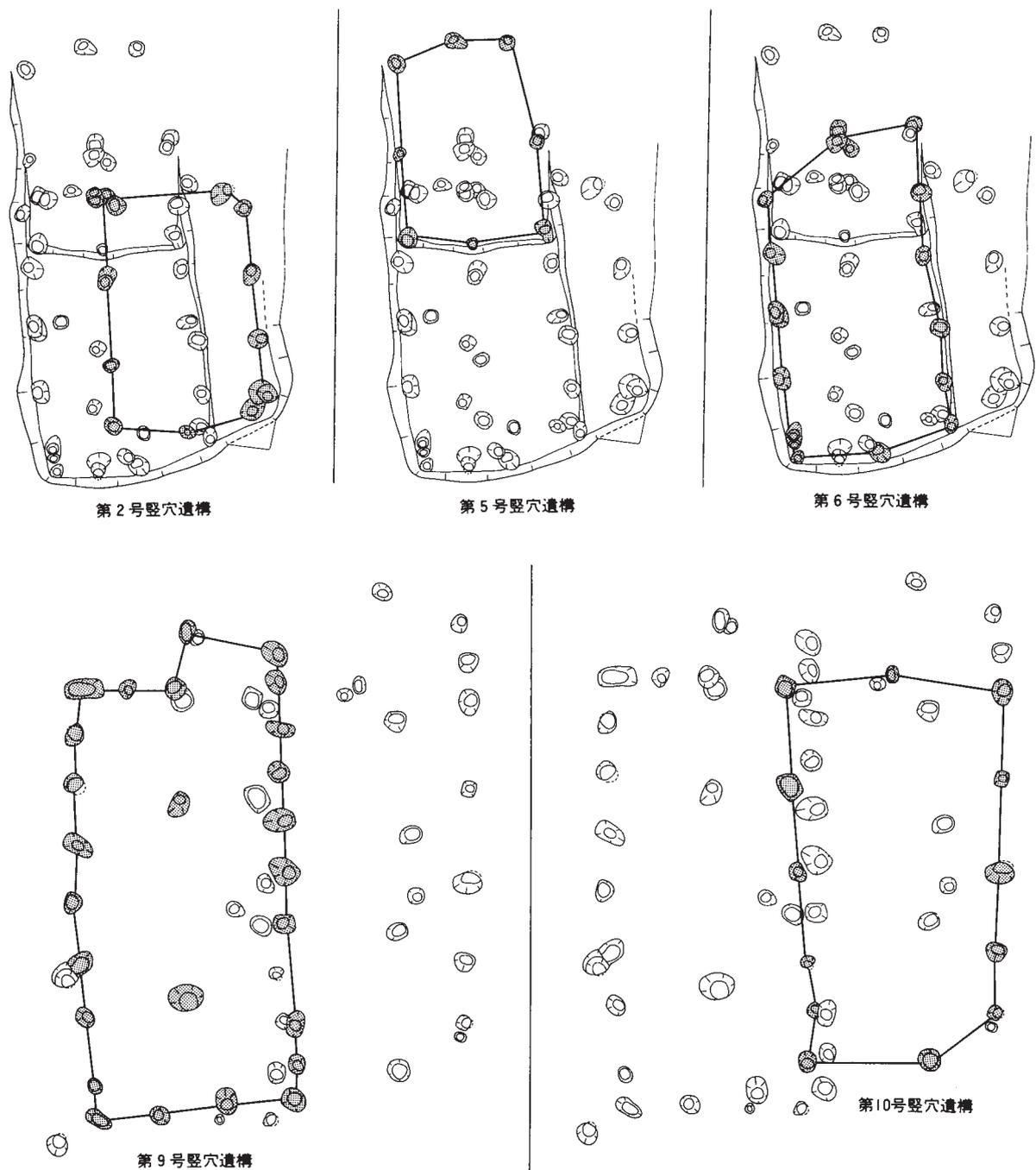


図46 第2・5・6・9・10号 竖穴遺構柱穴配置

第8節 土坑

本調査で検出された土坑は、総数51基である。調査により攪乱と判明した土坑番号47は欠番とした。また、第1号地割りと第2号地割りで検出された土坑については、遺構の性格上第5節で記述した。

(第1号地割り内土坑番号29・30・31・32、第2号地割り内土坑番号54) これらの土坑の中には、出土遺物と形状から縄文時代のものに比定できるものがあることから分けて記述する。記述に際しては、重複のないものや、遺物が出土しないものについては、[重複]・[出土遺物]の項目を削除する。

1) 縄文時代の土坑 (図47)

総数9基を検出した。形態的にはフラスコ状となるものを本時代の土坑とした。検出面は第IX層面である。本来の掘り込みは、第III層ないし第IV層中から行われていたものと思われる。いずれも勾配の緩やかな斜面に位置しており、遺構上部が破壊されているものが大半である。館構築時及び構築物により破壊されているものと考えられる。

第1号土坑 (図47)

[位置] 調査区北側の緩斜面、P36グリッドに位置する。

[重複] 小穴と重複しており、小穴の方が新しい。

[規模・形態] 開口部は長径で1.21m、短径1.04m、底面で1.24m、1.21mのほぼ円形である。

[堆積土] 4層に分けられる。褐色土を主体とし、下層に黒土の混入が多い。第1層から第3層には微量に炭化物が含まれている。

[壁・底面] 周壁は38cm～48cmで、東側が若干高い。底面はほぼ平坦である。

第10号土坑 (図47)

[位置] 調査区北側、P37・38グリッドに位置する。

[重複] 第1号竪穴遺構と重複し、本遺構が古い。

[規模・形態] 竪穴遺構に壊されており全体は不明である。遺存する底面で1.50m×1.20mある。

[堆積土] 2層に分けられる。第1層は黄橙色のロームである。第2層はローム粒が混合する黒色土で、人為堆積と判断される。

[壁・底面] 東壁は、鋭角に内傾する。底面はほぼ平坦である。

第14号土坑 (図47)

[位置] 調査区東側の緩斜面、H27グリッドに位置する。

[規模・形態] 開口部は長径で1.08m、短径94cm、底面が長径1.24m、短径1.16mの円形である。

[堆積土] 3層に分けられる。褐色土を主体とする。人為堆積土と考えられる。

[壁・底面] 壁高は北壁で37cm、東壁34cm、南壁17cm、西壁で18cmある。斜面傾斜に添い南東側が高い。底面はほぼ平坦である。底面北西側隅に、浅い楕円形の掘り込みをもつ。

第19号土坑 (図47)

[位置] 調査区中央部の緩斜面、K・L27・28グリッドに位置する。

[規模・形態] 開口部は長径で1.56m、短径1.34m、底面が長径1.74m、短径1.56mの円形である。

[堆積土] 9層に分けられる。全体的に褐色土を主体とし、第1層から第8層まで全層にロームブロックが混入する。人為堆積と考えられる。

[壁・底面] 壁高は、49cm～60cmである。全体的に壁際から開口部にかけて内反しているが、北壁は垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦である。底面西側隅に、浅い楕円形の掘り込みをもつ。

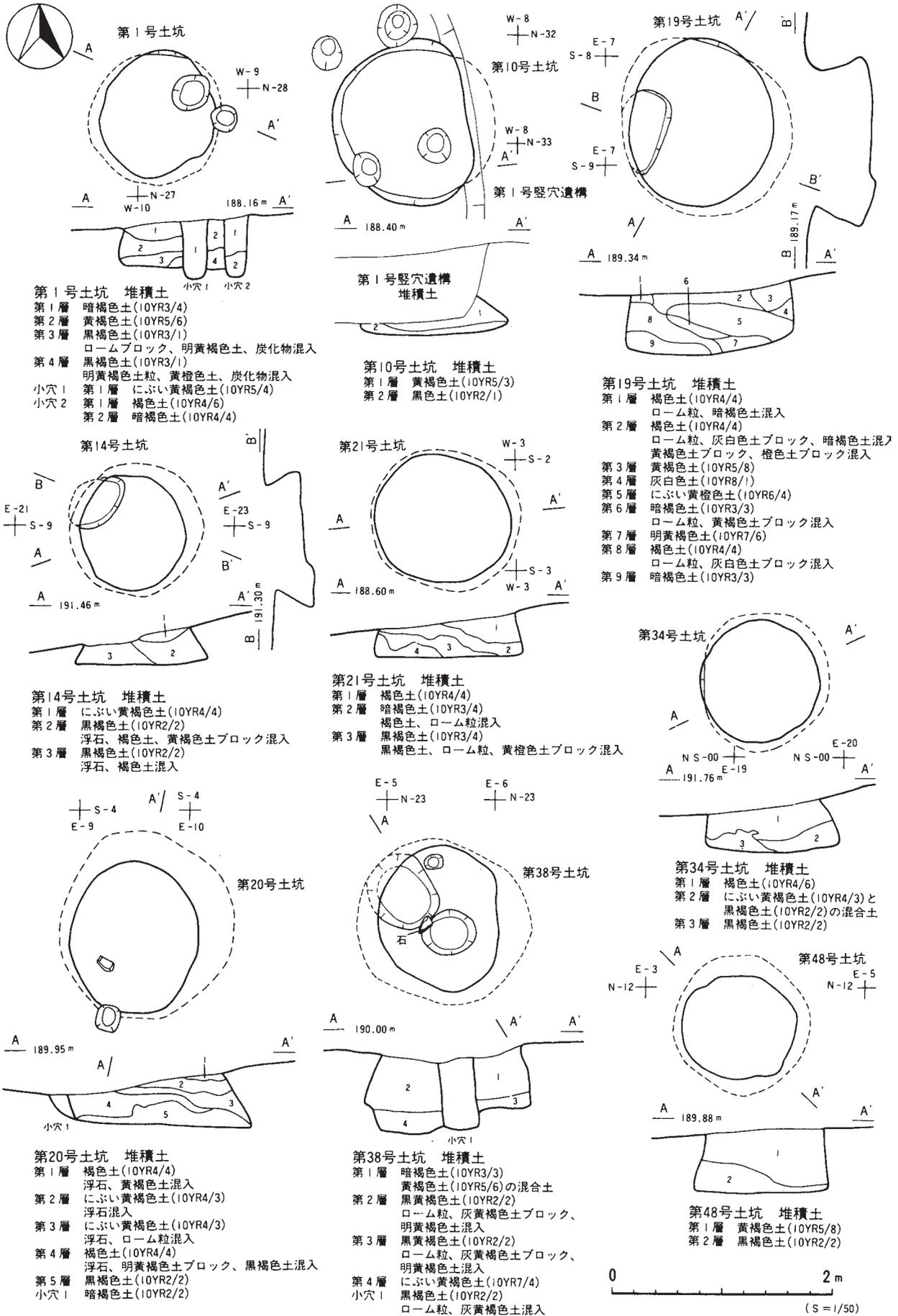


図47 縄文時代の土坑

第20号土坑 (図47)

[位置] 調査区中央部の緩斜面、K28グリッドに位置する。

[重複] 小穴と重複しており、小穴の方が新しい。

[規模・形態] 開口部は長径1.40m、短径1.20m、底面が長径1.72m、短径1.58mの楕円形である。

[堆積土] 5層に分けられる。全体的に褐色土を主体とする。第1層～第4層までは浮石やローム粒が混入する。第5層は黒色土である。人為堆積と判断される。

[壁・底面] 壁高は、北壁50cm、東壁53cm、南壁22cm、西壁33cmである。壁際からの立ち上がりは北東側が鋭角的に内反する。底面はほぼ平坦である。床より礫が出土したが使用痕は認められない。

[出土遺物] 第5層中から、縄文中期末葉から後期に比定される土器片が出土した。

第21号土坑 (図47)

[位置] 調査区中央部緩斜面、N・O29グリッドに位置する。

[規模・形態] 開口部で長径1.28m、短径1.14m、底面が長径1.72m、短径1.58mの円形である。

[堆積土] 4層に分けられる。褐色土を主体とした土で、全層にローム粒が一樣に混入している。傾斜面の逆方向から重なるように堆積していることから、自然堆積と考えられる。

[壁・底面] 壁高は24cm～41cmである。傾斜面高位の東壁側が高い。底面はほぼ平坦である。

[出土遺物] 第3層中から、縄文中期末葉から後期に比定される土器片が出土した。

第34号土坑 (図47)

[位置] 調査区中央部東側緩斜面、I30グリッドに位置する。

[規模・形態] 開口部で長径1.14m、短径1.10m、底面が長径1.30m、短径1.18mの円形である。

[堆積土] 3層に分けられる。第1層はローム層である。第2層は混合土である。人為堆積である。

[壁・底面] 壁高は33cm～47cmで、西壁が若干低い。北壁側から東壁側にかけての立ち上がりが鋭角である。西側はほぼ直に立ち上がる。底面はほぼ平坦である。

[出土遺物] 堆積土中より銭貨が1枚出土した。銭貨名は摩滅により判読できない。

第38号土坑 (図47)

[位置] 調査区北側緩斜面、L35グリッドに位置する。

[重複] 小穴2個と重複しており、本遺構が古い。

[規模・形態] 開口部で長径1.14m、短径1.08m、底面が長径1.62m、1.46mのほぼ円形である。

[堆積土] 3層に分けられる。黒褐色土を主体とする。人為堆積の可能性はある。

[壁・底面] 壁高は44cm～62cmである。北壁側が若干低い。底面はほぼ平坦で、北西隅に浅い楕円形の掘り込みをもつ。

第48号土坑 (図47)

[位置] 調査区中央部緩斜面、L・M32・33グリッドに位置している。

[規模・形態] 開口部で長径1.06m、短径96cm、底面が長径1.28m、短径1.24mのほぼ円形である。

[堆積土] 2層に分けられる。第1層はロームを主体としている。第2層は傾斜の逆方向から厚く堆積している。人為堆積である。

[壁・底面] 壁高は、45cm～63cmである。西壁側が低くなる。底面はほぼ平坦である。

2) 縄文時代以外の土坑 (図48～図51)

総数43基検出された。調査区内のほぼ全域で検出されているが、調査区のほぼ中央部分、グリッドのI～M範囲に集中している。ほとんどのものが不整形で、縄文時代のものより浅い。検出面は、縄文時代の土坑と同じ第1層面である。本来の掘り込み面は第II層であったと思われる。概ね、館機能時期に比定されるものと考えている。また、第1号堀跡北の斜面に炭窯が作られていた。あわせて記述する。

第2号土坑 (図48)

[位置] 調査区北東側の緩斜面、P35グリッドに位置する。

[規模・形態] 開口部の長径84cm、短径76cm、底面長径68cm、短径64cmのほぼ円形である。

[堆積土] 2層に分けられる。第2層はローム層である。人為堆積と考えられる。

[壁・底面] 壁高は8cm～21cmで、東壁側が高い。底面はほぼ平坦である。

第3号土坑 (図48)

[位置] 調査区中央部緩斜面、N33グリッドに位置する。

[重複] 小穴と重複しているが、新旧は不明である。

[規模・形態] 開口部で長径1.54m、短径1.26m、底面長径1.34m、短径1.12mの隅丸方形である。

[堆積土] 暗褐色土にローム粒が斑状に混入する単層である。人為堆積と思われる。

[壁・底面] 壁高は12cm～17cmである。底面には小規模な起伏が認められる。

第4号土坑 (図48)

[位置] 調査区中央部緩斜面、L30グリッドに位置する。

[重複] 第6号土坑と重複している。本遺構の方が新しい。

[規模・形態] 開口部で長径1.08m、短径92cm、底面が長径74cm、短径68cmのほぼ円形である。

[堆積土] 3層に分けられる。第2層中には炭化物、浮石が含まれる。第3層はロームを主体の土で、上面から礫が6個出土した。礫の直下には、小規模な炭化物範囲が検出された。人為堆積である。

[壁・底面] 壁高は17cm～45cmで、東壁側が高い。北壁に酸化面と炭化範囲が認められる。

[小結] 礫と炭化物範囲及び壁の酸化から、第3層上面で二次使用されていると判断される。

第5号土坑 (図48)

[位置] 調査区中央部緩斜面、K31・32グリッドに位置する。

[規模・形態] 開口部の長径1.36m、短径1.18m、底面長径1.12m、短径84cmの不整楕円形である。

[堆積土] 2層に分けられる。第1、2層とも黄褐色土を主体とし、ロームブロック、炭化物を含

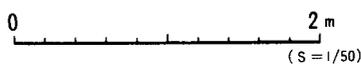
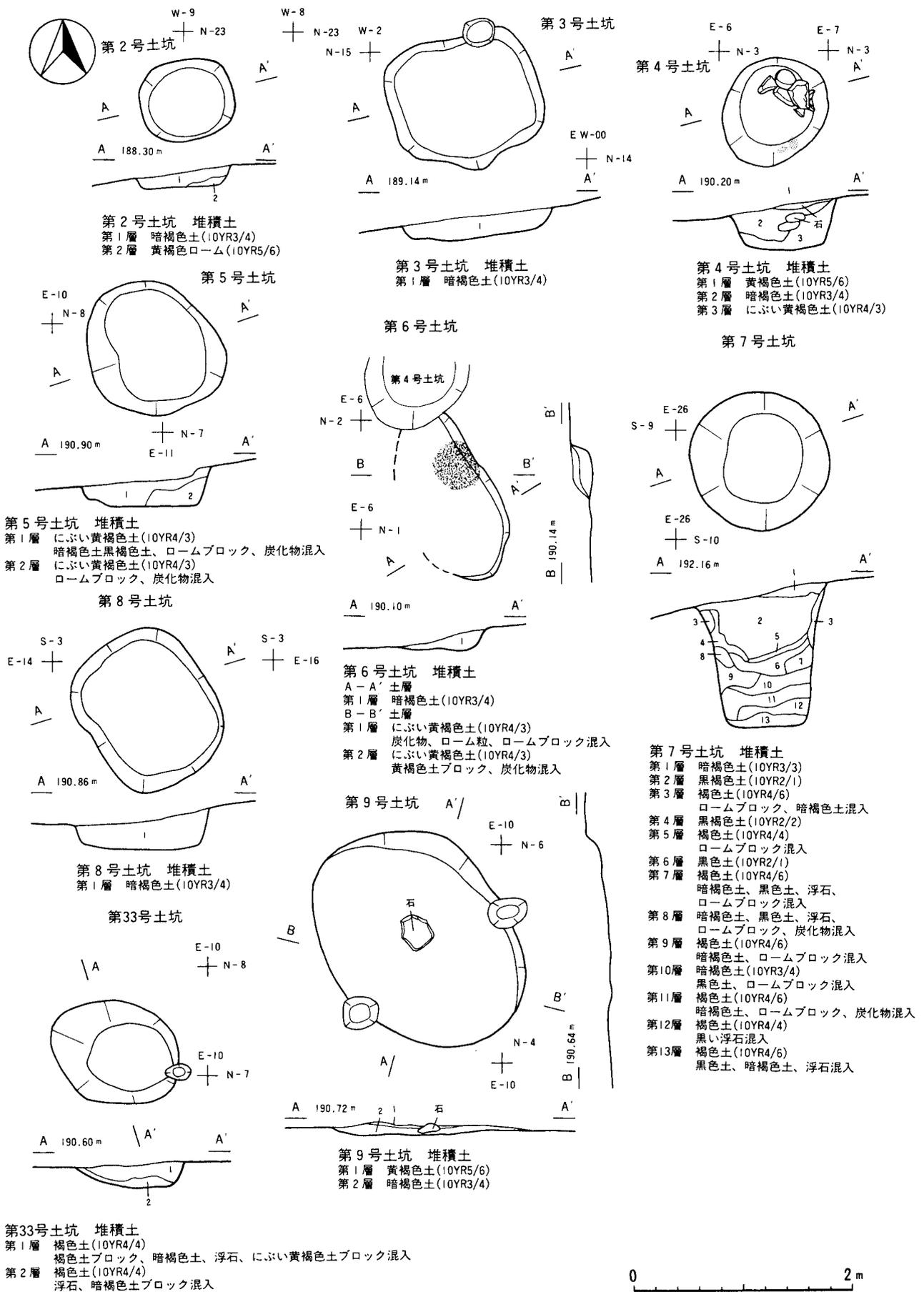


図48 縄文時代以外の土坑(1)

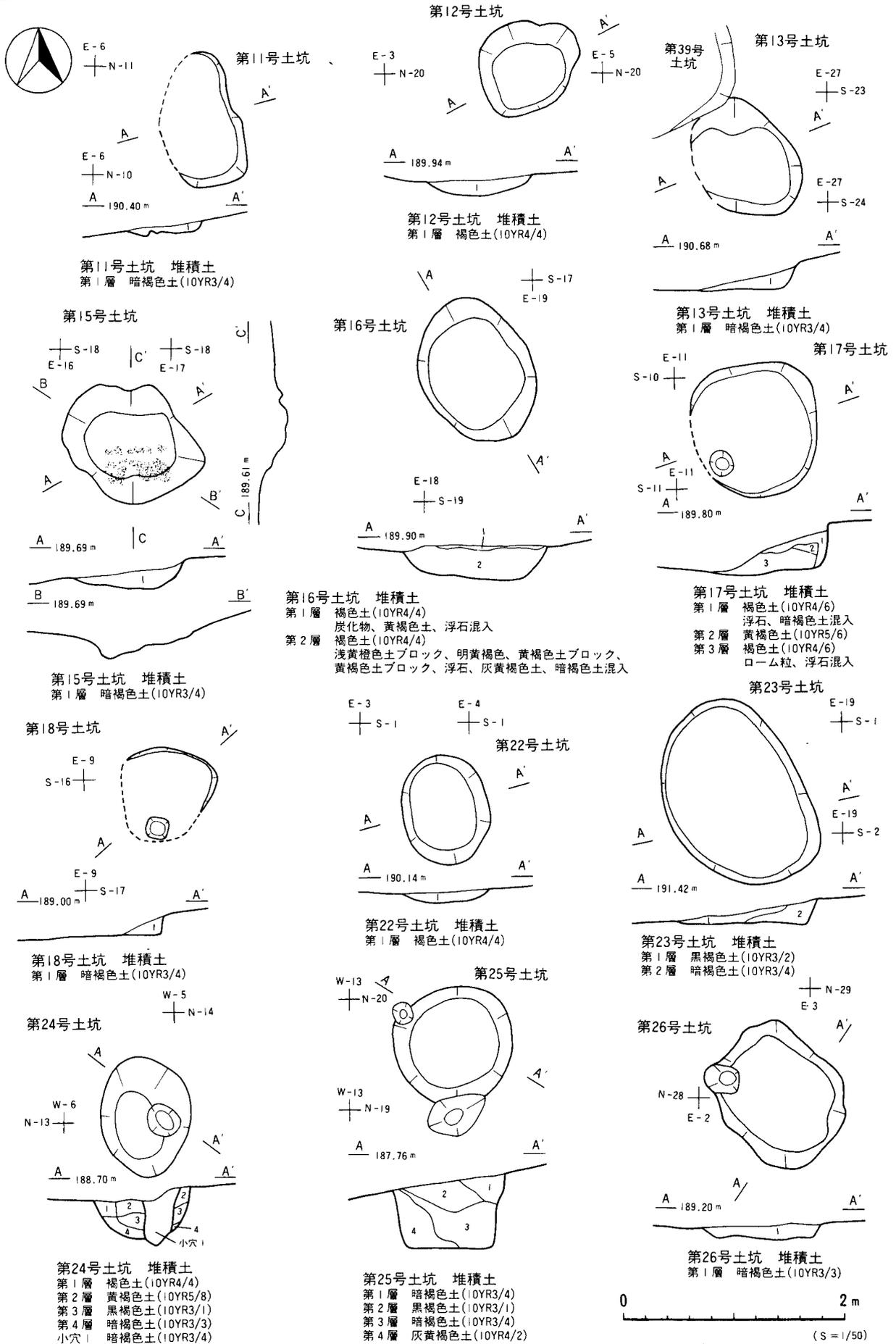


図49 縄文時代以外の土坑(2)

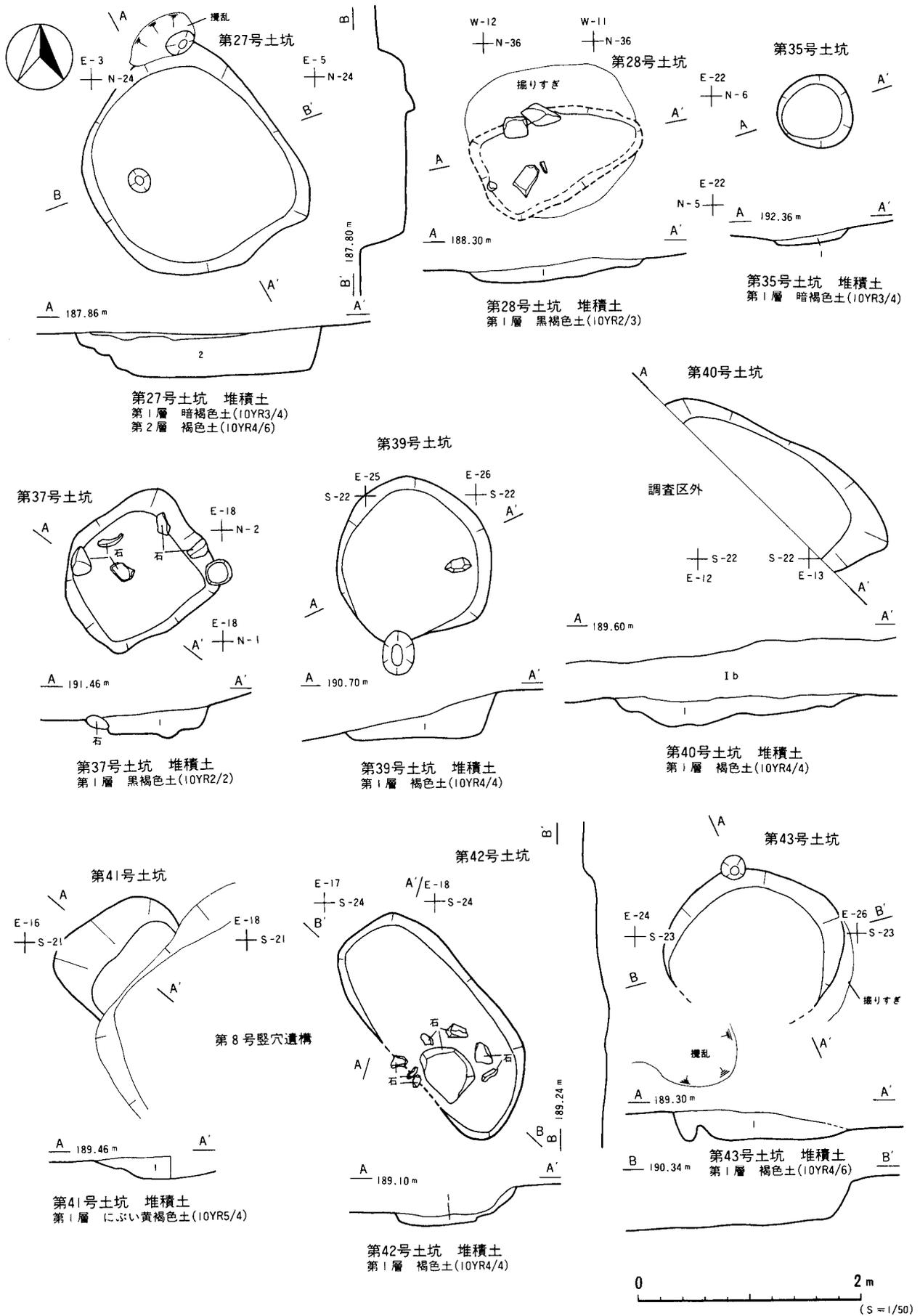


図50 縄文時代以外の土坑(3)

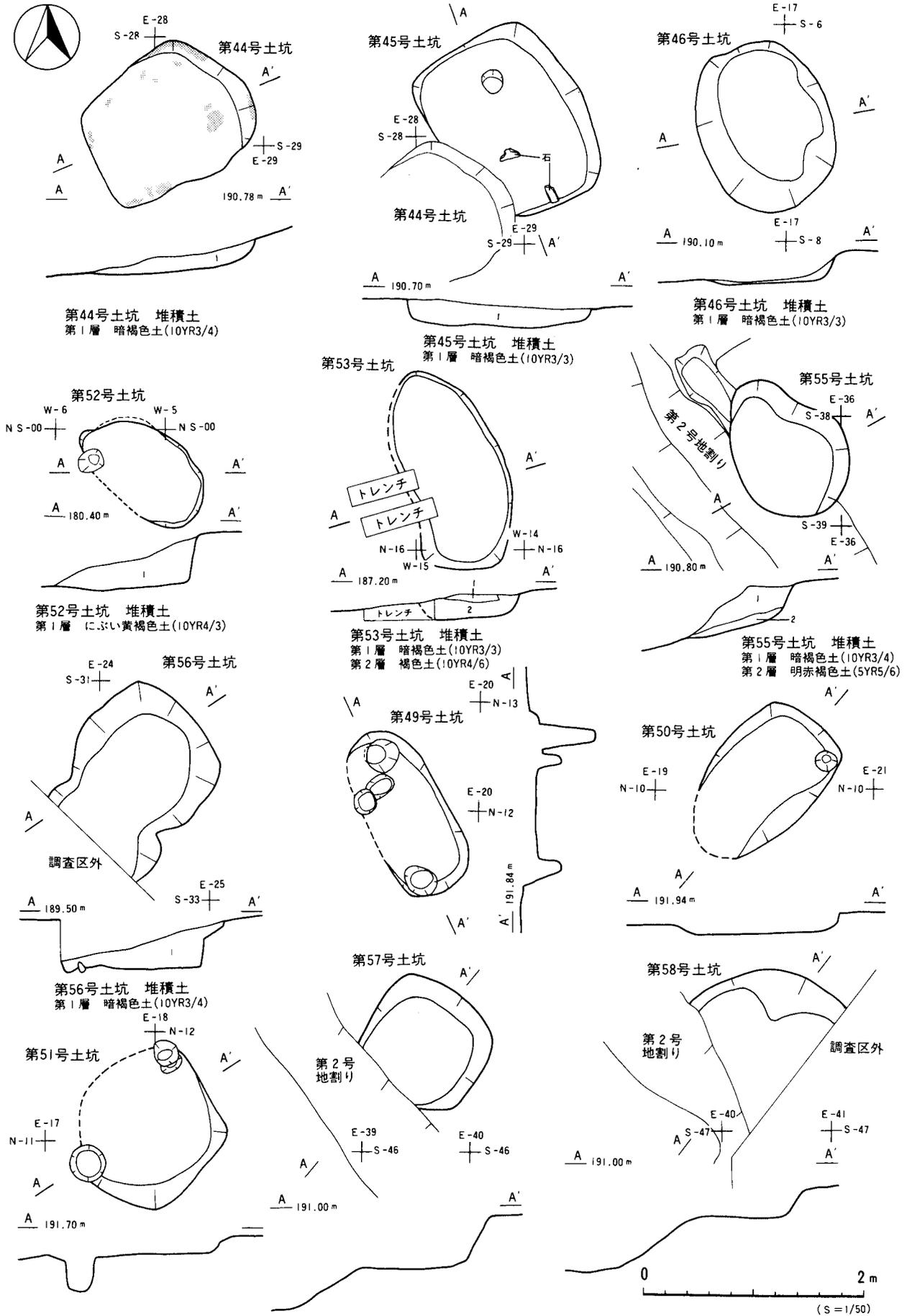


図51 縄文時代以外の土坑(4)

む、人為堆積と考えられる。

[壁・底面] 壁高は15cm～40cmである。底面はほぼ平坦である。

第6号土坑 (図48)

[位置] 調査区中央部緩斜面、L30グリッドに位置している。

[重複] 第4号土坑と重複しており、本遺構の方が古い。

[規模・形態] 開口部で長径1.64m、短径88cm、底面が長径1.60m、短径80cmの楕円形である。

[堆積土] 2層に分けられる。両層に、炭化物とローム粒を含む。人為堆積と考えられる。

[壁・底面] 壁高は東壁16cm、南壁で6cmである。傾斜面低位の西壁は、斜面に吸収されているものと思われる。底面はほぼ平坦である。

第7号土坑 (図48)

[位置] 調査区中央部東側緩斜面、G27グリッドに位置している。

[規模・形態] 開口部で径が1.30mのほぼ円形。底面は、径85cmの隅丸方形状である。

[堆積土] 14層に分けられる。第2層は黒色土で、下位の層は褐色土を主体とし、第IX層以下のロームブロックを含む。第2層は自然堆積土で、第5層以下は人為堆積土と考えられる。埋没に時間差があり、縄文時代の遺構の可能性もある。

[壁・底面] 壁高は、西壁で1.10m、東壁で1.35mある。壁の立ち上がりはほぼ垂直で開口部に向かってやや開く。底面は平坦である。

第8号土坑 (図48)

[位置] 調査区中央部緩斜面、J28・29グリッドに位置する。

[規模・形態] 開口部で長径1.50m、短径1.30m、底面が長径1.30m、短径1.10mの隅丸方形である。

[堆積土] 暗褐色土の単層である。

[壁・底面] 壁高は20cm～40cmである。傾斜面高位側の東壁が高い。底面は平坦である。

第9号土坑 (図48)

[位置] 調査区中央部緩斜面、K31グリッドに位置する。

[重複] 小穴2個と重複しており、本遺構の方が古い。

[規模・形態] 開口部で長径2.24m、短径1.70m、底面が長径2.24m、短径1.54mの楕円形である。

[堆積土] 2層に分けられる。第1層はローム土である。第2層は黒褐色土が混入する。人為堆積土と考えられる。

[壁・底面] 壁高は北壁8cm、東壁20cmである。南壁と西壁は認識できるほどしか残っていない。底面はほぼ平坦である。

[出土遺物] 底面中央部から偏平な礫が出土した。第1層から縄文中期から後期に比定される土器片が出土した。縄文時代の遺構の可能性もある。

第11号土坑 (図49)

[位置] 調査区中央部緩斜面、L32グリッドに位置する。

[規模・形態] 開口部で長径1.26m、底面が長径1.16m不整楕円形である。

[堆積土] 暗褐色土にロームブロックが混入する単層である。人為堆積と考えられる。

[壁・底面] 壁高は10cm程である。傾斜面高位の東側側部分が残存する。底面は凹凸が激しい。

第12号土坑 (図49)

[位置] 調査区北側緩斜面、M・L34グリッドに位置する。

[規模・形態] 開口部で長径1.02m、短径86cm、底面が長径72cm、短径58cmの不整円形である。

[堆積土] 褐色土の単層である。

[壁・底面] 壁高は、7cm～14cmである。底面はほぼ平坦である。

第13号土坑 (図49)

[位置] 調査区南側緩斜面、G24グリッドに位置する。

[重複] 第39号土坑と重複しているが、本遺構の方が古い。

[規模・形態] 開口部で長径1.18m、短径88cm、底面が長径98cm、短径72cmの不整形である。

[堆積土] 暗褐色土の単層である。

[壁・底面] 壁高は北壁7cm、東壁18cm、西壁23cmである。傾斜面低位側は斜面に吸収される。底面はほぼ平坦である。

第15号土坑 (図49)

[位置] 調査区南側緩斜面、I25グリッドに位置する。

[規模・形態] 開口部で長径1.2mの不整形である。

[堆積土] 暗褐色土で炭化物が混入する単層である。

[壁・底面] 壁高は、9cm～20cmで傾斜面高位側の東壁が高い。壁面底面ともに起伏が激しい。床直上に炭化物が検出された。

第16号土坑 (図49)

[位置] 調査区南側緩斜面、I25グリッドに位置する。

[規模・形態] 開口部で長径1.36m、短径1.02m、底面が長径1.02m、短径88cmの楕円形である。

[堆積土] 2層に分けられる。第1層は褐色土で炭化物が混入する。第2層はロームブロックが斑状に混入する。人為堆積と思われる。

[壁・底面] 壁高は15cm～30cmである。底面は平坦である。

第17号土坑 (図49)

[位置] 調査区中央部緩斜面、J・K27グリッドに位置する。

[重複] 小穴1個と重複し、本遺構の方が古い。

[規模・形態] 開口部で径1.30m、底面が径1.15mのほぼ円形である。

[堆積土] 3層に分けられる。褐色土を主体とし、全層に浮石が混入する。

[壁・底面] 壁高は北壁8cm、東壁43cm、南壁30cmである。底面はやや起伏がある。

第18号土坑 (図49)

[位置] 調査区中央部緩斜面、K25・26グリッドに位置す。

[重複] 小穴と重複しているが、新旧は不明である。

[規模・形態] 北壁僅かに残るだけで、全体形は不明である。

[堆積土] 暗褐色の土が僅かに残る。

[壁・底面] 壁高は最高で、18cm程である。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦である。

第22号土坑 (図49)

[位置] 調査区中央部緩斜面、L・M29グリッドに位置する。

[規模・形態] 開口部の長径1m、短径80cm、底面が長径80cm、短径60cmの楕円形である。

[堆積土] 褐色土にローム粒が混入する単層である。

[壁・底面] 壁高は7cm～20cmで、傾斜面高位の東壁から南壁が高い。底面は平坦で鍋底状である。

[出土遺物] 堆積土中より銭貨が1枚出土した。後黎朝期の延寧通寶である。

第23号土坑 (図49)

[位置] 調査区中央部緩斜面、I29グリッドに位置する。

[規模・形態] 開口部で長径1.75m、短径1.25m、底面が長径1.60m、1.10mの楕円形である。

[堆積土] 2層に分けられる。第1層は黒褐色土である。第2層はロームの細ブロックが混入する

[壁・底面] 壁高は、北壁12cm、東壁21cm、南壁11cm、である。壁は、傾斜面高位側の東壁が高く、西壁側はわずかに残存するのみである。東壁の立ち上がりはほぼ垂直である。底面はほぼ平坦である。

第24号土坑 (図49)

[位置] 調査区中央部緩斜面、O33グリッドに位置する。

[重複] 小穴と重複し、本遺構の方が古い。

[平面形] 開口部で長径1.10m、短径82cm、底面が長径64cm、短径40cmの不整楕円形である。

[堆積土] 4層に分けられる。第2層はローム粒を主体とする。第3、4層は浮石、褐色土ブロックを混入する。人為堆積と思われる。

[壁・底面] 壁高は35cm～47cmである。傾斜面高位側の東壁が若干高い。北東側の壁がやや緩やかに立ち上がる。底面はボール状である。

第25号土坑 (図49)

[位置] 調査区北側緩斜面、P・Q34・35グリッドに位置する。

[重複] 小穴と重複しているが、新旧は不明である。

[規模・形態] 開口部の径が1.15m、底面径が85cmのほぼ円形である。

[堆積土] 4層に分けられる。褐色土が主体で、全層にローム粒が斑状に混入する。人為堆積と考えられる。

[壁・底面] 壁高は50cm～70cmである。底面は平坦である。

第26号土坑 (図49)

[位置] 調査区北側緩斜面、M36・37グリッドに位置する。

[重複] 小穴と重複しているが、新旧は不明である。

[規模・形態] 開口部で長径1.35m、短径1.15m、底面が長径1.12m、短径84cmの不整な方形である。

[堆積土] 暗褐色土にローム粒が混入する単層である。

[壁・底面] 壁高は3cm～10cmである。傾斜面高位の東側が若干高い。底面には起伏がある。

第27号土坑 (図50)

[位置] 調査区北側緩斜面、L・M35・36グリッドに位置する。

[重複] 小穴2個と重複しているが、新旧は不明である。

[規模・形態] 開口部で長径2.15m、短径2m、底面が長径1.90m、短径1.70mの不整円形である。

[堆積土] 2層に分けられる。第1層は整地土の可能性が高い。第2層は暗褐色土でロームブロックが混入する。人為堆積と思われる。

[壁・底面] 壁高は25cm～45cmである。傾斜面高位側の南東側の壁が高い。北側の一部は、木根による攪乱を受けている。底面はほぼ平坦であるが、一部攪乱の影響を受けている。

第28号土坑 (図50)

[位置] 調査区北側緩斜面、P・Q38グリッドに位置する。

[規模・形態] 掘りすぎのため、全体形は不明である。

[堆積土] 黒褐色土にロームブロックが混入する単層である。堆積土中より礫が出土した。第1号土塁北の盛土の可能性もある。人為堆積と判断する。

[壁・底面] 残存する東西壁で、約12cm程である。底面にはやや起伏がある。

第33号土坑 (図48)

[位置] 調査区中央部緩斜面、K31グリッドに位置する。

[重複] 小穴と重複しているが、新旧は不明である。

[規模・形態] 開口部で長径1.24m、短径95cm、底面が長径1.20m、短径1.15mの楕円形である。

[堆積土] 2層に分けられる。両層ともに褐色土を主体とし、ロームブロックを混入する。

[壁・底面] 壁高は12cm～25cmである。傾斜面高位側の東側の壁が高い。底面はほぼ平坦である。

第35号土坑 (図50)

[位置] 調査区東側緩斜面、H31グリッドに位置する。

[規模・形態] 開口部径が70cm、底面径が55cmの円形である。

[堆積土] 1層である。暗褐色土でロームブロック、浮石、黒褐色土が混入する。

[壁・底面] 壁高は4cm～10cmである。傾斜面高位の南東側壁が若干高い。底面はほぼ平坦である。

第37号土坑 (図50)

[位置] 調査区中央部東側緩斜面、I 30グリッドに位置する。

[重複] 小穴と重複しているが、新旧は不明である。

[規模・形態] 開口部で1.55m×1.40m、底面が1.20m×1.16mの隅丸方形である。

[堆積土] 黒褐色土の単層で、褐色土ブロックとローム粒が混入する。

[壁・底面] 壁高は14cm～25cmである。底面には起伏がある。底面から礫が出土した。

[出土遺物] 土器片が1片出土した。時期は特定できない。

第39号土坑 (図50)

[位置] 調査区南側緩斜面、G 24グリッドに位置する。

[重複] 第13号土坑および小穴と重複し、第13号土坑より新しい。小穴とは不明である。

[規模・形態] 開口部で径1.50m、底面が径1.40mのほぼ円形である。

[堆積土] 褐色土に、5cm～10cm大の第IX層の細ブロックと灰黄褐色粘土が混入する単層である。人為堆積と考えられる。

[壁・底面] 壁高は8cm～26cmである。底面は平坦である。

[出土遺物] 平安時代の土師器片が1片出土した。また、底面直上から礫が出土した。

第40号土坑 (図50)

[位置] 調査区南側緩斜面、J・K 24グリッドに位置する。

[規模・形態] 調査区外に延びているため全体形は不明である。楕円形になるものと思われる。

[堆積土] 暗褐色土でローム粒、炭化物が微量混入する単層である。人為堆積と思われる。

[壁・底面] 壁高は北壁6cm、東壁20cm、南壁20cmである。底面は起伏が著しい。

第41号土坑 (図50)

[位置] 調査区南側緩斜面、I 23・24グリッドに位置する。

[重複] 第8号竪穴遺構と重複し、本遺構の方が古い。

[規模・形態] 第8号竪穴に壊されており、全体形は不明であるが、楕円形になるものと思われる。

[堆積土] にぶい黄褐色土にロームブロックが混入する。人為堆積と思われる。

[壁・底面] 北壁が15cmである。底面にはやや起伏がある。

第42号土坑 (図50)

[位置] 調査区南側緩斜面、I 23グリッドに位置する。

[規模・形態] 開口部で長径2.25m、短径1.05m、底面が長径2.10m、短径90cmの長楕円形である。

[堆積土] 褐色土にロームブロック、浮石が混入する単層である。人為堆積と思われる。

[壁・底面] 壁高は東壁で30cm、南壁で6cmである。底面はほぼ平坦である。底面から、大型の偏平な礫と其れを囲む様に7個の礫が出土した。性格は不明である。

第43号土坑 (図50)

[位置] 調査区南側緩斜面、G23・24グリッドに位置する。

[重複] 小穴と重複しているが、新旧は不明である。

[規模・形態] 斜面にあり南側が不明であるが、径が約1.60m程のほぼ円形になるものと思われる。

[堆積土] 褐色土の単層である。

[壁・底面] 壁高は北壁21cm、東壁32cmである。底面は平坦である。

第44号土坑 (図51)

[位置] 調査区南側緩斜面、F・G22グリッドに位置する。

[重複] 第45号土坑と重複しており、本遺構が新しい。

[規模・形態] 開口部長径1.60m、短径1.40m、底面が長径1.50m、短径の1.42mの隅丸方形である。

[堆積土] 暗褐色土にロームブロック、炭化物が混入する単層である。

[壁・底面] 壁高は東壁11cm、底面は平坦である。床直上と周壁から焼土と炭化物が検出された。

第45号土坑 (図51)

[位置] 調査区南側緩斜面、F・G22・23グリッドに位置する。

[重複] 第44号土坑および小穴と重複し、第44号土坑より古い。小穴との関係は不明である。

[規模・形態] 開口部の長径1.90m、底面長径1.75mの隅丸方形になると思われる。

[堆積土] 暗褐色土に5cm～10cmのロームブロックが混入する単層である。

[壁・底面] 壁高は北壁15cm、東壁35cm、南壁15cmである。底面は平坦である。

[出土遺物] 堆積土中より土器片が1点出土した。時期は不明である。

第46号土坑 (図51)

[位置] 調査区東側緩斜面、I28グリッドに位置する。

[規模・形態] 開口部で長径1.60m、短径1.20m、底面が長径1.25m、短径82cmの楕円形である

[堆積土] 褐色土にローム粒、浮石が混入する単層である。

[壁・底面] 壁高は東壁が25cmで、他の壁は5以下である。底面はほぼ平坦である。

第49号土坑 (図51)

[位置] 調査区東側緩斜面、I32・33グリッドに位置する。

[重複] 小穴4個と重複しているが、新旧は不明である。

[規模・形態] 開口部で長径1.60m、底面が長径1.40mの長楕円形である。

[堆積土] 掘り上げてしまったため不明である。

[壁・底面] 壁高は北壁15cm、東壁12cm、南壁17cmである。底面はほぼ平坦である。

第50号土坑 (図51)

[位置] 調査区東側緩斜面、H・I 32グリッドに位置する。

[重複] 小穴と重複しているが、新旧は不明である。

[規模・形態] 開口部長径1.56m、短径98cm、底面が長径1.46m、短径76cmの隅丸長方形と思われる。

[堆積土] 掘り上げてしまったため不明である。

[壁・底面] 壁高は北壁22cm、東壁20cm、西壁16cmである。底面はほぼ平坦である。

第51号土坑 (図51)

[位置] 調査区東側緩斜面、I 32グリッドに位置する。

[重複] 柱穴3個と重複しているが、新旧は不明である。

[規模・形態] 南壁だけしか遺存しておらず、不明である。

[堆積土] 掘り上げてしまったため不明である。

[壁・底面] 壁高は約10cm程である。底面はほぼ平坦である。

第52号土坑 (図51)

[位置] 地割りの段際、O29・30グリッドに位置する。

[重複] 小穴と重複しているが、新旧は不明である。

[規模・形態] 開口部の長径で約70cmある。ほぼ長楕円形になるものと思われる。

[堆積土] にぶい黄褐色土の単層である。

[壁・底面] 壁高は約40cmである。底面はほぼ平坦である。

第53号土坑 (図51)

[位置] 調査区西側緩斜面、Q33・34グリッドに位置する。

[規模・形態] 開口部で長径1.90mの不整な円形である。

[堆積土] 掘り上げてしまったため不明である。

[壁・底面] 壁高は約40cmである。底面はほぼ平坦である。

第55号土坑 (図51)

[位置] 調査区南側第2号地割り段差際、E 20グリッドに位置する。

[重複] 第2号地割りと重複し、本遺構が古い。

[規模・形態] 開口部で長径1.35mの不整な円形ないしは楕円形になるものと思われる。

[堆積土] 2層に分けられる。第1層は暗褐色土で、第2層は明赤褐色の焼土で炭化物を含む。

[壁・底面] 壁高は東壁で26cmある。底面は平坦である。

第56号土坑 (図51)

[位置] 調査区南側緩斜面、G・H21・22グリッドに位置する。

[規模・形態] 調査区外に延びるため全体形は不明である。開口部で最大1.45mある。不整形である。形状から2基重複していた可能性がある。

[堆積土] 暗褐色土で、焼土粒と5cm～6cmのロームブロックが混入する単層である。

[壁・底面] 壁高は北壁43cm、東壁24cm、西壁16cmである。底面は起伏がある。

第57号土坑 (図51)

[位置] 調査区南側第2号地割り段際、C・D18グリッドに位置する。

[重複] 第2号地割りと重複し、本遺構が古い。

[規模・形態] 全体形は不明であるが、不整な円形になるものと思われる。

[堆積土] 掘り上げてしまったため不明である。

[壁・底面] 壁高は北壁31cm、東壁40cm、南壁29cmである。

第58号土坑 (図51)

[位置] 調査区南側第2号地割り段際、C・D18グリッドに位置する。

[重複] 第2号地割りと重複し、本遺構が古い。

[規模・形態] 調査区外に延びているため全体形は不明である。

[堆積土] 掘り上げてしまったため不明である。

[壁・底面] 壁高は北壁で25cmある。底面はほぼ平坦である。

(中村)

3) 炭 窯 (図52)

[位置] 調査区北端部、Q・R39・40グリッドに位置する。第1号堀跡北の表土撤去後、焼土と土が混合する範囲を確認し、この土を撤去後に本遺構のプランを検出した。

[重複] 第1号堀跡北の南側法面を掘り込んで作られている。

[規模・形態] 掘形の規模は長軸で約4.70m×3.70mである。焼成室の規模は、長軸で約2.30m、単軸で最大1.90mある。平面形は、奥壁から焚口に向かいすぼまる、三角形状である。断面形は、箱型で、長軸方向は階段状となる。焚口の幅は40cm程で、長さはおよそ50cmである。

[堆積土] 8層に分けられる。黒褐色土を主体にした土で、ロームブロックと焼土粒を混入する。図53に示したが、第2層から第3層にかけて5cm～40cm程の礫が多量に出土した。第8層は焼土である。均一で混入土がほとんどない。おそらく焼成室天井部を構築していた粘土等で、崩落したものと思われる。多量の礫も、天井を覆うものであったと思われる。第5層から第7層も、天井ないしは煙道を構築していた土と思われる。第10層は、掘形の埋め土と考えている。

[壁・底面] 壁は、第9層とした、にぶい橙色の焼けた粘土がほぼ全周する。厚さは、約5cmでほぼ均一である。底面は平坦である。底面と周壁は強く還元している。酸化焼成厚は、最大10cmである。

[小結] 第1号堀跡廃絶後に作られている。近世頃のものと思われる。操業回数を確認することはできなかったが、堀跡内に廃棄された焼土から数回使われていたものと思われる。自然崩壊している。

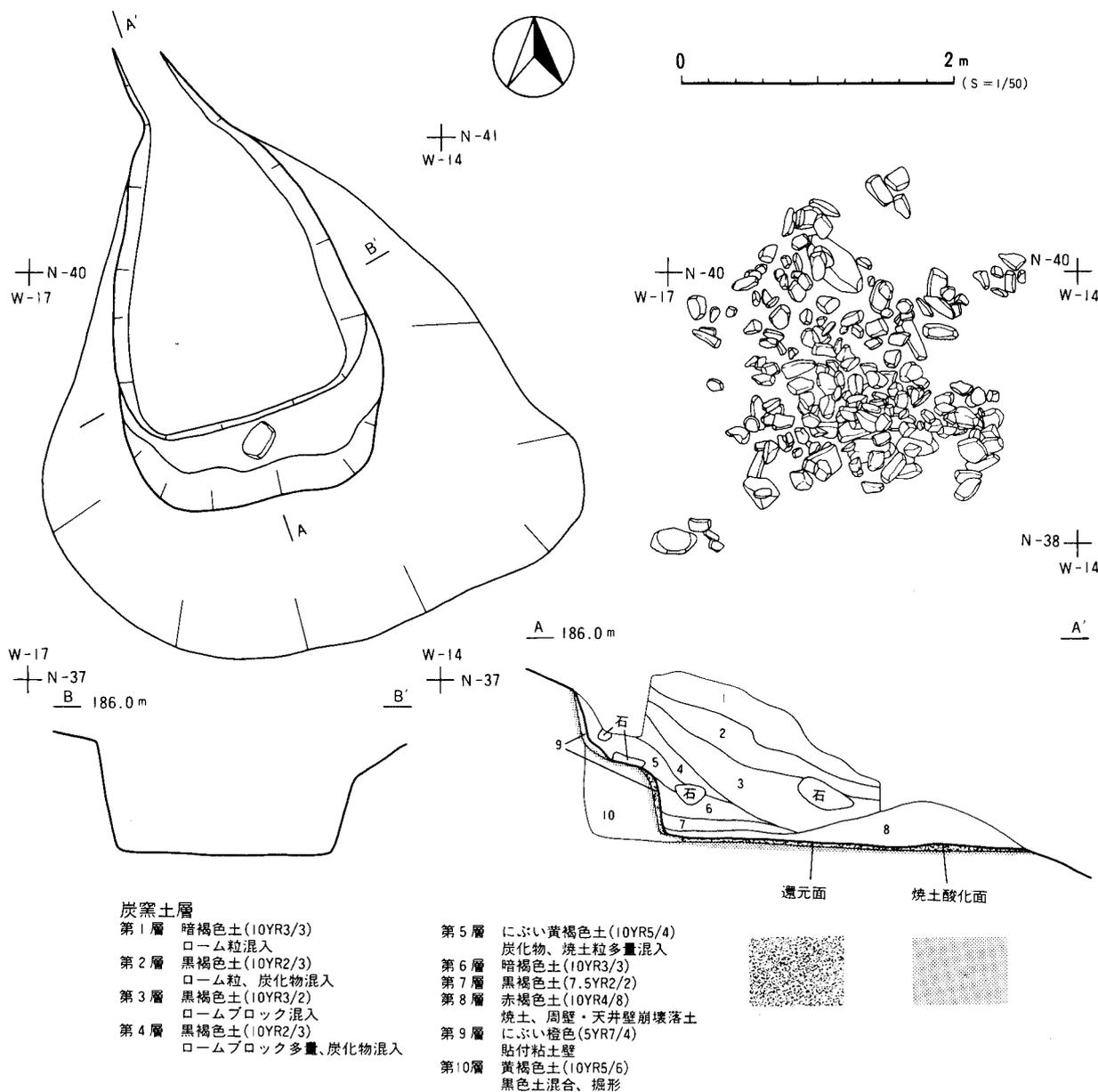


図52 炭窯

第9節 焼土・炭化物 (図53)

第2章第5節で記述した焼土のほか、館内部から7ヶ所の焼土・炭化物の範囲を検出した。これらの遺構は、すべて第IX層のローム面で検出された。規模は、小ささまざままで、形状も不整形である。焼土の厚さは、最大のもので約10cmほどである。ローム面の酸化層は、薄く1cm～2cmである。炭化物範囲の下の酸化層は、極めて薄い。ここに上げた焼土は、小穴が多数検出された場所にあり、復元できなかったが、掘立柱建物跡と関連して機能していたものと考えられる。炭化物は、第8号堅穴遺構に隣接して検出されたが、関連性は見いだせなかった。全体的な小穴の数から見て、検出された以外にも多数存在していた可能性がある。(小田川)

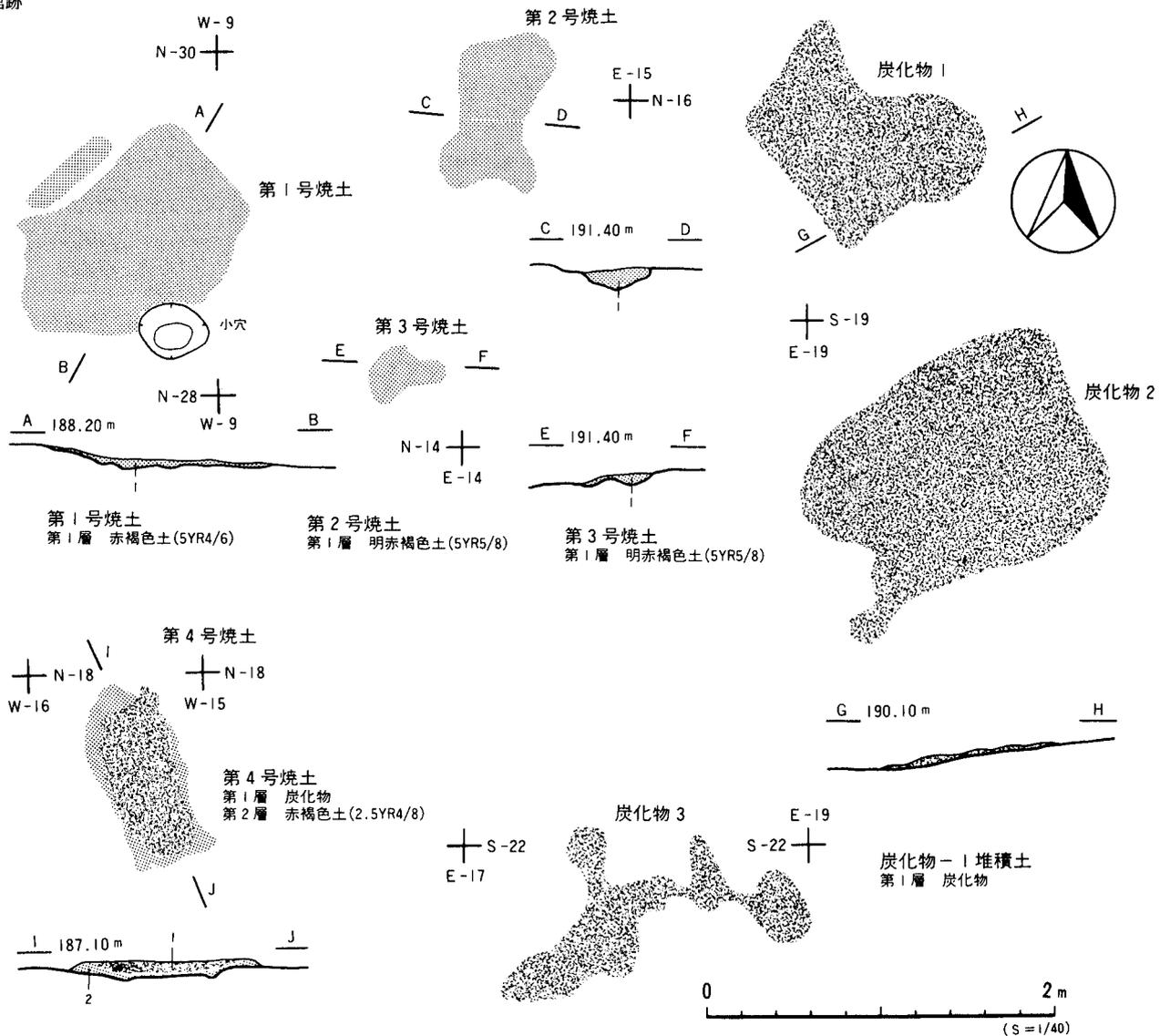


図53 焼土・炭化物

第10節 出土遺物

本調査で出土した遺物には、陶磁器、銭貨、鉄製品、縄文土器、石器・石製品がある。数量的には縄文土器が最も多く、全体の95%以上を占める。館に関連する遺物は少なく、これらが土塁盛土や整地土から散在して出土している。

陶磁器 (図54)

本調査で出土した陶磁器類は、総数7点である。検出された遺構のほとんどが、館に付随して機能していたと考えられ、その数や規模と比べて極めて少ない。内訳は、青磁1点、瀬戸美濃4点、瓦質土器1点、現代陶器1点である。

図54の1は、青磁の稜花皿である。第1号門跡付近のM37グリッドの整地層中から出土した。推定口径約13cm程の小皿と思われる。口縁部が、外側に反り返す器形である。口端は丸く仕上げられている。内面には、2条の刻線が施される。外面には整形痕が見られる。胎土は、暗灰オリーブ色であり、破損面の一部に漆で接合された痕跡が残る。

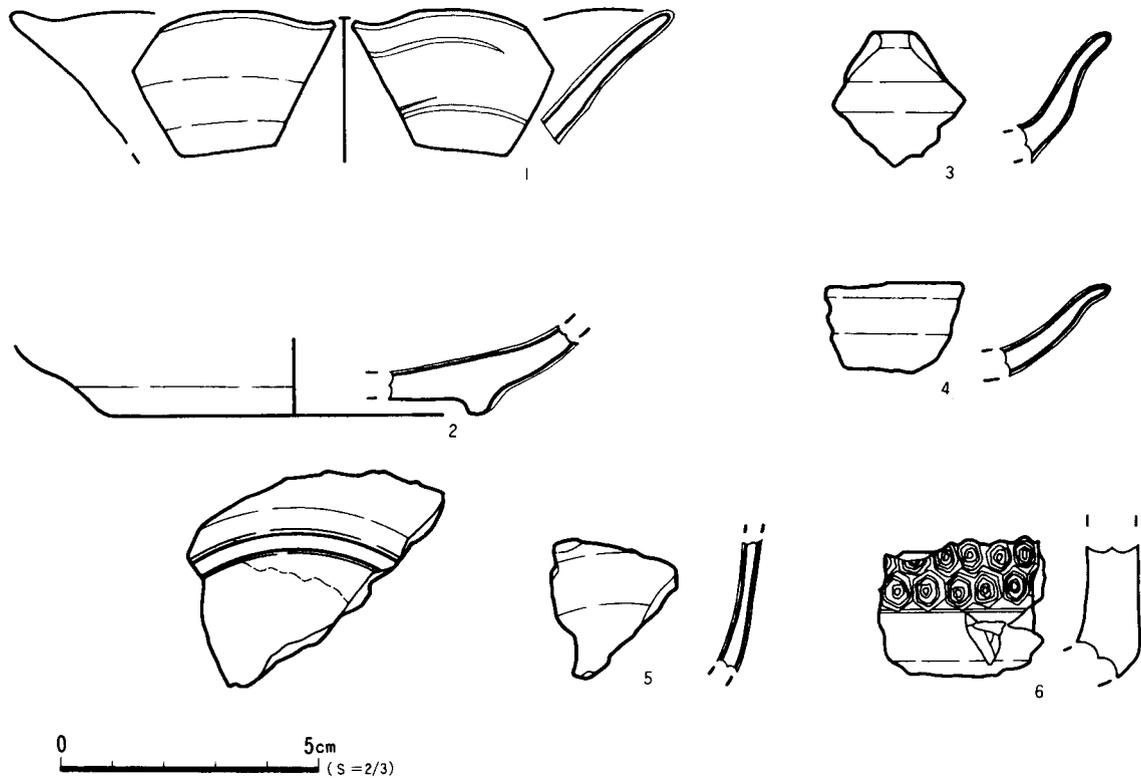


図54 出土陶磁器

同図2～4は、瀬戸美濃の灰釉皿と碗と思われる。2は、皿ないし碗の底部と思われる。Q35グリッドの小穴内から出土した。推定底径は約7.5cmで、底部の厚さは7mmである。内面と高台外側に釉溜まりが顕著である。高台内にも一部釉が付着する。胎土は、暗い乳白色で締まりがない感じを受ける。3は、Q33グリッドから出土した。口縁部破片で、器体にやや厚みをもち、この部分でやや湾曲することから碗の可能性はある。胎土は、灰黄褐色である。4は、S35グリッドから出土した。口縁部破片で、口縁の反り返しが顕著である。小皿と思われる。胎土は灰黄褐色である。5は、鉄釉の施釉されるもので、第4号堅穴遺構の床直上から出土した。器厚は4mmと薄く、部位も特定できない。胎土は暗い乳白色である。天目茶碗の可能性もある。

同図6は、瓦質土器である。底部付近の破片で、小型で円筒状の器形になるものと思われる。外面には、二重六角形の亀甲のような文様が二段に刻印されている。ミガキ、還元が施されている。器種は不明である。

出土陶磁器は、小破片であり明確に年代を決めかねるが、概ね15世紀後葉から16世紀初頭に比定されるものと考えられる。(小田川)

表2 陶磁器観察表

図版	出土位置	層位	最大計測値			重(g)	素地の色調	釉の色調	種類	分類	時期	備考
			口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)							
54-1	M37	—	(13.0)	—	—	11.3	暗灰オリーブ色	濃緑	—	小皿	15~16世紀	青磁、稜花皿
54-2	Q37小穴	堆積土	—	(7.5)	—	17.6	乳白色	薄緑	瀬戸美濃	—	15~16世紀	灰釉皿か碗、底部
54-3	Q33	—	—	—	—	3.9	灰黄褐色	薄緑	瀬戸美濃	碗	15~16世紀	灰釉碗、口縁部
54-4	S35	—	—	—	—	4.8	灰黄褐色	薄緑	瀬戸美濃	小皿	15~16世紀	灰釉皿、口縁部
54-5	SI-8	床直上	—	—	—	2.9	乳白色	茶	—	碗	15~16世紀	天目茶碗?
54-6	SI-2	堆積土	—	—	—	9.8	赤茶色	—	瓦質土器	不明	15~16世紀	—

銭貨 (図55)

本調査で出土した銭貨は11種類、総数22枚である。1号土塁盛土中から出土したものが多い。

判読可能な銭貨の初铸造年は開元通寶(960年・南唐)が最も古く、寛永通寶が最も新しい時期である。背銘をもつものはない。延寧通寶と寛永通寶を除けば、全て中国銭銘である。中でも多いものは、北宋銭で14枚ある。明銭も3枚ある。このうち北宋銭は平均重量が2.79gであり、浪岡城跡VII(浪岡町教育委員会1986)で報告されている平均重量3.50gよりかなり軽量である。この点から、全て模鑄銭である可能性がある。加工されている物としては、裏面が磨消しされているものが8点(2・3・5～7・12・15・18)ある。磨消しにより銭貨銘が太くなっているものは6点(2・4・5・7・9・13)ある。外縁が加工されているものは2点(7・11)ある。内郭を円孔に加工しているものは5点(2・7・12・18・21)ある。内郭部分を十字に加工したものは1点(8)ある。また、鑄造の際の鑄型痕が残るものは2点(4・6)ある。

出土した銭貨中、模鑄銭の比率が高いこと、またその中でも北宋銭の比率が高いことは、中世の社会情勢を鑑みれば特別なことではなく、出土状況からも祭祀的な要素が考えられないことから私銭として利用されたものと思われる。(中村)

鉄製品 (図56)

総数10点出土した。全体の遺構数からみて量的にはかなり少ない。出土位置も散漫で、遺構外のもものは表土直下の基盤層面で出土しており、動いている可能性がある。器種的には、ほとんどが生活用具である。

同図1は芋引金である。第2号地割り底面より出土した。刃部長8.7cm、幅1.8cm、厚さ0.5cmである。柄に装着する背の両端は、刃部より直線的に立ち上がり、逆方向にやや歪んでいる。

同図2は小柄である。長11.7cm、幅0.4cm～0.6cmで小刀の柄である。切っ先部分は欠損している。関の部分が少し残存している。柄の部分は銅製と思われる。表面には、濃緑色の斑が全面に見られる。模様であり、何らかの物が塗布されたか、焼き付けられているものと思われるが、判然としない。

同図3は鎌である。刃部長14.6cm、刃幅5.3cm、厚さ0.3cmである。背の部分が直線的であり、先端部で屈曲する。柄を固定した輪状の止め金がついている。

同図4は和鋏である。長12.4cm、刃部長5.7cm、刃部幅1.3cm、刃部厚0.2cmである。

同図5と6は煙管である。5は長7.0cmである。脂返しの湾曲が浅く、火皿の部分に補強帯がないことから18世紀前半のものと思われる。6は火皿の部分のみであるが、5に比べ大型で補強帯の部分より欠損していることから、5よりも古い時期のものである。

同図7～9は棒状及び板状の鉄製品である。8は端部がやや湾曲気味で、毛抜きの可能性はある。9は角柱状のものに薄い輪のようなものが付く。いずれも、破損しているほか腐食も激しく詳細は不明である。

同図10は鉄鍋の破片と思われる。厚さ0.5cmで、底部から胴部にあたる部分と推測される。

(中村)

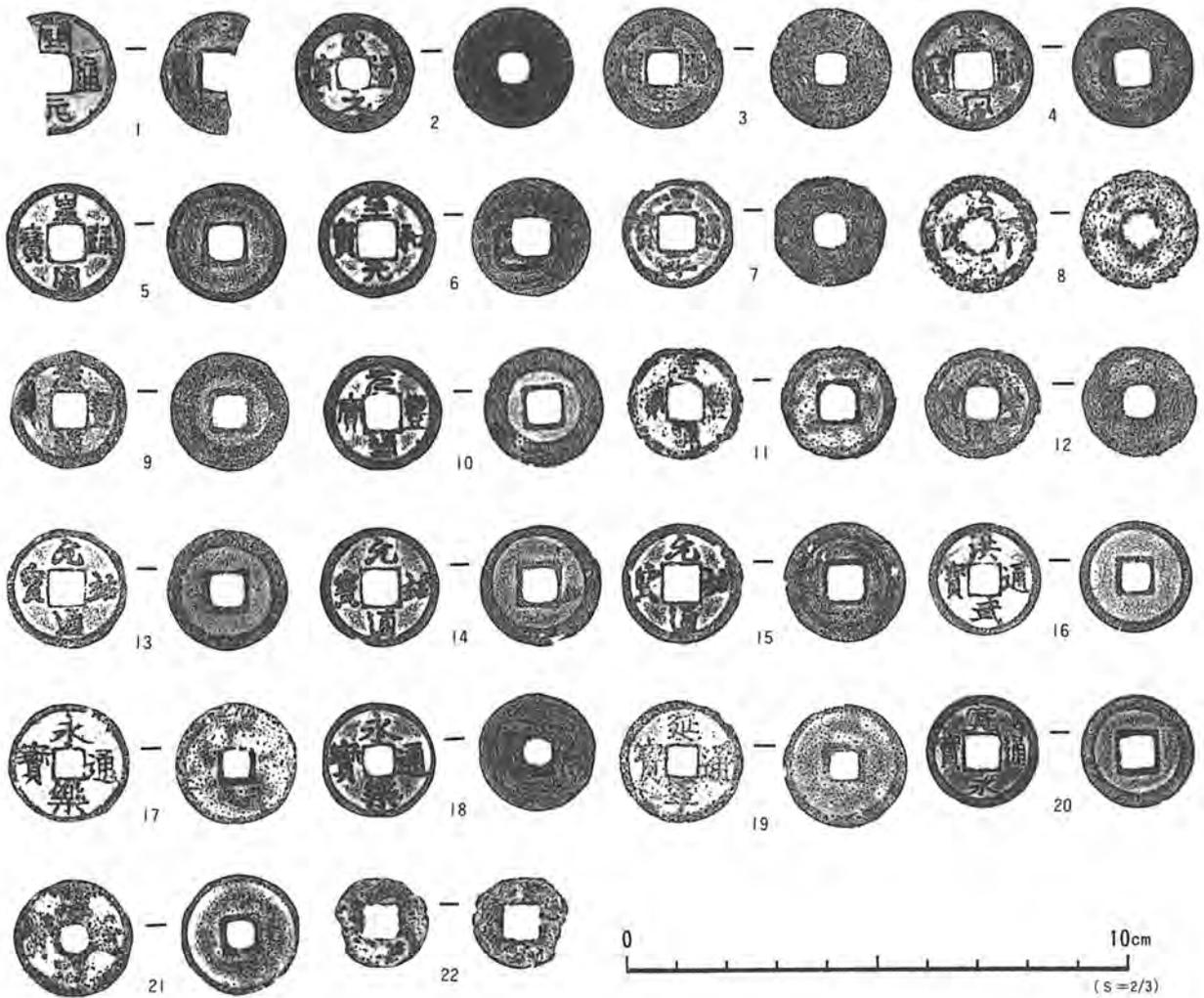


表3 古銭観察表

図版No.	銭貨名	地区	層位	直径(mm)	外輪厚(mm)	外輪幅(mm)	重さ(g)	書体	備考
55-1	開元通寶	1土壘北L39	—	25.0	1.1	1.5	1.5	真	南唐銭、一部欠損
55-2	至道元寶	1土壘北M39	—	24.5	1.0	3.2	2.9	行	北宋銭、模鑄銭
55-3	皇宋通寶	1土壘北L39	—	24.5	1.0	2.8	3.0	真	北宋銭、模鑄銭
55-4	皇宋通寶	1土壘北M37	—	25.0	1.0	1.5	3.2	篆	北宋銭、模鑄銭
55-5	皇宋通寶	1土壘北M37	—	25.0	1.1	2.0	2.7	篆	北宋銭、模鑄銭
55-6	至和元寶	1土壘北L39	—	24.0	1.0	2.8	2.4	真	北宋銭、模鑄銭
55-7	治平通寶	1土壘北L39	—	22.5	1.5	1.5	2.9	真	北宋銭、模鑄銭
55-8	治平元寶	—	—	24.0	1.3	2.8	2.3	真	北宋銭、模鑄銭
55-9	元豊通寶	1土壘北L39	—	24.0	1.0	2.2	3.1	篆	北宋銭、模鑄銭
55-10	元豊通寶	表土	—	24.0	1.1	2.5	2.7	篆	北宋銭、模鑄銭
55-11	元豊通寶	—	—	23.0	1.3	1.5	2.3	篆	北宋銭、模鑄銭
55-12	元豊通寶	1土壘北M37	—	22.5	1.0	2.0	2.3	行	北宋銭、模鑄銭
55-13	元祐通寶	1土壘北L39	—	25.0	1.1	2.1	3.2	行	北宋銭、模鑄銭
55-14	元祐通寶	1土壘北M37	—	24.5	1.2	2.1	3.3	行	北宋銭、模鑄銭
55-15	元祐通寶	1土壘北L39	—	24.0	1.1	1.8	2.8	行	北宋銭、模鑄銭
55-16	洪武通寶	1土壘北L38	—	23.0	1.5	1.8	3.2	真	北宋銭、模鑄銭
55-17	永楽通寶	—	—	25.0	1.3	1.8	3.0	真	明銭、中国銭
55-18	永楽通寶	1土壘北R32	—	24.0	1.0	1.1	1.6	真	明銭、模鑄銭
55-19	延寧通寶	22号土坑	I層	25.0	2.0	2.3	4.7	真	後黎、ベトナム銭
55-20	寛永通寶	—	—	23.0	1.0	1.8	3.0	真	新寛永
55-21	判読不能	34号土坑	覆土	24.5	1.5	2.5	3.2		
55-22	判読不能	—	—	18.5	0.8	—	0.5		腐食

図55 出土銭貨

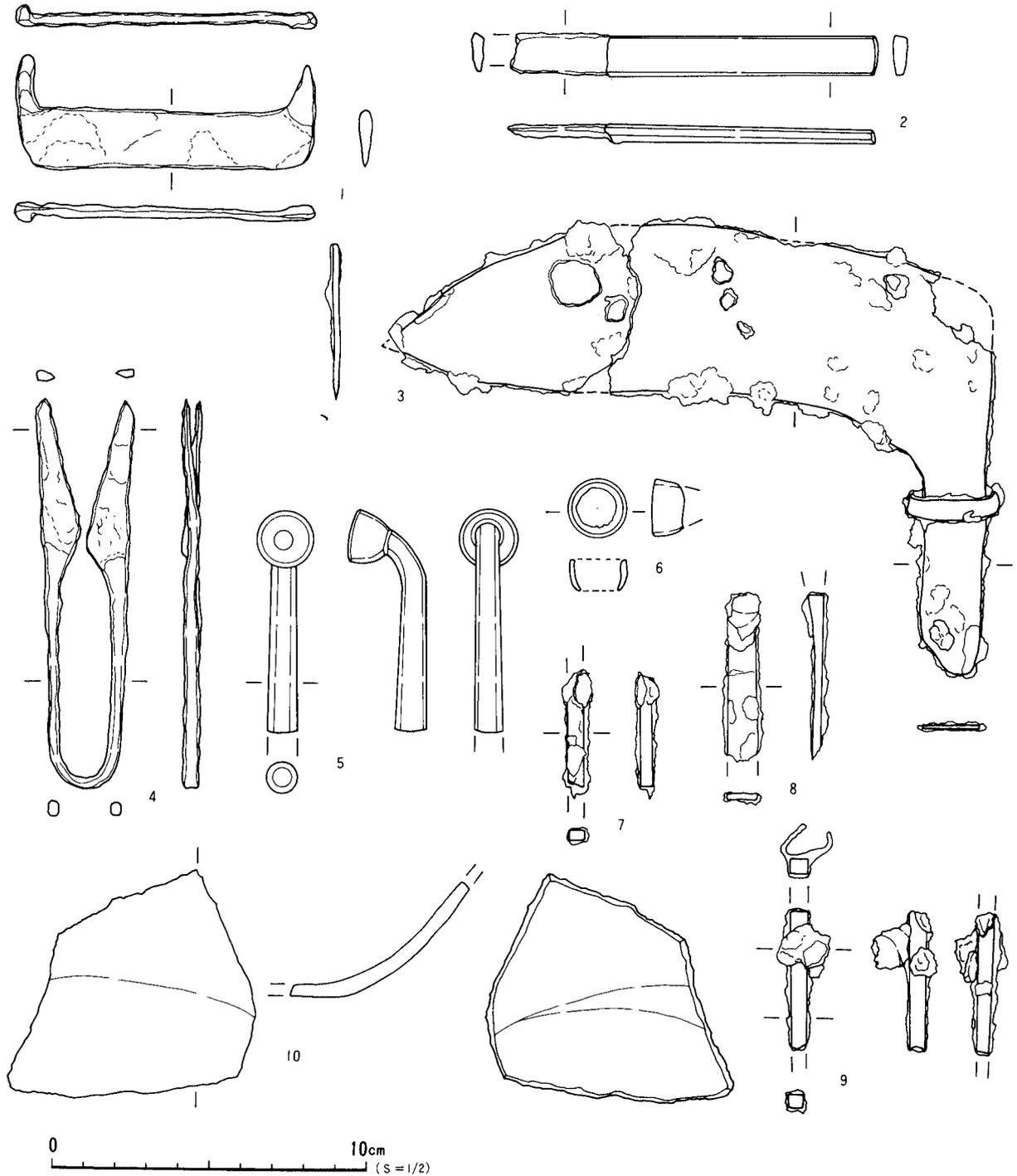


表4 鉄製品観察表

図版	出土地点	層位	最大計測値				種類	整理番号	備考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)			
56-1	2号地割	—	96.0	37.0	7.0	26.0	芋引金	3	
56-2	I 33	—	118.0	14.0	6.0	34.9	小柄	4	
56-3	1土壘北	—	146.0	198.0	31.0	116.5	鎌	10	
56-4	1土壘北	—	235.0	32.0	7.0	16.5	和鉄	2	
56-5	—	—	71.0	18.0	25.0	9.6	煙管	5	
56-6	G33	—	18.0	18.0	11.0	3.1	煙管、火皿	6	
56-7	Q33	—	41.0	10.0	8.0	3.5	棒状鉄製品	7	
56-8	I 33	—	54.0	13.0	9.0	5.1	板状鉄製品	8	
56-9	Q35	—	45.0	17.0	21.0	6.5	棒状鉄製品	9	小穴内出土
56-10	N32	—	73.0	79.0	37.0	96.7	鉄鍋	1	

図56 出土鉄製品

縄文土器 (図57・58)

本調査で出土した遺物のうち最も多く、総数1,630点ある。出土位置は、堀跡堆積土や土塁盛土に混入しているものが多く、他に地割りの整地層中に混入する。特にS・R31～36グリッドとD・E12～15グリッドの範囲からの出土が目立つ。次いで、プライマリーな層を一部残す、K・L35～37グリッド周辺からの出土が多い。このほか、調査区内より散発的に出土している。これら遺物の多くは、胴部細片が多く器形を推定できるものも少ない。また、時期を特定できる文様を持つものも少ないが、およそ縄文中期末葉から晩期までに比定されるものと考えられる。他に土師器が2点ある。数基の縄文時代に比定される土坑土のもの以外、殆どのものが、館構築の際に土砂とともに攪拌移動しているものと判断される。このことから、本遺物については分類せず、まとめて記述する。

図57の1から5と9は、竪穴遺構の堆積土から出土した。同図6から14は土坑内出土。同図15から18は第2号地割り出土。同図21から37は、堀跡および土塁出土をまとめた。図58は遺構外出土である。

縄文時代中期末葉に比定される土器

図58の1から6は、大木10式期に併行するものと考えられる。同図1から4は、同一個体と思われる。口縁部を無文帯とし胴部文様体と区画するもので、胴部には縄文施文後に沈線で文様が施される。同図5と6は、隆帯上に指頭圧痕が施されている。

縄文時代中期末から後期初頭に比定される土器

図57の5と18、図58の7から14。沈線により文様施文されるものと、文様区画の隆帯が貼付されるものがある。図58の12と13は、隆帯の在り方から牛ヶ沢遺跡第Ⅲ群に相当するものと思われる。図57の18と図58の7と11は、弥栄平(2)遺跡第Ⅴ群土器に相当するものと思われる。図56の5と図57の8から10・14は、十腰内Ⅰ式に比定される可能性がある。

縄文時代後期中葉から後葉に比定される土器

図58の27から29がある。同図27は注口土器である。注口の付け根に刺突文が全周する。同図28は口縁部に付けられた装飾突起である。十腰内ⅡないしはⅢ式に相当するものと思われる。

縄文時代晩期前葉に比定される土器

図58の21と23、24、28、29がある。同図23は、口縁部に入組三叉文が施される。大洞B式に相当する。同図24は波状口縁になるものと思われる。波頂部直下にボタン状貼付をもち、口縁に沈線が施されている。同図28は壺形土器と思われる。

粗製土器

遺物の大多数を占める。すべて、上記の各時期の範疇に含まれると考えられる。口縁の形状が外反気味になるもの(図57の17、図58の15・17・26)。口縁の形状が直立するもの(図57の3・19・22・26・27・35、図58の18・24～26)。口縁の形状が内傾気味になるもの(図57の20・31)がある。

土師器

図58の30と31の、2点だけの出土である。同図30は甕ないしは鉢の口縁である。外面はヘラ状工具による粗いナデ、内面はハケ状工具によるナデが施される。同図31は甕の底部と思われる。内外面の調整は、30と同じである。

その他、図58の32は粘土紐状製品である。幅約1cmで指頭圧痕が付く。時期は不明である。

(小田川)

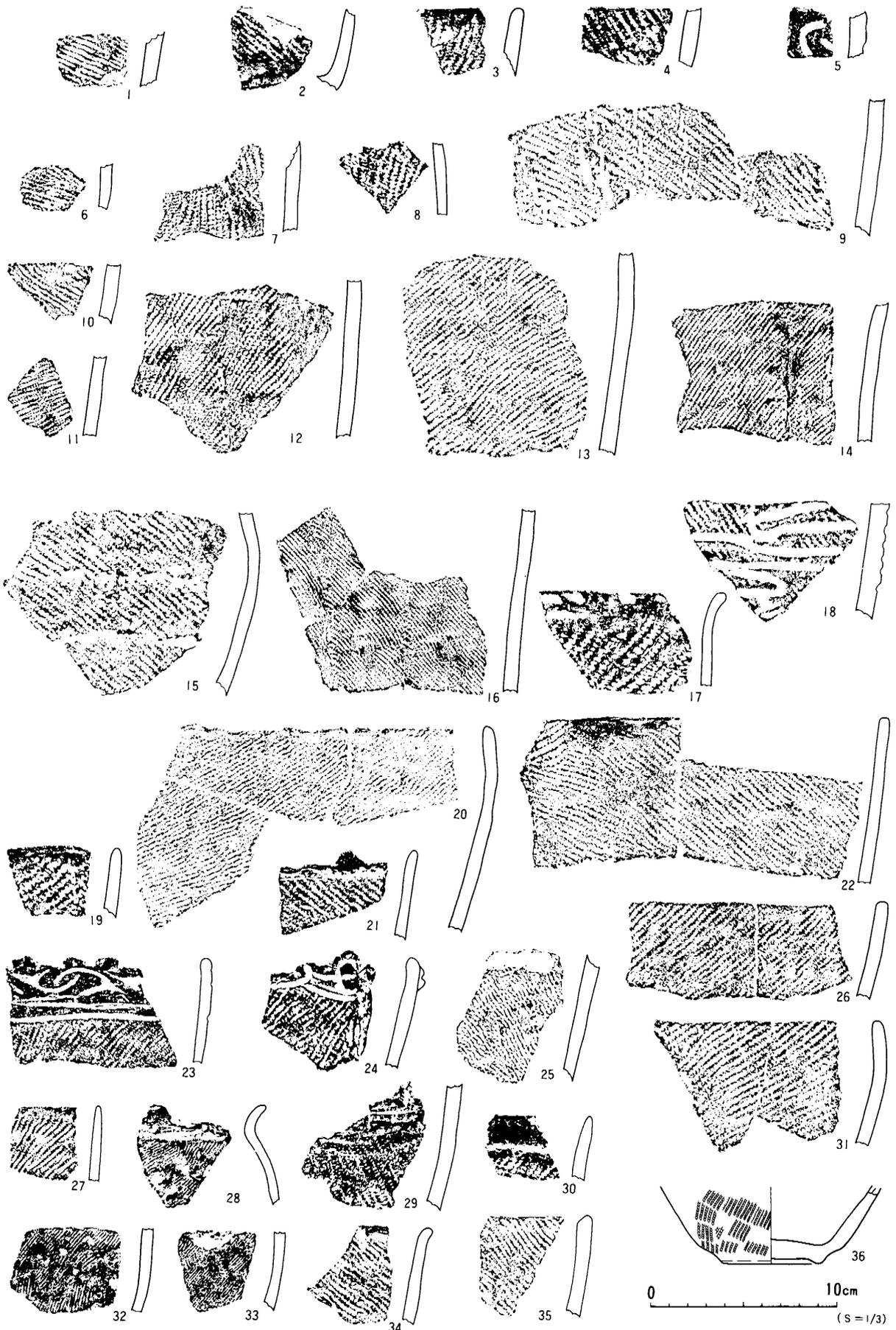


图57 出土土器

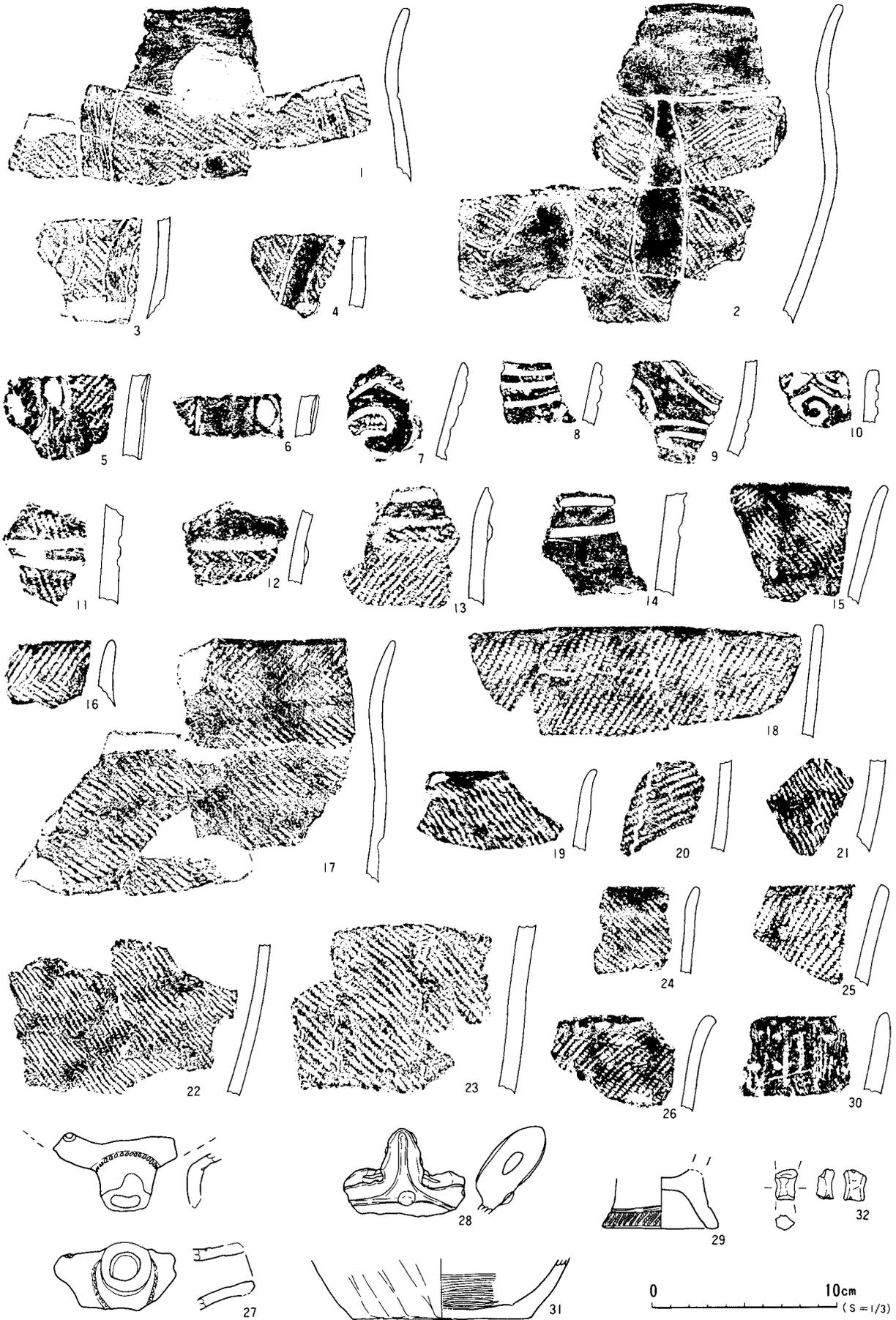


图58 出土石器・石製品

石器・石製品 (図59～図62)

本調査で出土した石器・石製品は総数26点である。内訳は石鏃2点、石匙3点、剥片4点(内2点掲載)、磨製石斧5点、石刀・石棒5点、礫石器5点、石皿1点、石臼1点である。これらは、J～M36～38グリッド及びR・S31～35グリッドの土塁盛土や南側の堀跡堆積土中より、縄文土器等と混在して出土した。石臼以外は、縄文時代に比定されるものであり、遺構内出土のものも少ないことから、まとめて記述する。

石鏃 図59の1と2は無茎の石鏃である。同図1は平基で、周縁に微細剥離が顕著である。裏面中央部には主要剥離面を残す。同図2は凹基で、鏃身中軸線から均一に丁寧に剥離されている。

石匙 図59の3～5は石匙である。同図3は横型で、剥片の打瘤部分を素材としており、肉厚である。割と急角度な周縁調整で作られている。同図4も横型の石匙である。刃部の作りだしよりも、つまみ部分の調整が入念である。刃部には、細かな潰れと磨耗が観察される。同図5は、一側縁からの片面調整で刃部が作られている。つまみ部分の作りだしも明瞭ではなく、他の器種の可能性もある。

剥片 図59の6と7は剥片である。剥片剥取時の形状そのままである。同図6の剥片末端はヒンジとなっている。両剥片ともに、鋭利な側縁部が使用されている可能性がある。

磨製石斧 図59の8～12は磨製石斧である。同図12以外は、欠損品である。器体に製作時の敲打痕をのこすものが多い。同図9の器体に残る凹みは、二次的に敲打使用によってできたものである。同図12は、細長い扁平な礫を素材としている。基端と側縁に僅かな剥離が認められるほか、端部を片刃に研磨している。

石刀・石棒 図60の1～4と図61の1は石刀・石棒と思われる石製品である。図60の1と2、図61の1は、粘板岩の節理から剥げたものを素材としている。器体の成形は顕著ではなく、基端部を主に敲打し、研磨している。握りの部分だけの加工である。図60の1だけが、器体を尖頭状につくりだしており、他は、素材の形状そのままで使用されている。図60の3は典型的な石棒の欠損品と思われる。器体全面の研磨は丁寧である。

礫石器 図60の5は敲石である。周縁に敲打による潰れが顕著であるほか、使用による階段状剥離が一端に大きく残る。図61の2と5は凹石である。図61の4は器体全面が磨耗している、磨石である。図61の3は、器面に擦痕が残るものである。欠損により全体形は不明であるが、側縁の状態から器体が整形されていたものと判断される。

石皿 図62の1は第2号土塁南の調査区外で表採された石皿である。破損品であるが、縁と脚を作り出されるものである。

石臼 図62の2は第1号堀跡北から出土した。溝跡から8分画6溝の正常回しの臼と推定される。

(中村)

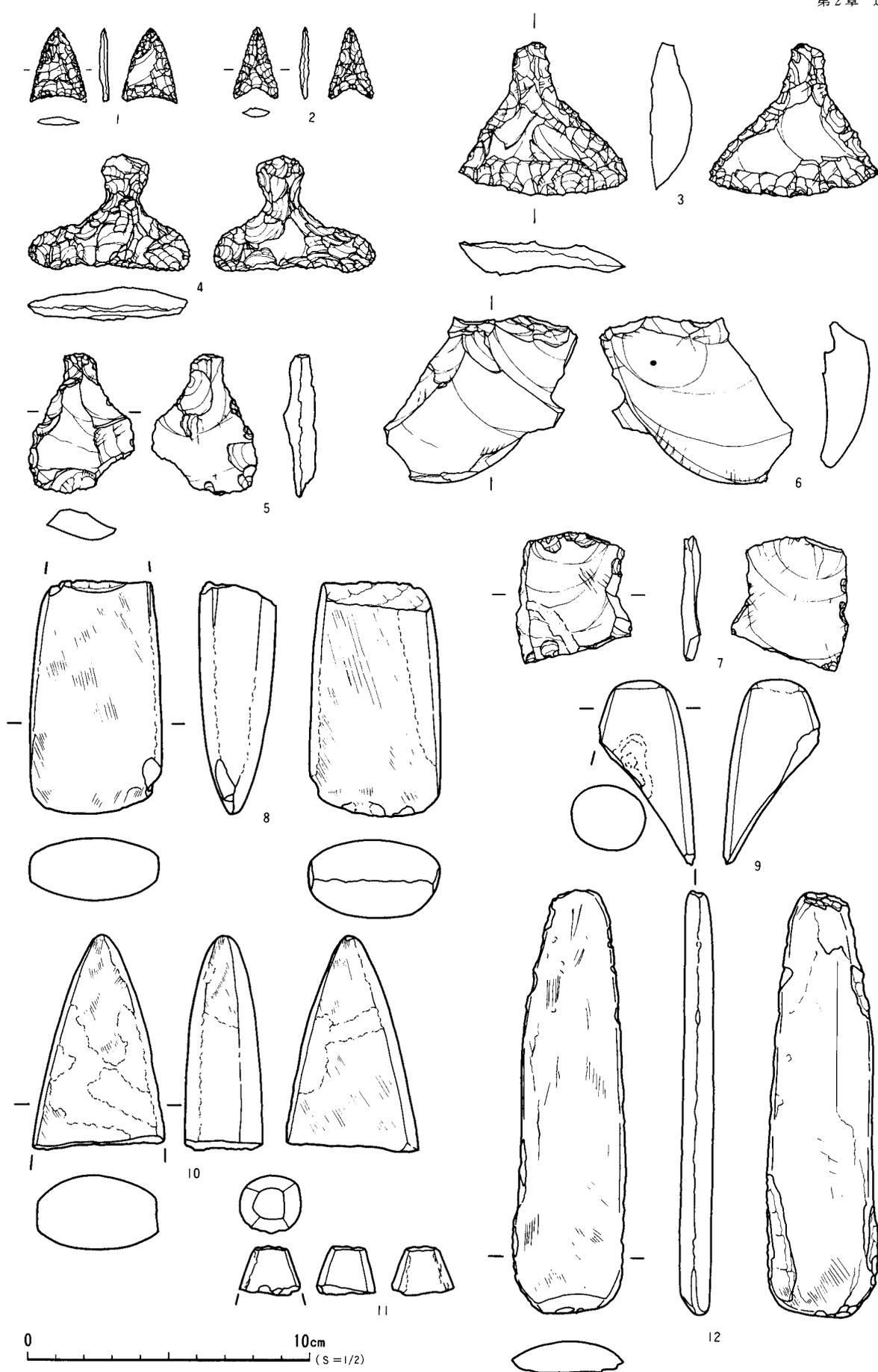


图59 出土石器・石製品(1)

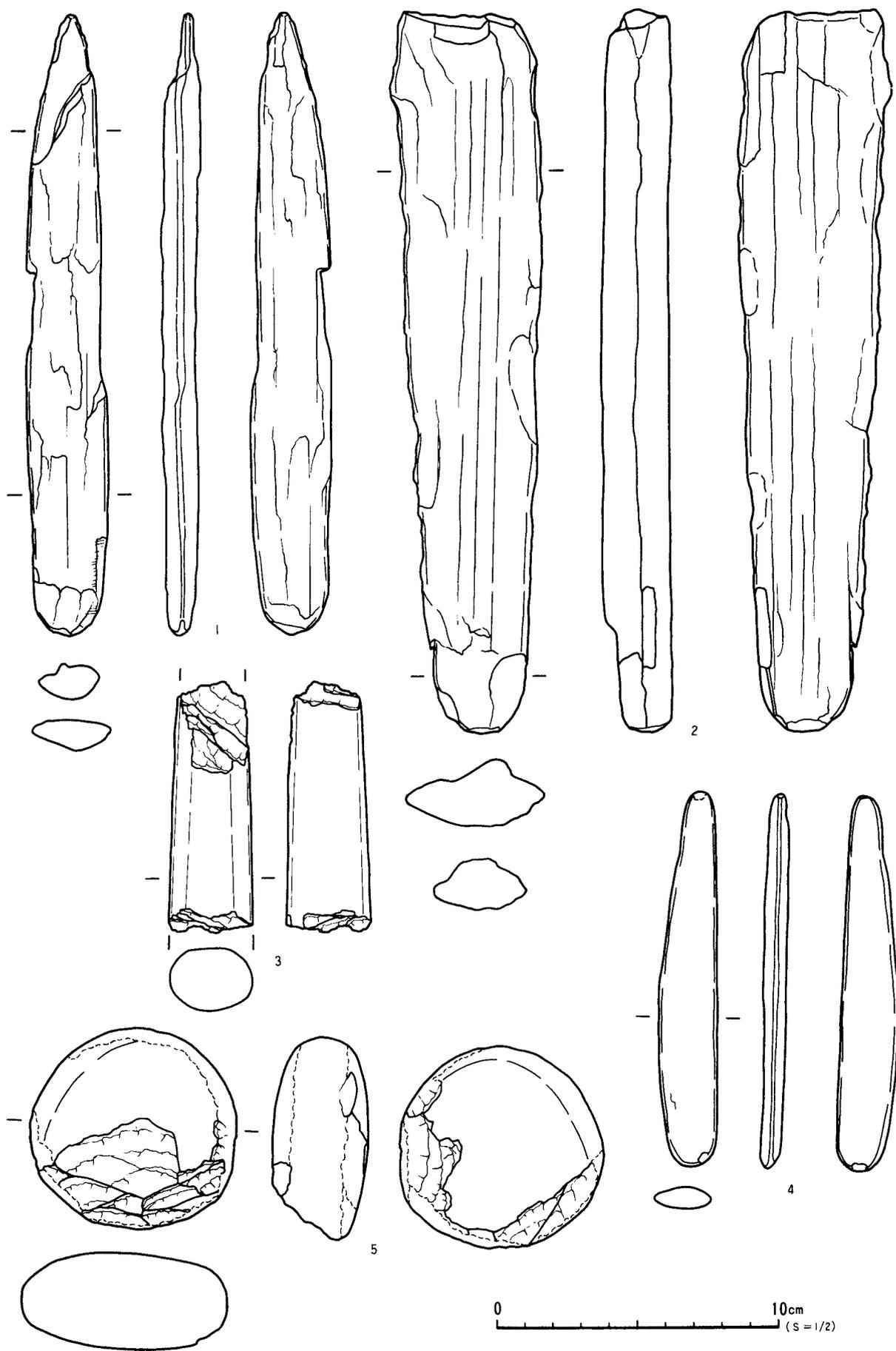


図60 出土石器・石製品(2)

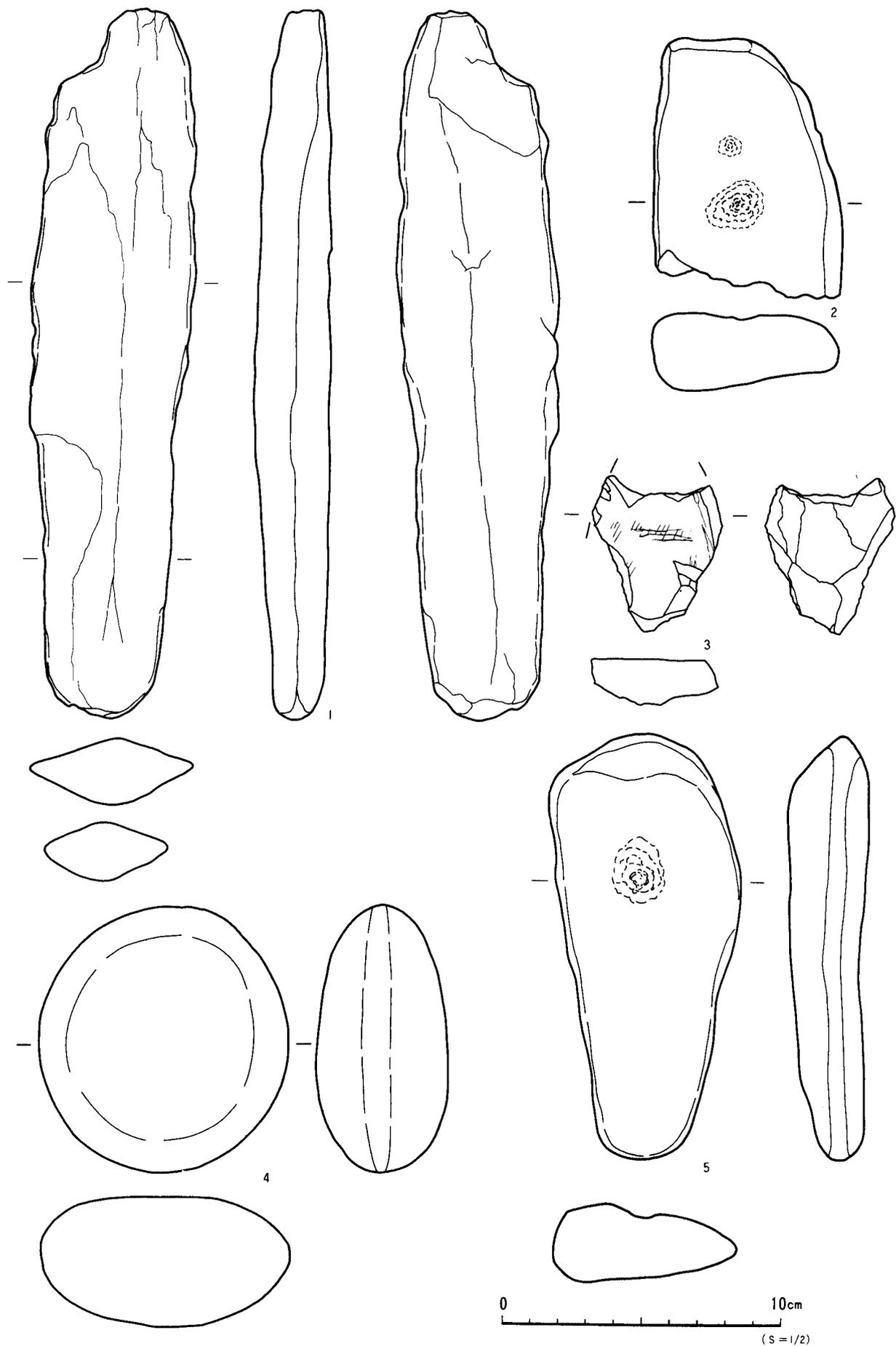


图61 出土石器・石製品(3)

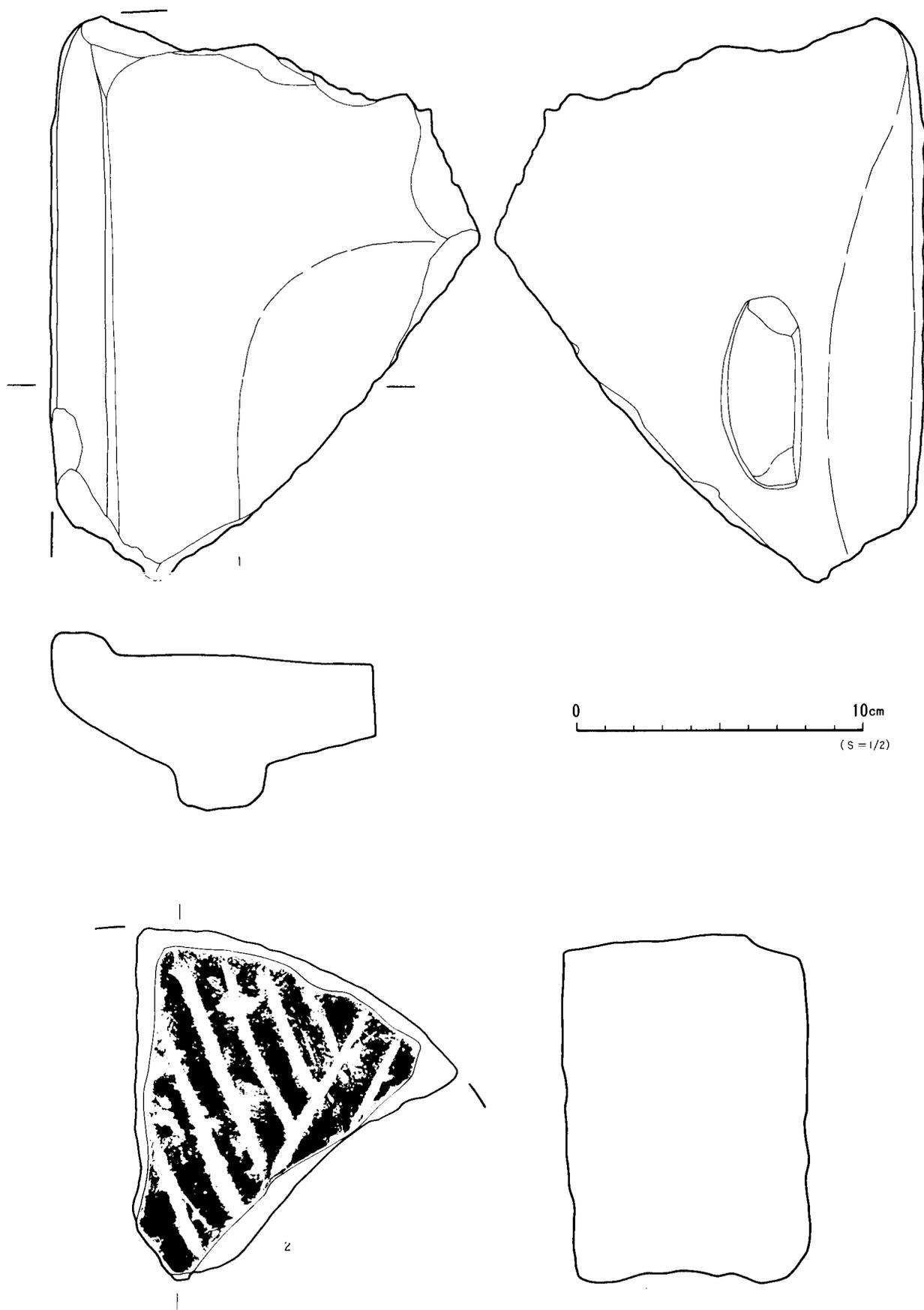


図62 出土石器・石製品(4)

表5 土器観察表

図版No.	出土地点	層	部位	外面文様構成(地文)	備考
57-1	S I-1	堆積土	胴部	(L縦位)	
57-2	S I-2	堆積土	底部	(RL横位)	
57-3	S I-2	堆積土	口縁部	(LR横位)	
57-4	S I-3	堆積土	胴部	(LR縦位)	
57-5	S I-8	堆積土	胴部	無文、沈線	
57-6	S K-9	2層	胴部	(LR縦位)	
57-7	S K-37	堆積土	胴部	(LR縦位)	
57-8	S K-54	1層	胴部	(LR縦位)	
57-9	S I-7	堆積土	胴部	(LR縦位)、擦糸圧痕	
57-10	S K-21	3層	胴部	(L縦位)	
57-11	S K-20	2層	胴部	(LR横位)	
57-12	S K-21	3層	胴部	(RL縦位)	
57-13	S K-21	3層	胴部	(RL縦位)	
57-14	S K-20	5層	胴部	(RL縦位)	
57-15	2号地割	—	胴部	(RL縦位)	
57-16	2号地割	—	胴部	(LR縦位)	
57-17	2号地割	—	胴部	(RL縦位)、折返口縁	
57-18	2号地割	—	胴部	(LR縦位)、沈線	
57-19	2堀跡南	—	口縁部	(RL横位)	
57-20	2堀跡南	—	胴部	(L横位)	
57-21	3堀跡南	—	胴部	(RL横位)	
57-22	1土塁北	—	胴部	(LR縦位、口縁部LR横位)	
57-23	3堀跡南	—	口縁部	(LR横位)、沈線	
57-24	2堀跡南	—	口縁部	(LR横位)、貼付、刺突	
57-25	2土塁南	—	胴部	(L縦位)	
57-26	3土塁南	—	口縁部	(LR横位)	
57-27	1土塁北	—	口縁部	(LR横位)	
57-28	2堀跡南	—	口縁部	(LR横位)	
57-29	3土塁南	—	胴部	(RL横位)	
57-30	1土塁北	—	口縁部	(RL縦位)、沈線	
57-31	3土塁南	—	口縁部	(LR横位)	
57-32	2堀跡南	—	胴部	(LR横位)	
57-33	3土塁南	—	胴部	(LR横位)	
57-34	2堀跡南	—	口縁部	(RL横位)	
57-35	2堀跡南	—	口縁部	(RL横位)	
57-36	2堀跡南	—	底部	(LR横位)	
58-1	K36	—	口縁部	(LR縦位)、沈線	
58-2	K36	—	口縁部	(LR横位)、沈線	
58-3	K36	—	胴部	(LR縦位)、沈線	
58-4	P29	—	胴部	(LR縦位)、沈線	
58-5	K37	—	胴部	(RL横位)、隆帯状の指頭圧痕	
58-6	L36	—	胴部	(LR横位)、指頭圧痕	
58-7	L37	—	口縁部	無文、沈線	
58-8	R36	—	口縁部	無文、沈線	
58-9	R36	—	胴部	無文、沈線	
58-10	R36	—	口縁部	無文、沈線	
58-11	R36	—	胴部	(LR縦位)、沈線	

図版No.	出土地点	層	部 位	外面文様構成 (地文)	備 考
58-12	L37	—	胴 部	(R L縦位)、隆帯	
58-13	K36	—	胴 部	(R L縦位)、隆帯	
58-14	R36	—	胴 部	無文、沈線	
58-15	J35	—	口縁部	(L縦位)	
58-16	K34	—	口縁部	(L R縦位)	
58-17	K35	—	口縁部	(L R縦位)	
58-18	L37	—	口縁部	(R L縦位)	
58-19	J36	—	口縁部	(R横位)	
58-20	K36	—	胴 部	(R L縦位)	
58-21	Q33	—	胴 部	(R L横位)	
58-22	L36	—	胴 部	(L R縦位)	
58-23	L36	—	胴 部	(R L縦位)、口縁部に入粗三叉文	
58-24	K36	—	口縁部	(R L横位)、波状口縁、ボタン状貼付	
58-25	L37	—	口縁部	(R L横位)	
58-26	Q33	—	口縁部	(L R横位)	
58-27	P29	—	注口部	刺突文	
58-28	不 明	—	口縁部	隆帯	
58-29	P36	—	高台部	(L R横位)、沈線	
58-30	F10	—	口縁部	外面ヘラナデ、内面ハケナデ	
58-31	不 明	—	底 部	外面ヘラナデ、内面ハケナデ	
58-32	P29	—	不 明	粘土紐状製品、指頭圧痕	

石器・石製品観察表

図版No.	出土地点	層位	最大計測値				石 質	分 類	整理番号	備 考
			長(mm)	層(mm)	厚(mm)	重(g)				
59-1	S I-1	堆積土	26.0	20.0	3.0	0.8	珪質頁岩	石 鏃	1	
59-2	U32	—	25.0	15.0	3.0	1.0	珪質頁岩	石 鏃	2	
59-3	不 明	—	54.0	59.0	14.0	15.7	珪質頁岩	石 匙	1	
59-4	1堀跡北	—	40.0	57.0	12.0	27.5	珪質頁岩	石 匙	3	
59-5	S I-3	堆積土	49.0	37.0	11.0	14.6	珪質頁岩	石 匙	5	
59-6	K34,35	—	75.0	48.0	16.0	39.3	珪質頁岩	剝 片	6	
59-7	K34,35	—	43.0	40.0	6.0	14.2	珪質頁岩	剝 片	7	
59-8	R36	—	81.0	42.0	22.0	165.3	輝 緑 岩	磨 斧	8	
59-9	K, L36	—	65.0	30.0	23.0	62.5	花崗閃緑	磨 斧	9	
59-10	R34	—	74.0	46.0	26.0	127.4	輝 緑 岩	磨 斧	10	
59-11	S I-3	堆積土	17.0	22.0	20.0	10.3	輝 緑 岩	磨 斧	11	
59-12	I32	—	146.0	38.0	11.0	96.9	粘 板 岩	磨 斧	12	
60-1	K, L36	—	220.0	26.0	12.0	103.4	粘 板 岩	石刀・石棒	13	
60-2	K, L36	—	256.0	52.0	23.0	409.7	チャート	石刀・石棒	14	
60-3	1堀跡北	—	88.0	31.0	22.0	91.3	緑色凝灰	石刀・石棒	24	
60-4	S I-3	堆積土	133.0	21.0	8.0	31.5	粘 板 岩	石刀・石棒	16	
60-5	R36	—	73.0	71.0	34.0	311.8	砂 岩	礫 石 器	15	
61-1	K, L36	—	256.0	59.0	23.0	425.3	石英片岩	石刀・石棒	17	
61-2	K, L36	—	89.0	67.0	27.0	310.1	閃 緑 岩	礫 石 器	18	
61-3	Q33	—	50.0	45.0	17.0	43.9	細粒凝灰	礫 石 器	19	
61-4	R36	—	96.0	88.0	47.0	575.8	古期安山	礫 石 器	20	
61-5	S I-2	—	152.0	66.0	27.0	379.8	粘 板 岩	礫 石 器	21	
62-1	2土塁南	表 採	193.0	150.0	53.0	1076.9	粘 板 岩	石 皿	22	
62-2	北 堀	表 土	122.0	113.0	84.0	1510.0	凝質砂岩	石 臼	23	

第3章 まとめ

館の構造

本館跡は、谷に面する標高185m～197mの卓状地に立地し、周囲の急斜面や沢筋を利用して防御しやすい独立区域を形成する、基本的な構築法である。館の西側は、河川に面する比高差のある急崖であり、地続きの東側と南側に堀と土塁を巡らすことで、隔絶した用地を作りだしている。形態的には、方形単郭型の館で、自然の要害を使った山城型の館跡と言える。

個別遺構について

堀跡と土塁

館の最大の特徴は、三重の堀と土塁である。調査の結果、各々に作り替えが行われた痕跡が認められるが、堀を埋めた痕跡がないことから、館廃絶時には三重の堀と土塁が同時存在し機能していたものと考えている。これらは一見して、館を全周しているように見られるが、調査結果と地形測量図から、館の最終時期には、以下のような配置であったものと考えている。(調査区外の埋められた部分にも堀と土塁が存在したと仮定してのものである。)

堀跡

第1号堀跡＝館の南西側を除く三方向に巡る。

第2号堀跡＝館の北側から西側を除き、館の二方向に巡る。

第3号堀跡＝不確定要素が強いが、館の南側から東側の一部にかけて巡る。

土塁

第1号土塁＝館内部に、ほぼ全周する。

第2号土塁＝館の西側を除く三方向に巡る。

第3号土塁＝不確定要素が強いが、館の南側から東側の一部にかけて巡る。

第4号土塁＝館の南側の一部だけに作り出されている。(調査区外。)

堀跡と土塁の配置からは、館の南側と東側に防御の主力が置かれ構築されていたことが窺われる。地形的要因から、防御区画を目的とした場合の基本的配置と推察されるが、堀跡と土塁が東側から西側に向かって緩傾斜している点で特徴である。特に、第1土塁を除く他のものは一様な傾斜で、館内部からの比高差は相当あるものの、隣接する堀と土塁間での比高差は高いとは言えない。防御施設という基本的性格からみて、二重・三重に巡らす割に効果は低いような感じを受ける。同様な傾斜は、館跡内部全体にも見られ、傾斜地のまま建物等を構築し使用していると判断された。堀跡や土塁の構築に強い規範性を感じるが、内部を平坦に整地していない点では、館内での恒常的生活を目的としたものか疑問がもたれる。他の館跡と比べ特異と思われる。

土塁の特徴は、作り替えが行われている点である。第1号土塁と第2号地割の土層から、数度の改変があったものと判断される。特に第1号土塁の場合、土塁直下に小穴が作られていることと、規模の割に盛土中に含まれる、第IX層粘質土の量が少ないことから、作り替えの際に斜面上位から土を削り移動したというより、土塁の盛土を内側に盛り替えして土塁位置を作り替え、館の規模を縮小しているものと判断される。これと連動して、第1号堀跡も改変しているものと思われる。

作り替えは、館内の他の個別遺構にも多数見られるが、第1号土塁の作り替えは、館の形状を大き

く変化させるほどのものであったものと考えている。このことは、堀と土塁のラインが北側では曲線的であるのに対し、南側では直線的で画一性に欠けることから窺える。館の機能上、重要な堀と土塁の改変には、それを強いる社会的背景があったものと考えられる。

また、特出されるものに第1号堀跡北側底面から出土した多量の礫がある。礫は、雑然としているが堀底の傾斜に沿うようにあることから、転石や投げ込まれたものとは異なるものと判断している。礫の上の土層に、グライ化した堅い面が認められることと考え合わせると、礫を基礎とした道が作られ、堀そのものが道として使用された、堀底道であった可能性が強い。山城等の城館で堀底を道として使用したという例をよく聞かすが、本遺構の様な例を知らず類例を待ちたい。

道跡と門跡

道跡は、前述の第1号堀跡の堀底道と、館南側の堀と土塁の端部に検出されたものがある。調査では、双方が同時期に機能したか明確にできなかった。しかし、館の西側からの出入りを考慮した場合、急勾配であるが最短距離で館内へ入る本遺跡と、第1号堀跡の堀底道を通る緩やかであるが遠巻きに館内に入る、二つのルートが同時に存在した可能性が考えられる。

門跡は、館の北東部と南西部の2箇所に検出された。第1号門跡は、八戸市根城跡で検出された門跡と比べると、掘形や間口ではやや小さいものの、門の前面に柱穴を持ち門柱間に敷居の痕跡もあることから、簡素な開き戸とは思われない。周囲の柱穴から門構えのしっかりした、板扉等を伴った作りのものか、上屋構造をもった櫓門や二階門と呼ばれるような構造であったものと考えられる。第2号門跡については、周辺の小穴の在り方から冠木門であったものと思われる。

両門跡は、館の対角線上に位置し、各々同一場所での作り替えが認められることから、同一時期に機能し廃絶しているものと思われる。

門と道との関連については、道の全容が不明なため明確に把握できない。第1号門跡は、土塁との関係から、館の最終時期以前にその機能を停止している。しかし、門柱に伴うと考えられる小穴が、第1号堀跡法面となる斜面に沿うように検出されていることから、本門跡が機能していた時期に第1号堀跡が既に存在していた可能性が強い。このことは、最終時期以前から堀跡が道として使われており、堀底道から第1号門跡へ入る経路があったものと推測される。最終時期には、本門跡が廃棄され館内部に入る出入口が変更されたものと考えられ、おそらく、館の東側の埋められた部分につながっていくものと思われる。

小穴と掘立柱建物

第2章第6節で述べたように、本遺構に対しては検討不足な点が多い。小穴の規模は、比較的小さいものが多く、並びは不揃いで、間隔も不規則で統一性に欠ける。しかし、これらが建物や柵等の柱穴以外のものである可能性は考え難く、また、館の大きさと調査区の割合を見れば、主殿相当の大型建物が調査区外に存在する可能性も低いものと考えられる。館の内部に小規模で簡易な建物が乱立していたと考えざるを得ない。堀と土塁の規模や第1号門跡の作りと比較して、貧弱さは否定できず、居館として長期間営まれていたとは考え難い。

竪穴遺構

規模と形態ともに多様である。住居であるか倉庫であるか、機能については意見が分かれるところである。上記のような、建物跡の在り方からすれば、倉庫である可能性が強いが、住居として機能し

ていた可能性も否定できない。また、第2・5・6・9・10号竪穴遺構は、ほぼ同じ場所に重複して検出されたが、館内部に竪穴遺構が乱立している状態ではないことから、建てられる位置が限定されていたものと推測され、土塁等の作り替えに連動して建て替えられていたものと考えられる。

出土陶磁器

館に係る陶磁器類の出土がわずか6点ということは、調査面積および遺構数から見た場合、県内の他の城館跡の調査例と比較してみても、極端に少なく特異でさえある。館廃絶時に、すべてが持ち出されたとも考えられるが、出土数という点からは積極的な営みや生活臭が感じられず、別の見方をすれば、恒常的生活の場ではない臨時的な使われ方ないしは機能があったものと考えられないだろうか。

館跡の時期と館の様相

館跡の構築および廃絶時期について、年代を明確にはできない。原因は、文献資料に対して調査していない点にもある。また、遺物の少なさにもその要因はある。しかし、出土陶磁器は15世紀後葉から16世紀初頭に比定されるものと考えられることから、この時期に機能し廃絶しているものと思われる。

館の様相は、堀と土塁の規模に比べ館内部の整地や建物等の規模が小さいことや、門跡の作りに比べ大型の建物跡が建つような柱穴が見受けられないことで、普請施設と作事施設の在り方にアンバランスさを感じる。いずれにせよ、普請施設に重点が置かれていることは明確である。

諸館と交通路との関連

第1章第4節で、階上町内に所在する館跡について記述したが、各館跡は、ほぼ県道沿いにある集落単位に所在している。町内には、久慈街道と呼ばれる、古くからの主要交通路が二経路通っている。一つは、浜側を通る現在の国道45号線に相当するもので、もう一つは山側の現在の主要地方道八戸大野線にあたる。二経路とも、発着点の八戸城下につながる街道であり、森林資源や産物輸送のための経済道路であった。この二つの幹線を結ぶ道として、階上岳の麓を通る現県道も古くからあった。

本館の西方約1kmの地点には、山側の久慈街道との結節点となる田代の集落がある。青森県「歴史の道」調査報告書によると、田代は城下と集葉をつなぐ伝馬継所で、田代番所と妙川館があったと言われる(ともに所在地不詳)。このことから、上記の集落道が、集落間の交通路以上の役割があったものと思われる。戦略的な意味で、進入および別の交通路に抜けることを防ぐことを考慮すれば、重要な位置にあると考えられ、道の押さえとして、これらの各館が作られ配置された可能性もある。この点で、本館はその最西端に位置し、各館の中でも要であったものと考えられる。館の構築には、交通路に主眼が置かれ場所が選地され、沼館愛三氏が指摘するように、各館跡が関連して機能したものと考えられる。

構築の背景

上記のような、広域な幹線の掌握を目的とするのであれば、一在地領主だけの勢力とは考えられず、広域的な影響力をもった上位階級の介入が想定される。本館を含め、県道沿いに連なる各館跡の規模と形態を見ると、山頂部に立地する根岸館を除き、ほぼ同一の規模と形態を持っていることから、各館の構築主体や構築目的に共通性が感じられ、同一の上位階級者のコントロールのもとに構築されたものと考えられる。

(小田川)

引用・参考文献

- 青森県教育委員会 1987 『境関館遺跡』 青森県埋蔵文化財調査報告書第102集
- 青森県教育委員会 1989 『中崎館跡』 青森県埋蔵文化財調査報告書第129集
- 青森県教育委員会 1993 『野脇遺跡』 青森県埋蔵文化財調査報告書第149集
- 青森県教育委員会 1983 『青森県の中世城館』 青森県文化財調査報告書
- 青森県教育委員会 1985 『久慈街道』 青森県「歴史の道」調査報告書
- 八戸市教育委員会 1983 『史跡根城跡発掘調査報告書』 八戸市埋蔵文化財調査報告書第9集
- 浪岡町教育委員会 1986 『浪岡城跡Ⅷ』 昭和59年浪岡城跡発掘調査報告書
- 浪岡町教育委員会 1988 『浪岡城跡Ⅸ』 昭和60年浪岡城跡発掘調査報告書
- 上之国町教育委員会 1986 『上之国勝山館跡Ⅶ』 昭和60年発掘調査整備事業概報
- （勸）山武郡市文化財センター 1994 『田向城跡』 （勸）山武郡市文化財センター発掘調査報告書第21集
- （勸）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1988 『笹間館跡発掘調査報告書』 岩手県文化財振興事業団埋蔵文化財調査報告書第124集
- （勸）福島県文化センター 1994 『東北横断自動車道遺跡調査報告28 猪久保城』 福島県文化財調査報告書第308集
- 第8回全国城郭研究者セミナー資料 1991 『小規模城館』 第8回全国城郭研究者セミナー実行委員会
- 兵庫埋蔵文化財調査会 1996 『日本出土銭総覧』 兵庫埋蔵文化財調査会
- 沼館愛三 1977 『南部諸城の研究』 青森県文化財保護協会
- 石井 進・萩原三雄 1991 『中世の城と考古学』 新人物往来社
- 小泉 弘 『江戸を掘る』 柏書房
- 石井 進他 1992 『北の中世』 中世の里シンポジウム実行委員会編

付 章

学習院大学放射性炭素年代測定結果報告書

1996年3月6日

青森県埋蔵文化財調査センター殿

1995年12月17日受領致しました試料についての年代測定の結果を下記の通り御報告致します。

なお年代値の算出には ^{14}C の半減期としてLIBBYの半減期5570年を使用しています。また、付記下誤差は β 線の計数値の標準偏差 σ にもとずいて算出した年数で、標準偏差(ONE SIGMA)に相当する年代です。また試料の β 線計数率と自然計数率の差が 2σ 以下のときは、 3σ に相当する年代を下限の年代値(B.P.)として表示してあります。また試料の β 線計数率と現在の標準炭素(MODERN STANDARD CARBON)についての計数率との差が 2σ 以下のときには、Modern と表示し、 $\delta^{14}\text{C}\%$ を付記してあります。

記

Code No.	試料	年代 (1950年よりの年数)
GaK - 19158	木炭 from 青森県小沢館跡 No.1 第1号竪穴遺構	340 ± 90 A.D. 1610

以上
木越邦彦



写真1 館跡現況



館跡完掘（北から）



館跡完掘全景（西上空から）

写真2 館跡完掘



基本層序（東側境界面）



検出作業（北から）

写真3 基本層序と作業状況



写真4 作業状況



写真5 調査区外現況(1)



写真6 調査区外現況(2)



写真7 堀跡・土塁北側現況



写真8 堀跡・土塁北側完掘



堀跡北側部分（北西から）



礫精査状況（北から）



堀跡西側部分（南から）



礫精査状況（北西から）



堀跡中央部分（北東から）

写真9 第1号堀跡出土礫(1)



写真10 第1号堀跡出土礫(2)

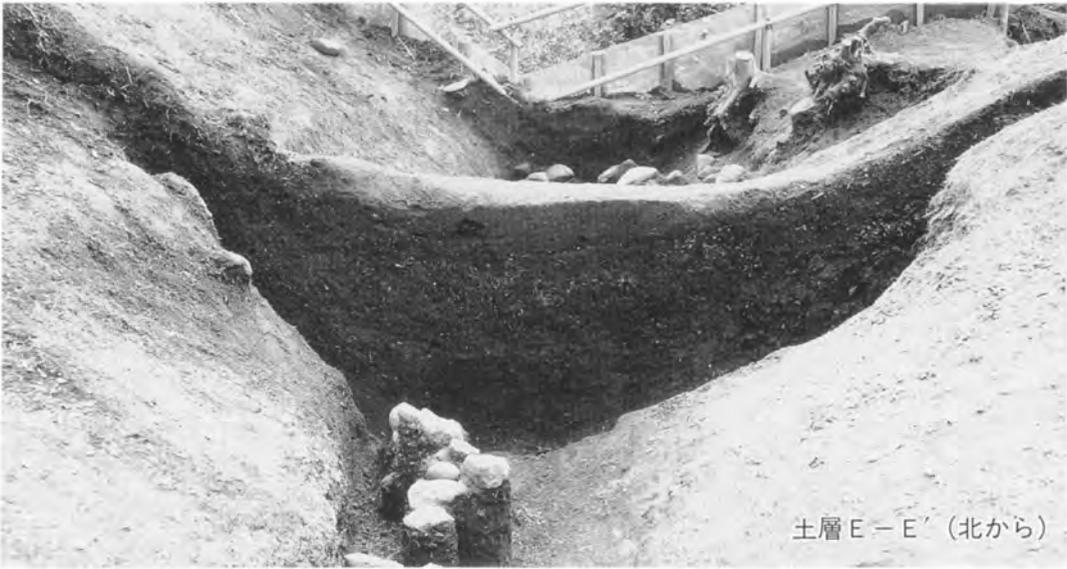


写真11 第1号堀跡土層



写真12 第1号土塁北側現況

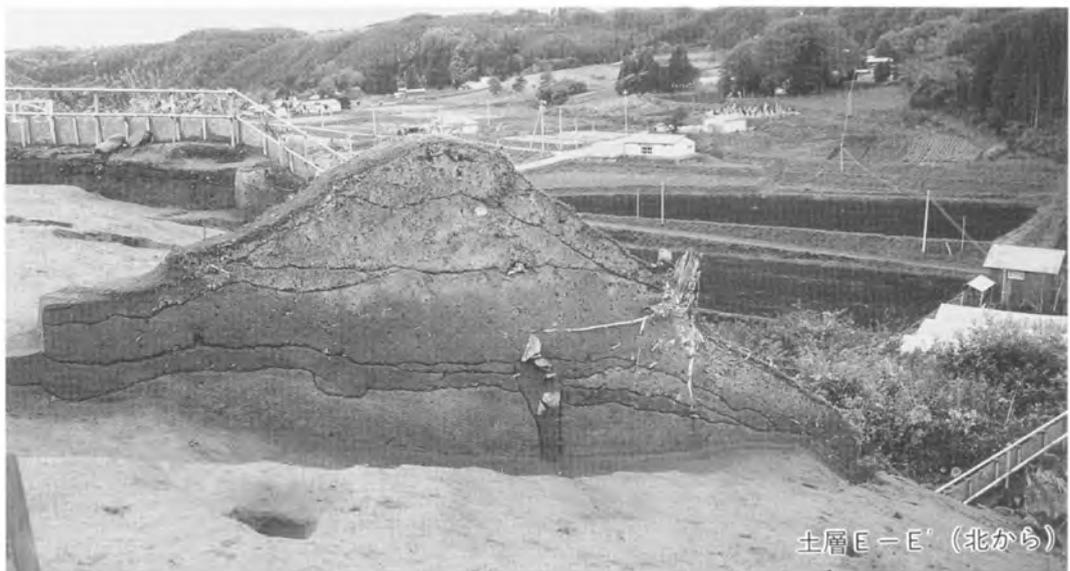


写真13 第1号土壘北土層(1)



写真14 第1号土壘北土層(2)



第1～3号掘跡・土塁（北東から）



雑木撤去後（南西から）

写真15 掘跡・土塁南側現況



第1・2号堀跡・2・3号土塁（北東から）



第1～3号堀跡・2・3号土塁（西上空から）

写真16 堀跡・土塁南側完掘



写真17 堀跡・土塁南側土層



道跡全景（北西から）



道跡土層（南から）

写真18 道跡

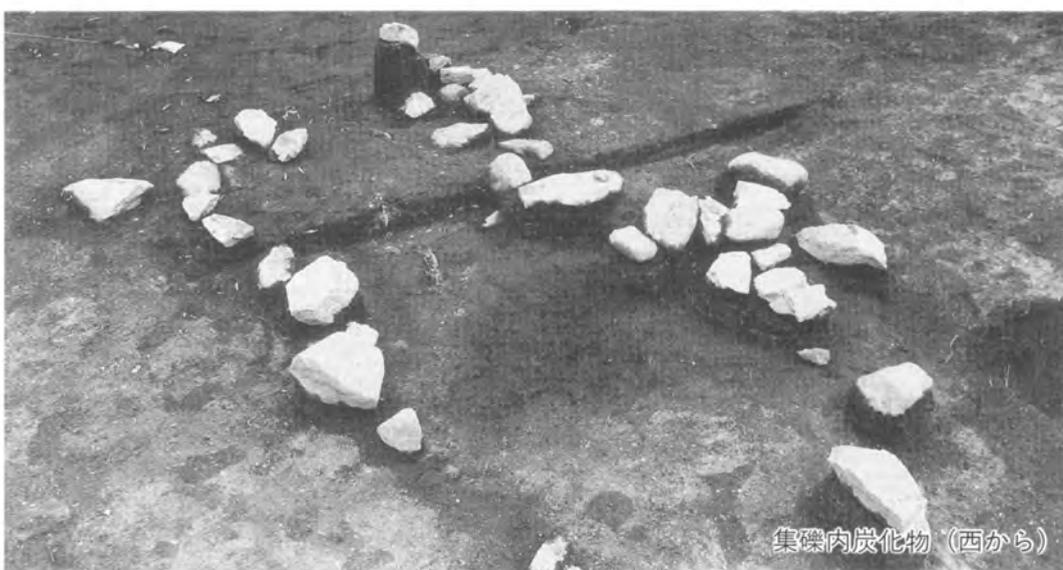


写真19 第1号門跡集礫

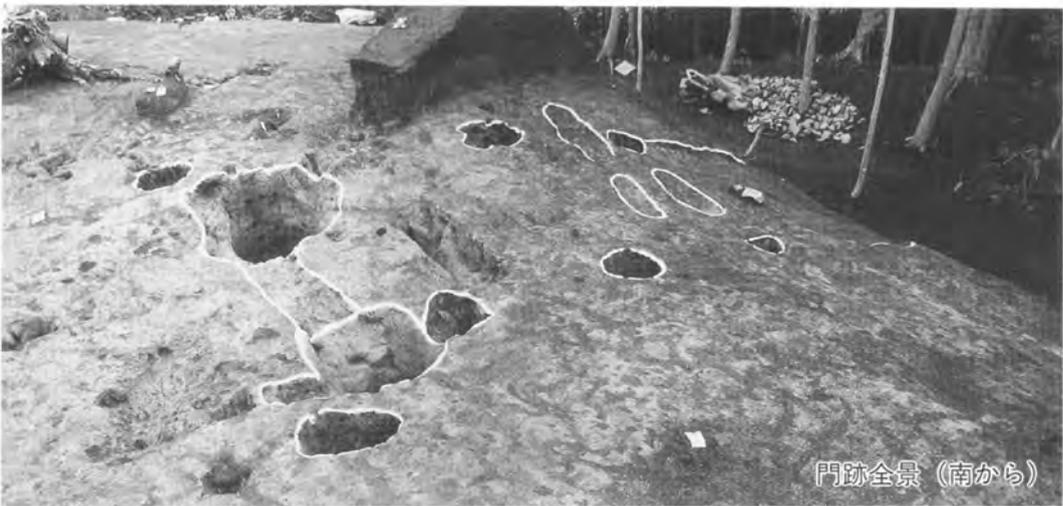
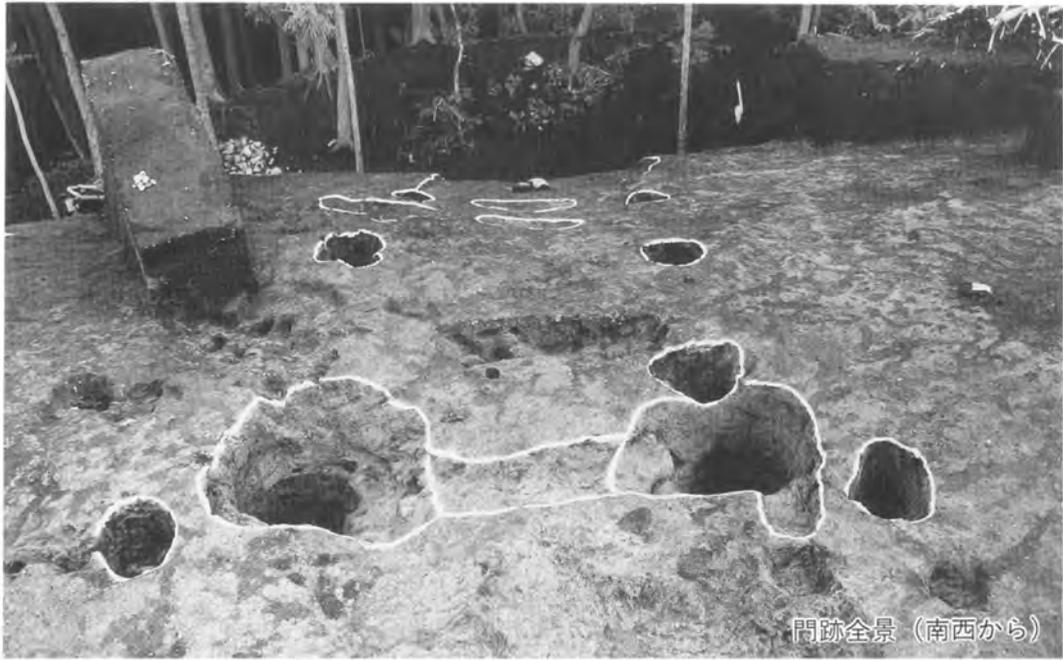
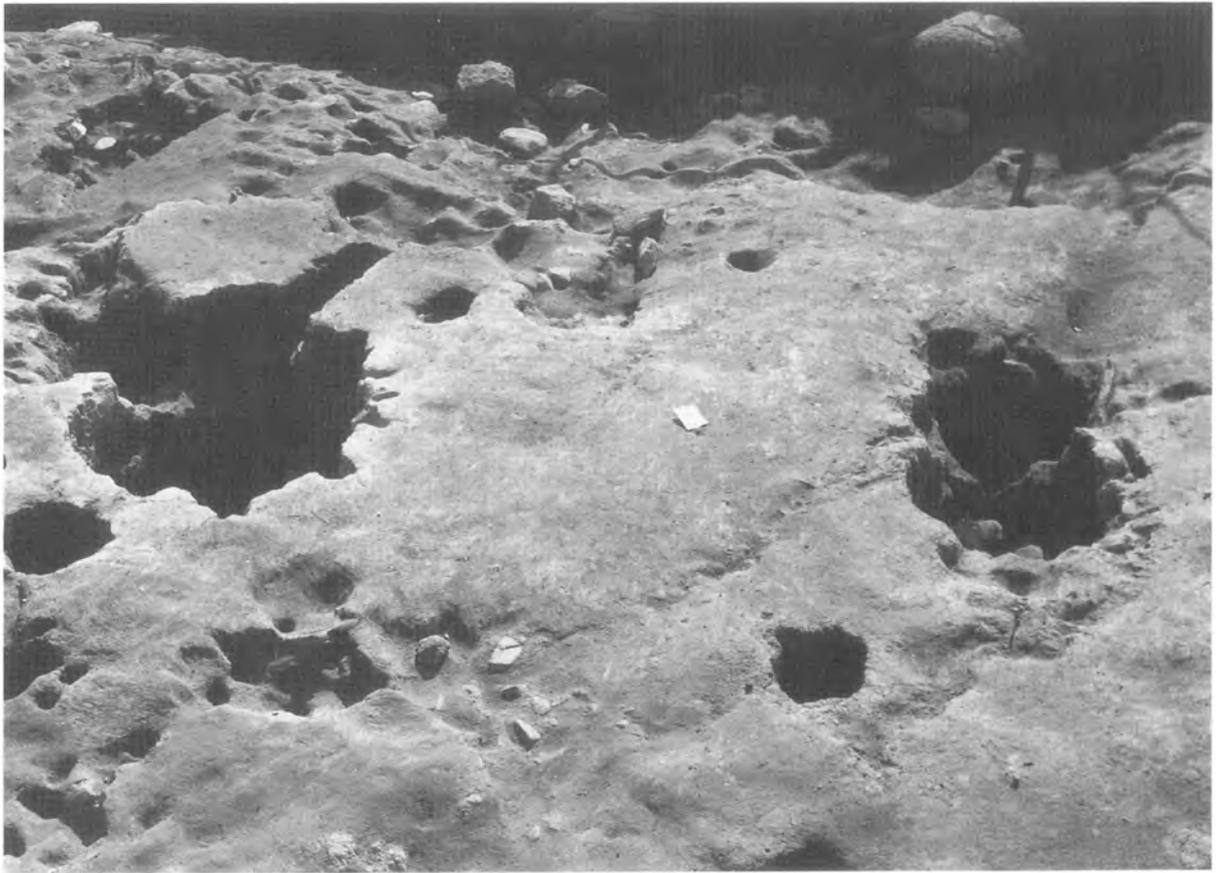


写真20 第1号門跡完掘



写真21 第1号門跡土層



第2号門跡全景（北東から）



P I 土層（南西から）

写真22 第2号門跡



地割り全景（南東から）



土層D-D'（北から）



土層B-B'（南東から）



土層C-C'（南東から）

写真23 第1号地割り(1)

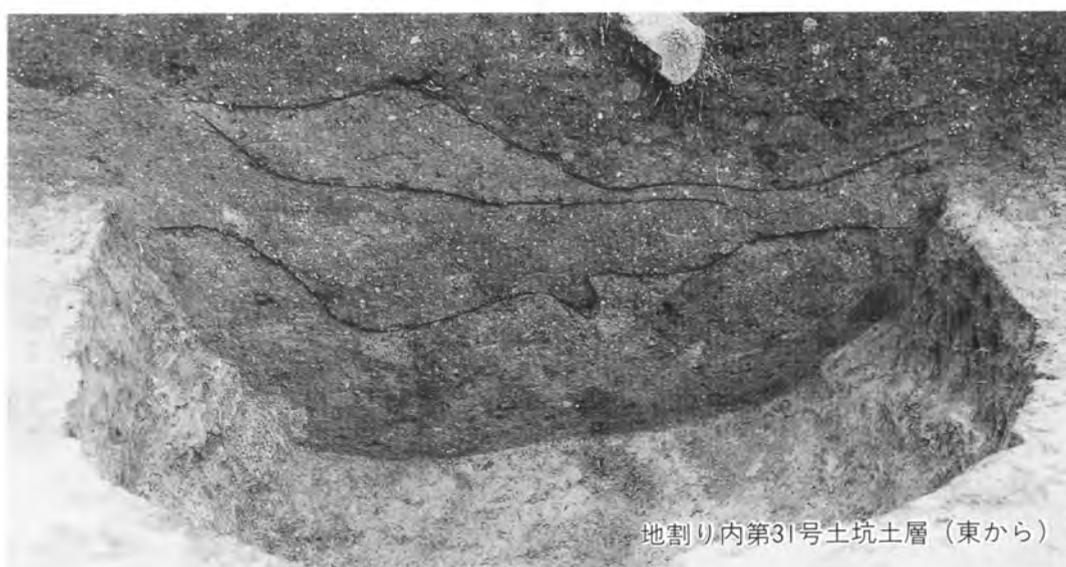


写真24 第1号地割り(2)



第7層面全景（北から）

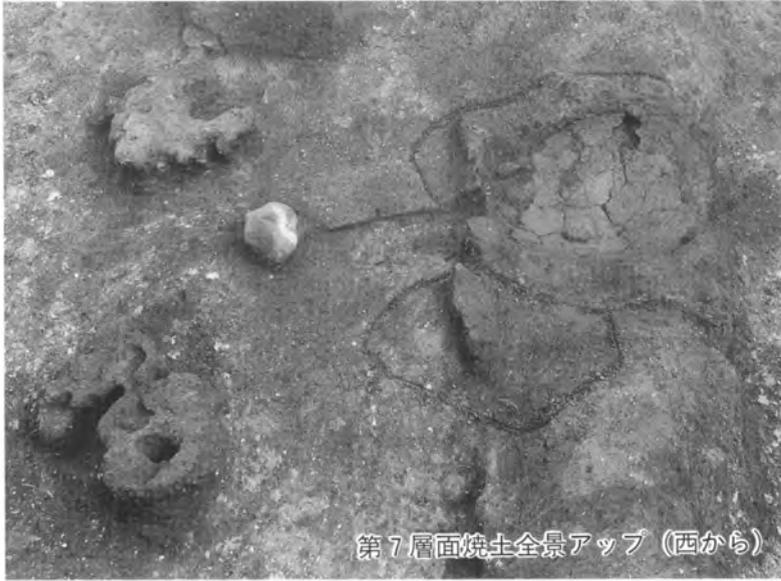


完掘（北から）

写真25 第2号地割り(1)



写真26 第2号地割り(2)



第7層面焼土全景アップ（西から）



第7層面焼土位置（南から）



第7層面第54号土坑土層（南西から）



第7層面第54号土坑完掘（西から）

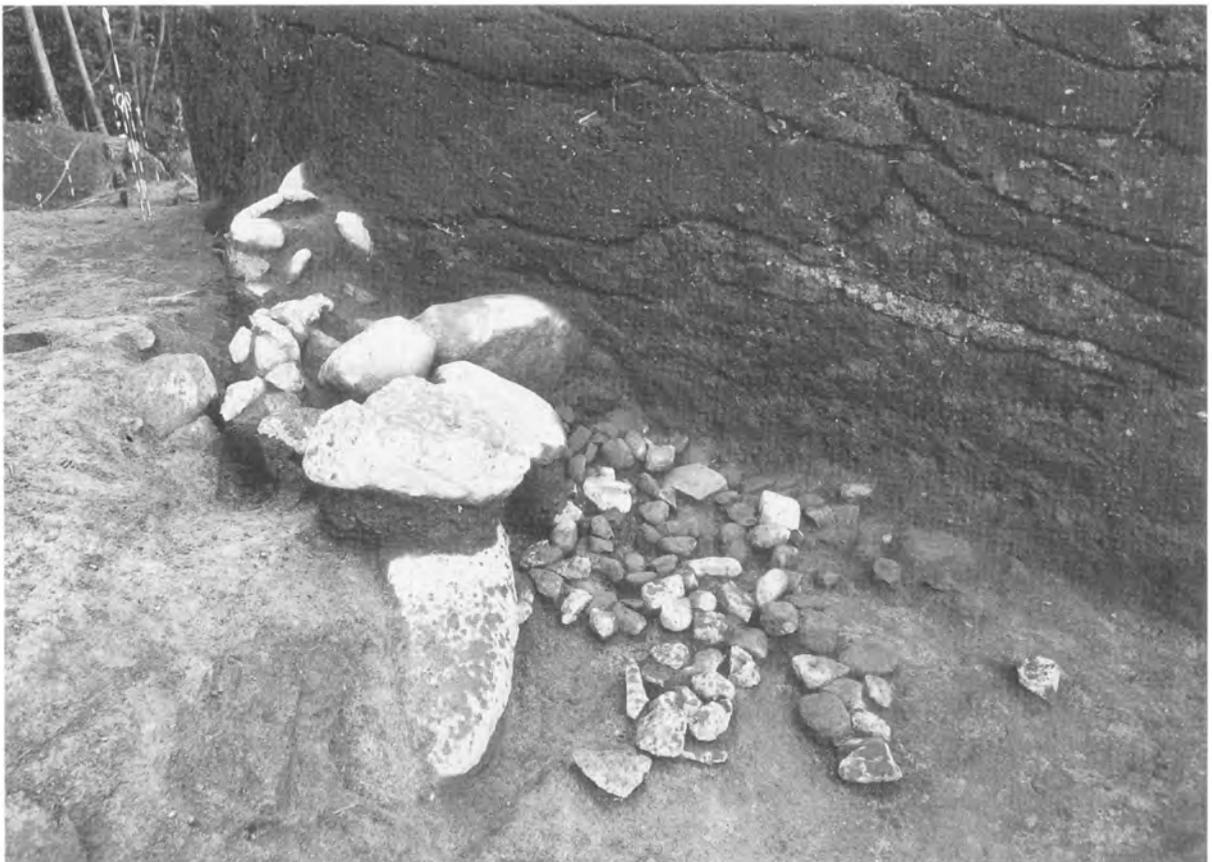


第7層面焼土・土坑全景（南西から）

写真27 第2号地割り(3)



地割り内集礫（南東から）



地割り内集礫（北東から）

写真28 第2号地割り(4)

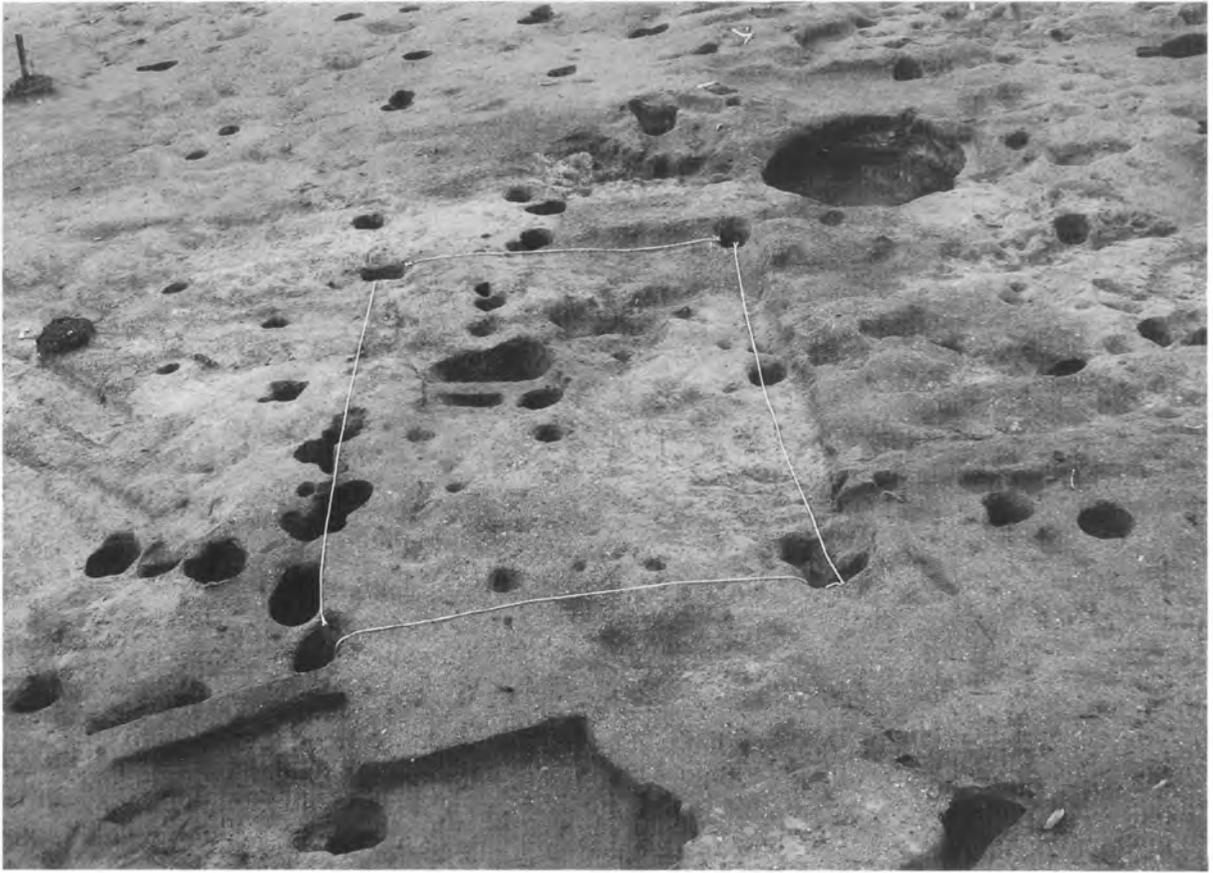


第3号地割り全景（北から）



第4号地割り全景（南西から）

写真29 第3号・4号地割り完掘



第5号地割り全景（南東から）



第1号掘立柱建物跡全景（北西から）

写真30 第5号地割り・第1号掘立柱建物跡完掘

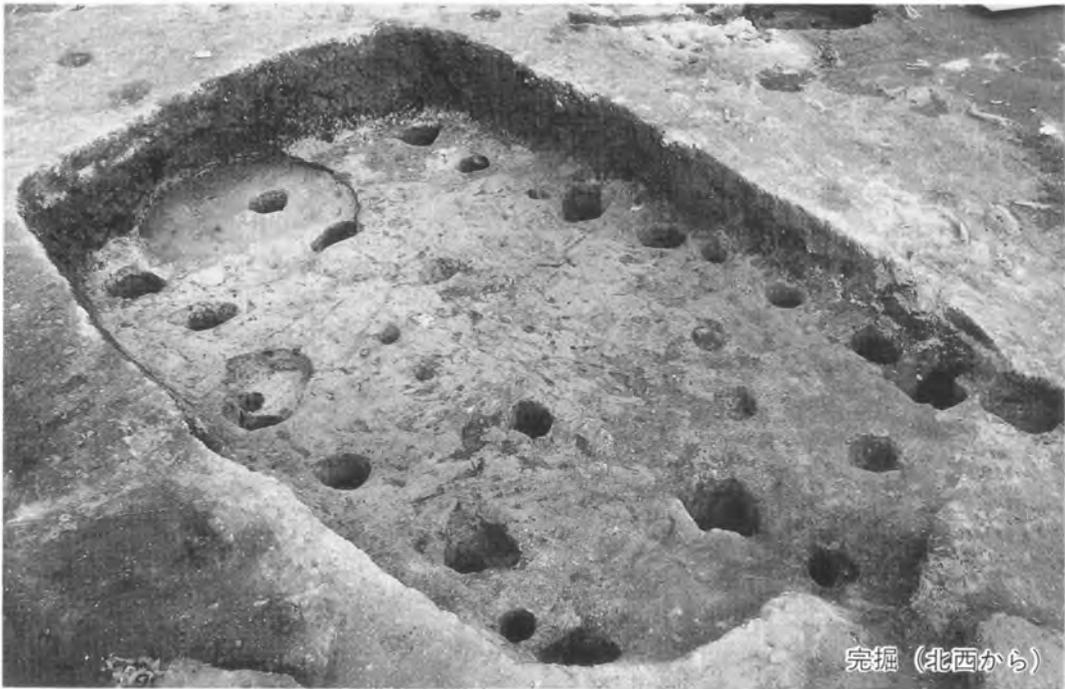
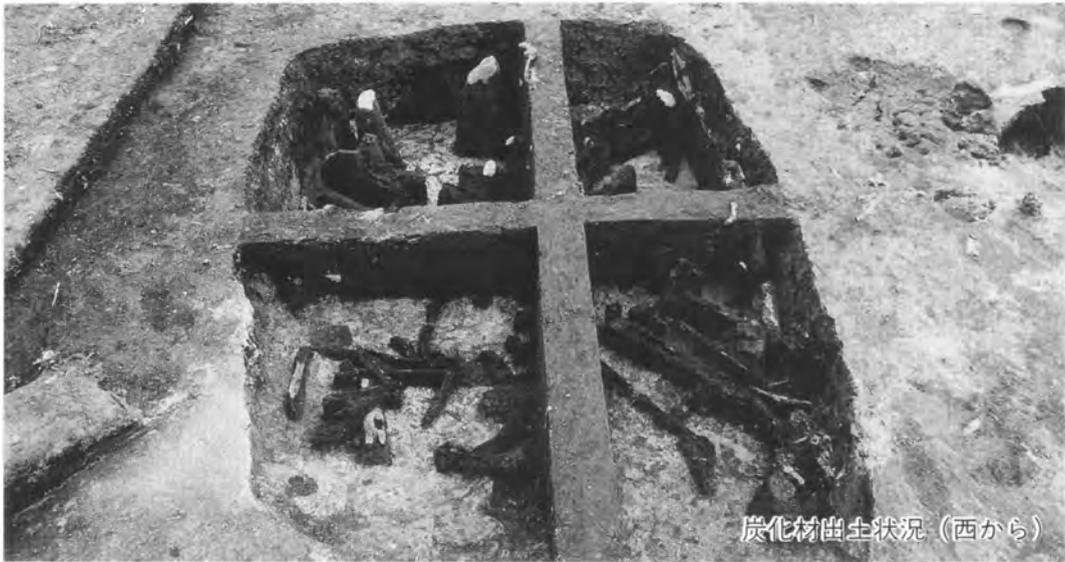
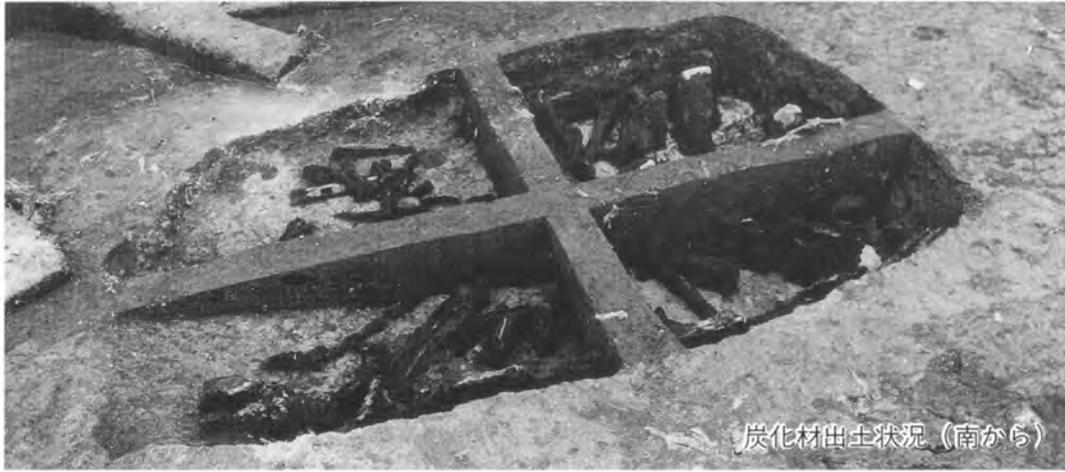


写真31 第1号竖穴遺構

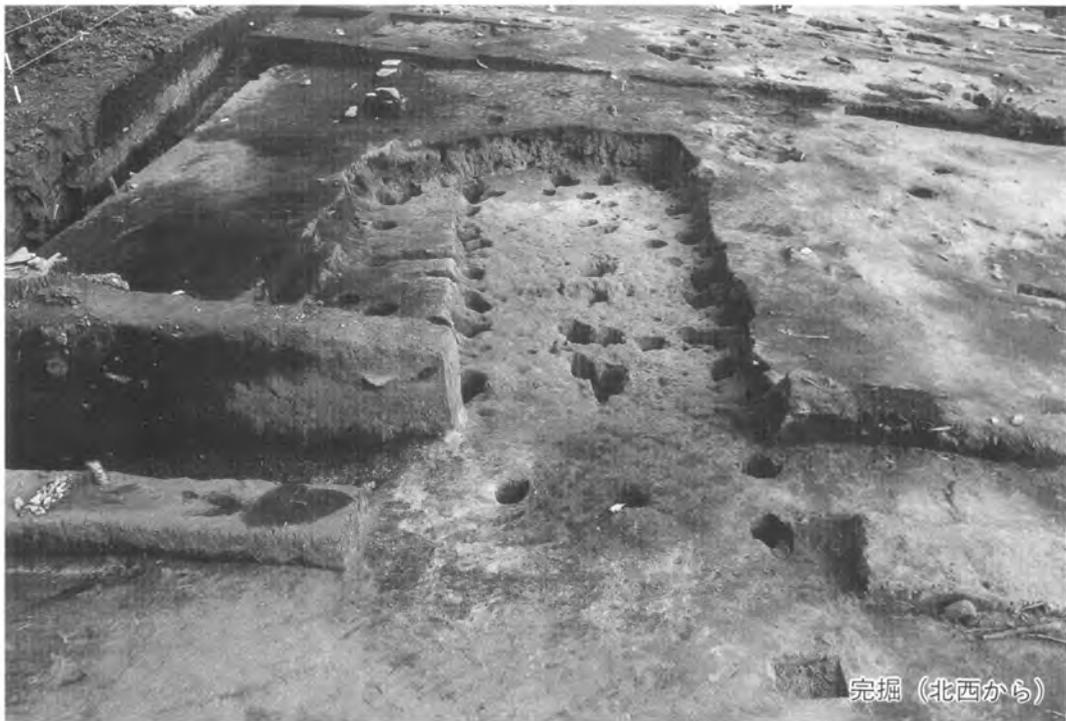
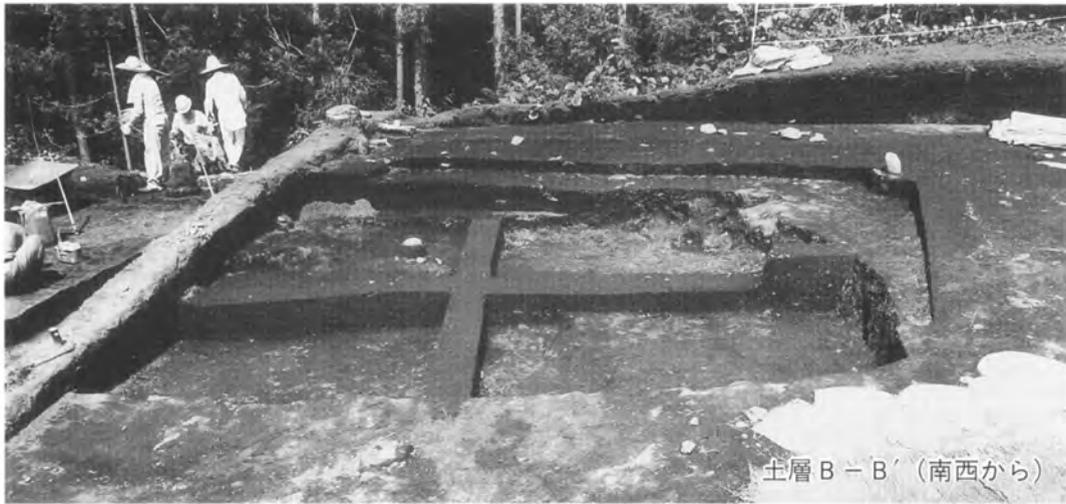


写真32 第2・5・6号竪穴遺構



土層 A・B (北西から)



完掘 (西から)

写真33 第3号竪穴遺構

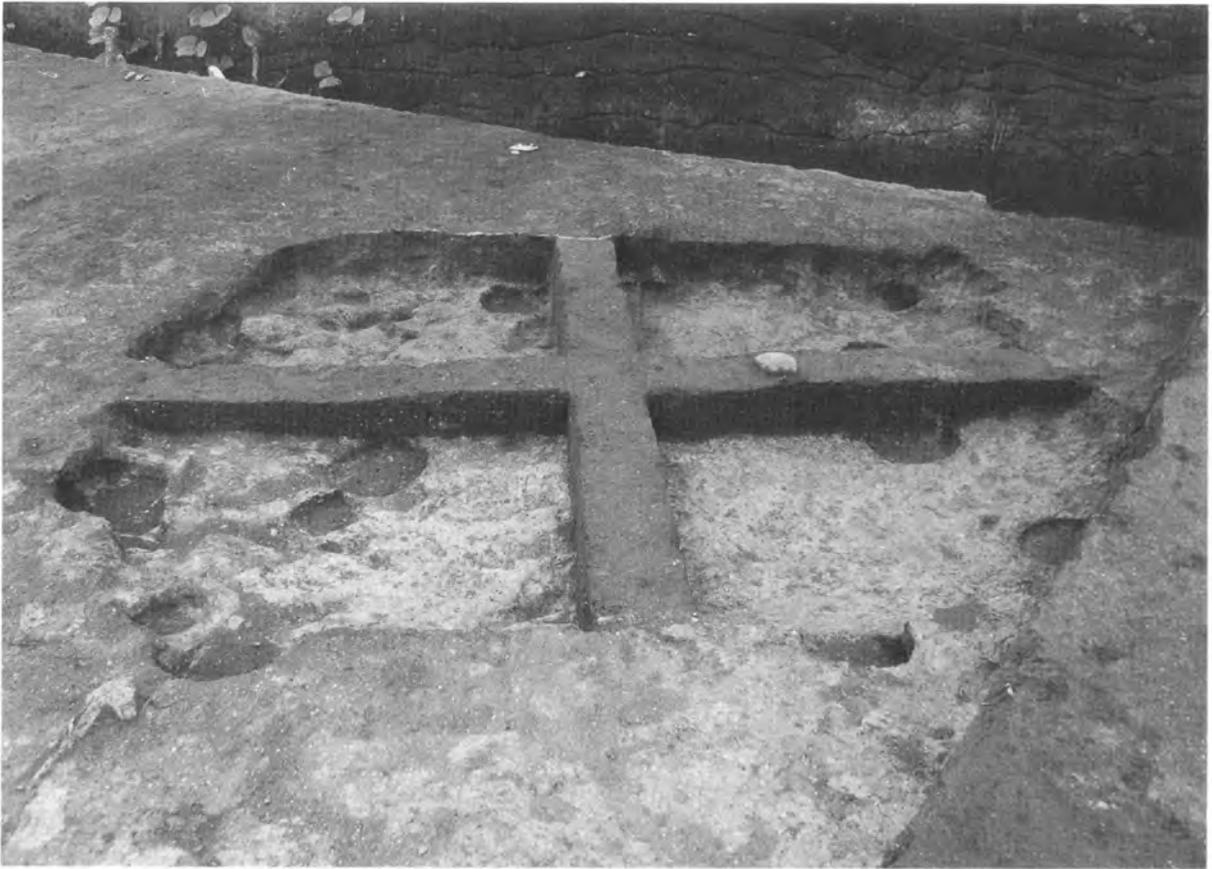


土層（北から）

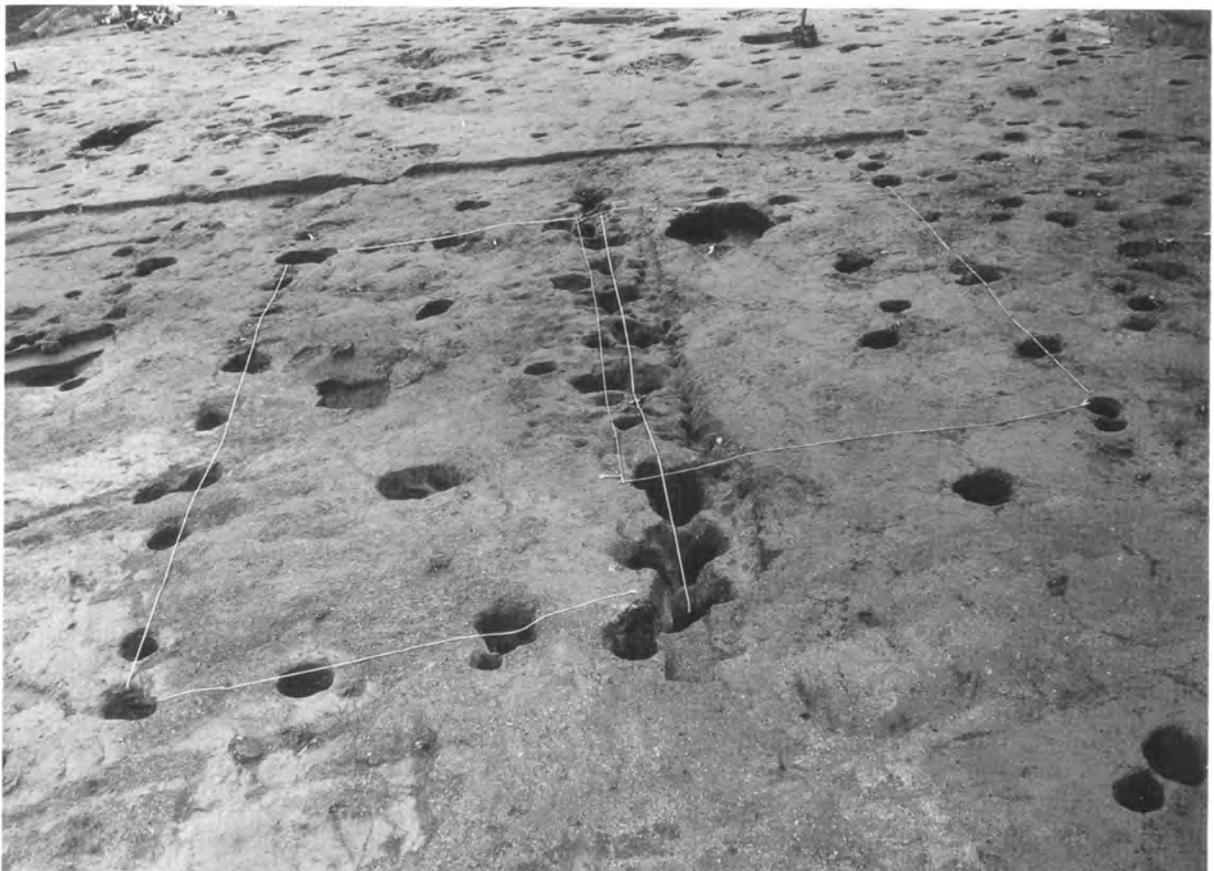


完掘（北から）

写真34 第8号竪穴遺構



第7号竖穴遺構（南西から）



第9号・10号竖穴遺構（南東から）

写真35 第7号・9号・10号竖穴遺構

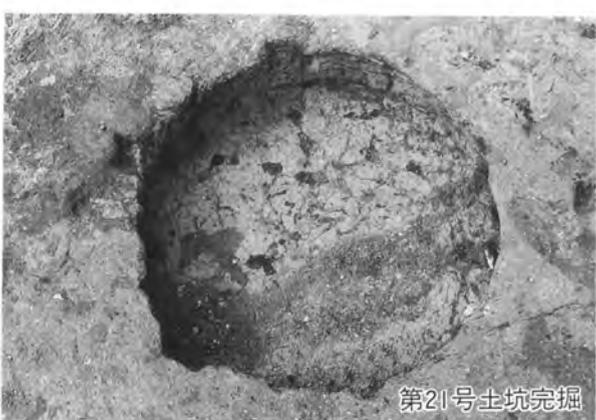
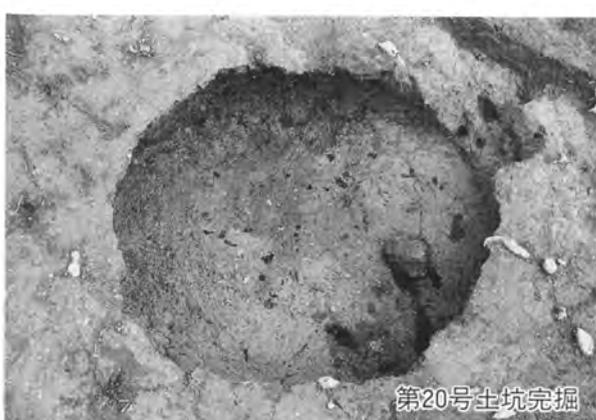
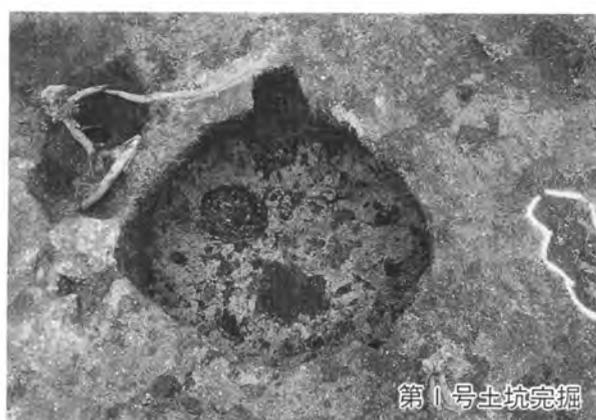


写真36 縄文時代の土坑

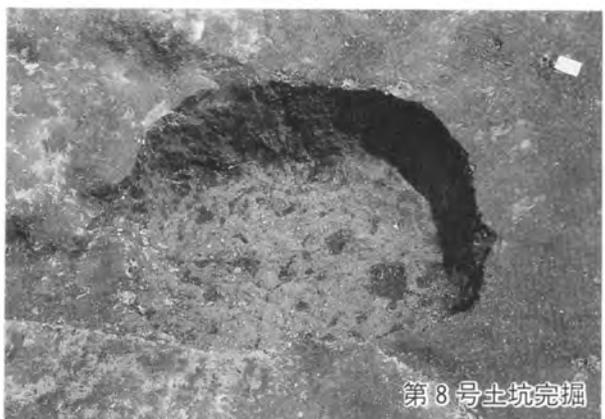
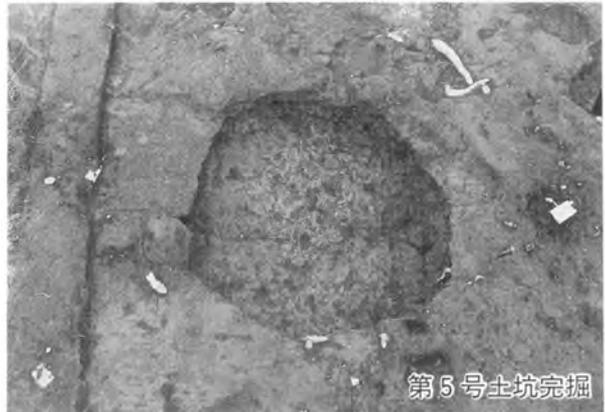


写真37 縄文時代以外の土坑(1)

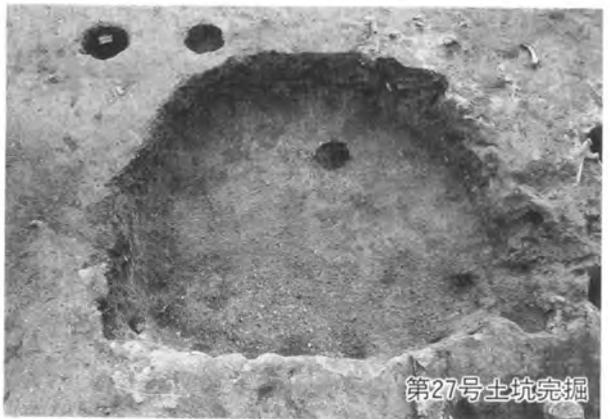
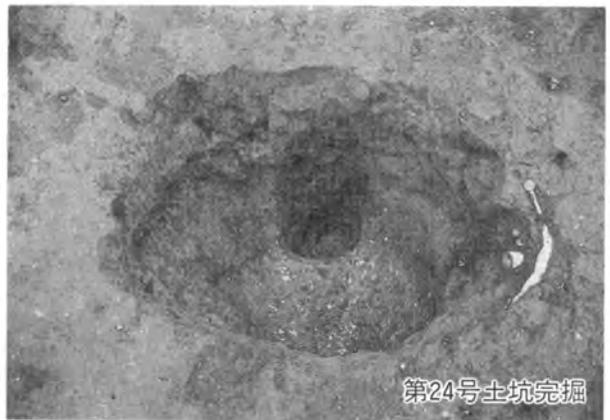
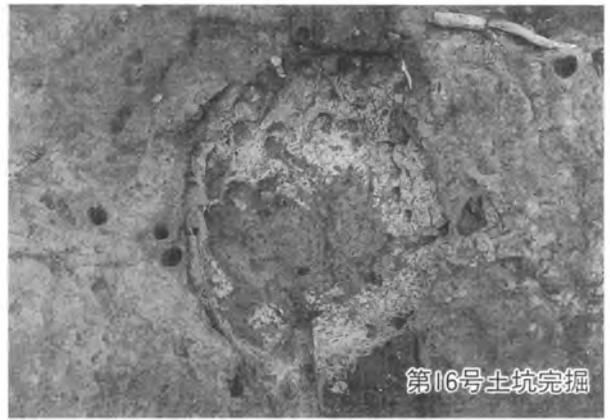


写真38 縄文時代以外の土坑(2)



写真39 遺物出土状況

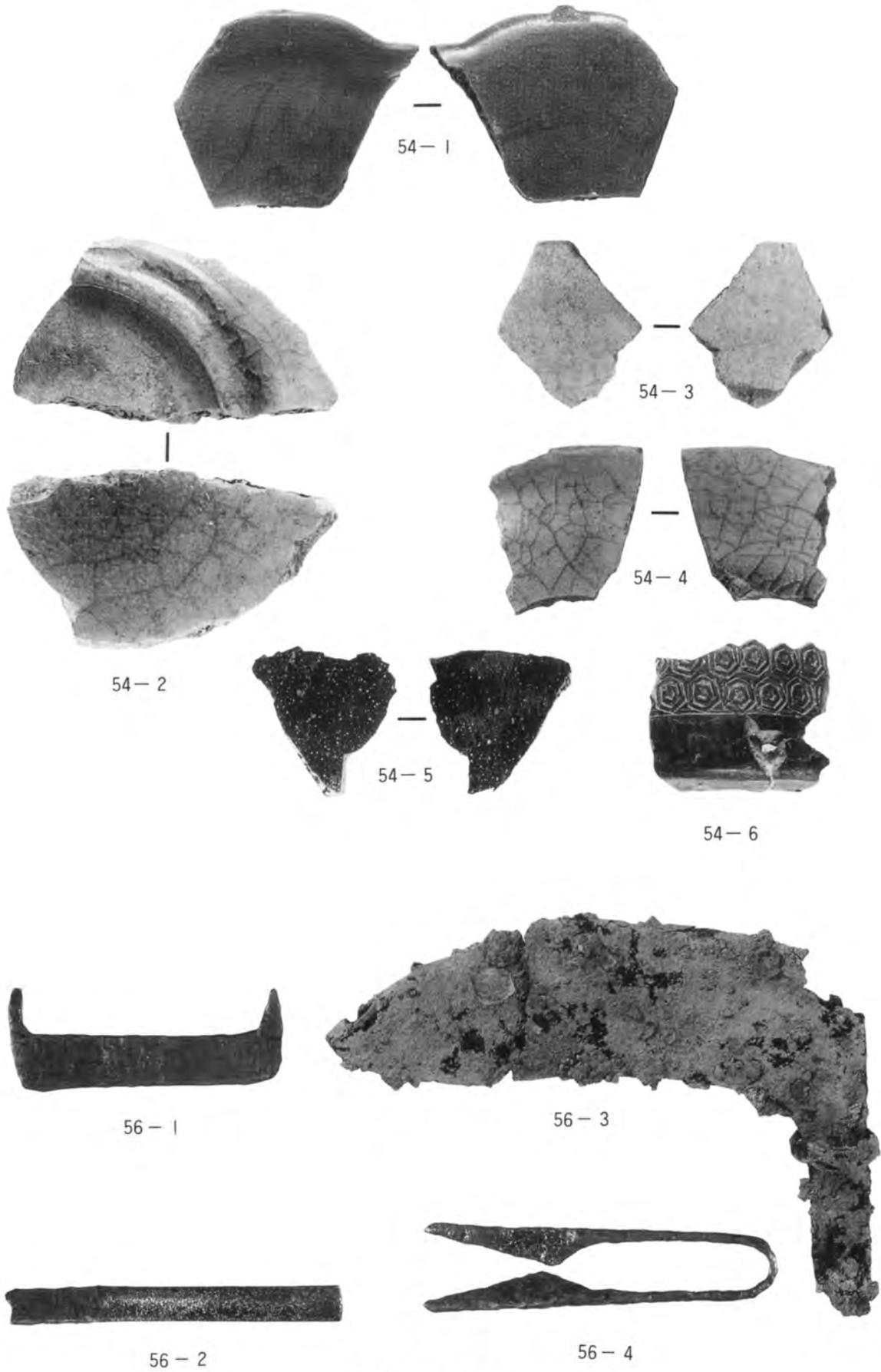


写真40 出土遺物(1)

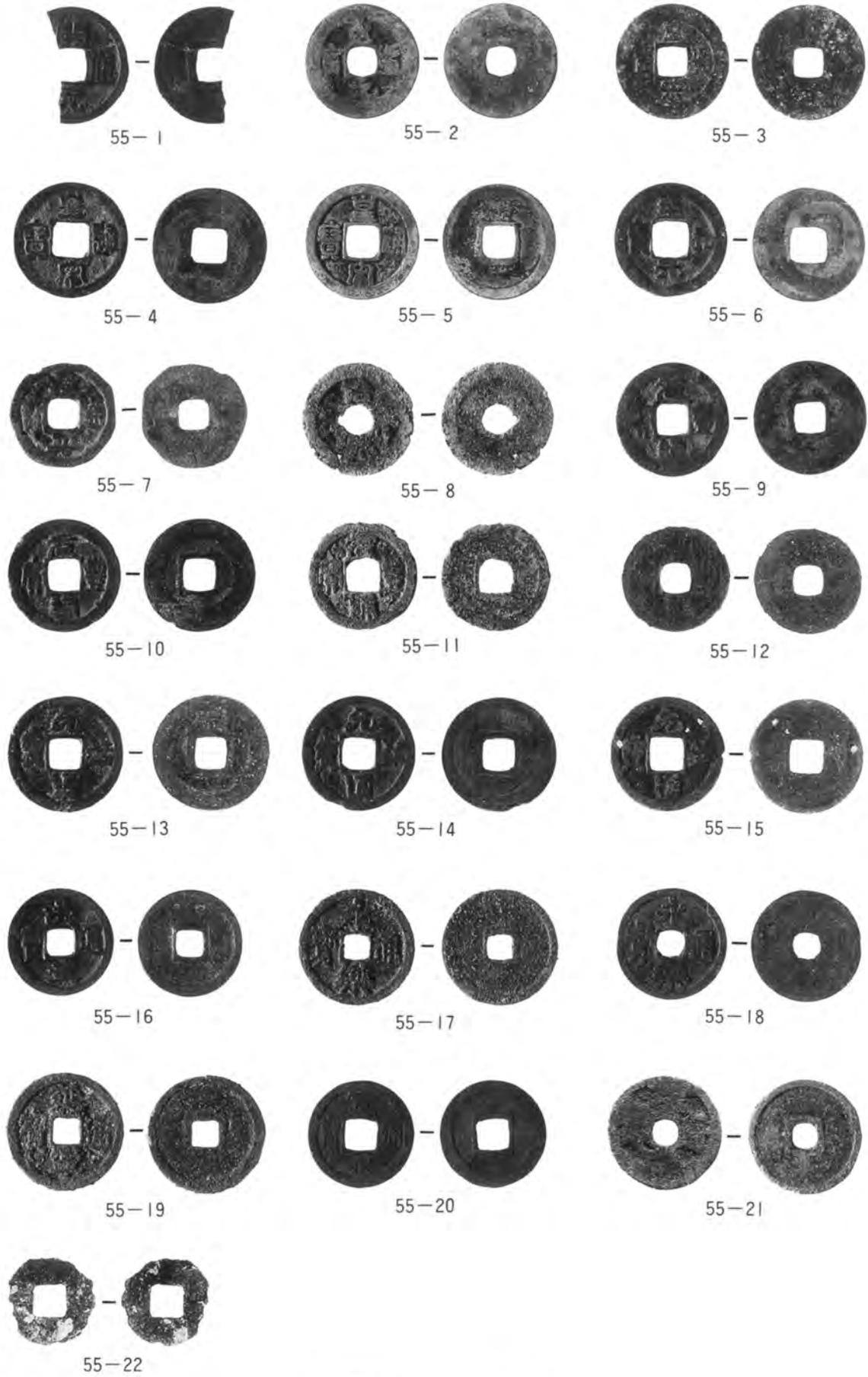


写真41 出土遺物(2)

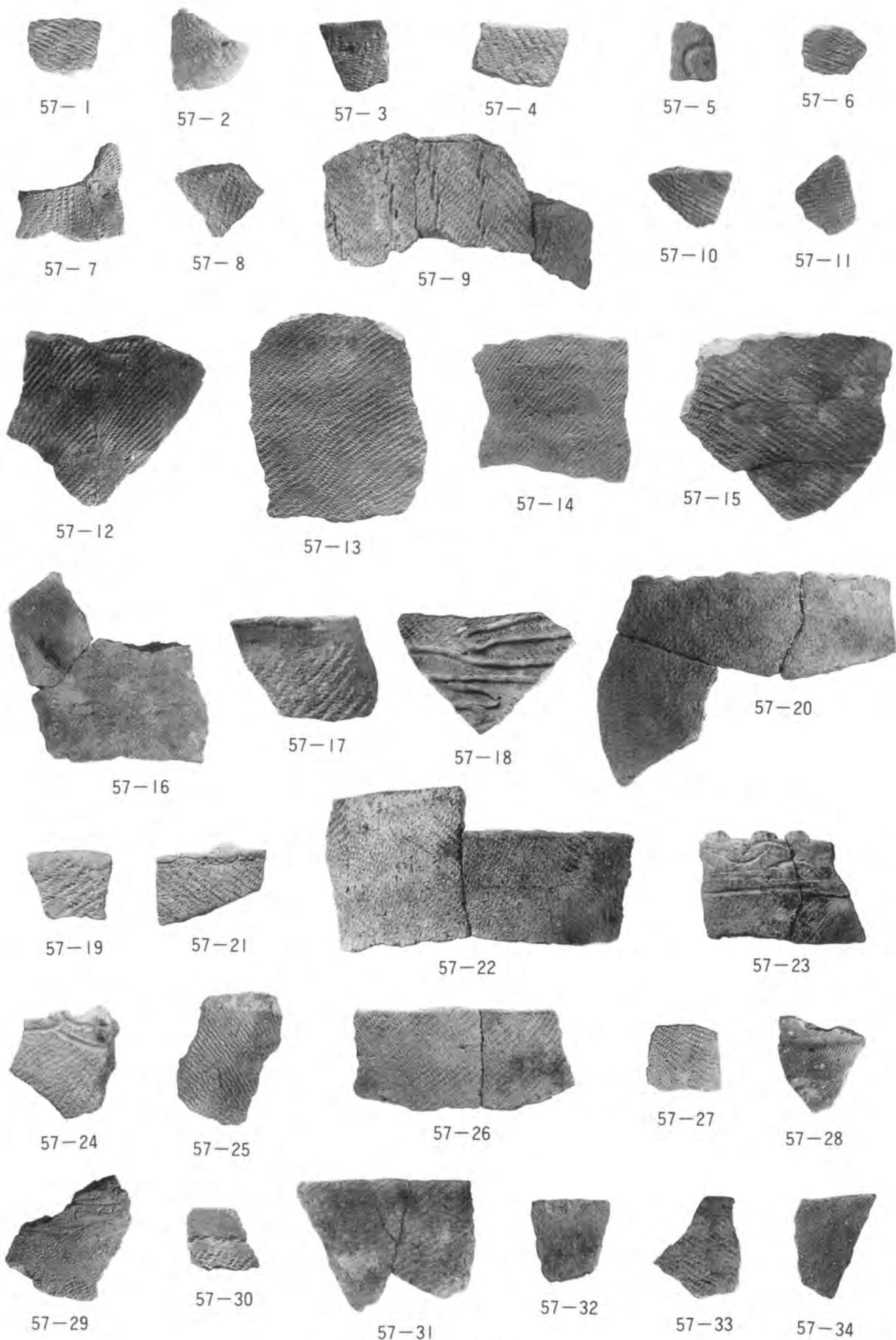


写真42 出土遺物(3)

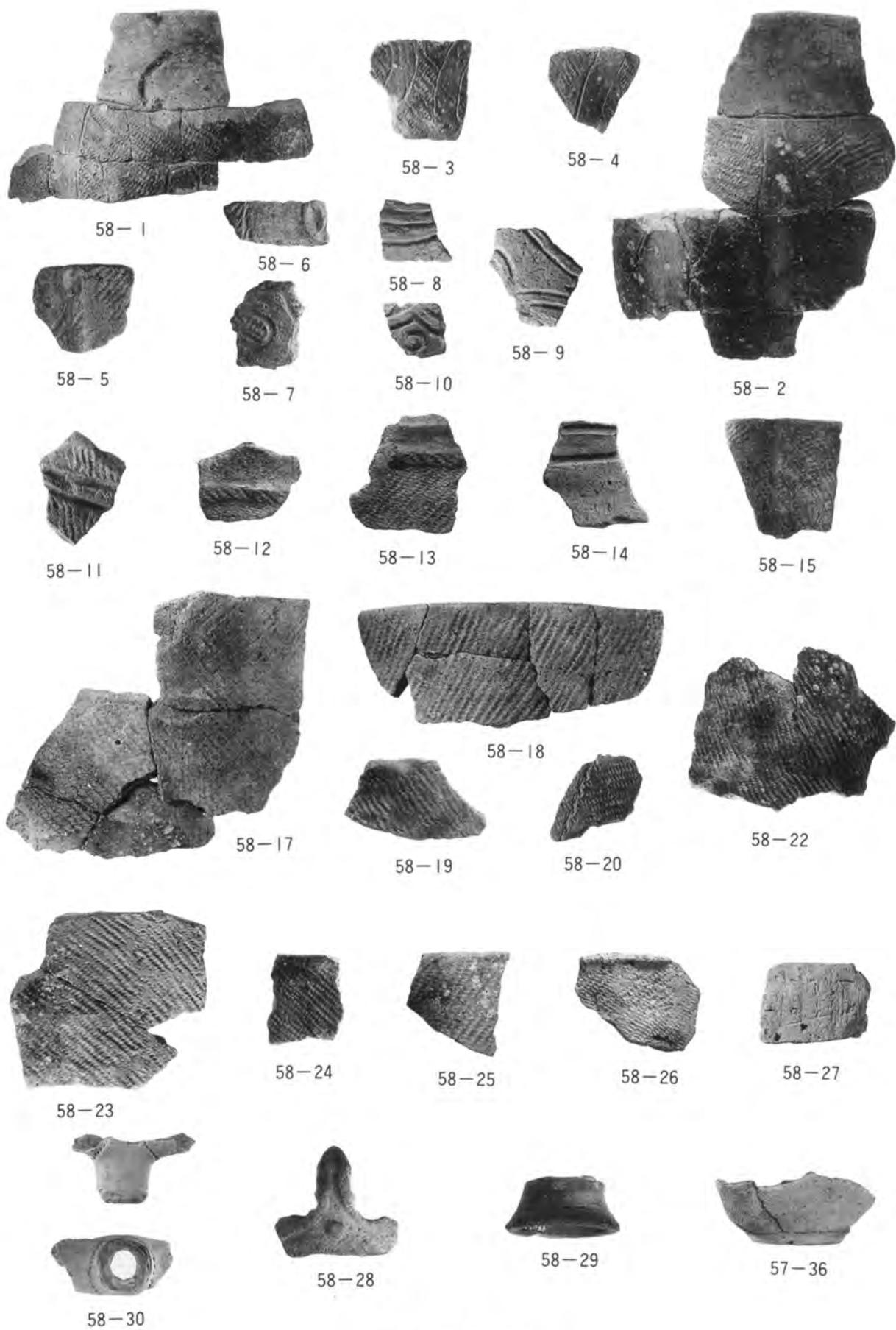


写真43 出土遺物(4)

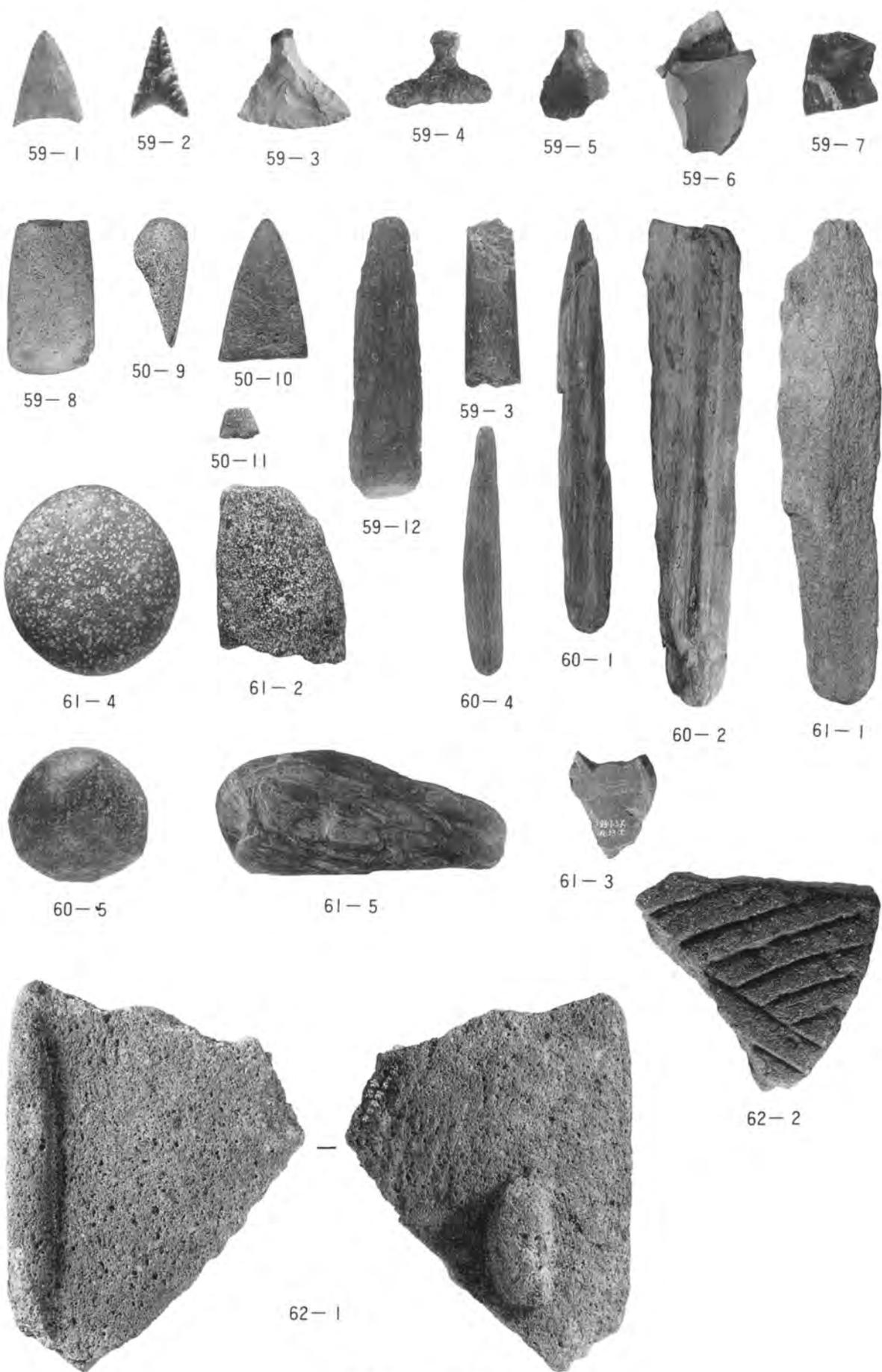


写真44 出土遺物(5)

☆報告書抄録

ふりがな	こざわたてあと								
書名	小沢館跡								
副書名	県道名川階上線建設工事に伴う遺跡発掘調査報告書								
巻次									
シリーズ名	青森県埋蔵文化財調査報告書								
シリーズ番号	第220集								
編著者名	小田川哲彦・中村博文								
編集機関	青森県埋蔵文化財調査センター								
所在地	〒038 青森市大字新城字天田内152-15 TEL0177-88-5701								
発行年月日	西暦1997年3月31日								
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因	
こざわたてあと 小沢館跡	あおもりけんきんのへぐんほしあみまち 青森県三戸郡階上町 おおあざはれやまざわあざこざわ ほか 大字晴山沢字小沢20外	02446	63060	40度 23分 58秒	141度 32分 22秒	19950508) 19951102	9,700	県道名川階上線建設事業に伴う発掘調査	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺跡	主な遺物		特記事項			
小沢館跡	城郭跡	戦国時代	堀跡	3条	青磁片・瀬戸片		自然地形を利用した館跡で三重の堀跡と土塁が巡る。堀と土塁は改修が認められる。これに伴い門跡も作り替えられている。また、堀底を道として使用していた痕跡がある。 館に伴う遺物が少ないことも特異である。		
			土塁	4条	銭貨				
			道跡	1ヶ所	鉄製品				
			門跡	2ヶ所	石製品				
			地割り	5ヶ所					
			竪穴遺構	9軒					
			土坑	48基					
			焼土炭化	7ヶ所					
			小穴	約1,750個					
		縄文時代	土坑	9基	縄文土器・石器				
		近世	炭窯	1基					

青森県埋蔵文化財調査報告書 第220集

小 沢 館 跡

— 県道名川階上線建設事業に係る遺跡発掘調査報告 —

発行年月日 平成9年3月31日
発 行 青森県教育委員会
編 集 青森県埋蔵文化財調査センター
〒038 青森市大字新城字天田内152-15
T E L 0177-88-5701
印 刷 所 第一印刷株式会社
〒038 青森市石江字江渡3-1
T E L 0177-82-2333
